

絶望の世界に希望の花を

Mk—IV

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

宇宙から飛来した隕石が南極に落下し、そこから現れた異形の存在『サベージ』が人類へと襲い掛かった。

現存するあらゆる兵器を上回る力を持ったサベージによって、多くの都市が壊滅し。人類は滅亡の危機に瀕する。

だが、未知の鉱石『ヴァリアブルストーン』を核とした『百武装』ハンドレッドを開発したことで、対抗手段を得た人類によって地球上から駆逐された。

この出来事は『第一次遭遇』ファーストアタックと呼ばれることとなり。その3年後に再びサベージが出現する、『第二次遭遇』セカンドアタックが起きてしまう。

しかし、既にハンドレッドを用いる者『武芸者』スレイヤーを中心とした防衛体制を構築していた人類に敗北はないと誰もが信じていた。

だが、セカンドアタック勃発後暫くして。人類に新たな脅威が出現した。

生物に寄生してその遺伝子を書き換え、サベージとも異なる異形の怪物へと変貌させてしまう新種のウイルス『ガストレアウイルス』が世界中に蔓延し。地球上に存在するあらゆる生物が『ガストレア』と呼称された怪物に変異し、サベージと共に人類に襲い掛かった。これらを総称して『バアル』と呼ばれることとなる。

非常に強い再生能力と、人間すら瞬時にガストレア化させる繁殖力によって。天文学的に増殖したガストレアに、サベージの対処だけで限界だった人類は瞬く間に駆逐されていった。

今度こそ滅亡するかと思われたが、『バラニウム』と呼ばれるヴァリアブルストーンとは異なる新たな鉱石が、ガストレアに非常に有効であることが判明する。

さらに、パワードスーツ『フアフナー』が開発されたことで決死の反抗に出る。

激しい戦いの末、消耗した今の人類では勝機はないと判断した各国家は、バラニウムによる巨大な壁『モノリス』を建造し。その内部に立て籠もることで生存する道を手にしたのだった。

これは混沌とした時代。後に『英雄』あるいは『救世主』と呼ばれることになる者達の物語である。

以下注意点

・この作品は作者が勢いで始めたものです。途中で構想に行き詰まり、打ち切りになる可能性もあります。

・未完の作品がありますので。原作の展開によっては、大幅な書き直しがあるかもしれません。

・オリ主+オリキャラあり。

・原作キャラとオリキャラとの恋愛要素、ならびにハーレム要素があります。

・原作の設定の一部改変と、独自の解釈があります。

目次

プロローグ1	1
プロローグ2	12
第一話	34
第二話	46
第三話	63
第四話	77
第五話	88
第六話	104
第七話	115
第八話	129
第九話	135
第十話	149
第十一話	161
第十二話	173
第十三話	186
第十四話	197
第十五話	207
第十六話	223
第十七話	236
第十八話	241
第十九話	248
第二十話	257
第二十一話	264
第二十二話	273

プロローグ1

世界がどれだけ絶望に包まれていても、僕達の世界は壊れることはない
と信じていた。

大切な人達と一緒に遊んで笑って、悲しいことがあれば共に泣いて、
辛いことがあれば励まし合う。そんな大好きな日常がずっと続くと
信じていた。

でも、そんな幻想は空が落ちてきたあの日に崩れ落ちた――

徳島県にある神社の神楽殿にて、10〜11歳程と見られる少年が
目を覚ました。

「起きましたか優君？」

「ん…ひなた…」

目を開けた少年——蒼希^{あおき} 優^{ゆう}の視界に同年代の少女の顔が映る。

上里^{うえざと} ひなた——優の幼馴染の少女の1人である。

優は彼女の膝に乗せた頭を上げると周囲を見回す。

彼らは通っている小学校の修学旅行で、香川から徳島へやってきていたのだった。

位置的には隣り合う県同士であり、その気になれば学校行事と関係なく訪れることもできるが。今の世界情勢では仕方のないことであつた。

『バアル』——そう総称されている人ならざる侵略者によって、世界はその在り様を大きく変えてしまった。

十数年前。突如宇宙から飛来した隕石が南極に落下し、そこから現れた異形の存在『サベージ』が人類に襲い掛かった。

現存するあらゆる兵器を上回る力を持ったサベージによって、多くの都市が壊滅し。人類は滅亡の危機に瀕した。

だが、アメリカにある『ワルスラーン社』が、未知の鉱石『ヴァリアブルストーン』を核とした新型兵装『百武装』^{ハンドレッド}を開発したことで、対抗手段を得た人類によって地球上から駆逐された。

この出来事は『第一次遭遇』^{ファーストアタック}と呼ばれることとなり。その3年後に再びサベージが出現する、『第二次遭遇』^{セカンドアタック}が起きてしまう。

しかし、既にハンドレッドを用いる者『武芸者』^{スレイヤー}を中心とした防衛体制を構築していた人類に敗北はないと誰もが信じていた。

だが、セカンドアタック勃発後暫くして。人類に新たな脅威が出現した。

生物に寄生してその遺伝子を書き換え、サベージとも異なる異形の怪物へと変貌させてしまう新種のウイルス『ガストレアウイルス』が世界中に蔓延し。地球上に存在するあらゆる生物が『ガストレア』と

呼称された怪物に変異し、サベージと共に人類に襲い掛かった。

非常に強い再生能力と、人間すら瞬時にガストレア化させる繁殖力によって。天文学的に増殖したガストレアに、サベージの対処だけで限界だった人類は瞬く間に駆逐されていった。

今度こそ滅亡するかと思われたが、『バラニウム』と呼ばれるヴァリアブルストーンとは異なる未知の鉱石が、ガストレアとサベージに非常に有効であることが判明した。

さらに、日本の科学者である日野^{ひの}洋治^{ようじ}とミツヒロ・バートランドがパワードスーツ『フアフナー』を開発したことで決死の反抗を行う。

激しい戦いの末、消耗した今の人類では勝機はないと判断した人類は、バラニウムによる巨大な壁『モノリス』を建造し。その内部に立て籠もることで生存することができた。

現在の日本は、バルによって国土を分断され。残された生存圏は東京・大阪・札幌・仙台・博多、長野、沖縄——そして、優達が暮らす四国のみであり。それぞれが独立した国家として国連に承認されたのだ。

セカンドアタックから7年の月日が経ち、崩壊しかけた秩序はある程度の回復を見せ。世界中のエリア間での空路と海路による交通網は構築されているも、それでも100%安全とは言えず。余程のことがない限りは、エリア間を移動することは暗黙の了解として禁止されていた。

そのため修学旅行地が近隣であろうとも文句を言う生徒は殆どいなかった。

優もひなたともう1人の幼馴染と共に修学旅行を楽しんでいたが、そこで強い地震に見まわれた。地震はその後も断続的に起こり、教師達が非常事態と判断して、地域の避難所であるこの神社へ生徒達を避難させたのだ。他にも近隣住民が避難しており、神楽殿には老若男女問わず多くの人が集まっていた。

老人を始めとした大人は、先行きが不透明なことに不安を隠せてい

ない者が多く。逆に学生ら若者は何かのイベントに参加したかのよう
に楽しんでいる者が殆どであった。

「具合はどうですか？」

「うん、大分良くなったよ。ありがとうひなた」

ひなたが不安そうに問いかけるも、優が微笑んで答えると。ホッと
したように胸を撫でおろした。

優は生まれつき身体が弱く。長時間体を動かすことができないの
である。そのため学校にも余り通えず、家に閉じ籠ることが多かつ
た。

だが、必死の治療の甲斐もあり。小学5年生となった今年は体調も
良くなり、医師から今回の修学旅行への参加が許されたのだった。

とはいえ、激しい運動は厳禁であり。適度に体を休ませることが条
件となっていたが。地震のため今いる神社に休みなく避難したこと
で、体に負担がかかってしまい。ひなたの好意で膝を借りて休んでい
たのである。

「——そういえば、若葉は？」

優がキョロキョロと辺りを見回し。もう1人の幼馴染を探す。

「若葉ちゃんならあそこですよ」

そういつてひなたが指さした方に視線を向けると。見知った少女
が1人立っていた。

凜とした顔立ちをしており、その佇まいかた育ちの良さを感じさせ
るも。その表情はどこか困ったように曇っていた。

——乃木^{のぎ}若葉^{わかば}優^ゆのもう1人の幼馴染であり、学級委員長を務めて
いる。

彼女の視線の先には、クラスメイトである3人組の少女がおり。一
様に若葉から向けられる視線に困惑した様子であった。

「(やれやれ)」

その光景見ただけで優は状況を把握し、隣にいるひなたへ声をかけ
る。

「僕のことともういいから。若葉の方に行ってあげてひなた」

「でも…」

優と若葉を交互に見ながら戸惑いの色を見せるひなた。若葉の元にも行きたいが、優のことを放っておくことできないのだろう。そんな彼女の優しさに、思わず笑みを浮かべる優。

「僕は十分休んだから、動かなければ大丈夫だから、ね」

「…わかりました。何かあったらすぐに呼んで下さいね？」

「うん」

一瞬だが逡巡するも。意を決したようで若葉の元へと向かうひなたを、微笑ましく見送る優。

ひなたが携帯で写真で若葉を撮りながら話しかける。彼女の『若葉コレクション』なるものの収集を趣味にしており。早い話が自分で撮った若葉の写真集である。

そこから若葉を交えて3人組と話始め、最後は先程までの気まずさはなく皆笑顔となっていた。

若葉はよく言えば真面目で、曲がったことを嫌うが。逆に言えば融通が利かず、頑固でもあった。人付き合いは得意とは言えず、優やひなたのような見知った相手以外には愛想良く接せられず。それ故、クラスメートからは『鉄の女』などと誤解されてしまっているのだ。

先程3人組を見ていた困っていた表情も、付き合いの長い優やひなただから気づけたが。他の者からは不機嫌そうに睨みつけているように見えただろう。

きっと、仲良く話していた3人組に注意すべきか考え、今の状況なら不安も和らぐから問題ないだろうと思っていたのだろうが。マイナスイメージで悪く見られただけなのだ。

ひなたはそのマイナスがを取り払い、若葉と3人組の橋渡しの役割を果たしたのだ。

「(もう、大丈夫か)」

心配事もなくなったので、その場から立ち上がる。ひなたにはああ言ったが、夜とはいえず、7月の暑さはなかなかのものなので。風にあたりたくなり神楽殿の外へと歩き出すのだった。

神楽殿の外には他に人はおらず。静寂に包まれていた。

古来、神社の鳥居は外界との境界という意味を持つていた。まだ人々が信仰心を忘れていなかった時代、神社は異界とされていたのだ。優は神社の持つそんな意味など知らなかったが、この場の静謐な空気を感じることはできた。

空を見上げると、この神社は住宅地等から離れているためか、無数の星が輝いている。

『にゃー』

ふと鳴き声が聞こえたので視線を落とすと。一匹の黒毛の子猫が優を見ていた。

「おいでー」

しゃがみ込んで微笑みながら右手の人差し指だけを伸ばし、上向きにして前後に軽く振りながら子猫を呼ぼうとする。

子猫は最初は警戒した様子だが、やがてゆっくりと優の元へと歩み寄って来る。

「よここよこ」

優は寄ってきた子猫をそっと抱きかかえると、近くにあった観光者に長椅子に腰掛け。子猫を膝の上に乗せると背中を優しく撫でる。

『ふにゃ〜』

子猫は気持ちよさそうに鳴くと、丸くなって寛ぐ。

「♪〜」

そんな子猫を撫でながら、満悦な様子で優。

「おーい、優〜」

境内に聞きなれた声が響いた。

「若葉どうしたの?」

声のした方を向くと、若葉が駆け足気味に向かって来ていて。その後ろにはひなたの姿もあった。

「どうしたのって。お前がいなくなったから何かあったんじゃないかと…」

安堵した様子で話す若葉。どうやら無断で外へ出た優を心配して捜しに来てくれたらしい。

優の姿を確認すると、ホツとした様子で隣に腰を下ろす。ひなたも優を挟む形で座る。

「ごめんね。ちよつと夜風に当たりたくなつてさ」

「そうか。だが、せめて誰かに一言話してからにしてくれ。昔より良くなっているとはいえ、何があるかわからないんだぞ?」

『もしも』のことを考えてしまったのか、不安そうな表情で俯いてしまふ若葉。

優はそんな彼女の頭に手を置くと、そつと撫でる。

「心配かけてごめんね。次からは気をつけるよ」

「あ、ああ」

若葉は嫌がる素振りも見せず、先程の子猫のように気持ちよさそうに目を細める。

すると、パシヤリと機械音が鳴る。

「やりました! 久々に撫でられ若葉ちゃんゲットです!」

そちらを向くと、携帯を片手に目を輝かせるひなたがいた。彼女の目には優に撫でられている若葉の姿は、レア度が高いらしく。いつもよりテンションが高くなっていた。

「ひくなくたく! だから撮るな! 消せ!」

「嫌です! これだけは何がなんでも死守します!」

若葉が携帯を取り上げようとするも、ひなたは優を盾にして対抗する。

「あの、ひなた事あるごとに僕を盾にしないで。後、若葉くつつきすぎだから」

優の言葉に若葉はハツと自分の状況を把握する。

携帯を取り上げるのに夢中になって、自分から優に体を押しつける形になっており。傍から見れば抱き着いているようにも見えるだろう。

そのことを自覚すると、若葉の顔がみるみると赤くなっていく。

「%&#\$\$##%&&#\$?!?!!」

普段の彼女ならまず発しないだろう言語を上げながら、慌てて優から離れる若葉。その顔は最早トマトのように真っ赤で、湯気らしきも

のまで出ていた。

そんな彼女をひなたは、赤面若葉ちゃん頂きましたー!と言って激写していた。

「えっと、大丈夫若葉?」

「&#%&&%#%&\$!!」

若葉の状態に不安になった優が声をかけるも。若葉はテンパリ過ぎて謎の言語しか話せていない。

そんな彼女を落ち着けようと、これだけ騒いでも優の膝の上で寛いでいた子猫を抱きかかえると。若葉に近づいて彼女の頭にポフツと乗せた。

『ウ〜』

子猫は、最初は優から離れたことに不満そうだったが。すぐに今の場所が気に入ったのか、上機嫌そうに鳴くと寛ぎだした。

「……」

「?どうした優?」

どうにか落ち着きを取り戻した若葉は、自分をジツと見て黙ってしまつた優に不思議そうに声をかける。

「いや、子猫頭に乗せてる若葉可愛いなあって」

「か、かわッ!?!」

不意に優が放つた言葉に、再び若葉の顔が赤く染まり。ひなたがキヤーと歓喜の声をあげて、さらなる速度で激写する。

「な、ななななな、何を言ってるんだお前は!?!」

「え?何か変なこと言つた僕?」

「お前はツそういうことを軽々しく言うなといつも……!」

目じりを吊り上げながら優に詰め寄る若葉。しかし、その口角も吊り上がっており、言葉とは裏腹に喜んでるように見えた。

「ブハッ!!」

若葉を激写していたひなたが、何かのキヤパシテイをオーバーしたのか。鼻血を物凄い勢いで噴き出す。

「わあああああ!ひなたあ!?!」

「お前は どうして そうなるんだ!?!」

優と若葉は慌てて止血に走るのであった。

「ふう。ごめんなさい、若葉ちゃん優君。ご迷惑をおかけして」

「まあ、もう慣れたけどね」

「そうだな」

あれからひなたの出血を抑え、3人は仲良く長椅子に腰かけて談笑していた。

「それで、優君。修学旅行は楽しめていますか？」

ひなたが、隣にいる優に微笑みかけながら問いかける。

「うん。こんな風に外に出たのは初めてだから、すっごく楽しいよ」

物心着いたころから優は持病のため、外出できたとしてもたまに学校へ行く時くらいであった。

そのため今回の修学旅行で見たものはどれも新鮮であり、かけがない思い出となっていた。

「これもひなたと若葉のおかげだよ。本当にありがとう」

「何を言う。友として当然のことをしたまでだ」

「そうです。私達も優君と一緒に来れて楽しいですしね」

感謝の気持ちを述べる優に、若葉とひなたは当然とばかりに微笑む。

今回の修学旅行に際して。若葉とひなたは事前に優専用のスケジュールの作成や、体調が悪化してしまった時の対応を考え。担任と掛け合い、他の生徒の迷惑ならないよう3人だけの班合わせをしたりと動いてくれたのだ。

「そうだ！さつきですね、若葉ちゃん私達以外のお友達ができたんですよー！」

「それって、さつき話してた子達？」

「はいー！」

優の問いに、まるで自分のことのように満面の笑みを浮かべるひなた。

「おお、よかったね若葉！」

「あ、ありがとう優」

優も同じように喜ぶと、照れくさそうに頬を掻く若葉。

「優君もせっかくの機会ですから、お友達を作ったらどうです？流石に班行動中は難しいですけど。今みたいに皆でいる時にでも」

ひなたが両手をポンツと合わせながらそう提案してくる。これから優も、学校へ通える日が今まで以上に増えていくだろう。だから彼女としても、もっと彼に学校生活を楽しんでもらいたかった。

「…僕はいいよ」

「どうしてだ？私だつてできたんだ。お前ならもつと簡単にできるさ」

だが、当の優は乗り気ではないという風に首を横に振ってしまふ。そのことに若葉が不思議そうに首を傾げた。

「僕はいついなくなるかもわからないから…。その人を悲しませちゃうかもしれないからアタタタタ!」

優が言い終わる前に、若葉とひなたが彼の頬をそれぞれ抓った。

「にやにやにすふの!？」

「お前が馬鹿極まりないことを言うからだ」

「そうです。なんですか私達は悲しんでいいってことですか？」

「しよしよーゆーわへひやないひえほ。ひえか、ひやなしてほお」

抓られたままの優が涙目で訴える。

「もう馬鹿なことと言わないって誓えるか？」

「ひかいまひゆ」

「よろしい」

優の言葉に、若葉とひなたは満足そうに手を離れた。

「うー痛い…」

「自業自得です」

頬を摩りながらあーうー唸る優に、ひなたが軽く溜息をつくのだった。

そんな折、優が咳き込み始めてしまふ。

「優!？」

「大丈夫。ちよつと冷えてきたから…」

夏場とはいえ長い時間外にいたため、体に負担がかかってしまったらしい。

「戻りましょうか、先生達も心配しているでしょうし」

「そうだな。優歩けるか？」

「うん。それくらいは大丈夫」

優を気遣いながら立ち上がると、神楽殿へと歩き出す3人。

2人に迷惑をかけていることに申し訳なく想いながら。こんな自分のことを、友達として大切に思ってくれる彼女達に出会えたことに、優は幸福を感じていた。

願わくは、これからも彼女達と共にいられることを神様に願いながら、夜空を見上げた。

「——えっ?」

同時に今までとは比べ物にならない程、地面が激しく揺れ始めるのだった。

プロローグ2

「(今までで一番大きい!)」

人生で体験したことのない激しい揺れに、ひなたは小さな悲鳴を上げて尻もちをつき。優はそんな彼女を庇うように片膝をついて、その華奢な体を支える。若葉は武道の心得があることもあり、中腰になって上手く姿勢を保っていた。

揺れは十数秒程続いた後、次第に収まっていく。

「凄い揺れだったな…。優、ひなた、大丈夫か?」

「僕は大丈夫。ひなたは?」

若葉が2人の安否を確かめ。優は何事もなく立ち上がり、座り込んでいるひなたに手を差し出す。

「……」

「?ひなた?」

しかし、彼女はその手を取らず。真っ青な顔をして呟いた。

「怖い…」

「え?」

ひなたの体は小刻みに震え、何かに怯えていた。

「ゆ、優君、若葉ちゃん…。な、何か、凄く、怖いことが…」

そう言っただけで彼女は空を見上げた。

優と若葉は何かあるのかと思い、顔を上げる。

そこにあるのは、なんの変哲もない星空のようだった。

だが、何かが違う。そう優は直感した。

無数の星々は、まるで水面を漂うように蠢うごめいていた。

星のように見える『それ』は、鳥か何かにも見えた。

しかし、動きが不規則な上に、夜にあれ程の数の鳥が空を飛んでいくの不自然であることは、滅多に外出しない優にもわかる。

そして、星々の幾つかが次第に大きくなっていき――

絶望が、空から降ってきた。

「待って、若葉ッ！」

中にいるクラスメートの安否が気になり。咄嗟に若葉は優の静止を聞かず、神楽殿へ駆け出す。その手をひなたが掴んだ。

「私も行きます」

「ひなた!?!」

若葉を止めるものと思っていたひなたの言葉に、優が驚愕の声を漏らす。

彼女の目には先程までの異様な光が消え、代わりに強い意志が感じられた。口調もしつかりしている。

そんなひなたの目を見た若葉は、頷くと共に駆けだす。

「若葉、ひなた!!」

「優はここにいろ！すぐに戻る！」

若葉がそう告げると、2人の姿が神楽殿の中へと消えていった。

「……」

阿鼻叫喚の渦に包まれた境内で優は、幼馴染達が駆けて行った。神楽殿を唾然と見つめていた。

若葉の言う通り、優が一緒に行っても足手纏いにしかならないだろう。持病の発作も強くなり、息が苦しい。

「(だからって!)」

役立たずでも、女の子だけを危険な場所に向かわせることは優にはできなかった。

弾かれるように駆けだすと、自身も神楽殿の中へと入っていく。

「ッ——!?!」

そこで見たものは正に地獄であった。

白い異形の生物達は、その口のような器官で、逃げ遅れた人々を貪っていた。口の中は血で紅く染まり、巨体の下には食い残した人間の欠片が残っていた。食われている者には、優達と同学年の生徒らも多く——その中には若葉と友達となった少女達までが、変わり果てた姿になっていた。

「そん、な…」

優の口から呻きが漏れる。

目の前の光景が信じられなかった。余りに現実感がない。つい数十分前まで日常を生きていた人々が、今は物言わぬ姿になり果てている。

「ううあああああああああああああつ!!」

突如耳に絶叫が響いた。そちらを向くと、若葉が木材の切れ端を手に化け物へと駆けだし、その先端を突き刺した。

しかし、化け物は蚊にでも刺されたかのようにものともせず。虫を払うように、若葉をその巨体で体当たりし吹き飛ばした。

その小さな体は、社殿奥にある祭壇の上に落下した。

「若葉ああああああああ!!」

優は無意識に、彼女の名前を叫んで駆け寄ろうとする。しかし、化け物の一匹が立ちほだかる。

「どけええええええ!!」

優は足元に転がっていた野球ボール程の大きさの瓦礫を掴むと、化け物目がけて渾身の力を込めて投げつける。

だが、瓦礫は化け物に命中するも、傷一つくかなかつた。化け物は餌を見つけたと言わんばかりに、その巨大な口を開けて優に迫って来る。

「(僕にも母さんみたいな力があれば!!)」

優の母親はスレイヤーであり。それも日本はおろか世界有数でも指折りの実力者であり『戦女神』の異名で呼ばれていた。しかし、数年前にとある任務中に帰らぬ人となっていた。

スレイヤーの子にはスレイヤーになれる才能があると言われ、息子の優にも期待されていたが。しかし検査の結果、優にはスレイヤーとしての適性がないことが判明したのだった。

何もできない優に化け物が目前まで迫り、呑み込もうとする。

「(力が、若葉とひなたを守る力があればツ!!)」

出会った当初から守られ続け、今危機に瀕している大切な人達を守る力を、優は神に継る思いで願った――

だが、神は彼の願いを聞くことはなかった。

ザシユツ！

神楽殿内に何かを切り裂く音が木霊した。

同時に優を食らわんとしていた化け物が動きを止め、背後に向き直る。

すると、化け物に亀裂が入ったかと思うと。両断されて形容しがたい鳴き声を上げて消滅してしまった。

「——え？」

突然の事態に、思わず間の抜けた声が優の口から洩れた。

化け物がいた場所には、見知った少女が立っている。

「若、葉？」

優がその少女の名を呼ぶ。そう、立っていたのは、先程化け物によって吹き飛ばされた幼馴染だった。

遠目から見ても、かなりに勢いで吹き飛ばされていたにも関わらず。その身には傷一つなく、その手には1本の刀が握られていた。

この神社に祭られていたのであろうその刀は、年代を感じさせる古めかしさがありながらも。その刀身は今まさに研がれたかのような輝きを放っていた。

「無事か優？」

「あ、うん」

啞然としていた優に、若葉が優しく語り掛ける。その姿には先程の焦燥感はなく、普段の落ち着き払った頼もしさに溢れていた。

そんな彼女に化け物が次々と襲い掛かってきた。

「若葉ー！」

「大丈夫だー！」

若葉は刀を鞘に納めると、左足を踏み出して柄を握り、居合を構えを取った。彼女の実家は由緒ある武家の末裔であり、若葉も幼い頃からその武技を修めていたのである。

「ハアツ!!」

裂帛の声と共に、解き放たれた刃が一刀の元、化け物を次々と葬っていく。その光景を優は、ただ眺めていることしかできなかった。

瞬く間に、神楽殿内の化け物は彼女によって一掃されたのだった。

「……」

神がかり的な力を発揮した幼馴染を、優は啞然と見つめる。同時にただ守られるだったことに、胸の奥で何かが軋むような音がした気がした。

「若葉ちゃん！外にもあの変なのが溢れていますー！」

そんな彼のことなど露知らず、ひなたが若葉に駆け寄りながら、そう叫んだのだった。

3人で神楽殿の外に出ると。いつの間にこれ程湧いたのか、神楽殿の外は大量の化け物達に囲まれていた。逃げようとした人々は、退路もなく絶望にくれている。

若葉は、刀を握り締める。

例え敵が何十匹いようと、負ける気がしない――

「…な、何？」

化け物達の異変が起こった。

複数の個体が一箇所に纏まり、粘土を集めるように巨大化しつつ姿を変えていく…。まるで授業などで聞いた、ガストレアが他の生物のDNAを取り込んで進化するかのよう――

ある個体はムカデのように長い体形となり。

あるものは体表面に矢のようなものを発生させ。

あるものは体組織の一部が角のように硬質化して隆起し。

「(…進化…している)」

単体では乃木若葉に勝てないことを学習したのだろう。彼らが自分達より強力な存在に対抗するために選んだ手段は『進化』であった。それもガストレアよりも早く、柔軟性をも持ったものであった。

進化した個体の内の1体が、その体に発生した矢を射出した。矢は進行方向上にいた人間複数人を貫き、その先にいた優にも迫る。

「あ――」

そのことを優が知覚したのは矢が目前に迫った時だった。回避も防御も間に合わず、彼にできるのはただ矢に貫かれることだけ――

優
ツ
ツ
ツ
!

真横から突き飛ばされる感覚と共に、優の体が地面に倒れる。矢は優の背後の神楽殿をたった一撃で、三分の一程崩壊させてしまった。

一瞬何が起きたのかわからなかったも。自分が生きていることを不思議に思う。

「(どうして?)」

決まっている誰かが助けてくれたからだ。では、誰が?あの時そんなことができたのは――

「若葉ちゃんッ!」

すぐ側でひなたの悲鳴が響き、優は上半身を起こし。恐る恐るそちらに視線を向ける。

「わか、ば…?」

視線の先には若葉が倒れ込んでおり、脇腹から血がとめどなく流れており端正な顔は苦痛歪んでいた。

「あ、ああ…」

どうして彼女が?いや、わかっている。だが、その事実を認めたくなかった。

自分を庇って彼女が傷ついたことなど。――

数のミサイルが化け物の群れに降り注ぎ、爆発と炎に包んだ。

理不尽な力によって生み出される絶望。ならば、それを覆せるのも
また力なのであろう――

『オツラアアアアアアアア!!』

爆発と炎によって小型個体が全て消し飛び。残った大型個体も体の至る所に亀裂が走っていた。

そんな大型個体の——1番硬質と見られる角つきに、上空から新たに飛来した1つの人影が、両手で逆手に保持していた槍状の武器を亀裂がある箇所突き刺した。

『くたばれやあ!!』

そして、槍の矛が中央から上下に展開し。柄に内蔵されていたレールガンが露出する。矛がレールとなり、そこをバラニウム製の弾丸が走り大型個体を一撃で粉砕した。

『よつと』

レールガンの衝撃を利用して人影は、他の大型個体から距離を取りながら着地した。

その姿は全長2メートル近くあり。全身を紫の装甲で包まれていた。

「ファ、フナー?」

優はその人影の名を呆然気味に呟く。『ファフナー』日本の科学者が生み出した、人類を守護するための力である。

そして、大型個体を撃破したのは。『メガセリオン・モデル』と呼ば

れる、指揮官あるいはエース用の機種であった。

よく見ると、そのメガゼリオンモデルは優の知るものより装甲が薄く、ブースターが大きくなっており。個人用に、機動性重視でカスタマイズされたもののようであった、

「自衛隊だ！自衛隊が来てくれたぞ!!」

助けが来たことに、絶望に包まれていた人々から歓喜の声がかかる。

「それにあれって『マスターオブゼリオン』だ!」

カスタムモデルの肩部に描かれた666の数字の上に。十の角と七つの頭と、七つの冠を持つ火のように赤い竜のエンブレムを見た者から、更なる歓喜の声が上がる。

『マスターオブゼリオン』——それはメガゼリオン・モデル搭乗者の中のエースには『マスターゼリオン』の異名が与えられ。さらに、その中で最も優れた者に与えられる唯一の称号である。

そして、その称号を与えられた者の名は——

「日野 道陽…」

フアフナー開発者の1人日野 洋治の息子であり、テストパイロットとして開発に参加し。前大戦で初の実戦投入型である『テイターン・モデル』で初陣にも関わらず多大な戦果を挙げ。フアフナーの正式配備後は、メガゼリオン・モデルを駆り英雄的活躍を続ける『生きた伝説』とさえ言われる男である。そして、優が最も憧れる人物でもあった。

『さあて、暴れるぜ!行くぞ光輝!!』

メガゼリオン・モデルの掛け声に応えるように、もう1体のメガゼリオン・モデルがパラシュート降下で境内に降り立つ。

こちらは黒色の装甲で従来機より重厚であり。バックパック一体型の2門のレールキャノンと、右腕に装備されたシールドと一体型の大口徑ガトリング。さらに、左腕には火炎放射器と見られる物まで装備された重装型のカスタムモデルとなっていた。

『てか、遅えよ!もつと早く来い!』

『あ?あの高度からパラシュート切り離しなど、アンタのような酔狂

しかやらんよ』

軽装型が何やら重装型に文句を言うも、重装型は馬鹿を見るような感じで対応している。その声はかなり若く、優達と同年代ではないかと思われる。

そんなことをしていると、矢つきの大型個体が矢を次々と放ってきた。

ファフナー部隊の背後には優達がいるため。避ければ彼らが犠牲になり、その身で受ければ串刺しになってします。まさに、絶対絶命の状況であった。

『よつと』

だが、軽装型は手にしていた槍状の武器『ルガーランス』を左手にし、背部パイロンに懸架していた折り畳み式の大型ソード『ロングソード』を右手に持つと。1歩前出て、それらを目にも止まらぬ速さで交互に振るい、危険度の高い矢のみを斬り落とすか、刀身と矛先に滑らせ軌道を変えて捌いていく。

放たれた矢は全て両断されて地に落ちるか、あらぬ方向に飛んでいき。自身はおろか、誰一人傷ついた者はいなかった。

「凄い…」

素人の優でも、今のことを他の者にやれと言われても、不可能であることが理解できる程の絶技であった。しかも、当人は息一つ乱していないことから、逸話通りその技量の高さが伺える。

『まったく、しゃあねえ。俺はムカデモドキをやる。お前は矢生やしてるのをやれ!』

『俺が悪いみたいになっているのは気に入らんが。了解だ』

コントのようなやり取りを終えると。軽装型はブースターを吹かし、ムカデ型の大型個体へと向かっていき、重装型は矢つきへとゆったりとした足取りで向かっていく。

矢つきは重装型へ再び矢を放つ。対する重装型は、ガトリングを構えると連なった砲身が回転を始め、次々とバラニウム製の弾丸を吐き出していく。

弾丸は飛来する矢を次々と撃ち落とし、撃ち漏らした矢が装甲に当

たるも弾かれる。いや、先程の軽装型同様、危険度の高いものだけを撃ち落とし。その他は強固な装甲と角度をつけることで、威力を殺し受け流しているのだ。こちらも常識外れの技量を持っていることを伺わせる。

やがて、矢つきの体からは、息切れしたかのように矢が生えてこなくなってしまうた。

『なんだ、もう終わりか。つまらんな』

重装型は、まるで興味が尽きたかのように呟くと。装甲の各々が展開し内部のミサイルが露出する。

『消し炭になれ』

ミサイルが放たれると、途中でその先端が解放され、小型のミサイルが飛び出していくと。次々と着弾し爆発と炎に包まれる。

矢つきは形容しがたい鳴き声を上げて炎に焼かれ、やがて跡形もなく燃え尽きてしまったのだった。

『そおりやつと！』

重装型が矢つきと交戦を始めた頃。軽装型もムカデ型の大型個体ががけて突進していくと。左手のルガーランスを背部パイロンに懸架し、腰部からサブマシンガンである『スコープピオン』を持ち発砲する。

連続で撃ち出された弾丸がムカデ型に殺到するも。大したダメージは与えられず、ムカデ型は煩わしそうに体を振るわせ、体を持ち上げると巨大な口を開け軽装型へと体当たりしてくる。

『はいなー』

軽装型は軽々と横に跳んで回避すると、ムカデ型がぶつかつた地面が深々と抉られ砂塵が舞い上がる。例えファフナーであろうとも、掠れても致命傷になりえる威力であった。

だが、軽装型は恐れなど微塵も見せず再び左手にルガーランスを持つと、接近しすれ違い様にその脚を数本斬り落とす。

ムカデ型は軽装型を捉えようと巨体を振るうも、軽装型はまるで動

きが読めているかのように避けながら脚を次々と斬り落としていく。

やがて自重を支えきれなくなったムカデ型は、地面に這いつくばり陸に打ち上げられた魚のようにもがくことしかできなくなった。

『よつとー』

待つてましたと言わんばかりに、軽装型がムカデ型の頭頂部にあたる部分に跳び乗る。ムカデ型はどうか振り落とそうと暴れるも、軽装型はそれさえ楽しんでるかのようになり、難なくバランスを取って立っていた。

『暴れるんじや、ねえ！』

軽装型はロングソードとルガーランスを交互に振るい、頭頂部を削り取っていく。ムカデ型はより激しく暴れるも、その猛攻は止まるどころかより激しさを増していった。

『せいー！』

止めと言わんばかりに、軽装型はルガーランスを薄くなった箇所突き刺しレールガンを撃ち込む。ムカデ型の頭部が弾け飛び一瞬ビクツと体を震わせ、動きを止めて倒れ込むと。残っていた体が朽ちるように崩れていき、跡形もなく消滅していくのだった。

化け物が全て倒され、境内には静寂が訪れる。

「助かったのか？」

誰かが呟くと、その声が次々と伝播し。やがて大きな歓声となった。

ある者は側にいた者と抱き合って生の実感確かめ合い、ある者は涙を流して神に感謝を捧げている。

『光輝。医療部隊を呼んでくれ』

『もうやっている』

流石、と部下の手際の良さに関心した軽装型は周囲の警戒に入つた。

「若葉、若葉！」

そんな中、優は傷ついた幼馴染に懸命に呼びかけていた。血を流し過ぎたため、彼女の顔色は青白くなっており。呼びかけても返事はなかった。

そんな幼馴染の姿に、優は再び後悔と無力さに苛まれる。

「若葉ちゃん……」

若葉に膝を貸しているひなたも、今にも泣きだしそうな顔をしていた。そのことが更に優を苦しめる。

『おい』

そんな彼らに、重装型が話しかけてきた。

「あなたは……」

優の言葉を無視して重装型は片膝をつくと、若葉の傷口を抑えていた優の手をどかす。

「!?何を……!」

『落ち着け。もうほとんど塞がってるぞ』

激昂しようとした優に、重装型は冷静に告げる。

「え？」

傷口を見ると、確かに塞がりかけており出血は収まっていた。顔色もよくなってきたいて、息苦しそうだっ呼吸も安定しており。辛そうであった表情も和らいでいた。

だが、どう見てもそんなすぐに塞がるような傷ではなかったののである。

『子供達』：ではないな。なのにこの再生力。こいつ人間か？』

さらつと失礼極まりないことを重装型が言うも。優もこの事態には困惑せずにはいられなかった。

ちなみに『子供達』とは。セカンドアタック後、妊婦がガストレアウイルスに接触することにより、ウイルス抑制因子を持ち生まれた子供のことを指す言葉である。

そのためウイルスへの強い耐性を持ち、常人よりもガストレア化するまでの期間が長く。人の形を保ったまま、驚異的な治癒力や運動能力を発揮できるのである。

だが、抑制因子保有者は全て前大戦時に生まれた7歳以下の子供のみであり。若葉が該当することはありえないのである。

「きつと、『神樹』様の加護のおかげです」

『神樹』様？」

幼馴染の口から出た聞き覚えのない単語に、優は首を傾げる。

『それは、もしかや『アレ』のことか？』

そういつて重装型の向いた方を見ると、優は我が目を疑った。

四国中心部の方角に、巨大な『樹』としか表現のしようがない物がそびえ立っているではないか。

優達がいる神社からかなりの距離があるにも関わらず。高層ビル程の大きさに見えることから、その巨大さを伺うことができる。

「何、あれ？」

『わからん。さっきの化け物共が現れるのと同時期に、いきなり現れたそうだ』

優の呟きに、重装型が興味深々といった様子で答える。

「あれは私達人類を守るために、土着の神々が集まりこの世に現界された姿、だそうですね」

「ひな、た？」

そう語るひなたに、優は困惑の色を隠せない。

そういつた知識はない筈の彼女が、なぜそんなことを知っているのか。

若葉に起きたことといい。優はまるで、幼馴染達が自分の手が届かない程遠くに行ってしまった錯覚に陥るのだった。

第一話

セカンドアタックから7年後、人類は新たなる未知の生命体による襲撃を受けた。

各国は持てる総力を用い、多大な犠牲を払うもこれを撃滅することに成功する。

その後。国連はこの新種の敵性生命体を『バーテックス』と呼称し、バアルに分類することを決定する。

それと同時期。歴史の裏で活動していた『大社』^{たいししゃ}と名乗る組織が台頭した。彼らはバーテックスが天の神々が人類を粛正するために生み出した眷属であることを世界に告げた。

また、四国に出現した巨大植物は。その天の神々に反抗した土着の神々の集合体で、彼らは『神樹』と呼びその声を代弁者であるとも語った。

大社曰く、神樹を中心とした日本の神々は日本列島を中心とし。世界規模で結界を張り、バーテックスの人間界への侵入を阻むことに成功した。だが、これは一時的なもので。天の神々は近い内に、再度人間界への侵攻を再開するであろうと。

結界は四国の地を中核とし。長野、沖縄、北海道の地がそれを支える形で形成されており。侵攻が再開された場合、天の神々は結界を破壊するため、それらの地が最優先で標的とされるため。対抗策として、神樹ら日本の神々は自らの力の一部をそれらの地に住まう、選ばれた数人の少女に与えたことも告げられた。

これを受け、四国エリア国家元首である乃木^{のぎ}大葉^{おおば}は。日本の各エリアに日本の再統一を果たしこの事態に対処すべきと打診するも、東京、長野以外のエリア元首は『大社の発言は信用できない』これを拒否したため。四国、東京、長野の3エリア同盟を結ぶに留まる。

『第三次遭遇』^{サードアタック}と呼ばれることになるこれらのできごとから半年後。予言通り長野、沖縄、北海道エリアにバーテックスが再侵攻を開始。各エリアは神樹から力を与えられた少女『勇者』を中心とした戦力で対抗するも。バーテックスの動きに同調したかのように、他のバアル

からの侵攻にもさらされ2年後には長野、沖縄エリアが陥落してしま
う。

残る北海道エリアでは、要である『勇者』が突如姿を眩ませてしま
う事態が起き。それと同時に、北海道の結界としての機能が失われて
しまう。その結果、バアルは興味をなくしたかのように、北海道エリ
アへの侵攻が止んだことで滅亡を免れる。

そして、支えである3エリアの結界が失われたことで、遂には四国
エリアがバアルの侵攻を受ける。四国エリアも所属する勇者を中心
とした戦力でこれを迎え撃ち、激戦が展開されることとなった。

サードアタックから3年の月日が経ち。日本を中心として、世界の
混沌が深まる中。蒼希優は、東京エリア外周区の一画で雑草の上に寝

ころび、気持ちよさそうに寝息を立てていた。自衛隊が使用している迷彩服を身に纏って――。

外周区――

各エリアと、バアルに占領された外界とを隔てるモノリス周辺の区画を指す言葉。

過去の大戦で荒廃したまま一部の発電施設や、ゴミ捨て場等、エリアのインフラに関わる設備以外は整備されておらず。何らかの理由で、内地に住むことのできない物達の隠れ家として利用されている。そのため一般人が立ち入ることはまずない。

「zzzz」

基本無法地帯同然の地である筈にも関わらず、優は無防備も同然であり。寧ろ安らぎを得ているようでさえあった。

また彼の周りには、10歳かそれ以下と見られる少女が数人寄り添うようにして共に眠っていた。彼女達は『子供達』と呼ばれる、ガストレアウイルス抑制因子を持った者達である。

その特徴の1つとして。感情の昂ぶりや能力の使用時に、目がガストレア同様赤く発光するため、ガストレアによつて被害を受けたことで、精神的に深い傷を負った親の元に生まれた子供達は迫害され捨てられてしまうことが多いのである。

そういった『子供達』は外周区で孤児としての暮らしを余儀なくされるのだ。だが、僅かによれていたり、汚れが見られる服を身に纏っていて。少々みずほらしさを感じさせるも、彼女達も優同様スヤスヤと穏やかな寝息を立てている。

そんな彼に1人の少年が近づいてくる。

14〜5歳程であり、ショートカットの黒髪で。その目つきはかなり鋭く、不良などと言われそうな顔つきをしている。そして、彼も優と同じく迷彩服を身に纏っていた。

少年は優達の元まで近づくと。眠っている少女達を起こさないよう細心の注意を払った様子で、ソロリソロリと優に近づいていく。

「おい、起きろ優」

そして、優を見下ろせる位置まで辿り着いた少年は、しゃがみ込み

優の体を揺する。

「zzz」

しかし、優は起きる素振りも見せず夢の世界にいる。

「おいこら。起きろ」

少年は先程より強めに揺すりながら、再度起こしにかかる。

「zzz」

それでも一向に起きる気配のない優。すると、少年から何か切れる音がした。

「オラア！」

「ぐぎゃ!？」

男は立ち上がると、片足を持ち上げ優の腹をおもっいきり踏みつけると。その激痛で目覚めた優は、少女達に害が及ばない場所まで飛び跳ねると。両手で腹部を抑えながらのたうち回る。

「ちよ、ちよつと、光輝！何すんのさ!!」

暫くして痛みが治まった優は起き上がると。涙目で元凶である少年に抗議した。

「あつ？お前が呼びかけに応じず、起こしに来てやつても起きないからだろうが」

少年——天童てんどう 光輝こうきは、不機嫌そうに優を睨みつけながら吐き捨てる。

「えっ？」

その言葉に、優はキョトンとして自身の携帯端末『Private Digital Assistant』を取り出すと着信履歴を表示させる。すると、確かに彼からの着信が連続でされていることがわかる。

「えくと」

「……」

優は恐る恐る光輝の方を向くと。彼はさあ、俺のどこに非はあるのか言ってみろ、といわんばかりのオーラを放っていた。

「ぐ、ごめくんねっ！」

テヘツと言った感じで舌を出しながら、右手を頭の上に乗せながらポーズを取り謝罪する優。そんな彼の尻に、光輝はハイキックをかま

す。

「オウツ!？」

「ごめくんね、じゃねえよドアホウ。なんのためのPDAだ、ん？」
「すいませんでした」

眼光だけで人を刺せそうな顔でなじる光輝に、誠心誠意平謝りする優。そんなやり取りをしていると、クスクスと複数の笑い声が聞こえてきた。

「どうやら騒ぎすぎてしまい、少女達を起こしてしまったようだ。」

「悪いが、仕事が入ったから俺達はそろそろ帰るな」

光輝が少女達にそう告げると、ええー!と寂しそうな顔をした彼女達は。光輝と優に抱き着いてくる。

「お兄ちゃん達もう帰っちゃうの?」

「うん、ごめんね。また明日来るから」

「本当?」

「ああ、約束だ」

2人が少女達の頭を撫でながら告げると、渋々ではあるが離れてくれた。

「いってらっしゃい!」

「お仕事がんばってねー!」

少女達の声援に手を振って応えながら、離れていく2人。

少しは離れた場所に止めてあった自衛隊が使用しているジープに近づくと、優は助手席に、光輝が運転席に座りキーを刺してエンジンをかけると、内地へ向けて発車させるのであった。

内地に向かってジープを走らせること暫くして、横浜まで移動し。東京エリアに駐屯している陸上自衛隊の活動拠点である横浜基地へと向かっていく。

ゲート手前でジープを止めると、近づいてきた警備担当に、光輝と優はPDAを取り出し身分証明書を表示させると提示する。それを確認した担当者が敬礼した後、ゲートに向けて合図を出すを開放され

る。

2人は担当者に返礼し、ジープを発進させると基地内を進んでいく。司令部がある建物前で停車すると、ジープから2人共降り、駆け寄ってきた隊員にジープを預け司令部の扉を通る。

エントランスを抜け、エレベーターに乗ると。パネルに備えつけられている読み取り機に、光輝が懐からPADの画面を読み取らせると、エレベーターが降下を始める。

パネルに表示された階数表示が変わっていき、BF3と表示されたところでエレベーターが停止し扉が開く。

扉から先は1本道になっており。少し進んだ先に別の扉があった。2人はそこまで歩いて移動すると、扉の横に備えつけられた装置に、光輝が手の平を押し当て指紋認証と、扉に備えつけられたカメラで網膜認証を行う。

『認証完了。天童光輝2尉と認証』

天井と一体化したスピーカーから機械音性が流れると、次に優が同じ手順を行う。

『認証完了。蒼希優3尉と認証』

スピーカーから機械音性が流れると、扉が開き2人はそのその先にある部屋に入っていく。

部屋の中は如何にも研究室だとわかる作りになっており。幾つかある机の上にはスピーカーや試験管といった用具や、研究結果と見られる文章が書かれた紙が机に散らばっていた。

「ただいま戻りました博士」

光輝がそう告げるも、部屋はシンと静まり返っており人がいる気配がない。だが、2人は慣れた様子で部屋の中を進んでいき、別の扉の前まで移動する。

光輝が扉を開けると、内部は灯りが点いておらず暗闇に包まれている。光輝が扉の側の壁にある電源パネルに触れると、天井にある蛍光灯が光を放ち部屋全体を照らす。

「ふふ、美しいよチャーリー」

部屋の中心にある手術台に、シートによって体は隠された1人の成人男性が横たわっている。そして、その男性に跨り、片手で頬を撫でながら愛の言葉を囁いている1人の白衣を纏った女性の背中が2人の視界に映った。

一見すれば男女の情事にしか見えないだろう――

相手の男性が死体でなければ、だが。

「博士」

「ああ、君を見ている若かりし日の情熱を思い出すよ」

光輝が女性のことを呼ぶも、死体に話しかけることに夢中なのか気づいた様子はない。

「博士」

「そう、あれは私がまだ——」

光輝は今度は大きな声で呼ぶも、女性は依然気づいた様子は見られない。

すると光輝から何か切れる音がした。優はこれから起きることを予見し、両手で耳を塞いだ。

「は・か・せエ!!!」

怒鳴るように叫ぶと、密閉された地下空間では実によく響き渡った。優の耳がキーンとするくらいには。

「おや、2人共お帰り」

そこで、ようやく2人の存在に気がついた女性が、呑気そうに顔だけ振り返った。

「ちよつと待ってくれ、今いいところだから」

「はっ倒すぞあんた!!」

再び死体を愛でようとした女性に、光輝が軽く殺気を放ちながら怒鳴る。

これ以上は身に危険が及ぶと判断したようで、ようやく女性——
室戸^{むろと すみれ} 堇は手術台から降りて2人に向き合った。

美人なのだが、肌は不健康な程青白く。髪を伸び放題にしており髪で目元が半分隠れており、存在感が希薄で幽霊にさえ見えてしまう程である。

彼女は重度の引きこもりにして死体愛好家であり。寝床にしているこの研究室に死体安置所を作らせ、そこに運ばれてくる死体を勝手に恋人にしてしまう、変態としか表現のしようのない人格破綻者なの

である。

「やれやれ。光輝君、そんなにイライラしていると将来ハゲてしまうぞ?。」

薫がやれやれといった様子で、軽く息を吐きながら失礼なことを言ってくる。

「誰のせいですか」

対して光輝は額に青筋を浮かび上げながら、こめかみをピクピクと引きつらせて睨みつける。

「だいたい、あなたが機体との同調テストをしたいと言うから戻ってきたのに。なんで死体とイチャついてんですか!」

「ムラムラしたから」

「少しは欲求を抑えろ!」

はばかりすることもせず本音をぶちまける薫に、光輝はツツコミを入れる。

「てか、博士。スーザンさんはどうしたんですか?」

優の言うスーザンとは、この前まで薫が恋人にしていた女性の死体である。ちなみに、薫は死体であれば性別をとわない。

「彼女は残念ながらもういない。代わりの彼だ。死体はいいよ、無駄口きかないし。彼らだけさ、私の気持ちを理解してくれるのは」

薫はそう言つて、防腐処理の施された死体に頬ずりをする。ちなみに彼女の座右の銘は「この世には死んだ人間と、これから死ぬ人間しかない」である。

「すいません。僕達博士みたいなド変態さんじゃないので、理解できなくて:」

「優君。思ったことを素直に言ってしまうのは、君の利点であり欠点だな。私はド変態さんでないよ」

申し訳lessnessさそうな顔で、とんでもないことを言い放つ優に。薫はハハハとにこやかに笑いながらツツコミを入れる。

「あ、すいません。そうですね!博士は『超』ド変態さんでしたね!」

「ハハハ、どうしよう光輝君。泣きそうなんだが」

「自業自得でしょう」

悪気を一切感じさせず、無自覚に追撃をかます優に。流石の薫も傷ついたようだ。そして、光輝はそんな2人を見て激しい頭痛に見舞われ、片手で顔を抑えるのであった。

東京エリア駐屯陸上自衛隊所属——国家代表直属遊撃小隊『アルヴァイス』

次世代ファフナー開発計画で開発された新型機『ノートウング・モデル』を実戦運用するために、開発計画兼整備班総責任者『室戸堇』部隊長『天童光輝』副部隊長『蒼希優』を中心に構成された部隊である。

その特異な部隊編成と、従来の部隊より突出した戦闘力を最大限に発揮するために。通常の指揮系統から外され、国家代表である『せいてんし聖天子』が直轄し。非常時には独自の判断で行動する裁量が与えられているのが特徴である。

「もういいから早くテストを——」

ウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ
!!!

光輝の言葉を遮るように、非常事態を告げるサイレンが鳴り響くのであった。

第二話

A i v i s 専用に使けられた横浜基地 B F 3 エリア。そのグリーンリングルームに光輝と優は並び立っていた。

彼らの視線の先には、壁に埋め込まれた大型モニターに1人の少女が映し出されていた。

雪を被ったような純白のドレスに銀髪——『聖天子』東京エリアを統べる国家代表である。

東京エリアは襲名制であり、聖天子という名は代表が代々受け継ぐ者の象徴と言えるものなのだ。

『天童2尉、蒼希3尉——あなた達の力が必要になりました』
どこまでも透き通る声で聖天子は厳かに告げる。

『未踏破領域にあるとある施設から最重要機密が盗み出されました。奪還に部隊を派遣しましたが、反撃を受け失敗しました。A i v i s には彼らに変わり奪われた機密の奪還を命じます』

未踏破領域——

バルによって支配された地域の総称。その全ての土地が、ガストレアウイルスによって異常進化した植物が多い茂り、ジャングル化しており生態系は完全に崩壊してしまっている。

聖天子の説明に光輝は顎に手を添えて思案すると。

「その最重要機密についての情報は？」

『…それはあなたの方であってもお教えできません』

光輝の言葉に聖天子は光輝らを一瞥し、躊躇うかのように目を伏せた。直属部隊である彼らにも明かせないというは、かなりの機密らしい。

聖天子個人としては話したくても、国家元首としての立場がそれを許さず、その板挟みに苦しんでいることは十分に感じ取れたので。光輝としては無理に聞き出す気はないため、深くは追求はしなかった。

「では、強奪犯については」

『1組の民警とのことです』

「民警、ですか」

民警――

民間警備会社の通称。セカンドアタック後に生まれた業種であり、エリア内に侵入したバアルの対応を主な業務とし、その戦闘力を生かし身辺警護といった業務も受け持つこともある。

『子供たち』であるイニシエーターと、その監視役のプロモーターのペアで行動するのが基本となる。

光輝は聖天子の言葉に目を細める。民警はあくまで民間組織だが、その戦闘力はピンからキリまでが激しく。基本はチンピラ程度の実力しかない者が殆どだが、中に単独で軍隊を壊滅させられる者さえいるのだ。

そして、そういった実力者は国に作業員として雇われることが多いのだ。

バアルの出現後、人類同士での争いは終結したように見えるが。水面下では民警による作業員を送り込み合う、かつての冷戦期のような対立構造ができて上がっていた。

「了解しました。それではただちに出击します」

光輝が敬礼すると優もそれに続く。

光輝自身としては人類同士で争うこと等、無駄以外のなにものでもないと考えているが。自衛隊員である以上命令に従うだけであった。

そして、光輝は優に目配せすると退出していく。

「……」

「……」

残った優と聖天子は何も言わず、ただ視線を合わせる。そこに気まぐさはなく、寧ろ心地よさがあるようであった。

『優さん……』

沈黙を破ったのは聖天子であった。だが、今の彼女には先程までの神聖な雰囲気はなく。16歳である年相応の少女のものであった。

『ごめんなさい。またあなたを戦場へ送り出してしまいました』

今にも泣きだしそうな彼女の口から出たのは、謝罪の言葉であった。厳格な国家代表としての彼女を知る人間が、その弱い姿を見れば仰天することだろう。

「泣かないで『聖ちゃん』。君はなにも悪くないんだから」
『でも、わたくしがもつとしつかりとしていれば。こんな事態にはな
らかったかもしれないですよ?』

自分の采配一つで国の生末が決まる。即ち、そこに住む全ての人々の
未来を決めることとなるのだ。その重圧と彼女は日々戦っている
のだ。

今回の事変への対処も、要所ごとに、自分の判断が間違っているの
ではないかという不安がつきまとっていた。あの時もつと適切な判
断ができたのではないか? そうすれば早期に解決でき、無用な犠牲を
—— 優を危険に晒さずに済んだのではないかと思えた。

「君は精一杯やっているとと思う。他の人はどう言うかわからないけど、
僕はそう信じているよ」

「—— ツー！」

そう言つて優が微笑むと、聖天子は頬を赤らめて俯いてしまった。
「それにこれは、僕が自分で選んだことなんだ。だから、後悔はしてな
いよ」

『優さん…』

優はモニターに近づいて右手で触れると、聖天子は顔を上げるとそ
の手に自分の左手を重ねた—— 遠く離れた場所にいる互いの存在を
確かめ合うように。

「守るよ、君が守ろうとしているもの全てを。そして、君を—— それ
が、僕が『命』の使い道の一つだから」

『どうか、お気をつけて…』

モニターから優が手を離すと、聖天子は名残惜しそうにするも。部
屋から去り行く彼の背中に、手を合わせて無事を祈るのだった。

一足先にモニタールームを出た光輝は、更衣室でフアフナー用戦闘
服へと着替える。『シナジエティック・スーツ』と呼ばれ、体つきが
はつきりわかる形状をしており、両肩・両脇腹・両膝部分には布地が
ないのが特徴的である。

更衣室から格納庫に繋がる扉を開くと、整備責任者である董が光輝を待ち構えようにして立っていた。

「今更だけど、いいのかい？君と聖天子様は許嫁なんだろう？」

腕を組んで前髪に隠されていた目を僅かに覗かせ、問いかけてくる。その目は光輝を案じているようであった。

実は光輝の実家は、東京エリアの政治経済を裏から牛耳る程の力を持っており。彼の祖父であり当主である天童てんどう菊之丞きくのじょう——は聖天子補佐官としてこのエリアのNo.2の地位にいるのだ。

光輝には政府の要職に就いている多くの異母姉弟や従兄弟らがいるも、祖父は自身の後継者は光輝とすることを決めており。また祖父は聖天子を敬愛しており、光輝は彼女と歳が近いこともあり。いずれは婚姻を結ばせ公私において聖天子を支えさせたいと考えているのだ。

そのため幼い頃から光輝と聖天子は交友があり、幼馴染といえる関係であった。

「勝手に決められたことですからね。俺はあの2人はお似合いだと思いますよ」

だが、光輝自身は聖天子とは姉弟のような関係で満足しており、正直婚姻には乗り気でなく。そして、とある任務で優と知り合ってから、聖天子が彼を想い慕っていることに気がつき、彼女を応援したいと考えていた。

「しかし、優君は優秀とはいえ一介の兵士に過ぎない。いくらなんでも身分が違い過ぎる。君は悲劇的な恋が好きなのかな？」

「そういう趣味はありませんね。今は博士の言う通りですが、あいつはいずれ大きくなりますよ。誰もが無視できない程にね」

「彼を信頼する気持ちは理解できるよ。だが、天童閣下がとても許すとは思えないがね」

董は眉を潜ませて言う。菊之丞は光輝を溺愛し、聖天子には揺るぎない忠誠心を持っている。そんな彼が光輝以外に聖天子を任せるとは思えなかった。

「そこは俺がなんとかしますよ。例えおじい様を敵に回したとしても

ね」

「そんなことをすれば、東京エリアにいられなくなるぞ?」

「幼馴染と親友の幸せのためなら、喜んで命をかけますよ」

そういつて笑みを浮かべる光輝。彼は滅多に笑わないので珍しい光景であった。

「そうか…。君にそこまでの覚悟があるなら、もう何も言わないよ」

そんな彼を見て、董はこれ以上語るのはやばだと理解した。

「お待たせ。どうかしたの?」

シナジエティック・スーツ着替えた優が更衣室から出てくると、光輝と董から流れる妙な気配に不思議そうに首を傾げる。

「なんでもないさ。博士準備は?」

「こちらは終わっているよ。後は君達と輸送機待ちさ」

光輝の問いに董は右手の親指で格納庫の奥を指す。

「では行くぞ優」

「うん」

光輝と優は格納庫の奥へ向かうと、ハンガーに固定された2体の黒色と空色のファフナーが姿を見せる。

ノートウング・モデル——次世代機開発のための最新装備のテスト用に開発された試作機であり。最大の特徴は、ガストレアの心臓を加工した『コア』と呼ばれる新型動力を搭載していることである。

そして、ノートウング・モデルに使用されているコアは、ガストレアでも11体しか確認されていない、ステージV『ゾディアック』と呼ばれる最大級個体の心臓から作られたものである。

ステージ——

ガストレアは進化の度合いで区分されており、感染して間もないステージIから完成形であるステージIVまで4段階に分けられる。

ステージの進行段階でさまざまな生物のDNAを取り込むため、ステージII以降のガストレアはそれぞれに異なる異形の姿と特徴を持ち、「オリジナル」とも呼ばれる。主だった個体には星座にちなんだ識別名が付けられている。

ゾディアックは通常は発生し得ないステージVに分類され、なぜこ

のような個体が生まれたのかは不明である。

ゾディアックの心臓——

ゾディアックの内、撃破された金牛宮タウルスと処女宮ヴァルゴの心臓を、国連より次世代ファフナー開発のため東京エリアへ『譲渡』されたのだ。

当時、貴重なゾディアックの部位を独占させるこの決定には、四国と長野以外の日本エリアから反対の声が大きかったが、ハンドレッドの開発元であるワルスラーン社社長や、一国の王と同等の権力を持つ『ビュリタリア神聖教会』教皇等の世界に強い影響力を持つ者達からの賛成の声を受け、実現したのだった。

この結果、コアシステムを始めとする最新技術が搭載可能となり。ノートウング・モデルは従来機を凌駕した性能を獲得することに成功している。

反面、適性のある者にしか機体を起動させることができなくなり。『特殊な適性を必要としない起動兵器』であるファフナーの利点が潰れてしまったことが、最大の欠点となってしまった。

ハンガーに収められた。全身に固定火器が装備され、堅牢な装甲で覆われた黒色の機体——マーク・ツヴァイに光輝が近づき、背中を預けるようにして乗り込む。すると装甲が閉じ全身が装甲に包まれ、空気を抜く音と共に最初から身体の一部だったかのような一体感を感じる。

優もスマートなフォルムに、背部だけでなく、両脚部に装備された大型ブースターが特養的な空色の機体——マーク・アインに同様の手順で乗り込むと。両者に内部に備えられている両肩・両脇腹・両膝に先端が、剣山のようになっているコネクターが打ち込まれる。シナジエティック・スーツには、この際生じる痛みを軽減する機能もあり、着ていなくても搭乗はできるが最悪激痛で気絶する可能性もある。

もつともスーツを着ていてもそれなりの痛みはあるが、優も光輝もすでに慣れているのでなんともない様子である。

コネクターを通して機体と神経接続がなされ、文字通り機体と一体となり。機体を受ける皮膚感覚が、搭乗者にダイレクトにフィードバックされる。

そして、2人の瞳が紅くなり、機動を完了する。

『2人共調子はどうだい?』

『マーク・ツヴァイ問題なし』

『マーク・アイン同じく』

通信ルームに移動した董の声に2人が答えると、ハンガーのある区画が上昇を始める。

その間に機体の最終チェックを終えると、地上に繋がるゲートが見えてくる。

ゲートが開くと日が沈みかけた空が広がり、機体が地上へと出ると、ハンガーのロックが解除される。

視界の先には、現地までの移動に使用する輸送機が待機しており、その後部ハッチまで2人は機体を移動させるのであった。

元千葉県房総半島——バアルによって占領されたこの地は、かつて人類が築いた都市群は軒並みバアルによって破壊され尽くし。ガストレアウイルスによって異常進化した植物に覆われ、人の営みの痕跡は消え失せ化け物が跋扈する密林と化していた。

南米のジャングルと同様の様相を呈している空間で。日が沈み、月が放つ光以外照らすものがない薄暗い森林の中、いくつかの人影があった。

最重要機密奪還のために派遣されたファフナー部隊である。隊長機である一般仕様のメガセリオン・モデルと、正式量産機であるグノース・モデル数体で構成されていた。

だが、どの機体も大小様々な損傷を受けており、ただならぬ事態があったことは容易に想像できた。

『——様子はどうか』

「…駄目です」

隊長機であるメガセリオン・モデルの問いに、地面に寝かせられた部下を見ていた別の部下が無念そうに首を横に振った。

『…そうか』

二度と目を覚まさなくなった部下に冥福を祈ると、隊長機は状況を整理する。

強奪犯を探索中、木々に覆われた暗闇から何かが姿を現した。

それは、人であった——1人はタキシードにシルクハットに身を包み、笑顔を浮かべた仮面で顔を隠した長身の男と、黒いドレスを纏い腰にバラニウム製と見られるの小太刀を2本携えた10歳程の少女であった。

恐らく、彼らが強奪犯なのであろう。隊長機はそのことを問いただそうとする。

——が、イニシエーターが小太刀を抜刀すると同時に、姿が消えたかと思うと。隊長機と共に前衛にいた2体のグノーシス・モデルが首から血を噴き出し崩れ落ちた。彼らの側にはイニシエーターがあり、手にしている小太刀には血が滴り落ちていた。

そこで攻撃されたことを自覚すると、隊長機は手にしていたアサルトライフルを構え、部下に攻撃を指示すると同時にイニシエーターへと発砲する。

それに続くように部下のグノーシス・モデルも、腕部と一体化しているガトリングとレールガンを放ち、10機分の弾幕がイニシエーターへと襲い掛かる。

だが驚くことに、イニシエーターはまるで踊るかのように弾幕を掻い潜りながら接近し。次々と部下を小太刀で斬り伏せていった。それもまるで遊んでいるかのような笑みを浮かべて——

このままでは全滅すると悟った隊長機は、イニシエーターを残った部下に抑えさせ、自身はプロモーター目がけて突撃した。イニシエーターは確かに高い戦闘力を持つが、それでも10歳程度の子供なのである。そのため判断を相方であるプロモーターに一任していることが多く、プロモーターが倒されると無力化されることが殆どであった。

その職業柄、民警同士での戦闘になることも珍しくなく。その場合、ただの人間であるプロモーターが優先的に狙われることが多いのである。

『はああああああー!』

そのためプロモーターが狙われれば、イニシエーターはプロモーターを守るために動くものだが。小太刀持ちのイニシエーターは、そのような素振りも見せず部下に襲い掛かっていた。

そのことに隊長機は違和感を覚えるも、ライフルをプロモーターへと構えトリガーを引く。撃ち出された無数の弾丸は、まるで見えない壁に阻まれたかのようにプロモーターの眼前で弾かれた。

『何!?!』

その事実には驚愕すると同時に隊長機は理解した。イニシエーターがプロモーターを守ろうとしなかったのは、その必要がなかったからだ。

『クッ!』

隊長機は再度ライフルを発砲するも、先程と同様に弾丸は何もない筈の空間に弾かれた。まるでその光景は、サベージの張る防御フィールドのようであった。

対するプロモーターは、隊長機の行動を仮面の奥で嘲笑っているようであった。

『ならば――!』

射撃武器では効果がないと判断した隊長機は。ライフルのマガジンを交換し左手に持ち、背部パイロンから近接用ブレードを右手に持ち、プロモーターへと突撃する。

牽制のためにライフルを放つと、やはり弾丸は見えない何かに弾かれるも。接近した隊長機はブレードをプロモーターへと突き立てた。

刃は弾丸同様に、プロモーターに届く前に見えない壁に阻まれ、それ以上前に進まなかった。

「無駄だよ。その程度では私には届かない」

プロモーターがどこまでも冷え切った声音で言葉を発する。

『舐めるなア!』

隊長機がライフルを手放し、腰部からグレネードを取り見えない壁に押し付け起爆させる。

握ったままグレネードを起爆させたことで、集約された威力が見え

ない壁に炸裂し、その衝撃で後方へ吹き飛び背中から地面に叩きつけられる隊長機。

捨て身の代償として代償として左手が吹き飛び、激痛に顔を顰めながら上半身を起こすと、その視線の先には無傷のプロモーターが立っていた。

「ふむ。無能な国家元首に率いられているからと、少し油断してたな」プロモーターは感心したように頷く。そして、右手の指をパチンツと鳴らすとイニシエーターが男の元へを戻った。

「もう終わりなのパパ？もつと斬りたい」

「我慢だ娘よ。じきに多く斬れるのだから」

不満そうに唇を尖らせるイニシエーターを、意味深な言葉で宥めるプロモーター。

「では、我々はお暇させてもらうよ。精々足掻いてくれたまえ」

そういうと2人組は背を向ると、茂みの奥へと消えていってしまった。それと同時に周囲から獣のような咆哮と地響きが響渡った。

『ツ不味い！森が起きたか！』

先程の戦闘音で、周囲にいたバアルがこちらに向かって来ているのだ。

隊長機は素早く部下に負傷者を連れて撤退を命じるのであった。

あれからバアルに気取られぬよう移動している最中、負傷していた部下の容体が悪くなり、部隊を一旦停止させることとしたのだ。

中隊規模の部隊が1組の民警に半壊させられるなど、悪夢以外の何物ものでもなかったが。現実として危機的状况であることに変わりなかった。

既にこの顛末は司令部に報告しているので、新たな追撃部隊が派遣されているであろう。だが、自分たちの救助に戦力を割く余裕はないため、自力で安全圏まで離脱しなければならない。

そのため部下の遺体は持ち帰る余裕がないので、タグだけ回収し地面へと埋めると部隊は移動を再開する。

『クソツ。なんでこんなことに』

部下の1人が悪態をつく。本来なら止めるべきだが、この状況では無理もないことであり、隊長機も内心は同じことを思っていたからでもあった。

奪還すべき対象も、強奪した相手に関する情報も伏せられたまま派遣されたことに、口にくそ出さないが上層部に対する不信感は拭えなかった。

『うわあ!?!』

突然僚機の1機の片足に蔦のようなものが巻き付き、強烈な力で引つ張られ地面に叩きつけられると、茂みへと引きずられていく。

『このッー!』

側にいた他の僚機が蔦のようなものへと発砲し切断する。すると、苦しむような獣の咆哮と共に、茂みからカマキリ型のガストレアが飛び出してくる。

カマキリを3m程にまで巨大化させた外観に、背部から2本の触手が生えており。他の生物のDNAを取り込んで進化したステージIIであり、1本の触手が途中でちぎれていて蔦に見えたのは、この個体の触手であった。

カマキリ型は、腕と一体となっている鎌を引きずり込もうとしていた僚機目がけて振り下ろす。

隊長機は狙われた僚機の前に立ち、手にしているブレードで鎌を受け流し、狙いが逸れた鎌は何もない地面へと突き刺さった。

『撃てー!』

隊長の合図と共に、僚機全機がカマキリ型へと一斉射撃を浴びせる。

蜂の巣にされたカマキリ型は、絶叫を上げながら崩れ落ちて絶命した。

『大丈夫か!』

『はい。助かりました隊長…!』

隊長機が助けた僚機の腕を掴んで起き上がらせようとすると、センサーが頭上に新たな反応を捉えた。

『隊長！』

腕を掴んでいた僚機が隊長機突き飛ばす。すると、僚機は落下してきた巨大な物体に押しつぶされてしまった。

『正木曹長オー！』

突き飛ばされた隊長機が地面を転がると、上半身を起き上がらせながら押しつぶされた僚機を呼ぶ。だが、返事が変えてくることはなかった。

落下してきたのはバアルの1種であるサベージだった。甲殻類——特にザリガニ近い形状をしており、黒光りする装甲が不気味さを放っていた。大きさは、先程のカマキリ型ガストレアより5m程と大きい。サベージの中では小型に分類されるも。今の状況では脅威度ではカマキリ型以上であった。

残っている僚機がサベージへと発砲するも、周囲に展開された防御フィールドに阻まれダメージを与えられない。

煩わしそうに体を震わせたサベージが、ザリガニでは口にあたる部分が開き輝き始める。

『いかん！散開しろ！』

隊長機が叫んだ直後、輝が強くなり閃光——ビームが僚機目がけて放たれた。

僚機は左右に散って回避すると、ビームは射線上の木々を焼き払っていった。

『ギャあ!?!』

『栗須小尉イー！』

回避した僚機の1機が飛来した無数の巨大な針に串刺しとなる。

針の飛来した方を見ると、ハリネズミ型のガストレアが新たな針を生成していた。そして周囲から新たなサベージやガストレアが集まってきており、完全に包囲されてしまっていた。

生き残っている機体同士で背中を合わせて周囲に弾幕を張るも、バアルの勢いは止まることなく群がってくる。

「(これまで、か……)」

隊長機は状況を分析し、部隊生存の望みは絶たれたことを悟った。

残ったのは自身を含め3機のみであり、最早包囲を破ることは不可能であった。残された手段は、機体に内蔵された機体の機密保持や、搭乗者がガストレアとの戦闘で、ウイルス感染しガストレア化するのを防ぐための措置として搭載された。燃料気化爆弾『フェンリル』を敵を1体でも多く巻き込んで起動させる——所謂自爆して果てることだった。

ファフナー乗りとなってバアルと戦うことを決めた時から、このような事態になることは覚悟していたことであった。まして、ガストレア化して化け物の仲間入りをして、人類に牙を剥くことだけは避けなければならぬ。部下達へ視線を向けると、皆語らずとも理解しているように頷いた。彼らも自分同様に当に覚悟を決めていたのだろう。

「(許せ:)」

残していく者達——妻や生まれたばかりの我が子を想いながら、行動に移そうとした時。センサーが上空にバアルでない反応を捉えた。

『あれは…』

無意識に上を向くと、月夜に照らされた空色のファスナーが、こちら目がけてパラシュートが必要な筈の高度から真つ逆さまに落下してきていた。

空色のファスナーは空中で姿勢を整えると、ブースターとスラスタを吹かせながら減速を始め、背部パイロンから近接用武装ルガールランスを両手で取り出し逆手に持った。

『ハアアアアアアアアアア!!』

空色のファスナーは、落下の速度を乗せながら1体のサベージの頭上にランスを突き立てた。その威力は、衝撃でサベージの足元の地面が陥没する程であり。ランスは防御フィールドを軽々と破り、頭部にあるサベージの急所である『コア』に突き刺さった。

『くらええええええええ！』

ランスの矛先が展開すると、レールガンが撃ち込まれコア諸共サベージの頭部が吹き飛び、残された体は力なく崩れ落ちた。

『救援、ノートウング・モデルか！』

落下してきたファフナー——マーク・アインを見た隊長機が思わず

驚愕の声を上げる。

ツヴァイはランスを左手に持ち替え、右手に背部パイロンから取り出したロングソードを持つと、近くにいたガストレアに目にも止まらぬ速さで迫った。

『オオオオオオオ！』

裂帛の気迫と共に振り下ろされたソードは、軽々とガストレアの皮膚と肉を絶ち両断する。悲鳴を上げる間もなく絶命したガストレアを見向きもせず、アインは他のバアルに襲い掛かった。

アインを危険と判断したのか、バアルは隊長機らを見捨てアインに殺到していく。

背部と脚部の大型ブースターと各部のスラスタ駆使し。周囲の木々と、バアルの巨体をも足場にして、目にも止まらぬ速さでジャングルを縦横無尽に跳びながら、次々とバアルを葬っていくアインに隊長機らは戦慄した。その強さそうだが、何より戦い方が異常だった。

カメ型のガストレアが前腕をアインへと振り下ろすと、それを僅かに機体を横にズラし。触れるか触れないかギリギリの位置で回避すると、アインはランスをカメ型の喉元に突き刺す。

そこに1体のサベージがビームを放ってくるも、アインは突き刺したカメ型の甲羅を盾にして防ぐだけでなく、そのままブースターの出力を上げサベージへと突撃していく。

ビームによってカメ型の甲羅に亀裂が入っていき、遂には碎けて肉の部分を焼いていく。するとアインは、カメ型が消し飛ぶ前にランスを引き抜くと、スライディングしてサベージの懐に潜り込むんだ。そして、ビームを撃った反動で膠着しているサベージの片足をソードで斬り落とすと、バランスを崩して傾いたサベージの口にランスを突き刺し、レールガンで頭部ごと粉碎した。

『あいつ、死ぬのが怖くないのか!？』

僚機の1機が、信じられないものを見ているように声を震わせる。

あらゆる攻撃を紙一重で回避していくアイン。それも、そうせざるを得ないのではなく、意図的に行っているのだ。

確かに最小限の動きであれば、反撃に転じやすくなるも。基本一撃

必殺になりえるバアルの攻撃を、そんな避け方を続ければ精神が摩耗して最悪自滅しかねない。鋼の精神という言葉すら生ぬるい精神力でなければできない芸当だ。あるいは――

『聞いたことがある。聖天子様直轄部隊には、まるで死に場所を求めようように戦う者がいると』

『では、あれが?』

『恐らく、な』

アインの戦いに気を取られている間にも、多数の新たなるバアルが茂みから現れるも。飛来したミサイル次々に着弾し、爆炎に飲み込まれた。

『今度はなんだ!?!』

新たに巻き起こった事態に僚機が動転した声を上げると、炎を掻き分けて新たなるファフナーが姿を現す。

従来の機体よりも重厚な装甲をしており、バックパック一体型の2門のレールキャノンと、右手には自身の全長に匹敵する程の大きさのジャイアント・ガトリングを保持しており、左肩背面に固定されている大型ドラムから弾丸がベルト式に繋がっている。さらに、左腕には火炎放射器と見られる物まで装備されていた

『こちら聖天子直属遊撃小隊 A l i v i s 。これよりそちらを援護する』

そう告げると、重装型――マーク・ツヴァイは、自身に迫りくるバアルに対し、ジャイアント・ガトリングを両手で保持すると銃口を向けた。そしてトリガーを引くと、束ねられた銃身が高速回転を始め轟音と共に弾丸が次々と撃ち出されていく。弾丸はガストレアはおろか、サベージをフィールドごと貫き風穴を開けていく。

そして、レールキャノンの長大な砲身から高速で放たれた砲弾は、複数のバアルを巻き込んで吹き飛ばし。装甲各部が展開すると、露出した無数のミサイルが発射され、途中でその先端が解放され、小型のミサイルが飛び出していく。さらに、両脚部に追加されているポッドからは対艦ミサイルも放たれ、それらがバアルに着弾し爆発と炎に包む。

暫くしてツヴァイが射撃を止めると、その眼前にはバルだった無数の死骸と、それを飲み込むようにして広がる炎のみだった。

』

その光景を、隊長機らは啞然と見ていることしかできなかった。たったの2機で大隊規模は必要とするバルを殲滅した事実にも、まるで夢でも見ているかのような錯覚さえ覚える。

『このポイントで輸送機と合流します。我々が敵を抑えますので行って下さい』

ツヴァイより、ポイントのデータが派遣部隊に送られてくる。それと同時に新たなバルの群れが押し寄せてくる。

その群れにアインが斬り込み、かき乱したところにツヴァイが火力を叩きこんで薙ぎ払う。

『了解した頼む』

敵地の真っ只中である以上、敵はとめどなくやって来る。いかにAlvisが強力でも限度があるので、早急に離脱する必要があった。

隊長機は部下を連れてポイントへ移動を始め、追撃してくるバルをAlvisが迎撃しながら後退していく。

『もういいアイン。俺達も退くぞ』

暫く殿を務めていたツヴァイが、派遣部隊が安全圏まで後退したのを確認すると、アイン——優に撤退を指示する。

『了解』

ガストレアの頭部を跳び退きながらソードで斬り落とすと、アインも離脱に入る。最後にツヴァイが制圧射撃をしながら離脱していくのであった。

時は少し遡り。Alvisがいる戦場から離れた場所に生えている木々の中でも、最も高い木の頂点に近い枝の上に派遣部隊を襲撃した仮面のプロモーターは立ち、小太刀使いのイニシエーターが腰かけていた。

「ふむ。あれが、ノートウング・モデルか」

バルと戦っているアインとツヴァイを見て、プロモーターが愉快そうに笑う。

「ねえパパ。あれ斬りたい！」

イニシエーターが足をプラプラとさせながら、ウキウキした様子で今にも飛び出しそうであった。

「我慢だと言っただろう娘よ。楽しみは最後まで取っておくものだ」「えー」

プロモーターが窘めると、むーとむくれるイニシエーター。

『例の物』がどこかに行ってしまうて面倒なことになったが。おかげでいいものが見れた。無能な国家元首にしてはいい仕事をする。これは益々楽しめそうだ」

撤退に入ったA i v i sを見ながら、獲物を定めたように目を細めるプロモーター。

「さて、『例の物』を探しに行くとしようか娘よ」

「はーい」

プロモーターが枝から枝へと移りながら地面に降り、プロモーターもそれに続くと。ジャングルの闇の中へと去っていくのであった。

第三話

四国エリア善通寺基地。四国エリア駐屯自衛隊の総司令部、その滑走路に学生服を身に纏い、旅行鞆等を持った13〜15歳程と見られる数人の少女がいた。

彼女らは神樹によつて『勇者』と『巫女』に選ばれた者達であり、この四国エリア防衛の要と言える存在であった。

「にしても東京かく。上手い食い物とか一杯あるといいなあ」

その中の1人である、土居どい球子たまこが両手を頭の後ろで組みながら陽気な声で話す。

「もお、タマツち先輩は食い意地張りすぎだよ。それに遊びに行くんじゃないんだから」

そんな球子に、伊予島いよしま 杏あんずが呆れを滲ませた声で苦言を呈す。

「折角四国から出られるんだから、それくらいの楽しみがあつてもいいじゃんかよお。なあ、千景？」

「伊予島さんの言っていることが全面的に正しいわね」

球子たまこが別の少女、郡こおり千景ちかげに話を振るも。千景はそっけなく返すのだった。

「でも、あつちにしかないゲームがあるかもしれないから、一緒に探してみようよぐんちゃん！」

「…いいの？」

「うん！」

「ありがとう、高嶋さん」

そんな千景ちかげに高嶋たかしま 友奈ゆうなが話しかけると、球子の時とは違い嬉しそうに答える千景。

「なんだよ。もう少しタマにも優しくしてくれていいじゃんかよ！」

「優しくしてるわよ十分に」

「さっきのやり取りのどこが!?!」

ワイワイと楽しそうに騒ぐ彼女らから少し離れた場所で、乃木若葉はどこか落ち着かない様子で青空を眺めていた。

そんな彼女の耳にシャッター音が聞こえてきたので、そちらを向くと幼馴染の上里 ひなたが携帯を片手に立っていた。

「だから、私を撮るなどいつてるだろうひなた！」

「だって、無防備過ぎたので撮っていいのかと」

「だって、つてなんだと変わらない幼馴染に溜息をつく若葉。」

「なんか、東京に行くって決まってるからボクっとしてるよな若葉」

そんな彼女らの元に球子らが集まって来る。

1ヶ月前に起きた『丸亀城の戦い』の後。当面の間は、四国がバアルによる侵攻を受けることはなくなつたと神樹は信託を下した。

そして、その間に四国エリアは、友好を深めるために同盟国である東京エリアへ勇者を訪問させることを提案し、東京エリアもこれを受諾。そして今日、若葉達が出発の日となつたのだつた。

また、そのことを伝えられてから、若葉は考え事をするようになり。授業中も上の空になって教師から注意を受けるといふ、生真面目である彼女には、非常に珍しい光景が見られるようになった。

「そんなにフラれた彼氏のが気になんのかよ？」

「だくかくらく、あいつとはそんな関係ではないと言っているだろう！」

球子のからかうような発言に、鬼のような形相で睨みつける若葉。しかし、顔が真っ赤でどうにも迫力がなかった。

「でも、3年近く連絡取れてないんだよね？」

「何か怒こらせることでもしたんじゃないかしら？」

球子のからかいは置いておいて、友奈と千景が会話に混ざる。サード・アタック後、若葉とひなたが、他に勇者と巫女として目覚めた者達共に大社に集められている間に、優は2人に何も伝えずに東京エリアに移り住んでしまったのだった。

それから優からなんの音沙汰もなく。その後、ネットに上げられている『子供達』の保護活動を掲載しているブログで。彼が自衛隊に入り、その活動を支援する任務に就いていることくらいしか、若葉は知ることができないでいた。

「いや、そんなことは…ない、筈…」

記憶を辿るも、優に嫌われるようなことはなかったと思いたいが。自分では気づいていないだけではと不安になり、ひなたに不安そうに視線を向ける若葉。

「……ここで考えても仕方ありません。本人会ったらに直接聞いた差しましょう」

「?まあ、そうだな」

話を打ち切るように言うひなた。確かにその通りだが、何か強引さを感じて違和感を覚える若葉。

そのことを問いかけようとする、彼女らの側で出発の準備中の輸送機から声をかけられる。

「おい、お前らそろそろ時間だが準備はいいか?」

輸送機から降りてきた男性——土居どい 球樹たまきが若葉らに話しかける。

彼は球子の兄であり、四国エリア駐屯陸上自衛隊所属第1迎撃隊所属のファフナー搭乗者で階級は2尉である。今回の若葉達の派遣に伴い、道中の護衛を彼の小隊が担当することとなっている。

「おう、兄ちゃん。いつでも行けつぞ」

「ホントか?忘れ物しててもしらんからな。電話で泣きつかれてもどうにもできんぞ」

「タマのことをいつまでも子供扱いするなよ兄ちゃん!」

兄の態度に、プンスカと怒りながら抗議する球子。

「もう少しおしとやかになつたらな。杏ちゃん悪いけど、この馬鹿妹のことしつかりと見ててくれな」

「はい、もちろん」

「はい、じゃない!タマの方がお姉ちゃんなんだから、そこは逆だから!」

球樹と杏のやり取りに、球子が更なる抗議を入れる。球子と杏は姉妹同然の絆で結ばれており。球子は杏を妹として、杏は球子を姉として接している。最も身長や言動で逆に見られることが多いが…。

「冗談だってば、向こうでも頼りにしてるよお姉ちゃん」

「む、そういうええなんでも許すと思うなよ。まあ、タマはいつでも頼りにはなるがな!」

悪戯が成功した子供のように笑う杏に、腕を組んでムスツとした顔をする球子だが。姉と呼ばれてなんだかんだで嬉しそうであった。

そんなことをしていると彼女らの側に1台のジープが停車し、人の少女が降りてくる。

「球樹さん！」

「よお、真鈴ますず。どうしてここに？」

珠樹は、その少女——恋人である安芸あき 真鈴ますずの姿を見て少し意外そう顔をする。

彼女はひなた同様大社所属の巫女であり、勇者付きである彼女とは違い、基本的には大社本部にいるのだ。

「私が連れてきた。君に渡したい物があるそうだ土居2尉」

「父さん！」

真鈴の後に続くようにジープから降りてきた壮年の男性に、今度は若葉が驚いたような顔をした。

乃木大葉——若葉の父であり、彼はこの四国エリアの国家代表を務めているのだ。そのため日夜政務の終われ、この場に来る余裕はないと思っていたからである。

大葉の姿を見た球樹が敬礼をすると、大葉は楽にしてくれと告げる。

「お仕事は大丈夫なのですか？」

「何、見送りするくらいの時間はあるさ。お前や高嶋君達にはいつも無理をさせているからな。これくらいのことはせねばな」

若葉の問いに、にこやかに答える大葉。

「それで、俺に渡したい物ってなんだ真鈴？」

「これ、お弁当を作ったので。よかつたら食べて下さい」

そういって照れながらも、お弁当包みにくるまれた弁当箱を球樹に手渡す真鈴。

「マジか！ありがたうな真鈴！」

受け取った弁当を大切そうに抱えながら喜ぶ珠樹。

その様子を見ていた球子がヒューヒューと茶化していたり、恋愛小説を好む杏はいいなく、と羨ましがつているようである。

「もう！球子は茶化さない！向こうでくらいは少しは女の子らしくしなさい！」

「は〜い」

妹を叱るように注意するが、余り効果はない模様。真鈴はやれやれといった様子で軽く溜息をつくど、今度は杏に声をかける。

「杏も大変だろうけど、いってらっしゃい」

「はい、お土産一杯買ってきますね！」

球子と杏のことを本当に心配している様子の真鈴。そして、球子は態度こそあれだが2人もそのことを嬉しく思っているようであった。

真鈴はサード・アタックの際。彼女が神託により、球子に杏の居場所を伝え助けるように伝えたのが縁で、2人を妹のように気にかけて。球子らも真鈴を姉のように慕っているのだ。

「若葉」

「はい、父さん」

父親に呼ばれて若葉は姿勢を正す。

「今回の訪問だが。最近東京エリアでは反政府勢力の不穏な動きが見られる、十分に気をつけるように」

「はい！必ずやお役目を全うしてみせます！」

強く意気込む娘に、大葉は微笑みながら肩に手を置く。

「それも大事だが。元気な姿で帰ってくるのが大切だ。それを忘れないでくれ」

「父さん…」

その言葉に心から嬉しそうに笑う若葉。そんな親子のやり取りを、少し離れた位置で千景はどこか羨ましそうに見ていた。そんな彼女に友奈が話しかける。

「いいお父さんだね、大葉さんって」

「ええ」

「そう言えば、郡ちゃんのお父さんはどんな人なの？」

屈託のない笑顔で問いかける友奈に、千景はなぜか言葉を詰まらせる。

「私、の」

「うん！」

「(私のお父さんは…)」

父のそして、故郷のことを思い出そうとして心がそれを拒絶した。「えっと、ごめんね変なこと聞いちゃって。そうだ！あっちに着いたらどこを見て回るか決めようよ！」

「ええ、そうね」

千景の様子の変化から話題を変えた友奈に、内心申し訳なく思いながらも。千景はその気遣いに乗らせてもらうことにした。

「……」

思い思いに会話を弾ませる若葉らの中で、ひなたは1人何かを憂うように東京エリアのある方角の空を見上げる。

「(優君…。私はあなたの選択を許すことができません…)」

ひなたは、これから再会することになる幼馴染に思いを馳せるのだった。

横浜基地にある董の研究室にて、光輝は椅子に腰かけてPCと向き合っていた。だが、その表情は僅かではあるが陰しく、苛立った様子を醸し出していた。

「光輝君少しは休んではどうかね？ここ1週間碌に休んでいないだろう」

董が話しかけながらコーヒーが入ったビーカーを差し出すと、輝はそれを受け取ると軽く顔をしかめる。

「また器具でやったんですか？優に怒られますよ」

「ちゃんと洗浄はしてあるんだ。この方が効率的だろ？」

「単に面倒くさがっているだけでしょ？」

おどけた様子で自論を展開する董に、光輝は呆れを含んだ目を向けながらコーヒーに口をつける。

様々な理由があり董の生活能力は壊滅的である。かつては部屋は散らかしぱっなしで、風呂にも滅多に入ろうとせず、果ては死体の胃袋に入っていた物を平然と食べていた程だった。

優が入ってからは、そういった生活態度を徹底的に改めさせられ。毎日風呂とまではいかないがシャワーを浴び、食事もまともな物を口にするようになり大分改善されたのだ。

「それで話を戻すが。前回の出撃から、1日3時間程しか寝ていない君は働き過ぎだと私は思うがどうかね？」

「そうですね。この件が片付いたら存分に休ませてもらいますよ」
そう言ってPCに向き直る光輝を見て、やれやれといった様子で息を吐く堇。

前回の出撃にて。光輝は現地の状況から判断し、機密の奪還は不可能と判断し友軍の救助を優先したが。結果としては機密の奪還を優先せよという命令に背く形となり、上層部から責任を問われる声もあつたが。聖天子の、その場において指揮官は最良の判断をしたとして不問となった。

そして、A l v i s は引き続き機密の奪還を命じられたのだが、どうにもややこしい事態となっていた。

その後の調査で、どうやら強奪犯は東京エリア内に潜伏しようとしたが。その途中でガストレアに襲われエリア内まで逃げ切るも、ウイルスに感染してしまっており。そのままガストレア化してしまい、機密毎エリア内に潜伏してしまっているのだ。

そのためすぐに見つけ出し排除しなければならぬが、正規部隊や警察を動かすとメディアの目につくので大規模な捜索が行えずにいたのだ。

「しかし、東京エリアには至る所に監視カメラがあるんだ。それなのに1週間も経って見つからないのは妙だね」

「恐らく特異能力を持った変異種なのでしょう。それも隠密に優れたね」

ガストレアは進化する際に、極稀にだがその個体特有の特殊な能力を身に着けることがあるのだ。そのため外見だけで判断して対処しようとする、手痛い反撃にあう事例が報告されていた。

「私も同意見だ。最早市民の目を気にしている場合ではないだろう。聖天子様に本格的な捜索を進言することを薦めるよ」

「俺も初めからそう言っているんですがね。周りの官僚が反対しているそうですよ。世論の批判が怖いんでしょうね」

「こんな情勢下でも権力という椅子にしがみつくか。どこまで行っても人間の本质は変わらないものだな」

「同感です」

そんな話をしていると、キッチンから3つの丼が載ったお盆を持った優が姿を現す。

董が極度の引きこもりのため人前に余り出たがらず、基地の食堂を利用しようとしなかったため、彼女の食事は自前で用意するというのだが。そうすると前述したように碌な物を食べないので、代わりに優が作っており。その流れで A i v i s の食事は、彼が担当することとなったのである。

「お昼できたよー」

「ああ、ありがとう」

優から、かけうどん入りの丼を受け取った光輝は早速麺を啜る。

「うん、やはり優君の作るうどんは格別だな」

「ありがとうございます〜」

同じようにうどんを味わう董に褒められ喜ぶ優。

「……」

「どうしたの光輝？何か変だった？」

「いや、ただお前が来てから、うどんかそばしか食ってないなと思っただけだ」

優が入隊してからの3年間。A i v i s のメンバーは彼の作る物しか食べていないのだ。そして、優が作れるのはうどんかそばのみなので、必然的にそれだけしか食べていないことになる。

それでも不満が出ないのは。麺から出汁に至るまで優の自作であり、季節毎や果てはその日によつて最適な味に調整し、常に飽きがないことを意識し続けているからであろう。

「他のが食べたいの？ん〜自信ないけど頑張ってみるよ」

「別に不満がある訳ではないが。ただ香川人のうどんへの執念に感服しただけだ」

「そうだね。こつちに移り住む際に、自前の調理道具を持参してきていたくらいだからね」

さらには、お気に入りの小麦粉の種まで持ち込んできて栽培を始めた時には、最早唾然とするしかなかったことを2人は思い出していた。

「まあ、そんなお前がそばも受け入れたことは以外だったかな」

「そうだね。歌野には感謝しないとね」

歌野とは長野の勇者である白鳥しらとり 歌野うたののことであり。1年前の長野陥落の際、生き残った人々と共に東京エリアに逃げ延び、現在は外周区の一画を借り受けた地に築かれた亡命政府の代表を務める少女である。

彼女との交流によって、香川人にとって縁のなかつたそばの魅力に気づいた優は、以降そば料理も作るようになったのだ。

「……」

「え？何、光輝。こつちの顔見つめて」

「いや、なんでもない。(こいつ、その内女に刺されるかもな)」

光輝が意味深なことを考えていると。テレビから流れていたニュース番組のキャスターから、興味の引かれる話題が出てきた。

『それでは、四国勇者のリーダーを務める、乃木若葉様へのインタビューを始めさせて頂きたいと思います。乃木様よろしくお願いします』

『はい、よろしくお願いします』

画面には、椅子に腰かけて司会者と向き合う若葉の姿が映し出される。

彼女は司会者から振られる質問に淀みなく答えており。とても14歳とは思えない程様になっていた。

「また彼女か。確かに画面映りはいいが、私としては他の子も見たいんだがね」

「国家代表の娘でもありますからね。その方が都合がいいんでしよう」

神に選ばれた『勇者』は人類の希望として英雄視され。人々の不安

を和らげるカンフル剤として、マスメディアを通して積極的な宣伝公報が行われていた。

四国エリアには複数の勇者がいるが、基本メディアに露出するのは若葉であり、他の勇者は余り取りざたされていなかった。

「それにしても、このタイミングで訪問を受け入れるとはね。政府は何を考えているのやら」

いくら友好国とはいえ、最重要機密が奪われている中。他国の要人を受け入れるのはリスクが高いと言わざるを得なかった。

「それに、最近是人革連の連中も怪しい動きを見せているんだがね」

人革連――

人類革新連盟の略称。

セカンド・アタック後、現在の国連主導の防衛体制では、バアルに對抗できないと考えた者達が立ち上げた反国連組織。

国連を打倒し、全ての国家を統一することで新たなる防衛体制を構築し、バアルから人類を守護することを目的として掲げ。その思想に賛同した世界中の政財界から影ながら支援を受けており、ファフナーを始めとする最新鋭の装備を有する巨大組織へと成長する。

しかし『来る物は拒まず』という姿勢から、政争で敗れた物やアウトロー、果ては過激な思想を持つ者を多く取り込んだ結果。組織の統制がまともに取りれなくなっており、無差別テロを多発させていることから、世間からはただのテロ組織として見られることが多い。

ここ最近人革連が東京エリアでの活動を活発化させており、今回の機密強奪事件への関与は現状不明だが。近い内に大規模なテロを行おうとしているのではないかと警戒していた。

「まあ、何か考えがあるんでしょう。何であれ俺達は命令に従うだけです」

董と光輝がそれぞれの意見を交わす中、優はただ画面をジッと見ていた。しかし、その表情には不機嫌さがありありと出ていた。

「…そんなに気に入らんのか。幼馴染が活躍するのが？」

「……」

やれやれといった様子で問いかけてきた光輝に、優は何も答えな

い。

その間にもテレビでは、司会者が若葉を『救世主』『希望』と褒めたえていた。そんな司会者に、優は不快そうな目を向ける。

「…若葉は、どこにでもいる女の子なんだ。特別ななんかじゃない。歌野だってそうさ」

ようやく口を開いた優は司会者の言葉を否定した。その声音には苛立ちと憤りを感じられる。

「そうだな。だが、大多数の人間にとっては、力を持つ者は特別な存在に見えるのさ。ましてや、自分の命を守ってくれるならな」

「それでも、彼女達だって傷つくし悩むんだ。歌野はどんなに苦しくても、勇者だから、皆に期待されているからって弱音も吐けずに抱え込んで1人で泣いてたんだ」

どれだけ超人的な力を宿しても、心は15にも満たない少女なのだ。多くの人を守るという責任と、否応なしに寄せられる期待という重荷に耐え続けている友の姿を思い浮かべ。優は歯を食いしばり、井を持つ力を強くする。

「…だから、彼女達の分までお前が戦う、か」

「うん。それが僕の命の使い道だから」

「少なくとも歌野はそんなこと望んでないぞ」

「それでもいいさ。勝手な自己満足だからね」

そういつて笑う優。今更考えを変えさせる気はないので、呆れた様に溜息をつくも、光輝はそれ以上は何も言わなかった。

ウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ
———
!!!

そんな中、非常事態を告げるサイレンがけたたましく鳴り響いた。それと同時に、その場にいた全員が慣れた動作で行動に移る。優と光輝はブリーフィングルームに駆け込み、光輝がモニターを起動させると、その前で並び立たつ。

すると、モニターに聖天子の姿が映し出される。

『こちらへの訪問のため、移動されていた勇者方を乗せた輸送機が。伊豆諸島にて人革連の襲撃を受けました』

「!」

聖天子の告げた内容に優の目つきが鋭くなる。

「こちらの領域内で、ですか」

『そうです』

「なる程、彼女らに來られると困る者が政府内にいると…」

顎に手を添えて何かを察した様子の光輝。

『戦況は極めて劣勢とのこと。A l v i sには直ちに救援に向かつてもらいます』

「勇者が5人もいるのにですか？」

告げられた命令に疑問を挟む光輝。

勇者1人で最低フアフナー1個中隊相当の戦闘力があると言われている。それが5人もいるのであれば、余程の事態が起きない限り、人革連が相手でも苦戦することはないというのが光輝の分析であった。

『いえ、勇者は戦闘には参加していません。迎撃は全て護衛のフアフナー部隊だけです』

「参加していない？何故です？」

『天童2尉。勇者には対人経験がありません』

「…了解」

聖天子の一言で、光輝は自身の分析が誤りであることを理解した。勇者が想定しているのは対バル戦であり、対人戦はせいぜい訓練のみなのであろう。そんな者達を出しても足手纏いにしかなるまい。

「状況は理解しましたが、距離が離れすぎています。今から輸送機を全力で飛ばしても間に合わないのでは？」

『その点については手を打ってあります。司馬重工の新型装備を用います』

「例の装備が完成したのです？」

その言葉に光輝が興味深そうに反応する。

司馬重工――

東京エリアに本社を構える軍事企業であり、日本の基幹産業を受け持つ程の巨大企業でもある。

フアフナーの開発にも深く関わり、日本の各エリアの生産や新装備開発の最大手であり。ノートウング・モデル用の各種兵装も司馬重工

製が殆どである。

『…あくまで試作品なので、あなた方次第となりますが…』

「それが我々の役目ですので、どうかご期待下さい」

危ない橋を渡らせることに申し訳なさを滲ませる聖天子に、光輝は気にするなと目で応える。

ノートウング・モデルの開発と並行して、ファフナー用の新装備のテストもA l i v i sの任務なのである。

「それでは、出撃します」

光輝が敬礼すると優もそれに続く。そして、いつものように光輝は優に目配せすると退出していく。

優と聖天子は立場上、表立って私的に接することができないため。光輝の計らいで、嚴重なセキュリティが施されているこの専用通信で、出撃前に友人として僅かに話す時間を得ているのだ。

聖天子にとっては貴重な瞬間だが。今回はその時間すら惜しまれる状況であり、何より優には今すぐにでも現場に駆け付けたい理由があるのを理解していた。

だから彼女は――

『優さん。どうか、あなたの大切な人を守って下さい』

「うん、ありがとう聖ちゃん」

それだけの言葉を交わして退室していく優。

聖天子は、ただ想い人の無事と彼の願いが叶うことを祈るのだった。

第四話

伊豆諸島にある島の浜辺に四国エリア所属の輸送機が不時着しており。その周囲を球樹の乗るメガセリオン・モデルと部下のグノーシス・モデルが展開しており。

それを取り囲むように。人革連所属を示す、青色に塗装された数機メガセリオン・モデルと、2個大隊程はいるであろうグノーシス・モデルが展開されており。球樹らへと距離を詰めながら銃撃や砲撃を加えていた。

『こっちに来んじゃねえー!』

球樹機は標準装備のアサルトライフルに、両肩に光学シールド発生装置『イージス』と、背部には2門式キャノン砲を装備した拠点防衛仕様であり。イージスを展開して攻撃を防ぎながら、ライフルで牽制しつつキャノン砲を放ち。砲弾は1体のグノーシス・モデルに直撃し、上半身を吹き飛ばした。

また、僚機も同様に拠点防衛仕様であり(キャノン砲は1門)球樹機同様にイージスを展開しつつ射撃と砲撃で弾幕を張っているも。人革連側は物量を持って押しつぶそうと包囲を狭めてくる。

四国エリアを出発してから暫くは何事もなく順調だったが。伊豆諸島にまで差し掛かると、島にある森から対空ミサイルによる攻撃を受け、主翼に被弾した輸送機は島の浜辺への不時着を余儀なくされたのだ。

幸い落ちたのが砂浜だったので衝撃も少なく、勇者や巫女らに怪我はなかったものの。パイロットら非戦闘員に何名かの負傷者が出てしまった。

そして彼らは、浜辺に近い森から現れた人革連のファフナー部隊の攻撃を受けることとなった。

「(情報が洩れたってのか!)」

完全に待ち伏せを受けたことから、勇者訪問の情報が人革連に漏れていたことに他ならない。彼らのシンパは世界各国にいるので、どこから洩れてもおかしくはないのだが…。

『そんなこと考えてる場合じゃないか!』

より苛烈さを増す人革連の攻撃に、舌打ちしながらも迎撃する球樹。同時に全周波数帯で通信を開く。

『テメエら、自分達のやっつてることがわかってんのか!勇者に何かあつたらどうなると思つてんだ!』

万が一にも戦闘を止められる可能性に賭けてみるも、人革連から帰ってきたの予想通りのものであった。

『我らは軟弱な国連を打倒し、新たな秩序を生み出す!故に、現支配体制の象徴である勇者は肅正せねばならん!青き清浄なる世界のために!!』

『『青き清浄なる世界のために!!』』

青き清浄なる世界のために――

人類革新連盟の掲げるスローガンであり。新たなる秩序が構築され、バアルが駆逐された世界を指している。また、ガストレアウィルスを宿す『子供達』の差別にも用いられている。

通信機越しに聞こえてくる人革連の言葉に、苦虫を噛み潰したような顔をする球樹。やはり彼らとは、どちらかが倒れるまで戦うしかないと再認識させられた。

「兄ちゃん!」

そんな折、輸送機の亀裂から妹の球子が顔を出しながら声をかけた。

「タマ達にも戦わせてくれよ!」

『いいから、隠れてろ馬鹿妹!!』

今まで聞いたことのない兄の怒声に、球子が怯えた様に体を震わせる。

球樹は球子ら勇者は戦いには参加させず、身を隠しているよう指示を出していた。それは、光輝は分析したように、勇者には対人経験がないこともあるが。何より妹とその友人に、人と戦わせたくないという思いがあった。

彼女らの力は人類を守るためのものなのだ。このようなことに使われるべきではないというのが球樹の考えであった。

『お前達は戦うな！こんなことは俺達だけで十分だ！』

「でも…！ツ!？」

それでも引き下がらない珠子の顔の、すぐ側の装甲に弾丸が当たり甲高い金属音が響き、珠子は思わず身を縮ませて隠れる。

『妹に何しやがんだオラァ！』

その弾丸を放った人革連機を、球樹はキャノン砲で吹き飛ばすのだった。

「タマつち先輩大丈夫!？」

輸送機内に戻った球子に、杏が抱き着くようにして声をかける。

「あ、ああ大丈夫だあんず…」

杏を心配させないようにと気丈に振舞おうとするも、その顔色は青白くなっており、体も小刻みに震えていた。

バアルとの戦いで幾度も死線を超えてきた彼女だが、始めて感じる人から向けられる殺意に怯えてしまっていた。

輸送機内には他にも非戦闘員が集まっており、彼らも迫りくる戦火に不安を募らせていた。

「ツ——！」

そんな球子らの姿を見た若葉は、歯を噛みしめて拳を強く握ると。自身の武器である『生大刀』を手にすると、スカートのポケットからPADを取り出すと、勇者に変身するためのアプリ『勇者アプリ』起動させようとする。

「駄目です若葉ちゃん！」

そんな若葉をひなたが慌てて止める。

「だが、このままでは…！」

こうしている間にも戦闘音は激しさを増しており、今は珠樹らが奮戦しているも。戦力差は歴然であり、いずれは押し切られてしまうだろう。

「でも、相手は同じ人間なんだよ…」

「高嶋さん…」

俯いている友奈が震えた声で若葉に話かける。彼女は誰よりも優しいため、人と戦うことに一際抵抗感があるのだろう。

そんな彼女の不安を和らげようと、千景はそつと手を繋ぐ。

「……」

その場を沈黙が支配する。バルと戦う覚悟こそしていたが、人と戦う覚悟など誰もしてはいなかったのだ。

「それでも、私はこのまま見ているだけなんてできない…!」

「若葉ちゃん!」

そういつて機外に飛び出そうとする若葉を、ひなたは制止しようとする。

「皆はここにいてくれ!戦うのは私だけでいい!」

人と戦うことへの躊躇いはある。それでも、リーダーとして仲間を守るために若葉は決意する。

仲間たちが自分のことを呼ぶ声がするも、若葉は止まることなくアブリを起動させると機外に飛び出した。

『ぐあッ?!』

『曹長!』

『まだ、やれます!』

僚機のイージスが攻撃の負荷に耐えられず、破損してしまふ。それでも僚機は怯むことなく左腕のレールガンで反撃すると、直撃を受けた敵機が爆散した。

他の僚機も破損が目立つようになり、継戦が困難となってきた。球樹機は目立った損傷こそないものの、弾薬が尽きかけており限界が近づいていた。

だが、敵部隊はまだ20機近く残っており。このままでは全滅しか道はなかった。球樹が打開策を模索していると。背後の輸送機から人影が頭上を飛び越えて戦場に躍り出た。

『乃木!何をしている戻れ!』

飛び出してきたのは『戦装束』と呼ばれる。神樹の力を科学的、呪術的に研究し、ハンドレッドの技術を取り入れた結果生み出された戦闘服を身に纏った若葉であった。

戦装束を身に纏うことで、勇者はその力を最大限に発揮でき、起動させるためのアプリ等も含めて『勇者システム』と呼ばれている。

また、その形状は勇者個人によって違い。若葉のは桔梗を思わせる清楚な青と白の混交が特徴的であった。

「私が敵を引き付けます！援護をお願いします！」

そういつて敵機目がけて駆けだす若葉。

『ええい、全機乃木を援護しろ！敵を近づけさせな！』

引き止められないと判断すると、素早く援護するよう僚機に指示する球樹。

「ハアアア!!」

球樹らの援護を受けた若葉は1体のグノーシス・モデルに接近すると、刀を振るい両腕の武装だけを斬り落とした。

『ぐお!!』

『勇者だ！勇者が出てきたぞ！』

若葉の姿を確認した人革連部隊は若葉に砲火を集中させ始める。

迫りくる無数の弾丸を、若葉は最小限の動きで躲すか、避けられないものは斬り払いながら接近し。1体ずつ搭乗者は傷つけずに機体だけを破壊し戦闘力を奪っていく。戦場において、敵の命を奪わずに無力化することは、相手よりも遥かに高い技量が求められることであり。若葉自身の日々の鍛錬の結果であると同時に、勇者の力がどれだけ強力であるかの証左でもあった。

「くッー」

それでも敵の数はいまだ多く、足元にレールガンから放たれた弾丸が着弾し。その衝撃で地面を転がる若葉。

すぐに起き上がろうとするも、周囲を敵機に囲まれ銃口が向けられる。

「(避けられない——!)」

若葉は撃たれることを覚悟し、少しでも被弾を減らそうと身を守

る。

「ヤアアアアアアア！」

敵機が発砲しようとした瞬間。山桜を思わせる桃色の戦装束を纏った友奈が、手甲である『天ノ逆手』あまのさかてによる拳打を1体の敵機に打ち込んで弾き飛ばし。他の機体を巻き混んで吹き飛んだ。

さらに友奈は四国勇者一の瞬発力を生かし、次々と若葉を包囲していた敵機に肉薄し打撃技を浴びせて蹴散らしていく。

『おのれエ!!』

別の機体が友奈へ発砲するも、彼岸花を思わせる紅色の戦装束を纏った千景が、獲物である『大葉刈』の霊力が宿る大鎌を目の前で回転させて防ぐ。

そして、発砲した敵機は飛来した矢が膝や肘のに突き刺さり、身動きが取れなくなる。

矢を放ったのは、紫羅欄花ストックを思わせる戦装束を纏った杏である。彼女は『金弓箭』きんきゆうせんと呼ばれる弩を武器としており。杏は輸送機を盾にしながら引き金を引くと、矢が連射され敵機の関節に突き刺さり行動不能に追い込んでいき。さらに敵部隊の牽制にもなり動きを鈍らせる。

『チィッ！まずはあの弩持ちから潰せ！』

敵部隊は支援要員である杏を最優先で排除すべきと判断し。森の中に隠れていた、スナイパーライフルを装備していたメガセリオン・モデルが発砲する。

放たれた弾丸は杏の頭部目がけて迫る。だが、姫百合を思わせる橙色の戦装束を纏った球子が、杏と弾丸の間に入り。武器である『神屋楯比売』かむやたてひめの霊力を宿した旋刃盤を、盾に変形させて弾丸を弾いた。

「ありがとうタマっち先輩！」

「へへん！タマがいる限りあんずには傷つけさせるもんか！」

防御力の高い球子が敵の攻撃を防ぎ、遠距離攻撃ができる杏が攻撃に専念する。互いの役割を最大限に発揮した連携を披露する。

『お前らまで何出てきてるんだ！きつさと戻れ！』

勝手に戦場に出てきた勇者達を見て、珠樹が近くにいる妹に怒鳴り

つける。

「兄ちゃん達こそボロボロなんだから退がってろよ！後はタマ達に任せタマえ！」

『いつもの化け物相手とは違うんだぞ馬鹿妹！』

互いの主張をぶつけ合って口論になる土居兄妹。そうこうしている間にも、敵の放った砲火が周囲に降り注ぐ。

「タマ達は勇者なんだ！悪い奴らはやっつけてやる！行くぞあんず！」

「うん！」

兄の静止を聞かず、球子は杏と共に前線に向かっていく。

「皆どうしてッ！」

「だって、若葉ちゃんが私達を守りたい気持ちと一緒で。私達も若葉ちゃんを守りたいから！」

若葉の問いに、友奈は叫び返しながら敵を殴り飛ばす。

「それに、若葉ばかりにいいカッコさせられないからな！」

「皆で支え合って戦う。それが仲間です！」

「危なっかしくて、見られないのよあなたは」

球子、杏、千景、それぞれが戦いながら若葉に語り掛ける。

「皆……」

そんな仲間の頼もしさに支えられるように立ち上がる若葉。

「そうだな私達は仲間だ！一緒に戦おう！」

若葉の掛け声にそれぞれ応えながら、敵部隊へ向かっていく勇者達。

『隊長、我々は？』

『ダアアア突撃だ！突撃！あいつらを援護しろ！』

部下の問いに球樹はヤケクソ気味に指示を出しながら若葉達の後を追うのであった。

『敵部隊の反応消失しました隊長』

『警戒態勢に移行。生き残った奴らを拘束しろ』

部下の報告に答えながら周囲を見渡す球樹。

砂浜は荒れ果て、破損した人革連の機体と残骸が散乱し、生き残った搭乗者を部下が一箇所に集めていた。

勇者が戦闘に加わってからは戦局は一転し、不利と悟った敵部隊は撤退していったのだった。

「おーい兄ちゃん！」

周囲を警戒する球樹の元に、球子が手を振りながら駆け寄ってくる。戦装束に汚れはあるが、傷らしい傷がないことに内心球樹は安堵する。

妹の後ろには他の勇者達が追いかけてきており、彼女らも目立った傷はないようであった。

『お前ら無事か？』

「はい、皆無事です」

『そうか』

球樹の問いに若葉が答えた。

『いいたいことは色々あるが。とりあえずお前達に助けられたな、怖いによく頑張った。ありがとうよ』

そういつて球樹は球子の頭を撫でると、彼女は嬉しそうに目を細める。若葉達も彼に褒められて嬉しそうにしている。

「へへ、タマ達も強くなったからな！いつまでも子供じゃないさ！」

『アホ。どんなに強くなっても、お前達はまだまだ子供だっつーの』

エツヘン！と胸を張る妹の額を小突く球樹。彼もまた、勇者を特別な存在ではなくどこにでもいる少女と同じで、大人である自分達が支えていく必要があると考えていた。

子供扱いされたことにムーツと拗ねる妹の頭を、今度は少し乱暴に撫でる球樹。髪をクシヤクシヤにされたことにやめろよー！と抗議する球子。

若葉達は、そんな兄妹のじゃれ合いを微笑ましく見ていると。そんな穏やかな雰囲気を持ち壊すように、PADから警告音が鳴り響く。

『ツ!?バアル反応だどー!』

球樹がすぐに機体のセンサーを確認すると、反応は海から出てい

た。

反応が近づくのと同時に、浜辺付近の海面が盛り上がりつついき。海水を掻き分けるように20メートルはあろう巨体が姿を現していく。

『ステージ、IVだとッ!?!』

その姿を見た珠樹の口から驚愕の声が漏れた。

現れたのは岩のようにゴツゴツとした赤色の甲羅に、大木と同じくらいの大太きをした節足動物特有の無数の足と、甲殻類によく見られる腕が6本も生えており。極めつけは蟹のような胴体部分に目とイソギンチャクに似た口がビッシリと備え付けられており。嫌悪感を抱かずにはいられないような怪物がそこにはいた。

甲殻類を始め多くの海洋生物のDNAを取り込んで進化を続けた結果。最早元の生物を特定するのが難しいまでに変異している。

最近確認されるようになり、アジア各国の沿岸部で猛威を振るっている『デス・フォートレス』と呼称される。ガストレアの中でも、完全体と呼ばれるまでに進化した個体であった。

デス・フォートレスの全身の目がギョロギョロと動き、若葉達の姿を捉えるとその巨体を動かし、地響きを上げながら接近してくる。

「(最悪だッ!!)」

球樹は心の中で悪態をつく。ステージIVともなれば、単体であつてもその力は計り知れない。若葉達がいたとしても疲弊した今の戦力では対処は困難であった。

『全員逃げるぞーこのままじゃ全滅するだけだ!』

故に球樹が選んだのは逃走であった。幸いデス・フォートレスの動きは遅く、逃げに徹すれば救援の到着まで持ちこたえられると判断したためである。

「でも、人革連の人達が…」

友奈の言葉に、周囲を見回した球樹が思わず舌打ちする。

そう。この場にいるのは球樹達だけでなく、捕縛した人革連の生き残りもいるのだ。中には、負傷して自力で移動することができない者も少なくない。

「た、助けてくれ!頼むから置いていかないでくれ!」

人革連の1人が縋りつくように球樹の足にしがみついていた。他の者達も若葉達に助けを求める声を上げる。そんな彼らに若葉達は困惑してしまっている。

『ツ——ぎげんな！襲ってきたのはテメエらだろうが！こんな時だけ都合のいいこと言ってるんじゃないやねえ！』

こんな事態になったのも、全ては人革連の襲撃があつたからである。それなのに、いざ自分達が危機に陥ると、手の平を反して助けを求めてくる彼らの身勝手さに思わず怒鳴り散らす球樹。

その自覚はあるのか人革連の者達は一瞬黙るも。そうしている間にも、デス・フォートレスは近づいてきており。その姿を見て再び懇願してくる。

球樹としては、この状況で彼らも連れて行くのは不可能であり。例え見捨てても自業自得としかいいようがなかった。

そうこうしていると、輸送機にいたひなたらが合流してきており。彼女らも助けを求めてくる人革連者に困惑の目を向ける。

『お前ら行くぞー！こいつらに構っている暇はねえんだ！』

これ以上長居すると、デス・フォートレスに捕捉されてしまう。最早迷っている時間はなかった。

「ですが……」

だが、若葉達勇者はその場から動けずにいた。彼女らには目の前にある『命』を見捨てることのできないのだ。

遂に逃走不可能な距離にまで、接近してきたデス・フォートレスの一部の口から、無数の触手が飛び出してきた。

「わああああああ?!?!」

触手は近くにいた人革連者に次々と巻き付き持ち上げていくと、そのまま巻き戻るように口へと運ぼうとする。

捕らえられた者は死を覚悟して目を覆うも、ザンツ！という何かを斬り裂くような音がすると同時に。浮遊感に襲われかと思うと誰かに受け止められた感覚がした。

「えっ？」

恐る恐る目を開けると、自分が若葉によって抱きかかえられている

ことに気がつく。

周りを見ると他の者達も、他の勇者によつて助け出されていた。

「どう、してっ？」

思わずそんな言葉が漏れる。球樹の言う通り、見捨てられても文句の言えないことをした自分達を彼女らは命がけで助けてくれているのだ。

球樹らの側に降り立った若葉は、抱えていた者を降ろした。

「例え敵対していたとしても、助けを求めて伸ばされた手を掴みたい。少なくとも私はそう考えています」

そう告げると、若葉はデス・フォートレス目がけて駆けだしていった。

『あいつらの底なしの優しさに感謝しろよ。全機勇者を援護する！着いてこい！』

呆然とする人革連者に語り掛けると、球樹は部下を連れて若葉の後を追いかけていった。

「ああ、そうか…」

彼は理解した。なぜあんな少女達に、神からあれだけの力を与えられたのか。それは、どんな命をも尊び他人を思いやれる『強^優さ』を持っていたからなのだ。そして、自分がどれだけ愚かなことそしやうとしていたのかを悔い、涙を流しながらその場で膝について崩れ落ちたのだった。

第五話

「ハアッ！」

群がる触手を若葉は刀を一閃の元斬り落とす。しかし、新たな触手が襲い掛かってきて後退せざるを得なくなる。

「若葉ちゃん！」

非戦闘員や人革連の者達を纏め、退避の準備をしていたひなたが若葉に呼びかける。

「どうしたひなた！」

「もうすぐ助けが来ます！それまで耐えて下さい！」

「分かった！」

まるで未来を予知したような内容だが、若葉は疑うことなく聞き入れた。

大社の巫女は、神樹は自らの意思を『信託』と言う形で受け取り、それを代弁するのが使命である。その内容には未来予知するような内容も多く。今も何らかの信託を受けたのだと若葉は察したのだ。

「だあああああ！キリがないぞこれ!？」

若葉と同じように触手の対処に追われている球子が、苛立ちを隠さず叫ぶ。

他の勇者達も途切れなく襲い掛かる触手に阻まれ、デス・フォートレスに近づけずにいた。

勇者の攻撃にもバラニウムと同じく、ガストレアの再生を阻害する効果があるのだが。ステージIVともなると、その再生力はケタ違いであり。破損させた触手が瞬く間に再生し、絶え間なく襲い掛かってくるのだ。

『!!』

てこずらされていることに苛立つかのように、デス・フォートレスが複数ある口から鼓膜をつんぎくような咆哮を上げると。6本ある腕の内の1本を砂浜を抉るようにして振り上げ、掻き上げられた大量の砂塵が津波のようにして若葉らに襲い掛かる。

若葉達は散開して退避すると、デス・フォートレスは杏目がけて別

の腕を振り下ろしてくる。跳躍して回避したばかりで避けられない杏は、思わず目を瞑り咄嗟に腕を交差させてダメージを抑えようとするも、デス・フォートレスの巨体による一撃の前では焼け石に水ではない。

「ハアツ!!」

振り下ろされた腕目がけて友奈が跳躍し、跳び蹴りを打ち込み軌道をそらすと。腕は杏から逸れた場所に叩きつけられ、その衝撃で友奈と杏は吹き飛ばされて、砂浜に叩きつけられる。

「あんず!」

「高嶋さん!」

球子が杏に、千景が友奈にの元に慌てて駆け寄る。

「私は大丈夫だよ、ぐんちゃん」

「私もです。でも、このままだと…」

地面が砂浜であったこともあり、2人ともそれ程のダメージは負わなかったが。猛威を振るうデス・フォートレスを見て、杏の表情が陰しくなる。

若葉や球樹らフアフナー部隊が攻撃を続けているも、多量の触手に阻まれ本体には届いておらず、消耗しているだけであった。そして――

『クソツッ!弾切れか!』

遂にフアフナー部隊の主兵装の弾薬が底を尽いてしまった。これで残った戦力は勇者だけとなってしまふ。

「よーしー!こうなったらタマが『切り札で』!」

「無理よ」

球子がいきこんで提案するも、千景がバツサリと否定した。

切り札――

神樹には地上のあらゆるものが概念的記録として蓄積されており。その記憶にアクセスすることで抽出し、自らの体に顕現させることで強化することができる機能。

「なんでだよ千景!?!」

「あなた忘れたの?丸亀城での戦いの後、大葉さんの指示で切り札は

封印されたことを」

切り札は強力であるが、反面使用者への負担が大きく。また、どのような影響を与えるか解明しきれていないため。勇者の安全を優先した四国エリア代表の大葉は大社と検討した結果、システムの解析と改良が終わるまで、一時的に封印処理を施すことを決めたのである。

「…あ」

「タマっち先輩…」

どうやらそのことを記憶から忘却していた球子。そんな彼女に、千景と杏は呆れを滲ませた目を向けて溜息をつき、友奈は困ったような顔をしていた。

「じゃ、じゃあ、どうすりゃいいんだよ!？」

「それは…」

事態の重大さに気づいた球子が慌てて問いかけるも、千景もどうすればいいのか分からず言い淀む。

「ぐあ!？」

そうこうしていると、若葉の苦悶の声が聞こえ。そちらに意識を向けると、若葉が触手に絡めとられてしまっていた、

「若葉ちゃん!？」

「あれ、不味いぞー!」

友奈達が急いで助けに向かおうとするも、壁のように群がって来る触手に阻まれてしまう。

「このツ…!」

若葉は自力で振りほどこうとするも、勇者の力を持つてしても触手はビクともしない。

デス・フォートレスは捕らえた若葉を、無数にある口の1つへと引き寄せていく。

「ツ——!」

口の中には、刃物のように尖った歯がビッシリと生えており。それがまるで、ミキサーのように蠢き始める。あの中に放り込まれたが最後、粉々に砕かれてしまうだろう。

その光景を思い浮かべてしまいゾツとする若葉。渾身の力を込め

るも、触手が肉体に食い込んで痛みが走るだけだった。

「(死ぬ、のか：私は：?)」

友奈達とは戦い始めたばかりの頃は、友奈以外は互いを信じられず、背中を預けることもせず自分勝手に戦っていた。特に若葉自身は、バアルに命を奪われた人々の仇を取ることにしか考えていなく、敵を倒すことに固執して危うく取り返しをつかない事態を引き起こしかけた。

そのせいで戦う理由を見失いかけたが、仲間のおかげで過去に囚われず、未来を生きる人々のために戦うべきなのだと感じつけた。

そして、丸亀城の戦いを経て。友奈達とやつと本当の意味で、仲間と呼び合えるようになったばかりなのだ。まだ、彼女らのことを知らないことの方が多いのだ。もっと、仲良くなるためにも死ぬ訳にはいかない。なにより――

「(優：)」

3年前自分の前からいなくなってしまった幼馴染。もう一度彼に会いたい、そして今までどうしていたのか話したいことが山ほどあるのだ。だから死にたくない。

「(優：：！)」

最愛の人を強く想った時、若葉の勇者システムが接近する反応を捉えた。

若葉達がデス・フォートレスを引き付けている間に、ひなたら非戦闘員は人革連の者達と共に少しでも離れるため森の中を移動していた。

「ひなた様。乃木様達は大丈夫でしょうか？」

ふと、1人の自衛隊員が不安な様子で、先頭を歩くひなたに語り掛ける。勇者と言えど、切り札が使えない状態でステージⅣのガストレアを相手に、無事でいられるとは思えなかったのだ。

それは他の者達同様で皆一様に若葉達を案じていた。そして、それは敵対していた人革連の者達もだった。見捨てられて然るべき自分達を、その身を顧みず助けてくれた彼女らに、最早敵意を持つこと等できなかった。

「安心して下さい。大丈夫ですよ」

ひなたは足を止めて振り返ると、皆を安心させるように微笑みながら話す。

大社の巫女であるとはいえ、自分達よりも遥かに年下の彼女が。このような状況でも落ち着き払っていることは、その場にいる者達に自然と安心感を与えていた。

「彼らが来てくれました」

沈みかけた空を見上げながら告げるひなた。しかし、その表情はどこか悲しそうであった。

『これは!?!』

『何だ!どうした!?!』

デス・フォートレスに捕らえられた若葉を助けるべく、思案していた球樹は。驚愕の声を上げた僚機に振り向く。

『こちらに接近する飛行隊あり!物凄い速さです!』

僚機の言葉に自機のセンサーを確認すると。1つの反応がみられると距離を詰めて接近してきていた。

伊豆諸島上空。その空を切り裂くように1機のファフナーが駆け抜ける。

その背部には、4器のロケットブースターと主翼を取り付けた司馬重工製試作装備『緊急展開ブースター』『EEB』を装備しており。リミッターを外した影響で、ブースターが悲鳴を上げながらも、最新の航空機に匹敵する速度で若葉達のいる島目掛けて直進していた。

島に接近するにつれその輪郭が鮮明になっていき。浜辺には異形の怪物デス・フォートレスがおり。触手に絡めとられた若葉が口の中へと放り込まれそうになっていた。

ファフナーは軌道を修正し、デス・フォートレスへと迫っていく。

『なんだ!?!ミサイルか!?!』

『!飛行隊より、メッセージを受信!』

『読み上げろ!』

球樹が命じている間に。飛翔するファフナーは、デス・フォートレスとの距離を詰めると。EEBを切り離し慣性に乗って進んでいく。切り離されたEEBはデス・フォートレスに激突し、ロケットブースターの燃料が引火し大爆発を起こし。その衝撃とダメージにデス・フォートレスが苦しむように吼えた。

EEBを切り離したファフナーは。水平な姿勢で砲弾のように直進しながら、背部と脚部の大型ブースターを吹かして、慣性を殺さぬようにしつつ機体を起き上がらせる。

『ハッ！『東京エリア部隊、戦闘に参加ス！』』

僚機がメッセージの内容を読み上げると同時に。意識を失ってもおかしくない程の、猛烈なGを受けながらも。意に介した様子もなくファフナーは、背部パイロンからルガーランスとロングソードを取り出すと。若葉に絡まっている触手へと斬撃を放つ。

すると、触手は容易く両断され若葉の体が自由になると、重力に従って落ちようとする。そんな彼女をファフナー——マーク・アインは、両手の武器を手放すと、すれ違いざまに肩から首と膝裏に腕を回すいわゆる『お姫様だっこ』の態勢で受け止めると、ひゃッ!?という可愛らしい悲鳴が若葉から洩れた。

『繰り返す！『東京エリア部隊、戦闘に参加ス！』』

僚機が戦場にいる者全員に伝わるよう。再度、メッセージの内容を読み上げるのと同時に。アインは浜辺に着地し砂浜を削りながら勢いを殺し、最後は片膝について停止した。

『……』

アインに抱きかかえられた若葉は、何が起きたのか理解が追い付かず。固まったままアインの頭部を見つめていた。初めて見る機体だが、そのバイザー越しに見える目にはどこか懐かしさを感じた。

『……』

アインは何も言わずゆっくりと若葉を降ろすと立ち上がる。そして、彼女の目に出ながら球樹機へと通信を繋ぐ。

『こちら、聖天子直轄遊撃小隊A l i v i s 副隊長蒼希優3尉。これよりそちらを援護します』

「え…？」

アインから聞こえてきた声に若葉の目が見開かれる。その声は紛れもない幼馴染の少年のものであった。

「ゆ…う…？」

若葉は掠れるような声で、アインの背中に話しかけるも、返事は帰ってこない。

『!!!』

EEBの爆発によるダメージを回復させたデス・フォートレスは、地面を揺るがす程の咆哮を上げながら、無数の目でアインを睨むように見ると、腕と触手を振り回して暴れ出す。

そんな折、EEBを通常での運用をしていたため、遅れていたマーク・ツヴァイが到着すると。減速しながらEEBをパージし、砂浜を滑りながら着地すると同時に、全兵装を展開し発射した。

放たれた弾幕は触手の群れを次々と焼き払い、流星のデス・フォートレスも堪えたのか、再び苦しむように吼えた。

『こちら、聖天子直轄遊撃小隊A l v i s 隊長天童光輝2尉。ガーディアン1そちらの状況を把握したい』

そう告げると、ツヴァイはジャイアント・ガトリングのトリガーを引くと。吐き出された弾丸の嵐が再生された触手を引き裂いていき、本体の着弾していくも全て堅固な皮膚に弾かれてしまう。

ちなみにガーディアン1とは、球樹のコールサインである。

『こちらガーディアン1。我がファフナー部隊は全機主兵装が弾切れだ。勇者の方は全員戦闘に支障はない』

通信を受けた球樹の報告を合わせつつ。光輝は過去に起きたデス・フォートレスとの戦闘に関するデータを照合し、現在得られているデータを組み合わせて戦術を構築していく。その間にも襲い掛かかる攻撃を回避しながらである。

ツヴァイは複数の事象を並列的に処理することができ、常に最前線に立ちながらも、戦場全体を俯瞰しながら戦闘と部隊指揮を同時にこなすことができるのである。

『マーク・ツヴァイより、ガーディアン1へ。そちらの光学シールドは

「まだ使えるか?」

『ああ、そちらは問題ない』

『では、こちらの作戦への四国部隊の協力を要請する』

『ガーディアン了解。好きに使ってくれ』

ツヴァイの提案に球樹は難なく了承する。階級が同じとはいえ、自分よりも一回りも年下の相手に仕切られることになるが。自分では打開策が思いつかず、ツヴァイの自身に満ちた態度を信じることにしたのだ。

『お前らもそれでいいな!』

球樹の言葉に、それぞれの反応で応える若葉以外の勇者達。不安はあるも、ここは球樹の判断を信じることにした。

『ガーディアン小隊は、敵の注意を可能な限り引いてもらいたい、その間に、俺と金弓箭様で敵の防御を破り。その後、天ノ逆手様が輸送ユニットが爆発した箇所ダメージを与えて下さい。再生したばかりでそこが一番脆いので。次にマーク・アインが同じ箇所を攻撃し皮膚を破壊し、残った勇者様方がそのポイントに全力で攻撃を』

『それで、あいつをやっつけられるのか!』

『いえ、無理です』

期待の籠った目を向ける球子だが、あつさりとその期待を裏切られズツコケそうになる。

「な、なんでだよ!?!」

『戦力が足りません。デス・フォートレスは、自身の身に危険が及ぶようになると逃げる習性があるので、それを利用します。最も、そちらが切り札を使えるのであれば話は別ですが?』

「それは…」

弱気な策に球子が抗議するも。理論整然としたツヴァイの言葉に反論できなかつた。

「タマっち先輩、ここはあの人の言う通りにしようよ」

「むくあんずがそう言うなら仕方ないか…」

杏に諭され渋々とだが納得する球子。杏は勇者の中でも豊富な知識を持ち、戦闘よりもどちらかと言えば参謀として活躍しており。そ

の彼女が他の案がないと判断した以上、球子から言えることはなかった。

「よし！頑張ろうぐんちゃん！」

「ええ、高嶋さん」

両拳を握り締めて気合を入れる友奈に、静かに答える千景。だが、彼女の手は僅かだが震えていた。

冷静を装っているように見えるが、彼女の死への恐怖は人一倍強く。初陣では杏と共に恐怖に囚われ動けず、友奈に後押しされてようやく戦うことができたのだ。

今回の作戦は、もしも目論見が外れてデス・フォートレスが反撃してきた場合、間近にいる自分達が被害を被ることになる。それこそ最悪死人が出てもおかしくはない。それが自分だったら――

「ぐんちゃん！」

そんな千景の手を友奈が握る。彼女の手から伝わる温もりが、震える千景の心を支える。

「高嶋さん……」

「大丈夫。皆で力を合わせれば絶対上手くいくから！」

満面の笑みで話す友奈からは、迷いも疑念も感じられなかった。心の底から仲間達や、会ったばかりの Alvis のことを信じているのだ。

「ええ、そうね」

そんな彼女だからこそ、自分も信じていることができるのだ。友奈がいれば自分は**いら**ない子ではないのだ――

『マーク・アイン、そちらの勇者様はやれるのか？』

ツヴァイからの通信に、アインは自分を見て呆けている若葉に向き直る。

『若葉』

「え、ああ。何だ優？」

声をかけると、ハツとしたように反応する若葉。

『作戦は聞いていた?』

「作戦?」

ツヴァイの話を聞いていなかったようで、疑問符を浮かべている幼馴染に、無理もないと内心想う優。3年ぶりにこんな再会をすれば当然の反応だろう。

『マーク・アインより、マーク・ツヴァイへ。こちらの勇者様は作戦参加は困難、僕がその分を埋めるよ』

『分かった。では、作戦を開始する!』

通信を終えると、再度アインは若葉に背を向ける。

『そこで待つて、すぐに終わらせるから』

「あ、優!」

若葉の言葉を無視して、アインはブースターを吹かし飛び出すと。手放して砂浜に突き刺さっていたランスとソードを回収する。

「優…」

事態に追いつけていない若葉は、その背中をただ見ていることしかできなかった。

『オラア!…ちぢだ化け物!!』

珠樹らガーディアン小隊が、副兵装である拳銃『デュランダル』を撃ちながらデス・フォートレスの周囲を駆ける。

放たれる弾丸は全て弾かれも、デス・フォートレスは鬱陶しそうに腕や触手を振るい蹴散らそうとしてくるのを。回避するかイージスで受け流しながら耐える。

『いきますー!』

「はー!」

デス・フォートレスの注意が逸れている間に。ツヴァイと杏が放った弾幕が触手を蹴散らし、デス・フォートレスまでの道を切り開いていく。そして、その道をアイン、友奈、千景、球子が駆け抜けていく。「いづくぞおおおおお!!」

最初に飛び出した友奈が、修復されたばかりの箇所を拳を打ち付け

ると、皮膚に亀裂が走り広がっていく。

『オオオオオオオオ!!』

続いて飛び出した優が、亀裂にランスを突き刺し、レールガンを撃ち込み続ける。一発ごとに亀裂がより広がっていく。そして、遂に皮膚が砕け散って内部の肉が露出する。

「喰らええええええええええ！」

「ハアッ！」

最後に球子と千景が取りつき、露出した内部に攻撃を加えていくと、デス・フォートレスは悲鳴のような咆哮を上げると体を大きく揺らして暴れ出す。

「うわ!？」

「くっ！」

激しく揺さぶられ踏ん張れなくなった2人が振り落とされる。

「——ッ！」

球子と千景は空中で態勢を立て直し着地するも。その際、千景は右足を挫いてしまった。

『——!!』

デス・フォートレスは怒り狂ったように吼えながら、落とされた2人を踏みつぶそうと、大木はあろうかという太さの足の1本を振り上げていく。

『(!もう一押し足りんか!) いかん、逃げろ!』

若葉が抜けた分ダメージを与えられず、デス・フォートレスを撤退させるには不十分となってしまったことに、球樹が歯噛みする。

「ッ！」

2人は急いで退避しようとするも、千景の右足に激痛が走りバランスを崩して転んでしまう。

「千景！」

「ぐんちゃん！」

球子と友奈が助け出そうとするも、それよりも先に千景が踏みつぶされるだろう。

「(私、死ぬの?)」

千景の目に映る景色全てが、スロー再生されたようにゆっくりと動き。仲間達の自分を呼ぶ声がどこか遠くに聞こえる。

迫りくる足裏が徐々に視界を埋めていき、彼女の命を磨り潰そうと迫る。

死への恐怖から千景は思わず目を瞑った。

『ヌオオオオオオオオオ!!!』

だが、誰かの咆哮と共に金属が激しくぶつかる音がすると。いつまで経っても何も起きなかった。

「——え？」

千景が恐る恐る目を開けると。千景を庇うように立ったツヴァイが、突き出した両手でデス・フォートレスの足を受け止めていた。

だが、機体の各部に凄まじい負荷がかかっており、装甲み亀裂が入っていき、火花があちこちから散っている。

『ユウウウウウウウウウウウウウ!!』

『ウアアアアアアアアアアアア!!』

ツヴァイの声に応えるように、アインがデス・フォートレスの傷口部分に取りつく。両手で逆手に持ったランスを突き刺し、レールガンを最大出力で撃ち込んでいく。

『——!!』

苦悶を上げるように吼えたデス・フォートレスが、アインを振り払う暴れ狂う。だが、アインは巧みにバランスを取りながら踏ん張る。

負荷によってランス共々紫電が走り悲鳴を上げるも、アインは構わず撃ち込み続けた。そして、遂にはランスが耐え切れなくなり爆発を起こし、その衝撃で吹き飛ばされると砂浜に叩きつけられるアイン。

「優、優ウ!!」

その姿を見た若葉が弾かれるように彼の元へと駆け出す。

『オラアアアアアアアアアアア!!』

その間に、ダメージを受けたことでデス・フォートレスが怯んだ隙に、機体出力を最大まで高めて一気に足を押し返すツヴァイ。

押し返されたデス・フォートレスは、たたらを踏むように後退すると、ふらつくような足取りで海へと逃げ込み姿を消していく。

「つ、疲れた〜」

デス・フォートレスの姿が完全に見えなくなると、気が抜けた球子がへたりと座り込んだ。他の面々も生き残れたことにそれぞれ喜びを表現する。

『…(無事で?)』

「え、ええ…。でも、あなた…」

ツヴァイが千景の無事を確かめるも、寧ろツヴァイの方がダメージが大きかった。神経接続によって機体と一体化していることによつて、ダメージがそのまま搭乗者にフィードバックされているのである。機体の至る所に亀裂が入り、そこからオイルが流れ出ており、満身創痍という言葉が相応しかった。

そのことを千景は知らないも、彼の状態が普通でないことが感じ取れ言葉が出なかった。

そんな彼女に、ツヴァイはしやがみ込んで右足に触れる。

「ツ——！」

『暫しの辛抱を』

痛みに顔を顰める千景に、ツヴァイは語り掛けながら状態を確認していく。

『骨に異常はありませんね。これならばすぐに治る。他に異常は?』

「特には、ないわ」

間近に見つめられて、頬を赤らめて思わず視線を逸らす千景。同年代はおろか、異性と碌に関わったことのない彼女には、刺激が強いようである。

『(無礼を)』

そういつてツヴァイは、千景をお姫様抱つこの形で抱える。ツヴァイの背部にはレールキャノンがあるので、背負うことができず、安全に運ぶにはこうするしかないのである。

「え!? あっちょ、ちよつとー！」

『お一人では歩けないようなので。(ご容赦を)』

顔を真っ赤にした千景の抗議するも、正論を返されそれ以上何も言えなかった。

「優、優！しっかりしろ！」

ツヴァイの向かった先には、気絶して倒れ伏しているアインに寄り添い、今にも泣き出しそうな顔で呼びかけている若葉がいた。

その周りには友奈達が集まっており、皆今まで見たことのない程取り乱した若葉に、驚きの色を見せていた。

『——う……あ……』

「優！」

うつすらと目を開けたアインに、若葉が安堵しながら顔を覗かせる。

『若、葉……。敵……は……？』

『撤退した。作戦終了だ』

アインの問いに、ツヴァイが代わりに答えた。

『そう……。また……生き残ったんだ……』

『ああ、お前は生きてるよ。まだ、な』

ツヴァイがの言葉に、自分が生きていることを実感しているアイン。だが、そこに喜びの感情は見られなかった。

「優……？」

そんなアインに。若葉は彼が目の前にいる筈なのに、どこか遠くいるような錯覚を覚えてしまったのだった。

第六話

「ああ、失敗したの、そう。え？驚かないのかって？そりゃ、成功するとは思ってなかったし」

東京エリアにある廃工場内で、1人の男性が携帯で通話をしていました。暗がりでは容姿はハッキリとしないも、20代後半といった年齢だろうか。

人革連による四国勇者襲撃作戦の失敗の報告を受けた男は、特に気にした様子は見られなかった。それどころか予見すらしていた節すら見て取れた。そんな彼に、話し相手が不思議そうに問いかけてくる。

「あ、なんで分かるのかって？勇者5人と精鋭のファフナー部隊相手に、2個大隊とか少な過ぎるんだよ。おまけにあいつらもいるんだぞ？失敗して当然だろ？あの『羽』共は自分達のことを過大評価し過ぎなんだよ」

男。やれやれとまるで、襲撃計画を立案した者を馬鹿にしたように話す。

「だから、別にこっちの方は問題ないよ。そういう前提で動いてるから。うん、そう。もういい？大事なお話中なのこっちは。じゃあね」
通話を終わると、携帯をズボンのポケットにしまう男。

「終わったかね？」

男の対面には。タキシードにシルクハットに身を包み、笑顔を浮かべた仮面で顔を隠した長身の男と、黒いドレスを纏い腰にバラニウム製の小太刀を携えた少女——機密物資奪還部隊を襲撃した者達だった。

「ああ、悪いね。予定通り四国の勇者一行がこっちに入ったわ」
「ほう、それは素晴らしいことだ。正直、君達の作戦が上手くいったら、どうしようかとヒヤヒヤしていたんだ」

プロモーターの男が、両手を広げながら歓喜するように笑う。

「いや、そこは、わーどうしようぼくたちのけいかくのしようがいになっちゃうよ〜って慌てるどころだけだな」

男が呆れの混じった目を向けながらツッコミを入れると、プロモーターは爪先立ちで一回転した。ちなみに、プロモーターの側でに控えているイニシエーターは、男のことをまるで嫌いな食べ物が出てきたような目で見ていた。

「まさか、寧ろ僥倖だ。勇者とは一度戦ってみたかったんだ。ああ、どれ程楽しいんだろうねえ」

そういつて仮面の奥でクッククックと笑うプロモーター。そんな彼を見ながら、男は呆れたように溜息をついて頭を搔く。

「戦闘狂は怖いわねえ。ま、お前さんがどう思おうが、別にどうでもいいけどさ。んじゃま、手助けはするから頑張ってくれなあ」

男は背を向けて手を振りながら廃工場を去っていく。

「パパ、私あいつ嫌い。斬りたい」

男の姿が見えなくなると、今まで沈黙を保っていた少女が、男に対する嫌悪感を隠すことなく吐き捨てる。

「いいよ、と言いたいが。今あの男を敵に回すべきではないな」

イニシエーターの頭を撫でながら、やれやれといった様子で首を振ると。プロモーターが男が去っていた方角を見つめる。

「それにしても皮肉なものだ。日本の、東京エリアの守護者を言われた男が、東京エリアの破滅に加担するとは」

プロモーターは、実に愉快そうな笑い声を上げるのであった。

デス・フォートレスを退けた後。無事東京エリアに辿り着けた若葉達は、本来であればすぐに代表である聖天子と会談する予定であったが。彼女の計らいで日をまたいで行うこととなった。

千景だけは怪我の治療のために入院することとなり、護衛の任務を終えた、球樹らガーディアン小隊は四国エリアへと帰還し。残った若葉らは手配されていた高級ホテルで一晩身を休るのだった。

そして、翌日の昼頃。東京エリアの政治の中枢である第一区にある聖天子の住居と職場を兼ねた聖居と呼ばれる建物にて、若葉達は聖天子と会談が行われた。ちなみに、治療を終えた千景も合流している。

会談は。まず、聖天子の今回の人革連による、四国勇者への襲撃に

関しての深い謝罪から始まった。東京エリアの領域内でありながら、人革連の動きを察知できなかったこと。そして、東京エリアの政府内から、今回の四国勇者訪問に関する情報が人革連側に漏れていた可能性が高く、その原因の究明と再発の防止を徹底することが告げられた。

その後は、東京、四国の両エリアが今後も手を取り合い発展していくこと。そして、いずれは全ての日本エリアが団結し、バアルから日本全土を奪還できる日を迎えることを願っていることが話されたのだった。

会談を終えた若葉達は、聖天子からの見送りを受けながら聖居から出ると、入り口前にはリムジンが止められており。その側には自衛隊の制服を纏った光輝が一切の乱れのない姿勢で立っていた。

「勇者様、ならびに巫女様。東京エリアへようこそおいで下さいました。自分は以後、皆様のご案内と警護を務めさせていただきます、聖天子様直轄遊撃小隊 A l v i s 隊長の天童光輝 2 尉であります」

若葉達がリムジンに歩み寄ると、光輝は敬礼しながら名乗り出た。A l v i s という単語に、優の所属と同じであることを思い出した若葉が、無意識に彼の姿を探す。

「他の隊員が皆様の歓迎の準備をしておりますので、どうぞお楽しみに」

「そうですか。それは楽しみです」

それを察した光輝が、それとなく優の不在を告げると。若葉はなんでもないように振舞いながら対応する。

「あ、もしかして。昨日タマ達を助けにきてくれた、やたら派手にぶっ放してたファフナーに乗ってた人か！」

「ちよ、タマっち先輩！」

光輝ことを指刺してよろしくない言葉遣いで話す球子を、杏が慌てて窘める。

「どうか、お気になさらずに。自分に正直な球子さんのことを、わたく

しはとても好ましく思います」

光輝に代わり、代表である聖天子がにこやかな笑みを浮かべてフオーする。そこには、彼女の嘘偽りのない本心であることが伺い知れた。

「お、タマの良さに気づくとは、聖天子様は見る目があるな。100タマポイントを贈呈しよう」

そういつてサムズアップする球子。歳が近いせいもあるのか、完全に友人感覚で話してしまっている。

「だから、タマっち先輩イイイ！」

「す、すいません聖天子様！球子が失礼極まりないことを」

下手をしたら、国際問題になりかねないことをやらかかしている球子に。杏が悲鳴を上げ、若葉が慌てて頭を深々と下げながら謝罪する。残った友奈達もハラハラした様子で見守っている。

「いえ、お気になさらずに乃木さん。もう、わたくし達は友人なのでから遠慮なさらないで下さい。立場上、対等に接して下さい相手が少ないのですから…」

そういつて今度は悲しそうに笑う聖天子。これもまた、彼女の偽りなき本心なのだろう。

「そ、そういつて頂けると幸いです…」

聖天子が心の広い人物でよかつたと安堵する若葉。ひなたなんかは、胸を撫でおろしながら、額に流れる汗をハンカチで拭き取っていた。

「おう、これからよろしくな聖天子さ、イツタイ!？」

「ちよつと、タマっち先輩は黙つてて」

元凶たる球子は反省した様子もなく、再びサムズアップしようとして語気を強めた杏に脇腹を抓られた。

「(面白え)」

そんな彼女らのやり取りを、光輝は内心で爆笑していた。

「聖天子様、お時間です」

なんともいえない雰囲気を変えるように、会談の時から聖天子の側に控えていた初老の男性——天童菊之丞が咳払いをしながら聖天子

に語り掛ける。厳つい顔つきと、しゃんと背筋の伸びた長身と袴姿の上からでも分かる程、無駄なく鍛えられた体付きをしており。彼こそが聖天子補佐官を務め、東京エリアのN.O. 2の地位に立っており、光輝の祖父でもある人物だ。

「そうですね。それでは皆さん、これで失礼します」

「天道2尉。くれぐれも失礼のないようにな」

「ハッ、承知しました天道閣下」

菊之丞の言葉に敬礼しながら答える光輝。祖父と孫ではあるが、公の場ではあくまで聖天子補佐官と一自衛隊員として公私を分けて接していた。

だが、光輝が菊之丞に向ける目には、何か疑念の色が滲んでいるように若葉には見えるのだった。

「おゝ流石東京だな！都会って感じだー！」

若葉達を乗せたリムジンが道路を走り。窓側の席に座った球子が、外の景色を眺めながら目を輝かせていた。

「もう、小学生じゃないんだから…」

そんな球子を見ながら、隣に座る杏が溜息をつく。

「ぐんちゃん、足はもう大丈夫なの？」

「ええ、最新の治療を施してもらったから」

友奈が問いかけると、千景は微笑みながら答える。

セカンド・アタック末期。激減した人口の減少を抑えようと、医療分野の研究が盛んに行われ。捻挫程度であれば、一日と経たず完治できるとまでに発展しているのだ。

「それに…。応急手当が適切だったからとお医者様が言っていたわ。だから、その…。礼を言うわ」

そういつて手当をした光輝に視線を向ける千景。その時のことを思い出しているか、少し気恥しそうにしている。

「お気になさらず。訳あってその手のことには慣れていましたので」
軽く笑みを浮かべながら答える光輝。その目はどこか遠くを見て

デス・フォートレスを退け、千景の手当を終えた後の光輝と優のやり取りを思い出し。友奈達はなんとなく心当たりがつくのであった。「天童2尉。その、優はああいった負傷をよく、するのか?」

恐る恐るといった様子で光輝に問いかける若葉。沈痛な趣な彼女の雰囲気、騒いでいた球子も大人しくなる。

「…そうですね。私の部隊が、正規部隊が手に負えない任務を担当していることもあります。あの男は自分の命を顧みらないせいでもありますかね」

「命を、顧みらない?」

光輝の言っていることが理解できず首を傾げる友奈。

「ええ、大切なものを守るためなら迷わず自分を犠牲にする。優しすぎるんですよ、彼は。あなたならお分かりでしょう?」

光輝の言葉に頷く若葉。

そう優は誰よりも優しい。若葉やひなたといった時も、病弱な自分よりも他人を優先させていた。まるで、自分の存在価値を求めるように。しかし、再会した時感じられたのは、それとはまた異質なものであった。

「…彼については聞きたいことが多いでしょうが。後は、当人から直接伺った方がよろしいかと。見えました、あれが我々が活動拠点としている横浜駐屯地です」

そういつて光輝が窓の外に視線を向けるので、それを追うと、基地施設の輪郭が見えてくるのであった。

横浜基地に到着した若葉達は。光輝に連れられA l i v i s専用ルームへと向かっていた。

「凄い警備嚴重だね」

「出入りするのがメンドクさそうだよなあ」

設けられたセキュリティの高さに、友奈と球子がそれぞれ感想を述

べる。

「ここには最新ファフナー開発の全てがありますからね。東京エリアの生命線と言ってもいいでしょう」

最後のセキユリティを解除しながら光輝が告げる。

扉が開かれ――

「だからいつも言ってるでしょうがあああああああ!!」
優の怒声が響いた。

室内には、縮こまって床に正座した董を仁王立ちしながら腕を組み、鬼のような形相で睨みつけている優がいた。

「ビーカーでコーヒーを入れるんじゃないやありません！ただでさえ、今日は大事なお客さんが来るんですから！」

「ウチらしさを出そうと思って……」

「そんな独自さなんていらないの！狙い過ぎるとかえってスベるの！」

火を噴くのではと思える勢いで説教する優に、自論を展開するも、バツサリと切り捨てられてしょんぼりする董。

「おい、帰ったぞ」

「大体、死体も終わったら元の場所に戻……え？」

光輝に声をかけられ、ようやく存在に気が付いた優。若葉達は予想外の展開に、啞然としていた。

「えーと……」

何とも言えない空気に、嫌な沈黙が訪れる。

「何をやってんだお前は……」

そんな中、光輝は呆れ果てたように溜息をつくのであった。

「…どうも、初めてのの方は初めまして。Alvis 副隊長を務めております蒼希優3尉です。以後お見知りおきを」

「Alvis 所属の整備班並びに、次世代フアフナー開発計画総責任者の室戸董です」

どうにか場の空気を整えると、取り合えず自己紹介を行う優と董。ちなみに董は手にしているメモ用紙を見ながらである。

「それにしても可愛い子達ばかりだね。死体になった「あんたは必要な時、決められたこと以外喋るな」

何かほごこうとした董を光輝が黙らせた。

「今、死体とか言わなかったか？」

「き、気のせいだよ。きつと…」

董の発言に困惑する球子と杏。

「…室戸博士は色々アレなので、変なことを言っても『ああ、そういう人なんだな』とどうか、暖かい目で見て頂ければ…」

光輝の説明に、若葉達は曖昧に反応することしかできなかった。

「私の扱いが酷すぎないかい？」

「え？…そうですか？」

董が優に愚痴ると、彼は本当に疑問に感じていないように首を傾げたので。董の心は傷ついた。まあ、自業自得なので同情の余地はないが。

「さて、本題に入りましょう。蒼希3尉」

「了解」

光輝に呼ばれた優が、若葉とひなたの側まで歩み寄る。

「久しぶり、若葉とひなた。元気そうでした」

「優……」

「……」

ようやく再会できたことに顔を綻ばせる若葉。対照的にひなたは、まるで彼を責めるような視線を向けていた。

「優、教えてくれ。どうしてお前がファフナーに、いや、私達の前から何も言わずにいなくなったんだ？」

若葉には聞きたいことは山ほどあった。なぜ自衛隊にいるのか、ファフナーで戦っているのか……。それでも、一番知りたかったことは自然と口に出ていた。

「……。そうすることが君のためになる。そう思ったからだよ」

そういつて微笑む優の姿は、今にも消えてしまいそうな程儚かった。

第七話

ブリーフィングルームに移動した優達。モニターの前に優が立ち、その前に椅子に腰かけた若葉達勇者と巫女組がおり、部屋の隅には光輝と董が立っていた。

「…あの、他の方々もお聞きになるの？これっぽっちも面白くないですよ？」

当たり前のように、話を聞こうとする友奈らに問いかける優。

「個人的に色々気になるし、なあ」

そういうながら球子が視線を向けると、他の者達がそれぞれ同意した。

「まあ、それなら別に「ゴホンツ」…そのように希望されるのなら構いませんが」

優の言葉を遮るように、光輝がわざとらしく咳払いする。すると、優はヤベツと聞こえそうな顔で自身の口を抑えると、慌てた様子で言い直した。

そんな彼らを見ていた球子が、腕を組んで不思議そうな顔をしている。

「てかさ。お前らなんで敬語なの？話しにくいなら普通にすればいいじゃん」

「え、うくん」

球子の言葉が意外過ぎたのか、思わず困惑の声が漏れる優。そんな彼の声をかき消そうとするように、光輝が数回咳払いした。

「あのねタマっち先輩。私達国賓だから、皆さん配慮してもらってるの。だからそういうこと言っちゃ駄目なの！」

杏が慌てて窘めるも、球子はうーむと腕を組んだまま納得していない様子であった。

「だからって、こういう時までかたっ苦しくされると、正直背中が痒くなるんだよ」

「あ、それ分かるな。私もなんかムズムズした感じがするんだよね」「高嶋さんまで…」

球子に同意する友奈に、千景も困惑している。

勇者に選ばれたとはいえ、一般的な感性を持つている彼女らには特別視されることに違和感があるのだ。

「でも、蒼希は若葉とひなたとは普通に話してるじゃん」

「え？まあ、幼馴染だしな」

寧ろ優に敬語で話されたら、若葉は正気を疑ってしまうだろう。

「若葉とひなたの友人ならタマの友人つてことになるしさ。こういう時くらい普通に話してほしいじゃん」

「立场上そういう訳には…」

光輝としては公務員である以上、やはり国賓に軽々しい口を聞くことに躊躇いがあった。そんな彼の肩を董が突つつく。

「何です博士。今クソ忙しいんですけど」

「いや、言い忘れてたことがあつてだね」

「はい？」

もったいぶるように話す董にイラつとくる光輝。

「君が彼女らを迎えに行っている間に。聖天子様から、こういった話があれば、彼女らの意思を尊重するようにとの命令がきたんだが」

「なぜ、すぐに報告しなかった…！」

国のトップからの命令を本気で忘れていた公務員に、本気で頭を抱えなくなった光輝。

「君が必要な時以外喋るなと言うから」

「なぜ、死体云々言う前に報告しなかった…！」

「真面目にやろうと思ったんだがね。彼女らを見てムラムラしてしまつて」

「このド変態がッ！」

キリつと最低なことをほざく董を、光輝は力の限り罵倒した。

「で、どうすんのさ光輝？」

「…希望者には合わせてやれ。もう、俺は知らん」

疲れ切った顔で投げやり気味に告げる光輝。今にも帰りたいそうである。

「じゃあ、土居さんはそれでいいんだね」

「おう！後、杏もそれでいいぞ！」

「別にいいんだけど、せめて一言くらい言つてよお…」

右手の親指を立てて答える球子に、杏がやれやれといった様子ツツコミを入れる。

「他の方は？」

「はいはい！私もそれがいい！」

友奈が右手を上げて申し出る。

「私も一向に構わない」

「私もです」

若葉とひなたも同意し、残った千景に視線が集まった。

「…私も、それでいいわ。仲間外れみたいだし…」

照れくさいのか、横目でボソボソとした声で話す千景。

「じゃあ、決まりつてことで。さて、何から話そうかね」

「その前に1つ気になっていたのだが。優、お前体は大丈夫なのか？これだけ起きていても、発作が起きていないようだが…」

若葉の知る優は、持病によつて長時間起き上がっていないことができず、定期的に体を休ませる必要があった。とてもではないが、自衛隊員に、ましてファフナーに乗れる体ではなかった。

だが、今の優はそのような兆候もなく、至つて健全なようにしか見えぬ。

「ああ、それ？もう、治つたよ」

「…本、当なのか？」

その言葉を聞いて若葉は思わず立ち上がると、優に詰め寄ると体に触れる。医師の話では、現代の医学では治療は困難だと聞かされていただけに、その喜びと驚きは大きかった。

「うん。今ならバク転でもなんでもできるよ」

「そうか、よかった」

まるで、自分のことのように喜ぶ若葉。

「だが、どうやって？」

「そこら辺もこれから話すよ。てか、顔が近いよ？」

そういわれてハッと現在の自身の状況に気づく若葉。傍から見る

と、まるで自分から優に抱き着いているようにも見える。

しかも、互いの身長が近いこともあつて、見つめ合っているかのような状態になっていた。

そして、そんな2人を球子や友奈と董はおー、興味深そうに見ており。杏はキャーキャーと興奮気味に目を輝かせ、光輝と千景は何やつてんのお前ら？とてでも言いたそうな顔をしていた。

「~~~~~」

火を噴くのではないかと思えるくらい顔を真っ赤にした若葉は、脱兎のごとく自分の席へと戻った。

「おい、若葉」

「何も言うな」

「いや、でも…」

「い・う・な！」

「ア、ハイ」

球子がからかおうとするも。若葉の鬼のような形相に、身の危険を感じて大人しくすることにした。

「…脱線してんぞ優」

「ああ、ごめん。それじゃ本題入ろうか」

呆れ顔で光輝が指摘すると、頬を掻きながら優は語りだすのだつた。

—— 3年前

徳島にある病院の一室にて。優はベット上で上半身だけ起こし、窓の外の景色を生気を感じられない瞳で見つめていた。

神社での一件の後、優は疲労の余り体調を崩して意識を失い、この病院へと搬送されたのだ。

備え付けられているテレビからは、全世界で新たに出現した怪物について様々な分野の学者による討論が行われる番組が流れていた。

—— サベージともガストレアとも異なる未知の生物。

—— 理由は不明だが、バラニウムやスレイヤーによる攻撃のみ有効であったこと。

—— この新たな脅威に対する今後の対策。

様々な意見が飛び交わされているも、優はまるで興味を示した様子

もなく。ただ景色を眺めているだけであった。

『次に、四国エリアに新たに出現した巨大植物についてですが——』

討論は次に移り。今回の騒動の最中、四国の中心に突如現れた神樹を呼ばれるものと、それを奉祭する組織についての議論となったが、これにも優は反応を示さなかった。

『それで、その大社とやらから発表された少女達についてですが——』

ある学者が、大社が報じた神樹から力を託されたと言われる少女ら——『勇者』の話題になると、優はようやくテレビに視線を向けた。

大社は彼女らこそ、神に見初められた選ばれた存在であり、この世界の希望であると告げたが。番組に出演している学者らは、選ばれたのが年端もいかない少女であることや、ついこの間まで只の一般人であったこと等を理由に懐疑的な意見が多かった。

「若葉、ひなた……」

無意識に大切な幼馴染達の名を呟く優。入院してから彼女らとは一度も会っておらず、あの後どうしているのかさえ知ることができないでいた。恐らくだが、あの日2人が見せた超人的な力は、勇者と神樹の代弁者である巫女に選ばれたからなのだろうと優は推察している。

きつと若葉はこの先バアルと戦わされるのだろう。ただ神とやらに選ばれたからという理由だけで。彼女の性格からしてそのことに迷いはないだろうが、それでも優の心には釈然としない思いが渦巻いていた。

やりきれない気持ちを静めようと毛布を力強く握っていると、部屋のドアがノックされた。

「……どうぞ」

軽く息を吐いて無理やり心を落ち着けて話すと、ドアが開かれ自衛隊を纏った見知らぬ男性と少年が入ってきた。いや、男性の顔には見覚えがあった——

「日野道陽さん？」

優は呆然とした顔で男性の名を呟く。そう、彼の前に現れたのは神社で助けられた命の恩人であり。日本を、いや、世界を代表するエー

スである人物であった。

「おりよ？俺のこと知ってるんかい？」

「あ、はい。テレビとか雑誌で何度も見えますから。それに、あなたみたいになりたいってずっと思ってる……！」

憧れの人物を目の当たりにし、先程までの陰鬱さが嘘のように興奮した様子で早口で語る優。そんな彼に、道陽は、いやー照れるなくと恥ずかしそうに頭を掻いている。

「今まで散々言われてきたことだろうが、今更照れてんじやねえよ」

そんな道陽に隣にいた少年が呆れ果てた目を向ける。その声から、彼が道陽共にいた重装型メガセリオン・モデルの搭乗者らしい。

「いやあ、だつて俺なんかそんな憧れてるなんてさく大袈裟だつてさ」

「…もういい。早く本題に入るぞ」

やけに自己を過少評価している道陽に、溜息をつきながら話を進めようとする少年。

「せやな。改めて、俺は東京エリア駐屯陸上自衛隊所属、国家代表直属遊撃小隊A i v i s 隊長の日野道陽1尉だ。よろしくな。んで、こつちの不愛想ヅラしてんのが、いつて」

道陽に指をさされると、少年は不機嫌そうにその手を払う。

「同隊副隊長の天童光輝准尉です」

それだけという少年——光輝は黙る。そんな彼に、道陽はやれやれと言いたそうな顔で溜息をついた。

「おいおい光輝。せつかく同い年の子と知り合っただから、もうちよつとなんか言えよ。そんなんだから友達が1人も、痛い」

道陽が指摘しながら光輝の肩に手を置くと、彼はより不機嫌そうにその手をはたき落とす。

「(もしかして、気にしてるのかな?)」

そんな光輝の様子からなんとなく感じ取る優。

「さっさと要件を言え」

「はいよ。さて、蒼希優君だよ。今日は君にお話が合ってお邪魔させてもらったんだよね」

今までの軽い雰囲気から、少しだけだが張り詰めた様子を見せる道陽に。思わず姿勢を正す優。

「言つとくけど、ここで聞いたことは他言無用でお願いね。万が一話しちゃうと豚箱行きになっちゃうからさ」

「は、はい」

軽い口調で話しているも、道陽の目は本気だった。言い知れぬプレッシャーに思わず息をのむ優。

「俺達の隊は、次世代型のファフナーのテストをするために編成された訳なんだけどさ。1つ問題があるのよ」

「問題、ですか?」

道陽の言葉に首を傾げる優。その話題から、何故自分を訪ねてきたのが繋がらないからだ。

「そ、その問題ってのがー光輝任す」

「あ?」

いきなり真面目な雰囲気を優るめた道陽が光輝に振る。彼は突然のパスに、露骨に不機嫌そうに反応する。

「いや、こういった話はお前の方が得意じゃん。それと同年代の子と話せる機会だしさ」

「ただ単に面倒くさいだけだろうが」

「いいからやりなさい。命令です」

「このクソ上官めが」

肩に手を置いて告げる道陽に、光輝は力の限り吐き捨てるように言う。優に向き直る。2人のやり取りを見ていると、上司と部下というよりも、まるで兄弟のように優は思えるのだった。

「次世代型にはあるシステムが導入されます。『コアシステム』と呼ばれるガストレアの心臓を加工した新型の動力です」

「ガストレアの心臓を?」

光輝の言葉に驚愕する優。そんなことをして大丈夫なのかと思わず不安になる。

「ええ。それによって、従来の物より高い出力を得ることが可能となるのです。他にも様々な新技術が投入されるのですが…ある問題点

が浮き彫りになりした」

「問題点、ですか？」

専門的なことは正直よく分からないので、疑問符しかでてこないが。光輝もその点は重々承知してるのだろう、特に気にした様子もなく話を進める」

「間もなく2体試作型が完成するのですが。その新型ファフナーを扱うには、ある条件をクリアできた者だけとなってしまったのです。『シナジエティック・コード』と呼ばれる、ファフナーとの一体化に際して理想的な脳を形成で可能であり。コアとの接触媒介となる、ガストレアウイルスから抽出した『ガストレア因子』を投与し定着可能な者です」

「…それって大丈夫なんですか？」

話を聞くだけでも、危険だと分かる内容に冷や汗が額から滲み出る優。

「無論誰でも因子が定着する訳ではありません。最悪拒絶反応を起こし死に至ります。試算ではこの条件をクリアできる者は、20歳未満の中で10万人に1人とされています。理由としては、高齢になる程シナジエティック・コードの形成が難しくなり、因子が定着しにくくなるからです」

「ちなみに、東京エリアでその条件をクリアできたのはこいつだけね」

そういつって光輝を指さす道陽。

「えっと、つまり搭乗者が1人足りないってことですか？」

「そ、だから同盟エリアの方も探してみようって話になった訳。まあ、でも先に行つた長野では見つからなかったけどね」

まいつちやうよねくと頭を掻きながら、困ったように笑う道陽。

「で、残る希望をかけてこの四国に来たのよ。そして、1人だけ見つかることができた」

そういつって真つすぐに優を見つめる道陽。そこで優は1つの結論に行き着くと同時に、彼らが見ず知らずの自分に会いに来たことに合点がいく。

「僕が、その適合者なんですか？」

「正確には適合できる可能性が高い、だね。条件をクリアしたからといって、処置が必ず成功するって訳でもないのよね」

震える声で問いかけると、道陽が訂正するように答えた。

「君の場合、光輝と比べると成功率は低い。ぶっちゃけると失敗する確率の方が高いね」

そういいながら道陽は、優の側まで歩み寄り姿勢を下げ、優と目線を合わせる。

「保護者である乃木代表からは、君の意思を尊重するよう言われている」

優の両親は既にこの世を去り、親交のあった若葉の父である大葉に引き取られて以降は、彼は乃木家で暮らしているのだ。

「個人的に言わせてもらうと、こんな賭け事みたいなことはしたくない。でも、世界に残された時間は余りに少ない。だから、君の力を貸してもらいたい。俺達と共に明日を切り開くために戦ってほしい」

その言葉に優は俯き、何も答えずに押し黙る。そんな彼を見て、道陽は光輝に視線を向けると頷く。いきなりこんな話をされて戸惑うのは当然だろう。元よりこの場で決断してもらおうつもりは彼らにはなかった。

「何も今すぐ決めてくれとは言わない。代表らともよく相談「やります」してえん？」

道陽が優の肩に手を置いて優しく語りかけると。その言葉を遮って優が顔を上げ、決意に満ちた目で話す。

「その適合処置受けます！だから、僕をファフナーに乗せて下さい！」
道陽の腕を掴みながら継るように懇願する優。その姿に道陽も光輝も思わず困惑する。

「いや、でも死ぬかもしれないしき。じっくり考えた方が…」

「必ず適合してみます。だから、僕に戦う力を下さいッ！」

どうにか落ち着けようとするも、今にも泣き出しそうな程掠れた声で優は懇願し続けるのだった。

「——てまあ訳で、因子の定着やらなんやら上手くいって、ファフナー乗りになったのさ」

「ちよ、ちよつと待ってくれ！」

優が一通り説明を終えると、若葉が勢いよく立ち上がる。

「父さんはそのことを知っていたのか？ だったらなんで私に……」

「教えてくれなかったのかって？ 僕が黙っていてもらうようお願いしたからね。君が知ったら心配するだろうから」

「そんなのは当たり前だ！」

優の言葉に憤慨した若葉が再び詰め寄る。

「どうしてだ。 どうして、そこまで私を遠ざける？ 私のことが嫌いになったのか？」

「違うよ若葉。君がこのことを知れば戦いに支障が出るかもしれない。もう、僕のせいで君に傷ついてほしくなかったんだ。3年前のよう」

「ッ！ 気にしていたのか、あの時のことを？」

若葉の目が驚愕で見開かれる。

「優は何も悪くない！ 私がそうしたいから、お前を守りたかったからしたことだ！」

若葉は上着を捲り、右脇腹の傷跡を晒す。それを見た優の目が今度は驚愕で見開かれた。今の時代、傷跡なら消そうと思えば簡単に消すことができるからだ。

「その傷、どうして…」

「この傷は私の誇りだ。あの時お前を守れた証だ。だから、自分を責める必要はないんだ」

「そっか。やっぱり若葉は優しいね」

そういつて笑みを浮かべる優。しかし、その表情は悲しそうだった。

「でも、僕は自分を許せないんだ。あの時、君の側にいる資格はなくなっただよ」

「勝手に決めるな！そんなものなくても、私はただお前が側にいなくてはならぬよ」

「それは無理だったろうよ」

思いを吐露する若葉に、今まで静観していた光輝が口を挟んできた。

「大社はお前達勇者を神聖化しようとしている。奴らにとつて、ただの一般人でしかなかったこいつのことは目障りだったろうよ。あのまま四国に残っていても、あの手この手でお前さんから遠ざけていただろうな」

「な、そんなこと…!」

「ならば聞くが。お前さんら大社から可能な限り、身内意外とは会うなど言われなかったか？」

「あーそーいや、そんなこと言われたなあ」

光輝の言葉に球子が思い出したように反応する。

「でも、それは私達の安全を守るためだからって…」

「ま、それもあるが。お前さんらを無暗に世間に晒すと、『神に選ばれた神聖なる存在』ってイメージを崩したくないのが本音だろうな。最も、俺の勝手な憶測だがな」

光輝の語った内容に押し黙る勇者達。そう言われてみると、大社の発言に違和感が感じられ、ただの個人の感想とは言い切れなかったの

だ。

「別に大社のやり方が悪いとは言わん。だが、個人的に大社と神樹のことを俺は信用してないってだけだ。なあ、優」

「そうだね。僕は神樹も大社も、勇者も嫌いだ」

「え？」

優のカミングアウトに、思わず固まる若葉。

「嫌いってなんだよ！タマ達のどこが気に入らないんだよ！」

「おい、それじゃ喧嘩撃ってるだけだぞアホ」

憤慨した球子が抗議し、光輝が呆れたように優にツツコミを入れる。

「ん？ああ、ごめん。勇者が嫌いなだけであって、別に君達のことはいじやないから」

「??？」

優の言っていることが理解できず、友奈は疑問符を浮かべまくっている。

「要は神に選ばれたからってだけで、お前さんらが戦わされているのが気に入らないと、そうこいつは言いたいのか」

「それは…」

光輝の説明に若葉が反論しようとして口ごもる。責任感の強い彼女は、それを当然のこととして当初から受け入れていた。しかし、友奈達は簡単には受け入れられず、初めての実戦では戦いに支障をきたすこともあったのだ。

「仕方のないことだっていうのは分かるよ。でも、それで納得しろと言われても、僕はそれでいいとは思わない。だから僕は戦う道を選んだんだ、若葉が戦わくてもいい世界にするために」

「それは、ただの自己満足じゃないか！私はそんなことお前に望んでなんかいない！」

「そうだよ、これは僕のただの我が儘だ。それでも君を守れるなら、それでいいんだ」

そういつて微笑む優を思わず睨みつけてしまう若葉。不穏な雰囲気になってきたことに、友奈達はどうすべきか困惑し、光輝や董は予

想通りといった様子で静観していた。

「…蒼希3尉」

すると、今まで沈黙を保っていたひなたが口を開いた。

「ひな、た？」

優への呼び方に違和感を覚えた若葉が呼びかけるも、ひなたは無視した。

「あなたが何も言わず東京エリアへ行つたと知つた日、どれだけ若葉ちゃんが悲しんだと思いますか？」

「覚悟はしていたよ」

責め立てるようなひなたの視線を、逸らすことなく受け止める優。その姿はまるで、裁きを待つ罪人のようであった。

「私は若葉ちゃんを悲しませたあなたを許せません。今までも、これからもずっと」

「許しを請うつもりはないさ上里さん」

幼馴染からの拒絶の言葉を、優は躊躇いなく受け入れるのであった。

「優、ひなた…」

そんな2人を、若葉はただ見ていることしかできなかつた。

優に会えれば、また昔のように戻れると信じていた彼女の希望は、無残にも崩れ去っていくのであった。

第八話

A I v i s からホテルに戻った若葉達。すぐに若葉とひなたはそれぞれ別の部屋に戻り、残った者達は友奈の部屋へと集まっていた。「にしても、なんかややこしいことになったな」

「うん。あんなに落ち込んだ若葉ちゃんと怒ってるヒナちゃん始めて見たよ…」

ベットにうつ伏せに寝転がった球子の言葉に、ベットに腰かけている友奈が同意する。

余りにも予想外過ぎた展開に誰もが困惑の色を浮かべていた。

「正直、あの蒼希って奴の言ってることがよく分からん。あそこまで自分を嫌いにならないんでもいいだろうにさ」

「…私は分かるかな。私もそうだったし」

「杏が?」

球子の隣に座っていた杏の言葉に、球子のがキョトンとした顔で反応した。

「私勇者に選ばれる前は病弱で色んな人に迷惑かけて、『私ってなんで生まれてきたんだろう?』って思うことがあって…」

「杏…」

沈んだ趣きで語る杏の肩を、起き上がった球子が抱き寄せた。

「そんなこと言うな。タマは杏に会えて良かったって思ってるぞ」

不安そうな表情の球子を安心させるように微笑む杏。

「うん、大変なこともあったけど。今は勇者になれて、皆に会えて良かったって思ってるよ。だから、あの人もそう思えるようになってほしいかなって」

「…でも、私達にできることってあるのかな?」

杏の意見に友奈が疑問を呈する。彼女としても杏の意見に同意できるが、そのためにどうすべきかが見えてこないのだ。

「…軽々しく、他人が踏み込んでいいことでもないんじゃないかしら?」

そんな彼女らに、友奈と背中合わせをするように座っていた千景が

苦言を呈する。

「まあ、それもそうだけどさ……。でも、ほつとけないじゃんか」
「だからって、彼のことを知らない人がどうにかできる問題ではないわ」

千景の言い分にむう、と押し黙る球子。

「じゃあ、彼のことを知ることから始めようよ！」

両掌をポンと合わせながら提案された友奈の意見に、球子と杏からおお、と感嘆の声が漏れた。

「確かにあの若葉がゾツコンになるくらいだし、興味はあるな」

「わ、私も……」

何やらおかしな方向に盛り上がり始める3人。

「大丈夫かしら……」

そんな彼女らを見て、一抹の不安を覚える千景なのであった。

時同じくして、若葉はひなたの部屋を訪れていた。

「なあ、ひなた。私達はもうあの頃には戻れないのだろうか？」

互いに並ぶようにしてベットに腰かけた状態で、若葉はひなたに問いかける。

「……もう、無理でしょうね。何も知らなかったあの頃とは違うのですから」

「そう、だな……」

幼馴染の言葉に、若葉は沈痛な面持ちになる。よくよく考えれば、勇者となったことで生まれた優との壁を認めたくなくて、過去の記憶に縋りついていただけなのかもしれない。

「お前は知っていたのか？ 優が東京エリアここで何をしていたのかを」

優と再会した時、ひなたは妙に落ち着いていたことへの疑問を問いかけてみる若葉。

「はい。とは言っても、大亀城での戦いの前に訪問が決まったので、勇者付きの巫女だからと大葉さんに教えてもらったからですけどね」

黙っていてごめんなさい、と頭を下げてくる彼女に。若葉はいや、

と頭を軽く左右に振る。

「戦いの前だったからな、私を氣遣ってくれたのだろうか？」

「はい。本当なら戦いの後に伝えるべきでした。けど…」

そこで言い淀むひなた。今の優の状態を伝えるべきか、彼女中で多くの葛藤があったのだろうか。故に若葉は彼女を責める気など起きなかった。

「いや、いいんだ。私もひなたが思い悩んでいることに気づかず、無責任なことを言ってしまったからな。許してくれ」

「若葉ちゃん…」

謝罪の意味も込めてひなたの頭を撫でる若葉。

「それで、ひなた。お前はいいのか、優とこのまままで？」

「…はい。私は彼の選択を、若葉ちゃんを悲しませることを選んだことを許しません」

若葉からの問いに、首を横に振りながら答えるひなた。その目には確かな決意が宿っていた。

優が何も言わずに、東京エリアに移ったことを伝えられた若葉は。リーダーだからと友奈達の前では気丈に振舞っていたが、その陰で涙を流していたことをひなたは知っていたからだ。

「…そうか」

彼女の意思を尊重するために、これ以上は何も言うまいと決める若葉。すると、ひなたがでも、と言葉を紡ぐ。

「私は目を背けてしまいましたけど。若葉ちゃんは彼から目を背けないであげて下さい」

「ひなた…」

両手を組んでまるで懇願するように告げるひなた。

彼女が優を拒絶したのは、変わってしまった彼と向き合うことが、怖かったからなのかかもしれない。

「ああ。もう、昔のようには戻れなくても、私は優と向き合い続ける。それが私にできる、あいつへの報いだ」

『何事にも報いを』それが乃木家に代々続く戒めの1つであった。

あの日自分の過ちを正してくれた優と共に生きること。それが若葉

が課した誓いなのである。

だから、彼が自分のために消えたいと思っているのなら、手を差し伸べ続けよう。いつかその手を掴んでくれると信じて。

翌日の朝食後。若葉達は外周区にある長野臨時エリアを訪問することとなっているのだ。

ホテルの前に集まった彼女らを、A l v i sを訪れた時のようにリムジンと共に光輝が迎えた。今回は隣に優もいる。

「よう、おはようさん」

始めて会った時とは違い、何かふつきれたように若葉らに挨拶する光輝。

「おはよ〜」

対して優はどこか眠たそうにしていた。そんな彼らにに対して、若葉達もそれぞれ挨拶していく。

「優」

「何、若葉？」

決意を込めた目をした若葉の呼びかけに、真剣に向き合う優。

「私はもう過去を振り返らない。これからは未来を見ていくぞ」

「…やっぱり、君は強いよ」

力強く宣言する若葉。そんな彼女を優は眩しそうに見るのだった。

長野臨時エリアに到着した一行が目にしたのは、『ようこそ長野エリアへ！四国エリア勇者、巫女様！』といった歓迎の言葉が書かれた横断幕を掲げたり、歓声を上げる人々の歓迎であった。

紙吹雪が舞い、盛大な音楽が奏でられ、空港を埋め尽くさんばかりの人々の歓声があった東京エリアと比べると、質素と言わざるを得ないが。それでも、彼らが若葉達を心から歓迎していることが伝わってきた。

そんな彼らの中から、ジャージ姿の2人の少女が歩み寄ってくる。

「ウエルカム長野エリアへ。私が代表兼勇者の白鳥歌野です」

「四国勇者代表を務めている乃木若葉だ」

その中の、ジャージ姿で前開きされた上着から『農業王』とデカデカとプリントされたTシャツがやたら目立つ少女が差し出した手を。リーダーである若葉が握ると、周囲の歓声がより強くなる。

「こうして会える日を楽しみにしていたよ白鳥さん」

「私もです乃木さん」

感極まったように話す両者。実は四国と長野が同盟を結んでいたこともあり、両エリアの勇者同士による通信での交流が行われているのだ。そして、四国側代表として若葉が歌野と親睦を深めていたのである。

故に、こうして互いに顔を合わせて言葉を交えることは、彼女らの悲願とも言えたのである。

「それと、こちらは代表補佐と巫女を努めています藤森水都です」

「よ、よろしくお願いします」

歌野が隣に立っている少女を紹介すると、呼ばれた少女はかなり緊張した様子で頭を下げてくる。

「四国巫女の上里ひなたです。同じ巫女同士仲良くしましょう」

「は、はい！」

そんな彼女にひなたが話しかけるのを皮切りに、他の勇者達も自己紹介をしていく。

「……」

楽しそうに話す若葉達を見て、優は心から嬉しそうに微笑みを浮かべる。

「よかったな。あの2人が会えて」

「うん」

そんな彼の方に手を置きながら話かける光輝に、優は頷く。

「こうして実際に見てみると、お前につられて俺も命令違反した甲斐があったな」

「ウツ、あの時はごめん」

満足そうな様子 of 光輝の言葉に、何かを思い出したのか申し訳なさ

そうに謝る優。

「別に責める気で言つたらんよ。ただ、お前が命を張ったからあの2人が生きてるって話さ」

「そんなことないよ。2人が諦めなかったから、生きたいって頑張ったからだよ」

首を振って光輝の言葉を否定する優。そんな彼の頭を少し乱暴に撫でる光輝。

「わわ、ちよ止めてよお！」

「そんなあいつらの手を掴んだのはお前なんだよ。だから、それくらい誇れや」

そういうと、光輝は優の抗議を無視して撫で続けるのであった。

第九話

挨拶を終えた一行は、歌野を先頭に最低限の舗装がなされた道を歩いていた。

「にしても瓦礫ばかりだなあ」

辺りを見回していた球子が思ったことを漏らす。エリアとはいうものの、周囲の建物は殆どがかつての大戦で崩壊したままであり。人が住んでいると見られる建物も、木材で組まれた質素なものばかりであった。

そんな彼女に、前を歩く光輝が歩みを止めることなく口を開いた。

「外周区で作業をしたがる人間はいないのさ。モノリスとて、100%ガストレアの侵入を防げる訳ではないからな」

ガストレアを衰弱させる磁場を発するモノリスだが、何らかの理由でその磁場の影響を受けなかったガストレアが、エリア内に侵入してくることがあるのだ。その場合被害を一番に受けるのは外周区にいる者になる。

「だから、セカンド・アタック後も、モノリス付近の土地は最低限の整備で済ませていたのさ。そこに長野から逃れてきた人々が碌な物資もない中、自分達の力でどうにか人が住めるまでに復興させたのさ」

「東京エリアからの支援はなかったんですか？」

杏が最もな質問をした。難民となった彼らを受け入れたのだから、もつとまともな環境で過ごせるよう手を貸すべきであろう。

「長野エリアの人達が住み始めた当初は、聖天子様はそうしようとしたけど。反対の声が多くて諦めざるを得なかったのさ」

「反対？どうしてだよ？」

その問いに答えたのは優であった。それに対して球子が疑問を挟んだ。

「長野の人達が『子供達』との共存に積極的だからさ」

優の返答に、何かを察した千景とひなたを除いた四国組は疑問符を浮かべる。

『子供達』との融和を唱える四国エリア育ちのお前達には不思議だろうが。10年前の大戦を経験した者の大半がバアル——特にガストレアに大切なものを多く奪われた。だから、ガストレアと同じウィルスをその身に宿す『子供達』をも増悪する者が多い、この東京エリアでもな。だから、彼女らとの共存を望む長野の人々に手を貸すことに強い反発が起きたのさ」

「だが、東京エリアの人々は長野エリアの人々を受け入れたのだろうか？それなのに…」

「同盟相手だから仕方なくつてのが大半の市民の本音さ。元々四国、長野との同盟には反対の声が大きかった。それを結界を守るためやらなんやら理由をつけて、聖天子様が必死に説いたことでどうにか納得させたのさ」

若葉の問いに。その当時を思い出しているのか、光輝はどこか遠くを見ているようであった。

「だから、長野の人とは関わりたくないって人が多くてね。隣接してはいるけど、関わってるのは政治レベルだけで、市民同士の交流は殆どないのさ」

そう語る優の目はどこか寂しそうであった。

「あれ？でも、東京エリアの人達は、私達のこと歓迎してくれたよね？」

昨日の空港のできごとを思い出し、不思議そうに首を傾げる友奈。

「四国エリアは最大の貿易相手であり、何かと支援してくれるからな。なんだかんだで同盟してからいいことづくしなのさ」

「…つまり、自分達とって益となるかどうかの違いということですか」

光輝の言葉に複雑な表情をするひなた。

「人間の思想信条なんてそんなものさ。人間にとって一番大切なのは腹を満たせるかどうかさ」

そんな彼女の心情を察するように肩を竦める光輝。

「それでも、こうして土地を貸してもらえただけ感謝しています。今の時勢、東京エリアだって難民を受け入れる余裕がある訳ではないで

すから。だから、自分達でできることは、自分達でやることにしたんです」

モノリスの中でしか生きることのできなくなった人類は、その限られた土地を活用するしかなく、外部の人間を受け入れるのは様々な面でリスクを伴うのだ。

そのため少数とはいえ、長野から逃げ延びてきた自分達を不本意とはいえ受け入れてくれた東京エリアの人々に、歌野は感謝していた。「着きました。ここが『青空学校』です」

歩みを止めた歌野が手で示した先には、芝生の上に子供達が整列して体育座りしており。その前にあるキャスター付きの黒板に、大人が何かを書き込んでいた。

そんな光景があちこちで見られ、子供達はノートと鉛筆に消しゴムが乗った木のボードを手に、熱心に話を聞いたり黒板の内容をノートに書き写していた。

「ここが、学校？」

「はい、本当はちゃんとした校舎を用意してあげたいんですけどね…。今の私達にはこれが精一杯なんです」

誰にもなく漏らした若葉の呟きに、歌野がどこか申し訳なさそうに答える。

野ざらしであり、机も椅子もなく使われている文具も古びた物であり、若葉達を知る学校とはかけ離れたものであった。

「東京エリアで親に捨てられた『子供達』を、長野エリアここに集めてな。ああして勉強を教えたりと面倒を見ているのさ。文具は聖天子様の好意で融通できてるが、他の設備はどうしてもな…」

光輝が彼女らの疑問に答えるように語る。そう言われて改めて子供らを見ると、10歳かそれ以下の年齢の少女が割合の多くを占めていることに若葉らは気がつく。

「捨てられるって…」

「これもお前さんらには馴染みないだろうが。さつきも言ったが、ガストレアを増悪する人間は多い。そんな奴の元に生まれた『子供達』は虐待されて殺されるか、生まれて早々に捨てられるのさ。そうでな

くても『子供達』が生まれた家庭は周囲から攻撃されることが当たり前でな、それに耐えられなくて…てのが現状だ。そんな『子供達』が生きていくには、外周区で暮らすしかないのさ」

「そんなのって…！」

「おかしいと言いたいのには理解できるがね高嶋よ。言っておくが、東京エリアなんてまだマシンな方だぞ？大阪辺りだと政府主導で『子供達』を殺すか、兵器として扱うか、あるいは『売る』なんてのをしているからな」

「……」

『子供達』との共存が、当然のように行われていた四国で暮らしていた若葉らにとって。光輝の語る内容は信じがたいものであった。

「光輝」

優が光輝を止めるように呼ぶ。その目には抗議の色がありありと浮かんでいた。

「ん、これ以上はこの場で話すことでもないか。不快な思いをさせて悪かったな」

「いや、見識を広められた。感謝する」

自省した様子の光輝に。悪気がないのは見て取れるし、四国の外について無知であったのは事実なので、若葉としては気にしておらず。他の者達も同様なようであった。

「ちなみに、出撃や機体のテストがない時に、子供達の面倒を見るのも A l i v i s の任務の1つだ」

「東京と長野の友好の証と、その様子をネットに通して『子供達』との共存への理解を深めてもらおうっていう聖天子様のお考えでね」

光輝の説明を優が捕捉する。

「それなら私もよく見ていた。とても丁寧で『子供達』への思いやりも感じられる素晴らしいものだった」

若葉は、優の足取りを探す中で見つけたサイトのことを思い出す。最初こそ優の様子を知ること目当てだったが、見ていく内に『子供達』を含む幼子へ向けられる情熱に触れ、サイトそのものを楽しむようになっていったのだ。

「そのサイトを作ってるの実はこのみーちゃん…あ、水戸さんなんですよ！ネットのこととかすつごく詳しいんですよ」

まるで自分のことのように水都を褒める歌野。

「そ、そんなことないよ！ただ、私にできることってないかなって考えただけで。光輝さんの教え方が上手だったからだし…」

「基礎を教えたら後は独学でやってたけどな。そっち方面ならもう俺より上だろ」

「そん、そんな…」

褒められることに慣れていないのか、顔を赤くして兩人差し指をつき合わせながら俯く水都。

「そうだよ！水都は頑張り屋さんなんだから、もっと自信持っていんだよ！」

「そ、そうかな。ありがとう優君」

優の言葉にはにかむ水都。

「藤森さんのことが本当に大切なんだな白鳥さん」

「ええ、一番の親友ですから！」

若葉の言葉に、胸を張って答える歌野。

「ところで白鳥さん。こうして話してみると、通信の時に抱いていたイメージと少し違う気がするのだが」

ふと、疑問に思ったことを口にする若葉。通信で話していた時は、真面目な委員長といった雰囲気だったが。会ってみると、どこか砕けた印象を受けたのだ。

「こいつキャラ作ってたからな。始めて通信しているのを見かけた時誰だこいつ？って正直引いた」

「ええ!?だ、だって勇者の公式な仕事だし、電話とか手紙だと何となくそうならない!?!」

光輝の告白に衝撃を受ける歌野、理由を述べながら、水都に助けを求めような視線を向ける。

「み、みーちゃん?」

「ごめん、うたのん」

「目を逸らされた!?!」

最後の希望にも裏切られ、追加でダメージを受けるのだった。そんな彼女の肩を軽く叩きながら、優が慰めるのだった。

一通り長野エリアの案内が終わると、歌野が若葉と2人だけで話したいと連れ出し。残った者達は交流の一環として子供達と触れ合うこととなった。

それから暫くして千景は、休憩のため学校区画の内にある瓦礫に腰かけていた。

「――ふう」

疲れを吐き出すように息をつく。友奈達はまだ子供達と遊んでいるが、元々人付き合いが得意な方ではなく、幼子とも接し慣れていないこともあり、思っている以上に体力を消耗していた。

「お疲れさん」

そんな彼女に、光輝が両手で持っていた飲料水の入ったペットボトルの1本を差し出す。彼も共に子供達を遊んでいたが、疲れたので先に休むと言い、それに便乗する形で千景も休むことにしたのだ。

「…ありがとう天童、さん」

受け取ったボトルを開け、中身を口に含む千景。

「呼びにくいならさん付けせんでもいいぞ」

残ったボトルを開けて飲みながらそう話す光輝。

「…そう、じゃなくて。同年代の男子と余り、話したことがないだけ」

勇者となつてからはクラスメートは若葉ら女子しかおらず、同年代の男子と接する機会がなく、その前の学校では――

——触んな、阿婆擦れが移んだろ！

「……」

過去を思い出し、押し黙ってしまおう千景。

「…お前、子供は好きか？」

「子供？」

いきなり振られた話題に、千景は思わず聞き返す。

「そうだ。子供はいい、可能性に溢れている。そこに、ウイルスを持って
いようがいまいが関係ない」

そういつて楽しそうに遊んでいる子供らを見つめながら、口元に僅
かに笑みを浮かべる光輝。

「……」

「見た目によらず以外、か？俺自身、数年前には考えもしなかった。特

に『子供達』にはな」

以外そんな目を向けてくる彼女に、光輝は自分のことを愉快そうに話す。

「つまらん話になるが。俺の実家——天童家はまあ、財閥みたいなもんでな、家同士の繋がりが無駄に強くてな。現当主のおじい様は妻——おばあ様をガストレアに殺されてからは、ガストレアに関する全てを憎むようになった——『子供達』を含めてな。そのせいで一族全体に『子供達』を嫌う流れができてな、俺もその影響を少なからず受けていた」

そこで一旦話を区切り水を飲む光輝。

「まあ、受けていたと言っても関わるのが怖い程度だったかな。ともかく『子供達』にいい感情は持っていなかった」

「……」

友奈達と遊んでいる子供達を見ながら、千景は何も言わず耳を傾ける。

「新型ファフナーの適性があることが分り、自衛隊に入りA l v i sへ配属となって『子供達』と実際に触れあって怖がっていた自分が馬鹿だっことを思い知らされたよ。あの子達もちゃんとした人間なのだということだな」

それでな、と空を仰ぎ見る光輝。

「夢ができた。『子供達』だからとあの子達が差別されることなく、人として生きていける世界を作ろうってな。その未来のために俺は戦っている」

「未来……」

千景は無意識にその単語を口にしていた。なぜだか分からないが、それが彼女の心に引かったのだ。

そんな彼らの元に数人の子供達が駆け寄ってきた。

「お兄ちゃんあーそーぼー!」

「分かったか、わかった。すぐ行くから服を引っ張らんでくれ」

袖をグイグイと引っ張る少女の頭を撫でる光輝。

そんな中、1人の少女が千景の側にやって来た。

「おねーちゃんの髪きれー!」

キラキラした目ではしゃぐ少女。そこ声を聞いた他の少女が集まって来る。

「本当だ綺麗〜!」

「いいなあ。私も大きくなったらそんな風になれるかな?」

尊敬の眼差しを向けてくる少女らから、千景と似た髪をした子が自分の髪に手を添えながら問いかけた。

そんな彼女に、千景はどうすべきか戸惑ってしまっていた。

「なれるさ。諦めなければな」

すると、光輝がその少女の頭を撫でながら会話に加わる。

「そうだろ、郡?」

後押しするような視線を向ける光輝に、千景は意を決したように少女の髪に触れる。

「…ええ、なれるわ」

「本当?」

「うん。あなたも髪も綺麗なもの」

微笑みながら言うと、少女はわーい!と喜びを表すように飛び跳ねる。

そんな彼女の成長した姿を、心から見たいと千景は思うのだった。

歌野が若葉を連れて訪れたのは、歌野の力の源である諏訪の神を祭るために建てられた社であった。

作りこそ簡素ではるが、手入れが隅々まで行き届いており。神樹を祭っている四国の大社本殿と似た神聖さを感じられた。

前を歩いていた歌野が足を止めたので若葉も立ち止まると、歌野が振り返る。

「ねえ、若葉」

「何だ歌野?」

真剣な——まるで、これから戦いに挑むかのような表情で呼びかけてくる歌野に。思わず身構えそうになる若葉。

暫くして、社の敷地内にある階段に腰かけている若葉と歌野。

「落ち着いた若葉？」

「あ、ああ。すまない取り乱した」

親友が幼馴染に思いを寄せていたことへの衝撃は大きかったが、それ以上に問わねばならないことがあった。

「通信で言っていた大切な人とは、優のことだったのだな」

通信でのやり取りの中で、気になる男子ができたという話題があったが。思い起こせば、話してくれた特徴が、まさに優に合致するではないか。

「(とうか。なぜ気づかなかつたのだろうか…)」

優は任務で度々長野エリアを訪れているのだ。その可能性があつて然るべきであつたのに。

若葉は彼に好意を寄せる者は、他にはいないだろうと決めつけて、呑気に話を聞いていたあの頃の自分を全力で引っぱたきたくなつた。「うん。彼から自分の名前は出さないとと言われてたか黙ってたけど。騙すようなことをしてしまつてごめんなさい」

「いや、それは仕方のないことだ。お前は悪くない」

申し訳なさそうに頭を下げてくる歌野の肩に、手を置く若葉。

「それで、その…いつ頃から優を好きになつたんだ…？」

こういつた話題の経験が少ないため、尻込みするように問いかける若葉。

「出会ったのは1年前。長野エリアがステージⅠVガストレア『アルデバラン』に侵攻された際に、東京エリアは増援を送ってくれたわ。そして、その中に優君もいてそこで知り合ったの」

アルデバラン——口からバラニウム侵食液を吐き出し。バラニウムによる再生阻害が効かず、脳などの急所の損傷すら修復可能で。フェロモンを利用して他のガストレアをコントロールして戦闘指揮できるという、かつてない特性を持ち。ステージVガストレア『タウルス』の右腕でもあった。タウルスが討伐された後も、その特性を駆使し数多くのエリアを壊滅させている。

「最初は気の合う友達だったわ。好きになったきっかけは私を『見て』くれたことかな」

「見て、か」

「うん。長野エリアの皆は昔は私のことを勇者・歌野として見ていたわ。それで皆が安心できるならそれでよかったし、私もそうあろうとしたわ。でもね、本当は怖かったの戦うことも、傷つくことも」

「それは人として当然の感情だ。私だつてそうだ」

歌野の見せた弱さを肯定する若葉。

一見すると怖いもの知らずに見える彼女だが、死がつきまとう戦場で恐怖を感じたことは幾度もあった。

「そうね。だから、皆の前ではなんてことないように振舞ってたわ。でも、自分でも気づかない内のため込んだのが、アルデバランによって長野が壊滅に向かう中で張り裂けそうになったの。そしたらね、優君が『君は勇者だけど、どこにでもいる女の子と何も変わらないよ。だから、怖いって、痛いって言っただけいいんだ。我慢しなくてもいいんだよ』って言ってくれたの。それを聞いたらいつの間にか泣いていたわ、あんなに泣いたのは初めてだったなあ」

その当時は懐かしんでいる様子の歌野。その顔は本当に嬉しそうであった。

「それで私が泣き止むまで、優君は黙って側にいてくれたの」

「そうか…。あいつらしいな」

そういうところは変わらない幼馴染に、自然と笑みを浮かべる若

葉。

「おかげで立ち直れたけど。それでも、アルデバランには勝てなかった。驚異的な再生能力を持ち、巧みな『戦略』を駆使するつアルデバランを倒すことができず。徐々に追い詰められたわ。そして、勝機がないと判断した東京エリアは部隊を撤退させることを決めたの」

「そんな、なぜ!？」

告げられた内容が信じられず思わず立ち上がる若葉。それはつまり、東京エリアは長野エリアを見捨てたということだからだ。

「光輝君も言っていたでしょう？東京エリアの人々の多くは、長野エリアとの同盟に否定的だったって。増援自体、聖天子様が無理して送ってくれたものなの。だから、勝ち目のない戦いにこれ以上犠牲を出すことに国民が納得しなかった」

「……」

気づけば若葉は拳を握り締めていた。人間はどんな苦境にも団結して立ち向かえると信じていた彼女にとって、受け入れがたいことだったのだ。

「それでも派遣された部隊からは反対の声が多くてね。だから妥協案として、長野エリアの人々を東京エリアで受け入れてもらえることになったの。だから私は、長野エリアを放棄することを決めた」

途中から膝を抱えて話していた歌野は、その当時を思い出しか腕に力が籠り震えていた。

力及ばず、故郷を捨てる決意をする。それがどれほど過酷だったか若葉には計り知れなかった。

「長野の人々が安全な場所まで避難するための時間を稼ぐために、私が殿を務めたわ。それと、みーちゃんも巫女として、私の戦いを最後まで見届けると言って残ってくれたの」

「それは……」

「ええ、生きて帰れる保証なんてなかった。でも、例え死んでも長野の人達が『希望』が残るなら本望だって考えてた」

「……」

そういつて笑う歌野。かける言葉が見つからない若葉は、せめて彼

女の言葉を聞き逃すまいと耳を傾ける。

「でも、そんな私達を優君は命令違反を犯してまで助けに来てくれてね。おかげで私とみーちゃんも、東京エリアに辿り着くことができたの。彼は私達に明日未来をくれた。だから私は彼に恩返しをしたい、力になりたいの」

「歌野……」

誇らしげに語る歌野に、若葉に笑みを浮かべた。自分以外にも彼を思いやつてくれる人がいることが嬉しかったのだ。

「ねえ、もう一度聞けど。若葉は優君のことが好き？」

真剣な眼差しで再度問いかけてくる歌野。彼女の心の内を聞いた以上、目を背けてはいけないと真つすぐに見返す若葉。

「ああ、私も優のことが好きだ」

決意を込めて言う。歌野はその言葉を待っていたかのように微笑み、右手を差し出してくる。

「じゃあ、これからは親友兼ライバルね。どっちが勝っても恨みっこなしってことで若葉！」

「ああ、負けないからな歌野！」

若葉はその手を握りながら微笑み返すのだった。

第十話

東京エリア勾田区にあるとある住宅街——その一画の道路が封鎖され、多数の警察関係者が慌ただしく動いていた。

そんな彼らの中心にあるのは、クモ型のステージIガストレア——だったものである。その肉体は、まるで強烈な衝撃を受けたように砕け散り、辺り一面に肉や血が飛散していた。

「……」

鑑識や処理班が対応しているのを警視庁捜査一課所属の刑事、ただしましげとく多田島 茂徳は火のついたタバコをくわえながら見守っていた。

この発端は、この地区のとあるマンションにて、ガストレアによると見られる事件が発生したとの通報を受け。多田島は派遣された民警と共に事件を解決し、その事後処理を指揮していた。

「にしても凄いつすね。『呪われた子供達』って素手でこんなことまでできるなんて」

側にいた部下の1人の若者がガストレアの死体を見ながら、感心しつつもどこか畏怖の混ざった声で呟く。

「なんだ、お前は彼女達のこと嫌ってんのか？」

多田島に向けての言葉ではないも、その発言が気になり、彼はくわえていたタバコを右手に持ちながら問いかけた。

『呪われた子供達』とは、基本的にウイルス保持者に対する蔑称とし生まれ言葉なのである。

「え？いや、そういう訳じゃないですけど。皆そう呼んでいるので：不味かったですか？」

キョトンとした顔で答える部下。セカンド・アタック時に被害を受けたことで『子供達』も険悪する者達の比率が圧倒的に多く。公共のメディアでも、平然とその蔑称が用いられることがそのことを証明していた。

そのため。被害を受けなかったり、まだ生まれていなかったのでもういった感情を持たない者でも、それが当たり前と思ってしまう、意味を知らずに使ってしまったことは珍しくなかった。

「いや、そういう訳じゃねえが。俺には、彼女達をそうまでして嫌う必要があるのかつてな…」

多田島は幸い、バアルによって受けた被害は殆どなかったこともあり、『子供達』への悪感情をもっていなかった。そのため、社会の『子供達』を排斥しようとする流れに疑問を感じる事があった。

「でも、バアルを簡単に退治できるだけの力を持った子供って、なんか怖くないですか？」

「それは…」

怯えを滲ませた部下の発言に、言葉を詰まらせる多田島。彼は部下の言っていることは間違いとも言えなかったからだ。子供と同じ体格でありながら、自身の数倍にも匹敵する巨体の怪物と同等の力を持っている。それは言い換えれば、人間を簡単に殺せるだけの力があるとと言えるのだ。事実『子供達』による殺人も少なくない件数が起きてしまっている。

『子供達』を排斥しようとする社会の流れには、もしかすれば彼女達によって自分達が駆逐されるのではないかという、恐怖の裏返しなのかもしれないというのが多田島の考えでもあった。

「だが、彼女達のおかげで人類が生き残っていられるのも事実だろう？」

「それも、そうなんです…」

多田島の言葉に、今度は部下が言葉を詰まらせる。

『子供達』は人類にとって、バアルへと対抗できる数少ない存在であり。その力を活用すべく生まれたのが、民警という制度であった。導入後はバアル、特にガストレアに関する被害は目に見えて減少しているのだ。

「世間では化け物だなんだと悪く言ってるが。俺としてはあの子達は『希望』だと思いがね」

「それには同意します」

「ん？」

突然背後から聞こえてきた声に振り向くと、見知らぬ10代の男子が立っていた。

「子供？なんでここに？」

「失礼。陸上自衛隊所属、聖天子直轄遊撃小隊A l v i s 隊長天童光輝2尉です」

部下の漏らした疑問に答えるように、少年——私服姿の光輝は身分証明書を表示させたP D Aを見せた。

「自衛隊だあ？」

いたずらかと、訝しみながらP D Aを覗き込む多田島。だが、何度見返しても正規の証明書のようにであった。

「問い合わせてもらっても構いませんが」

「…いや、お前さんと同じくらいの年の奴が民警やってんだ。そういう時代なんだろうよ。疑って悪かったな」

多田島と共に、現在処理中のガストレアを駆除したのは、光輝と同年代の少年であったのだ。

10年前の大戦によって急激に人口が減少したため、あらゆる分野で人材が不足しているのだ。特に国防に直結する自衛隊では、入隊可能年齢の引き下げが行われており、光輝の年代でも自衛隊へ入ることは可能となっている。

とはいえ、実際に入隊しようという者は多くはなく。彼の年代の自衛隊員を見るのは初めてのことであった。

「いえ、よくあることなのでお気になさらず。それで、今回の件の詳細をお聞かせ願いたいのですが」

「聞かせろって、こんなもんわざわざ自衛隊が出張って来るこたあないだろ？」

光輝の発言に、眉をひそめる多田島。エリア内に侵入したガストレアの対応は民警と警察の管轄であり、自衛隊が介入してことはまずない筈なのだ。

「け、警部。警部、ちよつと！」

「あ？なんだよ、おい！」

なぜか青ざめた顔をした部下に引つ張られ、多田島は光輝から離される。

「彼が誰だか知らないんですかあなたは!？」

「いや、自衛隊員だろ。証明書は正規のものだから、いたずらとかじゃねえだろ」

必死な形相で詰め寄って来る部下に、訝しみながら多田島は答える。すると、部下は仰天したような顔を向けてきた。

「彼は天童家の人間ですよ！『天童でなければ人に非ず』って言われているあの！」

そこまで聞いて多田島は部下が慌てている理由にああ、と思い当たった。

天童家といえは東京エリアの政財界を牛耳取っていて、その当主が代表補佐官でもあり、東京エリアの影の支配者とさえ言われている一族である。

「しかも、天童光輝っていえば、その天童家の次期当主って噂されている人ですよ！テレビにも出てるじゃないですか！

「そういうや、どこかで見たことあるなと思ったんだ」

「思ったんだ、じゃないですよ！下手に彼の機嫌を損ねたら、クビどころの話じゃなくなるかもしれないですよ!?!」

まるでこの世の終わりであるかのように語る部下に、おいおい、と肩を竦める。

確かに天童家には黒い噂が絶えないが、少なくとも光輝からはそういった傲慢さは感じられなかった。

ちらりと彼の方へ視線を向けると、こちらを静かに待っているが。まるで、見慣れたような目をして、どこか違った意味合いで不機嫌さを滲ませていた。

「ん？」

そんな中、不意に猛烈なエンジン音と共に、一台のパトカーがやって来るのが見えた。

「ありや、署長じゃねーか。なんだってこんな所に…」

パトカーが急停車すると、飛び出すように出てきた人物に意外そうな目を向ける多田島。

出てきたのは彼の所属する署のトップであり、肥満気味の腹を揺すりながら、額に脂汗を浮かべながらこちらに駆け寄ってきていた。

「これはこれは天童光輝様。このような場所にお越しいただくとは。我が署の者が何か不手際を致しましたでしょうか？」

まるで胡麻をするように両手を揉み合わせながら、いかにも媚びを売りますと言っているとしたか見えない笑みを浮かべ光輝に語り掛けている。その姿に多田島はギョツと目を見開く。普段は、威張り散らすのが仕事と言わんばかりにふんぞり返っているのとは、まるで別人のようであったからだ。

50代の大人が10代の少年に媚びへつらう姿は、異様としかいようがなかった。その光景を目の当たりにした者達は、皆手を止めて様子を眺めている。

「いえ、彼らの対応になんら問題はありません。私がここに来たのは事件の詳細を把握したいがためです。それで、あなたはなぜここへ？」

鋭く見据えてくる目に、署長は気圧されたようにたじろぐ。

「い、いえ。部下共があなた様に粗相を働いていないか、その確認に…」

「私は一介の自衛官ですので、そのような配慮は一切不要です」

胸に手を当てながら軽く頭を下げる光輝。それは、まるで署長だけでなく周囲の者にも宣言しているかのようであった。

「あなたの部下は皆さん優秀なようですので、どうか安心して職務にお戻り下さい」

礼儀正しい態度こそ取っているも、邪魔者を排除しようとしているようにしか多田島には見えなかった。

「いえ、しかし…」

「どうぞ」

署長がなおも食い下がろうとするも、有無を言わせぬ光輝の眼光に、逃げるようにして乗ってきたパトカーへ戻って去っていった。
「……」

現実離れた光景を見せられた周囲の者達は、奇異な目を光輝に向けている。

「大変お騒がせしました。さあ、我々も職務に戻りましょう」

そんな彼らに、申し訳なきように謝罪するところらへ歩み寄ってくる光輝。

「さて、事件の概要からお聞かせ願いたいのですが…」

「は、はあ…」

先程の光景を見た後となると、どう接するべきか図りかねてしまう多田島。

「私はただの2尉です。それ以上でも以下でもありませんよ」

そんな多田島に配慮するように告げる光輝。

「そうか、なら…」

その目からは、それが彼の偽りなき本心だと感じた多田島は、気負うことなく言葉を交わすのだった。

多田島から情報を得た光輝は、私物のバイクを走らせていた。

向かうは事件現場と同じ勾田区にある、今回の事件を解決した民警の事務所である。

古びた雑居ビルの前にバイクを止め入り口を潜り、1階にあるゲイバーの前を通り階段を上がると、キャバクラのある2階を過ぎて3階に上がる。

そして、3階フロアにある『天童民間警備会社』と表記された、古びたプレートが張りつけられたドアの前に立ち、ノックしようとする
と――

――里見君が『天童民間警備会社ここにあり！』って叫びながら衆人環視の中いきなり燃えるか爆発しなさい！

っとドアの向こう側から、少女の声で物騒極まりないことは聞こえてきた。さらに、少年声で、それではテロだろやら抗議の声も聞こえてくる。

それを聞いた光輝は、驚くでもなく呆れた様に息を吐きドアをノックする。

すると、え、嘘お客さん!? さ、里見君お茶の用意して！絶対に逃がしちや駄目よ！やら、おう、金づるだ！とか叫びながら慌ただしく人

が動く音が響く。

少しすると、ドアが勢いよく開かれ。セーラー服を身に纏った少女がとびつきりの営業スマイルで姿を現した。同姓ですら見とれてしまう程の美女だ。

「ようこそ、天童民間警備会社へ！雑草掃除から猫の搜索までなんなりとご用命を——ってなんだ光輝じゃない…」

光輝の顔を見た瞬間、営業スマイルが吹き飛び、落胆に染まった不機嫌な表情に一変した。

「お久しぶりです、姉さん」

光輝は、その少女——数いる兄弟の中で唯一の血のつながった姉であり、この天童民間警備会社の社長である天童木更てんどう ききよりに優しく語り掛ける。

対して木更は、ガツカリしたと言わんばかりの顔で弟を見ている。

「何か用？今、忙しいんだけど」

「何、久々に姉さんの顔が見たくなりましたね。それより、先程なにやら爆発しろやら聞こえました気がしましたが。まさか、テロでも計画なさっている訳ではありませんよね？もしそうなら——俺は自衛官として、相応の対応をしなければならいのですが？」

爽やかな口調の光輝の言葉に、木更はギクリツと体を震わせると冷や汗を多量に流し始める。

「さ、さあ…。なんのことやら…」

「そうですよね。心優しい姉さんが、そんなことを考える訳ないですもんね」

「そうよ。もう、光輝ったら」

ハハハハと笑い合おう両者。

「さて、冗談はここまでにして。できれば中に入れてもらえると嬉しいのですが」

「いいわよ入りなさい」

木更に続いてドアを潜る光輝。内部は清掃こそ行き届いているが、最低限の家具しか置かれておらず、ビルの外見同様至る所に劣化が見られた。

「って客ってお前かよ…」

キツチンに通じる敷居にかけられた暖簾を潜ってきたのは、不幸と共生でもしているのではないかという印象を与える表情をした、覇気のない瞳の少年であった。里見さとみ 蓮太郎れんたろう——天童民間警備会社所属のプロモーターである。IP序列12万3452位の言ってしまうとどこにでもいる民警である。

——IP序列

イニシエーター・プロモーター序列の略。全世界のイニシエーターとプロモーターのペアを、戦力と戦果で序列付けしたもの。

「お久しぶりです蓮太郎さん。お元気そうで何よりです」

「そっちもな。最近は何国から来た勇者やらの面倒見てるそうだな。ご苦労なこった」

「いえ、任務ですから」

気軽に挨拶を交わす光輝と蓮太郎。10年前のセカンド・アタックで身内を亡くした蓮太郎が天童家に引き取られたのを縁に知り合い、木更と共に幼少期は家族同然に暮らしていた仲なのである。

「よければ、こちらをどうぞ」

光輝は土産として持参した紙袋から取り出した菓子折りを2人に手渡し、来客用のソファアに腰かける。すると蓮太郎がお茶の入った湯飲みを、光輝の目の前にあるテーブルに置く。

社長席である革製の椅子に腰かけた木更は、渡された菓子折りの箱を見ると不満そうな顔をする。

「何よ安物じゃない、ケチケチせずもつと値の張るのにしなさいよね。聖天子様直轄の部隊の隊長として、いい給料もらってるんだから」

これでもかといわんばかりに皮肉を込める木更。姉である自分はその日の食うものですら困っているのに、弟の光輝は公務員——それも自衛隊の特殊部隊の長として、何不自由ない生活を送っているのだからそうもいいたくもなるのだろう。

「弟にたからなくて頂きたい。大体姉さんが貧しいのは、こんな物件に事務所を構えるからですよ」

文句を言いながらも、さつそく開封して食べている姉に呆れ果てた

目を向ける光輝。ちなみにこの事務所の上のフロアには、厳つい顔をした親切なお兄さん方がお金を貸してくれる事務所がある。

当然そんな立地にあるこの会社を訪ねてくる依頼者は極僅かであり、天童民間警備会社の経済状況は常に火の車なのだ。

「里見君といい分かってないわね。本当に良い会社なら立地なんて関係ないのよ」

腕を組んで堂々と言い放つ姉を、呆れ果てた目で見る光輝。

「単に安く売っていたから飛びついただけでしょうに…」

「そ、そんなことないわよ。ウチが儲からないのは里見君が甲斐性なしだからよ!」

「まあ、それもありますね」

「オイ」

思わぬ飛び火に蓮太郎がジト目でツツコンでくるも、光輝は涼しい顔で湯飲みを持つとお茶を飲む。

「まあ、いいわ。どうせただ顔を見せに来た訳じゃないでしょう? ちようど聞きたいこともあったし」

そういうと、木更は机の上にあるノートパソコンの画面を光輝に向ける。表示されているのはこの地区の地図であり、ガストレアとの交戦があつた場所、目撃情報が出た場所を記録している民間機関のサイトだ。

「今日、里見君がガストレアを駆除したけど、それは感染者だった。でも、その感染源が駆除されたという情報がないの」

「なんだって?」

その言葉を聞いた蓮太郎が眉をしかめて画面を覗き込む。サイトには、蓮太郎が感染者を駆除後からのガストレアに関する情報がそれ以降記載されていなかった。

「ええ、仰る通り感染源の駆除は確認されていません。我々の方でも目下捜索中です」

「どういうことだ光輝。どうして政府は周囲一帯に警告を出さない? これは一大事だぞッ」

平然とした態度で答える光輝を蓮太郎は睨みつける。

彼がガストレアを駆除してから既に大分時間が経っており、それだけの時間が経つてもエリア内部に侵入したガストレアが駆除されていない場合。被害の拡大を抑えるためにバイオハザード警報が発令されるのだが、一向にその気配がないのは異常事態だった。

「まあ、政府は避難警報といった強硬手段を取りたがらないから、こういったことは別段珍しくもないけど。光輝、今あなたの部隊も動いていると言ったわね?」

「はい、姉さん」

「…言い方はあれだけど、この程度のこと民警で事足りる筈よ。自衛隊、まして聖天子様直轄であるあなたが動く必要があるのかしら?」

木更だけでなく、蓮太郎にも懐疑的な視線を向けられるも、光輝の態度に変化はなかった。

「機密に関わることなので」

「つまり、これはただのガストレア事件じゃないのね?」
「ええ」

機密に関わる——すなわち政府が重大な隠し事をしていることを、あつさりと漏らす光輝に蓮太郎は意外そうな顔をする。

「随分素直に認めたな」

「この程度、あなた達に隠しても無駄ですから——む、失礼、電話だ」
不意に光輝がズボンのポケットからPDAを取り出すと、断りを入れて通話に出る。

「ん、そうか、もう十分だお前は先に戻れ。まだ捜せる?これ以上は無駄だ。体力は温存しておけ、何かあった時対処できなくなるぞ。ああ、ご苦労」

通話を切ると、PDAをしまう光輝。

「あなたの部下から?」

「はい。感染源を捜させていたのですが、残念ながら見つけれませんでした」

木更の問いに無念そうに答える光輝。

「部下ってあの蒼希って奴か」

優の顔を思い浮かべると、顔を不快そうにしかめる蓮太郎。

「あいつ、なんでだが俺のことを気に入らないって目で見てくんだよな」

「仕方ないでしょうな。力に選ばれなかったあいつにとって、力があるのに使われないあなたは好きになれないんですよ」

蓮太郎の右腕を見ながら話す光輝に、苦虫を噛み潰したような顔をする蓮太郎。

「別にどうしようが俺の勝手だろうが」

「ええ、あいつの我儘ですよ。だから、あなたに何か言う訳ではないでしょう?」

「……」

確かに優と顔を合わせることがあっても、何かを言ってくることはない。というより、そもそも自分と関わろうとしてこないのだ。

「…それで、あなたからの話は何かしら?」

部屋に流れ始めた気まずい雰囲気切るように、木更が話題を変えた。

「明日、防衛省に大手民警会社を集めてある依頼をします。聖天子直々にね。——その中に、あなた達天童民間警備会社も含まれています」

「は?」

光輝の告げた内容に、蓮太郎が間の抜けた声を漏らす。木更も声には出さないも、意表を突かれた顔をする。

「ちよ、ちよつと待てよ。聖天子直々つて…大体、集まるのは大手だけなんだろう?なんでウチみたいな弱小が…」

「それは、あなた自身が一番分かっている筈ですがね」

とぼけなさるなど言わんばかりの光輝の目に、蓮太郎は自分の右腕を抑えながら視線を逸らした。

「それはあなたが口添えしたことなのかしら?」

「蓮太郎さんを使うかどうかは、俺に任ざれていましたのでね」

何かを期待するかのような木更に、光輝が肩を竦める。

「俺は国の所有物じゃねえぞ」

「民警なんて言ってますが、実際は国の管理下ですよ。知らない訳

じゃないでしょう?」

蓮太郎が睨みつけながら不満をぶつけてくると、不敵に笑って返す光輝。

高位序列のイニシエーターは、単独で世界の軍事バランスを左右すると言われており、どの国も民警を自分の管理下に置こうとするのである。

「別に依頼を受けると強制はしません。あなた達の意味を尊重しますので」

そう言い残すと、それでは、失礼しますと挨拶し光輝は事務所から出ていく。

「…一体何が起きてるってんだよ」

光輝の去っていったドアを見つめるながら蓮太郎が呟く。木更はその呟きに反応することなく、椅子ごと体を窓へと向け鋭い目つきで夕日に染まる空を見上げた。

第十一話

東京エリアの中心である第1区にある防衛省。その内部の第1会議室に蓮太郎は木更と共にいた。

光輝から聞かされていたが、自分達以外にも多数の民警と彼らが所属する会社の代表が物々しい雰囲気にも包まれていた。

部屋に入って早々に、他のプロモーターに絡まれ流血沙汰寸前までいきかけたりするも。問題を起こして追い出された自衛隊員や、果ては殺人犯までいる民警では、挨拶のようなもので珍しくもないが。

楯田卓状のテーブルに各会社の社長が腰かけ、その周りを蓮太郎ら民警が囲む形となつて待機する。

暫くして幕僚クラスの自衛官が姿を現し、依頼を聞いた後では辞退できないことを念押しすと、壁に埋め込まれた巨大パネルに聖天子——このエリアのトップが映し出された。その隣には木更の祖父でもある補佐官の菊之丞が控えていた。

知っていただけに驚きこそなかったが、モニター越しとはいえエリアの代表を前にしているととなると、自然と体が緊張してしまっている。

『楽にして下さい皆さん、私から説明します』

聖天子が映ると同時に起立した社長らに、聖天子が優しく促すも、誰一人として着席する者は当然ながらいない。

それに気にすることなく、聖天子は依頼内容を説明し始める。こちらにも聞いた通り感染源のガストレアの駆除だったが——

『——もう一つは、このガストレアに取り込まれていると思われるケースを無傷で回収して下さい』

モニターに別のウィンドウが開かれると、頑丈そうなアタッシユケースと破格な成功報酬が表示された。このことは光輝は話していなかったため、蓮太郎は訝しげに眉を顰める。チラリと木更に視線を向けると、彼女も同様の目を聖天子に向けていた。

その間に他の社長が依頼について質問をしており、それに聖天子が

答えていく。そして、木更も質問すべく挙手をした。

「回収するケースの中には、何は入っているか聞いてもよろしいでしょうか？」

その問いに、ざわりと周囲の社長が色めき立つ。凶らずも彼女が全員の意見を代表する形となったのだ。

『あなたは天童木更社長ですね、お話は聞いています。それにしても、妙な質問をなさいますね。それは依頼人のプライバシーに当たるので当然お答えできません』

よくある常套句ではぐらかそうとする聖天子に、木更は悠然と食い下がる。対象のガストレアはせいぜいステージⅠ。本来ならこれだけの大手を集め、更に破格な報酬をつける必要はない筈である。ならば、相応の危険がケースの中にあると見るべきということを指摘した。

それでも聖天子は答えようとせず、木更はならばと依頼を辞退する旨伝えた。

『……ここで席を立つと、ペナルティがありますよ』

「覚悟の上です。そんな不確かな説明でウチの社員を危険に晒す訳にはまいりませんので」

そう脅しをかけてくる聖天子に、木更は怯むことなく言い放つ。

肌がぴりぴりするほどの沈黙が降りる中、蓮太郎は1人以外の感に打たれていた。ここに来る道中、彼女は政府の依頼は断れないと言っていたにも関わらず、自分達の身を案じてくれたからだ。

蓮太郎が何か言わなければと口を開きかけたその瞬間、突如部屋中に響き渡る程のけたたましい笑い声が響き渡った。

皆の視線が声の主に集まり、ぎよつとする。

部屋の入口に、燕尾服を身に纏ってシルクハットを被り、仮面で顔を隠した怪人が優雅に立っていたのである。

忽然と現れた仮面の男は、ゆったりとした足取りで卓に向かうと、啞然とする蓮太郎らのすり抜けてよつと、軽く跳ぶと卓の中心に降り立つ。

蓮太郎はその男を知っていた。昨日要請を受けてガストレアが出

現したマンションに突入したのだが、既にガストレアは逃走しており、代わりにいたのがこの仮面の男だったのだ。

そして男の側には、先に突入していた機動隊員の死体があり、自分が殺害したと自供したので取り押さえようとしたのだが、こちらの攻撃を意にも介さず軽々と受け流されて、逃亡されるという苦い結果となったのだ。

『…名乗りなさい』

唯一冷静だった聖天子が男に問いかける。彼女には、まるで男は現れるのが分かっていたかのような落ち着きようであった。

「これは失礼」

問われた男は、シルクハットを取って体を2つに折り畳んで礼をする。

「私は蛭子ひるこ、蛭子影胤かげたねという。お初にお目にかかるね、無能な国家元首殿。端的に言うとは私は君達の敵だ」

背筋を走る悪寒が、蓮太郎に拳銃を抜かせた。

「お、お前ツ…」

影胤と名乗った男の首が猛烈な勢いで蓮太郎の方を向く。

「フッフ、元気だったかい里見君。新しき我が友よ」

「どこから入ってきやがった！」

「フッフ、その答えに対しては正面から堂々とき。おおそうだ、丁度良いタイミングなので私のイニシエーターを紹介しよう。小比奈こひな、おいで」

「はい、パパ」

振り返るより先に蓮太郎と木更の脇を少女が歩き去っていた。それも、気配を悟らせることなくである。

フリル付きの黒いワンピースに、腰に交差させた2本の小太刀を差している少女は、うんしょつ、と言って手をつき足を上げて、難儀しながら卓の上に上ると、影胤の横に来てスカートを掴まんでお辞儀をする。

「蛭子小比奈、十歳」

「私のイニシエーターにして娘だ」

蓮太郎らが影胤が民警であることに驚いていると、聖天子が口を開く。

『蛭子影胤。先日機密物資奪還部隊を襲撃したのはあなた達ですか？』

「その通りだが？」

悪びれた様子もなく答える影胤に、聖天子は感情を押し殺すように目を瞑るとゆつくりと開く。

「投降しなさい。あなたが知っていることを全て話すのなら、命の保証はしましょう」

その通告に影胤は一瞬呆けるように動きを止めると、すぐに腹を抱えて笑い出した。

「ハハハハハッ！まさか、『はい、分かりました』とでも言うと思ったのかね！」

『思っています』

「ほう、では？」

期待していなかったとでも言いたそうに答える聖天子に、影胤が挑発するような目を向けた。

『実力を持って、あなたという脅威を排除します』

聖天子の宣告に合わせるように、窓を突き破って2つの人影が蛭子親子を挟むように侵入してきた。

『陸上自衛隊所属、聖天子直轄遊撃小隊A l v i s 隊長天童光輝だ。最後通告だ、直ちに武装を解除して投降しろ。従わない場合、命の保証はせんぞクソ野郎』

フアフナーを纏った光輝——ツヴァイが、両手にそれぞれ保持した最新型アサルトライフル『ガラム44』を突きつけながら警告した。

その姿はいつもと違い。ジャイアント・ガトリングやミサイル内臓の増加装甲等が外され、代わりに背中と両膝に計4つのウェポンバインダーと、左腕には小型のシールドが装備された、市街地戦用のB型装備と呼ばれる形態である。

「A l v i s だど？」

「では、あれがノートウング・モデルなのか」

木更を除く社長らが、突入してきたツヴァイらを見てざわめき立つ。そんな中、蓮太郎は光輝の狙いを読み取りその大胆さに驚かされていた。

「光輝、あなた最初から私達をあつ男を誘き寄せるための餌にする気だったのね」

『ええ。申し訳ありませんが、それが確実だったので』

同じく見抜いた木更が、不満そうな顔でツヴァイに問いかけると、素直に認めた。

「ふむ。どうりでこの建物に入ってからの道中、警備すらいないと思ったが、待ち伏せされた訳か」

『何を驚いてやがる。貴様程度の思考が読まれないとも思ったのか？おめでたい頭をしてるな』

関心したような口ぶりの影胤に、光輝が馬鹿にしたような口調で挑発する。

「パパ。あいつパパのこと馬鹿にしたよ、斬っていい？」

「いや、彼は私が相手しよう。お前はあつちだ」

そういつてツヴァイの反対側にいる優——アインをチラリと見る影胤。こちらは、なぜか戦闘態勢を取るでもなくただその場に立っていた。

『その発言は、警告を無視するととらえるぞ』

「無論だ。こんな素晴らしいサブライズを逃す訳ないじゃないか」

その言葉に合わせてトリガーに指をかけるツヴァイ。今まさに戦闘の口火が切られようとした瞬間、民警の中から怒号が響いた。

「おい、待てやア！」

他の民警より離れた位置にいた、ドクロのスカーフェイスで口元で隠した大柄な男が、憤怒の表情でツヴァイに歩み寄っていく。その手には、柄までバラニウムで作られた身の丈ほどの巨大な大剣が握られていた。

「俺達が餌だあ!?ふざけてんのかテメエ！」

「よせ将監！誰に口を聞いているのか分かってるのか！」

「止めんな三ヶ島さん！こいつは俺達をコケにしやがったんだぞ！」

大柄な男——伊熊 将監《いくま しょうげん》に雇い主である社長が止めようとするも、将監は聞く耳を持たず大剣の切っ先をツヴァイに向ける。

蓮太郎以外の他の民警も将監と同じ気持ちなのだろう。皆一様に殺意の籠った目をツヴァイに向けている。

『諸君らのプライドを傷つけたのは謝罪しよう。怨んでくれて構わない』

「あぁッ!？」

光輝の態度が気に入らず、将監は額に青筋を浮かべる。IP序列1584位という一流のプロモーターの殺気を浴びせられても、ツヴァイは影胤から視線を外すことはなく警戒していた。まるで、彼より影胤の方が脅威だと認識しているようであった。それが、将監の怒りに油を注いでしまっている。

「ブツ殺すー!」

「止めろオ! 将監ッッ!」

将監が大剣を振りかざしツヴァイに斬りかかると、三ヶ島が悲鳴のような声をあげる。

対してツヴァイは、影胤から視線を外さず左手のライフルの銃口を大剣の柄に向ける。引き金に指をかけるのと同時に、何かに気づいたツヴァイが素早く跳び退くと、バシィツという雷鳴音と共に将監の体が何かに弾き飛ばされるようにして吹き飛んだ。

「ガぁッ!？」

「やれやれ、せっかくの楽しみを邪魔しないでくれたまえ」

そのまま壁に叩きつけられた将監は、ズルズルと壁を滑り床に倒れ伏す。そんな将監に、影胤がつまらないものを見るような目を向けている。

「将監さんー!」

彼のイニシエーターが慌てて駆け寄る。

「何だ? 何が起こった!？」

予想外の事態に蓮太郎は困惑の声を漏らす。一瞬のことだったが、将監が吹き飛ぶ時に青白い燐光が見えた。

『なる程、それが斥力フィールドか』

「私は『イマジナリー・ギミック』と呼んでいるよ」

正体を知っている様子のツヴァイに、影胤は鷹揚に両手を広げた。

「…バリア、だと？お前、本当に人間なのか？」

「人間だとも。ただこれを発生させるために内蔵の殆どを摘出してパラニウムの機械に詰め替えているがね」

「機械…？」

「名乗ろう里見君、私は元陸上自衛隊東部方面隊第七八七機械化特殊部隊『新人類創造計画』蛭子影胤だ」

影胤が発した言葉に三ヶ島が驚きに目を見開く。

「…バアルに対抗するために生み出された特殊部隊？実在する訳が…」

「信じる信じないは君の勝手だよ。まあ、何かね里見君？つまり私はあの時まったく本気じゃなかったのだよ。悪いね」

悪びれた様子もなく恭しく頭を垂れてくる影胤に、蓮太郎は思わず両手の拳を握り締めて歯ぎしりをする。

『…この場にいる民警は出ていくか離れて伏せろ。死にたくなければな』

そう警告するとツヴァイが影胤へ照準くを合わせてライフのトリガーを引こうと――

『待つてツヴァイ』

して今まで沈黙していたアインが待ったをかけた。余りに存在感がなく、影胤が告げた内容が衝撃的過ぎて、蓮太郎達にはそういえばいたなと忘れられていた。

『なんだアイン？』

『その仮面の人に聞きたいことがあるんだけど』

戦場にいるとは思えない程悠長なことを話すアインに、何言ってるだこいつと蓮太郎達から奇異な目を向けられる。

『早くしろよ』

『天童2尉、何を…』

『構いません。わたくしが許可します』

『聖天子様?』

あつさりと許可そ出したツヴァイに、菊之丞が異論を挟もうとする
と、それを聖天子に止められ彼にしては珍しく困惑の色を浮かべる。

『あなたは先程聖天子様のことを無能と言いましたが、どうしてですか?』

それは影胤が名乗った際に言い放ったことであり。元首を侮辱されてことへの怒りからかと思われたが、アインからはそのような感情は読み取れず、純粹に疑問から問うているようであった。

アインからの問いに、影胤は鼻を鳴らす。

「弱肉強食となった世の中で、平和だ愛だのとのたまう者を、無能と言わず何というのかね?」

『なる程、ありがとうございます』

「いや、ありがとうございますです。それでいいのよ!」

影胤の言い分をすんなりと受け入れたアインに、蓮太郎が思わずツツコミを入れてしまう。

『テロをしようとする人によく言われることなので。あなたは否定できるんですか?』

「それは…」

そう聞かれると言葉に詰まる蓮太郎。実を言えば、聖天子の政策を甘いと思うこともあり、影胤の言葉に納得できてしまう部分もあったのだ。

「では、私の考えに賛同すると?」

『いいえ』

きつぱりとアインは、影胤の言葉を否定する。

『あなたの言うことも正しいですけど、それでも平和が好きだって言える聖天子様のために僕は戦います』

「愚かな。そんなことをして何になる? 平和になれば真つ先に切り捨てられるのは、君達だ」

『それでいいです。そのために戦ってますから』

揺るぎない瞳で語るアインに、影胤は盛大に溜息をついた。

「どうやら私と君とでは根本的『時間だアイン。始めるぞ』

『了解』

何やら慣れた様子で影胤の言葉を遮ったツヴァイ。そして、応じながらも未だに戦闘態勢をアインは取らない。

『マーク・ツヴァイ、戦闘を開始する』

ツヴァイが左手に保持しているライフルのトリガーを引くと、無数の弾丸がフルオートで放たれ影胤へ殺到する。

対する影胤は微動だにすることなく、斥力フィールドを発生させる。全ての弾丸がフィールドに受け止められ空中で制止する。

「無駄だよ。そんな物では私は殺せない」

影胤が右手の親指と人差し指を合わせてパチンと鳴らすと、受け止めた弾丸がツヴァイへと跳ね返される。

ツヴァイは右手側のライフルを連射し弾丸同士をぶつけて弾くか、装甲の厚い部分で受け流すかして対応した。そしてロックを解除すると、空になったマガジンが外れ重量に従い床に落ち、腰から伸びたサブアームが新しいマガジンを差し込む。

「何だよあれ…。人間じゃねえ」

その光景を見ていた民警の誰かが、信じられないと言いたそうに呟いた。影胤の斥力フィールドは当然ながら、ツヴァイが見せた対応も常識外の絶技だからだ。

「そう、君達がしていたのは只の遊びだ。これこそ真なる戦い！選ばれた者だけが到達しうる強者の世界だ！」

『……』

心の底から歓喜する影胤に反して、ツヴァイは無反応で、両手のライフルの銃身下部に取り付けられたランチャーからグレネードを左右計2発撃ち出す。

撃ち出されたグレネードの先端は螺旋状になっており、末端の複数の噴射口から火が吹き高速で横回転しながら斥力フィールドと接触する。フィールドを突き破ろうと回転を続けるグレネードだったが、突破できぬまま起爆装置が作動し激しい爆発を起こした。

「キャッ！」

「木更さん！」

爆発によって生じた炎と煙が近くにいた木更と蓮太郎に迫り、蓮太郎は咄嗟に木更を抱きしめて背中を盾にするように向ける。背中が炎に炙られ熱による痛みと、煙を吸い込んでしまったことで咳き込んでしまう。他の民警も同じ目に遭ったようで、辺りに咳き込む声が響く。

「ゲホツゴホツ！おい、光輝！室内で爆発物なんて使うんじゃないよ！」

『この場から去るか伏せているといった』

蓮太郎が抗議の声をあげるも、ツヴァイは冷たく切り捨て、右手首の装甲に内臓された先端が鉤爪状のワイヤーを射出した。

ワイヤーも当然ながらフィールドに阻まれるが、そこからツヴァイはワイヤーに電流を流すと、電流とフィールドがぶつかり合い激しいスパーク音が鳴り響く。

電流の出力を上げていくも、影胤には効果が見られず、遂には負荷に耐えられずショートを起こすと、ツヴァイはワイヤーを切り離れた。

「どうしたのかね？期待外れさせないでくれ」

落胆の色を滲ませ始めた影胤に、ツヴァイはガラム44を両膝のウエポンバインダーに格納し、背部右側のバインダーから射出されたガトリングを右手で保持すると脇も使い固定してトリガーを引く。

束ねられた銃身が高速で回転を始め、ガラム44以上の速度で弾丸が吐き出される。それでも、影胤のフィールドは揺るぎもせず、反射された弾丸をシールドと装甲の厚い部分を使い受け流す。

「うおわ!」

跳弾した弾丸が蓮太郎の足元附近に着弾し、思わず情けない声が漏れる蓮太郎。他の民警も同様に跳弾に見舞われていた。

「(何だ？光輝は何を狙っている?)」

無駄としか見えない攻撃を続けるツヴァイに、蓮太郎は違和感を感じる。

受け流せているとはいえ、ガトリング砲ともなるとダメージの蓄積は無視できず、次第にシールドも装甲も削り取られてしまっていた。

「あいつ、ヤケでも起こしちまったんじやねえのか？」

蓮太郎の側にいたプロモーターが跳弾に怯えながら呟く。

「いいえ、違うわ。あの子何かを待っているんだわ」

自分に向けられた訳ではないが、その呟きに木更が反論する。

それには蓮太郎も同意できた。待ち伏せていた以上、ツヴァイ——
光輝が何に策もないということとは長年の付き合いで分かるのだ。だが、何を？

「まさか、あいつか？」

蓮太郎はハツとして、小比奈と対峙しているアインに視線を向ける。

両手にそれぞれ手にした小太刀を交互に振るう小比奈。剣速も移動速度も、辛うじて捉えられる程の速さで襲い掛かる小比奈に対して、アインは最小限の動きで回避している。

「ちよろちよろ、逃げるな！斬れないじゃん！」

『痛いからやだよ』

一向に捉えられないことに苛立った声をあげる小比奈に、アインは心底嫌そうに返す。

「あいつ、完全に見切ってやがるのか!？」

アインの動きから至った事実には戦慄する蓮太郎。

自身のイニシエーターが小比奈と同じく速度重視型であり、目が慣れている蓮太郎でさえギリギリ目で追えているというのに、アインは小比奈の行動の先をすら読んで回避する余裕を見せていた。

「なのに、何で反撃しないんだ？」

そう、アインは小比奈からの攻撃を避けるだけで、一切の攻撃行動を取ろうとしていないのだ。それどころか武器を手にすることさえしていないかった。

「蓮太郎君。彼もしかして戦う気がないんじゃないかしら？」

「はっ。」

同じようにアインの戦いを見ていた木更が、信じられないといった目をしながら口を開く。

確かにアインからは一切の戦意を感じることができなかった。自

分を殺そうとしている相手に対してだ。

『ねえ。そろそろ投降してもらえないかな?』

何度目かの斬撃を回避すると、唐突にアインが投降を促がす言葉を発した。

「…はっ。」

それを聞いた小比奈は、思わずキョトンとした顔で動きを止めてしまう。彼女に限らず、蓮太郎ら民警とモニター越しにいる菊之丞も同じような顔をし、ツヴァイと対峙していた影胤さえも背中を見せることになってまで振り向いてしまっている。そんな中ツヴァイはまあ、そうなるわな、とやれやれといった様子で眩き、聖天子は期待と不安の混ざった目で見守っていた。

回避に専念していたのは、互いの力量差を見せつけて相手の戦意を喪失させようとしていたためだった。

『君じゃ僕に勝てないってもう分かったでしょ? 君を傷つけたくくないんだ』

心の底から小比奈を案じているアイン。だが、彼女からしてみれば途轍もない侮辱でしかなかった。

「ふぎ、けるな…」

怒りで紅い瞳の輝きが増し、手が震えだす小比奈。

「ふぎけるなアアアアアアアアア!!」

感情のままに振るわれた刃を、後ろに跳んで回避するアイン。

『そう、なら…仕方ないね』

無念そうに眩くと。背部のウェポンラックから右手にルガーランズを、左手にロングソードを手にすると戦闘態勢を取るアイン。

それと同時に、先程までとは打って変わり、肌がひりつくような威圧感を放つアイン。

『マーク・アイン、これより戦闘を開始するッ!』

そう宣言すると、アインの紅の瞳の輝きが増すのだった。

第十二話

戦闘態勢を取ったアインに対して、小比奈は持ち前の脚力を用いて懐に飛び込もうとし——アインの姿がブレた瞬間、視界がロングソードを振り上げたアインで埋め尽くされる。

「!?」

本能的に右斜め前へと飛び込むと、背後ストレスを刃が通り過ぎていった。体を丸めて前転しながら起き上がると、ソードを振るった勢いを殺さず両手を広げ、駒のように回転しながらアインが迫ってきた。

小比奈は小太刀を交差させて受け止めるのと同時に、後ろに跳んで衝撃を軽減するも、殺しきることができず腕に痺れが走り顔を顰める。

『セイツー!』

追撃しながら、今度はルガーランスとソードを地面突き刺し、それを支点に逆立ちした勢いを利用して体を丸めて縦回転しながら突撃するアイン。

小比奈が跳んで回避すると、足場に使っていた卓の一部が、アインの振るったソードとランスが叩きつけられ砕け散った。

「やあああああー!」

僅かにできた隙を逃さず、小比奈は右手の小太刀で刺突を放つ。完璧なタイミングで放たれた突きは、吸い込まれるようにアインの喉元目がけて迫り——空を切った。

「ッ!」

気配を追って視線を下げると、両膝を床に突いた態勢のまま、頭部が床に着く程に上半身を後ろに折り曲げたアインがいた。

その態勢からアインは、再びランスとソードを地面突き刺し体を固定させると、逆上がりの要領で彼女の顎目掛けて両足を同時に蹴りだす。

首と上半身を後ろに逸らしながら後方に跳び退く小比奈。爪先が顎を掠めて空を切ると、腕の力だけで跳び上がるアイン。

互いに着地すると同時に駆けだし、同時に振るわれた刃がぶつかり合い火花を散らす。

「(こいつの動き、あいつみたいで気持ち悪い!)」

余りに変則的な機動をするアインに、嫌いな男の姿を重ねる小比奈。

「(でも、あいつよりは遅い!)」

だが、圧倒的だったあの男に比べれば、アインの動きはまだ粗かった。嵐のような連撃を繰り返すアインの動きを、徐々に見極めながら反撃を挟んでいく小比奈。

「……」

そんな光景を蓮太郎ら民警はただ見ていることしかできなかつた。蓮太郎を除けば、この場にいるのは序列上位に位置する東京エリアでも実力者ばかりなのだが。誰もが目の前で繰り広げられる異次元の戦いに、割り込むことに二の足を踏んでしまっていた。

『アイン時間切れだ。プランBでいく』

ガトリングで影胤を抑えていたツヴアイが、やむなしといった様子で指示を出す。その姿は反射された弾丸によってボロボロになってしまっていた。

『了解』

それを合図に、アインは小比奈が放った左右からの斬撃を天井に届く高さまで跳んで回避し、天井にソードとランスを突き刺し足をつけると、天井を蹴って小比奈目掛けて砲弾のような速度で突撃しながら、縦回転斬りを放った。

だが、大振りなため容易く見切られ、1歩後ろに退がられただけで刃は空を切って床を砕き、粉上になったコンクリートが飛散し視界を塞ぐ。

「そっ……」

明確にできた隙に、今度は両手小太刀を同時に突き出す小比奈。対してアインは両手を武装から離し、手を広げたまま迫る小太刀へと突き出した。そして、小太刀はその手の平を貫いた。

アインは激痛を無視してさらに腕を押し出し、刃をより深くまで突

き刺していき、小太刀を握る小比奈の手を掴んだ。

「!?え!?」

予想外過ぎる事態に、思わず間拔けな声を漏らして小比奈。その間にアインが屈んだ状態から立ち上がると、身長の関係で小比奈の足が床から離れ宙にぶら下がる状態となる。

「この、離せー離せってばあ!」

小比奈は拘束から逃れようと暴れるも、手は掴まれており、蹴りを放つもアインには届かず虚しく空を切るだけだった。

『捕まえたよツヴァイ』

小太刀の刺さった手の平からは、血とオイルとが流れ続け激痛が走っているも、アインは気にした様子もなくツヴァイに告げる。

「小比奈!」

娘が捕らえられたことに、今まで余裕綽々だった影胤が動揺し、視線ごと意識を完全にツヴァイから外してしまった。

その瞬間、ツヴァイはガトリングを投げ捨て、ブースターを全開に吹かし影胤へと突撃した。

『隙を見せたな』

ツヴァイが左腕のシールドをパージすると、シールドの下に隠していた物が姿を現す。

「!」

視線をツヴァイに戻した影胤が見たのは、杭とそれを撃ち出す射出機——パイルバンカーだった。

『撃ち抜く!』

ツヴァイがアッパーの要領でバンカーの先端をフィールドに押し付けると、射出機を起動させ杭が高速で撃ち出されフィールドに叩きつけられる。左腕の装甲が衝撃に耐えられず無数の亀裂が走り、その衝撃は内部の肉体にまで及びズタズタに引き裂いた。

撃ち出されたバンカーはフィールドを貫通し、その衝撃で影胤の体が宙を舞い天井に叩きつけられめり込む。

「ガハッ……!」

影胤の口から血が吐き出され、貼り付けられた体が重力によって

ゆっくりと引き剥がされて落下し、床に叩きつけられる。

「…終わったのか？」

民警の誰かが呆然と呟く。床に倒れ伏す影胤とアインに捕まりもがいている小比奈、誰もが勝負は着いたと――

「フッフ、お見事」

思った瞬間、影胤が手を使わずに起き上がると、飄々とした態度でツヴァイへと拍手を送り出した。

「素晴らしいこの痛みツ、今私は生きているツ、素晴らしきかな人生！ハレルヤー！」

爪先で立ちながら一回転して歓喜の声を上げる影胤。

『チツ』

血とオイルが流れて混ざり合う左腕から走る激痛に、顔を顰めて舌打ちしながら、使い捨てのバンカーをパージするツヴァイ。想定では今の一撃で仕留められる筈だったが、想定よりもフィールドの強度が高かったのか、十分なダメージを与えられなかったようだ。

「ここまで追い詰められたのは久しぶりだ。あのような手段で小比奈を捕らえることといい、流石は彼の教えを受けていただけのことはあるね」

『彼』という言葉が出た瞬間、ツヴァイから殺気が放たれ小比奈を優しく宥めていたアインは、言い知れぬ気配を纏いだした。

『そうか、貴様には話してもらおうことが増えたな、特別にこの場で話させてやろう。話せないっていうなら話しやすいように手伝ってやる、安心しろ今の時代手足の1本や2本すぐに生やせるからな』

冷え切った声を出しながら、右手で膝のウエポンバインダーからガラム44を取り出し、銃口を影胤に突きつけるツヴァイ。

「申し訳ないがそれは遠慮させてもらおうよ。さて、十分楽しめたし今回はこれでお暇させてもらおうよ」

『逃がさんー！』

ツヴァイがライフルを発砲すると、フィールドを発生させて防ぐも、その輝きは先程までよりも弱弱しくすぐに消えてしまった。

「あいつ、もしかして弱ってるのか？」

「あれだけの衝撃を受ければ当然ね。多分、フィールドの発生装置である臓器がいくつか傷ついているのよ」

それを見た蓮太郎は影胤に違和感を覚える。飄々と振舞っているも、実際は余裕がないのではと。そして、木更の指摘でそれが確信へと変わる。

だが、イニシエーターは捕らえられ、自身も少なくない負傷をしている状況であっても、影胤からは余裕が感じられていた。

ツヴァイもそれを感じ取っているのか、影胤の一挙手一投足を見逃すまいと警戒している。

「できればこうしたくなかったが、致し方ないか」

やれやれといった様子で右手の親指と人差し指を合わせてパチンと鳴らすと、窓を割って無数の細長い物体がツヴァイへと殺到してきた。

『何!?!』

予想外の事態に動揺しつつも、跳び退いて回避すると、物体が次々とツヴァイのいた床に突き刺さっていく。

『投げ槍だど!』

突き刺さったのは投擲用の槍——いわゆる投げ槍と呼ばれる物であった。それも、凶鑑で見たことのあるアイヌ民族が用いてもものと酷似していた。発射点を探ると、どうやら向かいのビルの屋上の上のようなところにある。

突き刺さった槍の一本には太いワイヤーが結びつけられており、それを足場にフードで全身を覆った者が駆けてくるではないか。

『チイツー!』

ツヴァイがその者に向けてライフルを発砲すると、フードの者は右腕だけをフードから晒し、手にしていた短い一対の木製の棒を短い紐で繋いだ——所謂ヌンチャクと呼ばれる武器を振るい弾く。

それを見たツヴァイは、足場になっているワイヤーをフルオートから単発へ切り替え狙い撃つも、特殊な金属で作られたのか数発同じ個所に直撃して切断できない。ならばと、着弾の衝撃で振り落とそうとワイヤーを狙い続けるが、フードの者は驚異的なバランス感覚を持っているようで、ブレることもなく走り続けている。

そしてツヴァイ達がいる部屋まで近づいたフードの者は、軽く跳躍しながら侵入してくる。

『アイーン!』

『ツー!』

その軌道からフードの者の行動を予測したツヴァイが叫ぶ。本能的に狙われていることを察知したアインは、小比奈を捕らえたまま着地地点に移動すると、フードの者が着地しようとするのと同時に、脚部のブースタを吹かしながら顎を蹴り上げる。

フードの者は迫る脚に対処しようとし——だが顔の真横を通り過ぎた。

「!?」

そのことにフードの者から困惑の色が浮かぶ。首を傾けて回避しようとしたが、明らかに蹴りの軌道を変えて外されたからである。フェイントにしても違和感が感じられたのだ。

だが、アインが踵落としへと繋げてきたので、片膝立ちの態勢からヌンチャクを振り上げアインの左脇腹に叩きつける。

木製とは思えない打撃音と共にヌンチャクは装甲を砕き、その衝撃が内部まで伝達しアインの肉体にもダメージを与える。

『——ッ!』

流石に堪えたのか、吐血したアインは小比奈を掴んでいた手が緩んでしまう。その隙を逃さず小比奈は小太刀を手放すと後ろに跳んで距離を取った。

「それでは諸君さらばだ」

窓際まで移動していた影胤が飛び降りると、小比奈がそれに続き最後にフードの者が飛び降りていった。

アインが手の平に刺さっている小太刀を迷いなく引き抜くと、傷口から血が溢れ出すが、気にした様子もなく手放していた武器を回収し彼らを追いかけるようとして——ツヴァイに蹴り飛ばされた。

『いった!?何するんだよツヴァイ!』

床に倒れ込んだアインが、素早く起き上がりツヴァイに詰め寄りながら怒鳴ると、ツヴァイは悪びれた様子もなくアインを睨みつける。

『あん? テメエこそ何してんだ』

『追いかけるんだよ! 今ならまだ間に合う!』

興奮した様子で進言するアインに、ツヴァイは盛大に溜息をつく。

『自分の状態をよく見ろボケ。くたばりかけでどうにかできる相手

じゃねえよ』

影胤らを助けた者達は、少なくとも自分らと同等の実力を持っているとツヴァイは見ていた。仮に追撃したとしても、消耗した今の戦力では勝機はないだろう。

特にアインはフードの者から受けた脇腹のダメージが酷く、臓器に深刻な損傷が出ている状態である。誰が見ても今すぐにも治療が必要なレベルであり、本来なら安静にしているべきなのである

『問題ないー！ここで彼らを逃がすくらいなら死んでも構わない!!』

にもかかわらず戦い続けようとするアインに、その場にいた民警達
は恐怖すら感じられた。

『蒼希3尉』

そんな彼にモニター越しに聖天子が呼びかける。

『追撃は中止し、治療に専念しなさい』

『聖…天子様！僕はまだ戦える、戦えるんだ!!』

『これは命令です』

悲痛さすら感じられるアインの叫びに対し、聖天子は表情一つ変えず告げる。

『聖——！』

『アイン！』

それでもなお食い下がろうとするアインの肩をツヴァイが掴む。

『これ以上、あいつを泣かせるな』

『ツ——了解』

接触回線でアインにだけ聞こえるようにして語り掛けるツヴァイ。モニターに映る聖天子は悠然と佇んでいるが、その体は側に控えている菊之丞ですら気づかない程僅かに震えていた。それに気がついたアインは、握り締めていた拳を緩めて俯いた。

「（最後に現れた連中…）」

そんな彼を横目に、ツヴァイは辺りを見回す。床に突き刺さっていた無数の槍は、まるで最初からなかったかのように跡形もなく消えていた。記憶にある槍の形状やその事実から思い当たることが一つあつた。

「（これは想像以上に面倒だな……。やはりジョーカーを切るしかないか）」

これから起こるだろう事態を予測し、陰鬱な趣きになりながらも、呆然として立っている蓮太郎に視線を向けるツヴァイ。

窓の外に広がる東京エリアでは、何気ない日常が続いていた――

防衛省から逃亡した蛭子親子は、協力者であるフードの者達と共に東京エリアの外周区にいた。先導しているフードの者達に連れられとある廃屋に入ると、その内の1人が古びた本棚にあるいくつかの本を軽く押し込むように触れていき、ガコンツという音が響くと何もなかった壁から隠し扉が姿を現す。

その先には下へと続く階段があり、再びフードの者達が先導し降りていくと開けた空間へと出た。

その空間には様々な家具や最新の家電が置かれ清掃も行き届いており、建物の外観に反して真新しさを感じられた。

「お、お帰りギンバイカ、ペチユニアお疲れさん」

そしてその空間には数人の人間がおり。その中で、キャスター付きの椅子の背もたれを前にして持たれかかっている青年と、その隣で座布団に座った褐色肌ではつらつそうな少女がテレビに向き合って、格闘ゲームをしており、青年がフードの者達を方へ体ごと向けて労いの言葉をかける。ちなみにコントローラを握る手は淀みなく動き続けている。

「ただいま戻った道陽」

「ただいま〜」

そういつて、ギンバイカとペチユニアと呼ばれたフードの者達が、どちらも少女と言える声でそれに応じる。

「お前達は部屋で休んでいいぞ、飯の時間になったら呼ぶから」

「分かった」

「それじゃひと眠りしますかにや〜」

青年――日野道陽の言葉にギンバイカと呼ばれた方は頷き、ペチユ

ニアと呼ばれた方はあくびを噛み殺しながら答えると、空間の奥にある通路へと消えていった。

それを見送ると道陽はさて、と蛭子親子に視線を向ける。

「ようこそ我らがアジトへ。盛大にはできませんが歓迎しよう」

「お招き頂き光栄だよ。できれば君の手は借りたくなかったがね」

負傷している影胤を見て愉快そうな笑みを浮かべる道陽に、影胤は肩を竦めながら応じる。

「どうよあいつらは、強かったろ？」

「ああ、実に楽しませてもらったよ。流石は君の教えを受けただけのことはあるね、元Alvis隊長殿。いや、今は人類革新連盟特殊作戦部隊『Fuhren隊長日野道陽殿と言うべきか』

「そうやるそうやる、天塩にかけて育てたけえのう」

皮肉を隠そうとしない影胤に、ゲラゲラと道陽は高らかに笑う。

『KO』

「ああああああ！また負けたあ!!」

そんな折、置かれていたテレビから音声が行くと、道陽の隣に座っていた少女が絶叫共に後ろに倒れた。

テレビには格闘ゲームが映し出されており、少女の操るキャラのライフが尽き倒れ、道陽が操るキャラが勝利ポーズの決めていて、KOという文字がデカデカと表示されている。ちなみに道陽が操るキャラのライフは全く減っていない。

「なんで画面全く見てないのにハメコンできるのさ!？」

「ファーハッハッハッハッハッ！ナクリーよ年季が違うのだよ、年季が！」

ジタバタ暴れながら憤慨している少女——ナクリー・オルフレッドに、道陽が勝ち誇った笑みを浮かべている。

「大人気ねえ…」

ソファに寝ころんでいるナクリーと同じく褐色肌で勝気そうな少年——クロヴァン・オルフレッドが、そんな道陽に呆れた目を向けていた。

「覚えておけクロヴァンよ、獅子は兎を狩るのにも全力を尽くすの

「だあ！」

「もう1回、もう1回だかね！次は勝から！」

「よかろう！かかってこいやあ！」

体を起き上がらせて訴えかけてくるナクリーに道陽が応じると、再度対戦が始まった。

「道陽、準備ができた」

すると、奥の通路から現れた褐色肌で少女——ネサット・オルフレッドが告げてくる。名が示すように彼女とクロヴァンは姉弟であり、ナクリーは彼女らの親戚なのだが、とある事情で彼女も同じ姓を名乗っており血の繋がり関係なく家族の絆を持っている。

「おう、ネサット。んじゃ影胤、彼女に着いていきな。破損した臓器変えるから」

影胤に視線を向けて促す道陽。その間にもコントローラーを操作する手は止まらない。

「彼女が、かね？」

影胤はネサットに訝し気な目を向けた。彼のメンテナンスには高度な技術が必要であり、執刀医以外に行える者などほんの一握りしかおらず、彼女が行えるとは思えなかったからだ。

「だからなんでそんな話しながらハメコンできるのさ!？」

そんなやり取りをしている間にも、ナタリーの操るキャラが一方的に攻撃されている。

「ネサットは俺の親父の直伝だな。お前さんの執刀医からもお墨付き貰ってるよ」

そういつてネサットに視線で促すと、彼女は影胤に1枚の書類を差し出す。それを受け取って目を通すと、彼の執刀医のサインに、ネサットにメンテナンスを任せても問題ない旨記されていた。

「失礼した。それではよろしく頼むよ」

「なら、こっちに來て。それとあなあなたにはこれを」

ネサットが手にしていたアタッシュケースを小比奈に手渡す。ケースを開けると、彼女の武器である小太刀が2本納められていた。小太刀を手に取り構えると軽く素振りをする、以前使用していたの

よりも軽量でありながらも強度もあり、なにより彼女の手によく馴染んだ。

「私が造った、どう?」

「使いやすい。これならあのファフナー斬れそう」

「よかった」

小比奈の答えに満足そうに頷くと、ネサットは影胤を連れて通路の奥へと消えていった。

「また負けたああああああ!!」

そうしている間に、再び完敗したナタリーが仰向けに寝ころんで手足を投げ出した。

「クロヴァン、ご飯までその子とトレーニングルームで遊んであげなさい」

「あ?なんで俺が…」

道陽の指示に面倒くさそうな目をするクロヴァン。

「暴りたい暴りたいって騒いでただろ」

「まあ、そうだけだよ…」

「その子の新しい武器の慣らしついでに体動かせ」

道陽の言い分に、どこか不満そうに小比奈を見るクロヴァン。

「ごいつ斬っていいの?」

「あ?」

指さしながら言い放つ小比奈に、ビキリツと額に青筋を浮かべると、ソファから降りて歩み寄り睨みつけるクロヴァン。

「やれるもんならやってみろチビ」

「チビじゃないもん小比奈だもん」

暫く睨み合うと、クロヴァンが来い、と言いながら顎をしゃくると、小比奈と共に通路の奥に消えていった。

「ねえ道陽」

「なんや?」

寝転がったままナクリーが問いかけてくる。

「今回の任務ってさ、あたしらだけで十分じゃん。なのに何であんな奴ら使うのさ」

「スポンサーの意向だよ。今回の騒動は『子供達』が絡んでないと意味がないのよ」

「大人の都合ってやつ？」

「Yes」

椅子を回転させながら答える道陽に、メンドくささどぼやく。

「もうすぐお前達の出番だけど、嫌なら降りても構わんぞ？」

「でも道陽の『夢』に必要なことなんでしょ？」

「ああ」

「ならやるよ。あたし達は皆道陽に『救われた』んだから。少しでも役に立ちたいもん」

「ありがとうよ」

上半身を起き上がらせてニカツと笑うナクリーの頭を優しく撫でる道陽。

「それで昔の部下と戦うことになったら、殺しちゃってもいいんだよね？」

「おう。遠慮なくぶっ殺しな」

ナタリーからの問いかけに、カツカツと豪快に笑いながら答える道陽。

「そんじやもう一戦しよ！」

コントローラーを手にし再戦を望むナクリーに、道陽はフツと笑みを浮かべる。

「悪いなナクリー。今日は俺が料理当番なのでな。勝ち逃げさせてもらおう！」

フハハアハハハツ!!と悪役のような笑い声を上げながら台所に去っていく道陽。

「ズッる！大人ズツる！」

ナクリーは仰向けに寝転がると、手押しを投げ出して全力で悔しがるのだった。

第十三話

若葉達四国勇者組は宿泊しているホテルの前に集まっていた。

「依頼したいことあるとのことだが、何かあったのか光輝？それに優は？」

いつものようにリムジンで迎えに来ていた光輝に、皆を代表して若葉が問いかける。暫くは案内役の彼らが同行できないとのこと、昨日はホテルで思い思いに過ごしていたが。光輝から急にAlvissに来てもらいたいと呼ばれたのである。

「あいつは昨日の任務で死にかけてな。今は療養中だ」

「死にかけてって。な、何があったのだ!？」

さらりと語られた言葉に、若葉が光輝の両肩を掴んで激しく揺する。

「安心しろ。もうじき治る」

揺すられながらも何事もないように話す光輝。

「??? どういうことだった？」

言葉の意味が解らず首を傾げる球子。他の者達も同様に困惑の色を浮かべている。

「とにかく乗ってくれ。着けば分かる」

襟を正しながらそう促す光輝であった。

Alviss専用ルームに到着した一向が目にしたのは――

「んぐんぐ…」

「はい！はい！はい！あ、みーちゃん、もうなくなっちゃう！」

「はい、追加！」

歌野が次々とお椀に盛ったそばを口に運んでいく優と、せつせとそばを茹でる水都がいた。

「あ、若葉。皆グッドモーニング！」

若葉の存在に気が付いた歌野が、額の汗を腕で拭いながら爽やかに挨拶すると、水都と優もそれに続く。

「あ、ああ、おはよう歌野。お前達も来ていたのか。というかこれは…」

「彼女らにも協力してもらいたくてな。特にこいつの面倒が見切れなくてな」

そばを食べている優を右手の親指で指さしながら、若葉らに椅子を勧める光輝。

「聞いてたより元気だね蒼希君」

不思議そうに優を見ている友奈。聞いていたよりも遥かに元気なのだから当然だが。

「俺らがガストレアウイルスを元にした因子を、体に植え付けている話は覚えているか？」

「はい——もしかして…!」

光輝の話から杏が何かに気づく。

「おかげで『子供達』程ではないが体が丈夫になってな。エネルギーさえあれば大概の傷はすぐに治るのさ」

「飯食つてればいいのか、便利だな」

「…ですが、何らかのリスクもあるのでは？」

球子が関心知る中、ひなたが訝しむように光輝に問いかける。

「無論ある。『子供達』同様に俺達にも形象崩壊点が存在する」

形象崩壊点

『子供達』の持つウイルス抑制因子にも限界があり、基本的に浸食率が50%を超えるとガストレア化してしまい、その限界点を示す専門用語。

「!じゃあそれを超えたらガストレアに？」

「いや、ならん。代わりに活性化した因子に喰われて死ぬ」

「こともなさに語られた言葉に、言葉を失う若葉達。」

「大丈夫だよ。後、2、3年は持つし、技術開発が進めば更に伸びるって博士は言ってたし。それに『子供達』が能力を使わなければ問題ないように、ファスナーに乗らなければ普通に生きていけるし」

そんな彼女らを和ませるようとしてか、おどけた様に話す優。だが、若葉にとってはそんな幼馴染の姿に更なる不安を募らせてしまっ

ていた。

「そういや、あの変な人がいないな」

「博士は俺達の治療と機体の整備で燃え尽きて休んでるよ」

そういつて、霊安室と書かれたプレートのあるドアに視線を向ける光輝。

え、あそこで？とギョツとした目で視線を追う四国組。世の中には彼女達の知らない世界が存在しているのだ。∴別に知らなくともいいのだが。

「さて、もういいな優」

「ん、治った〜」

「では、本題に入ろう。こちらに来てくれ」

優が回復したのを見計らい、ブリーフィングルームへ一向を案内するのであった。

『四国ならびに長野勇者、巫女の皆さん、本日はお集り頂き誠にありがとうございます』

ブリーフィングルームに映った若葉達を迎えたのは、モニターに映る聖天子であった。

「私達をお呼びするとは、ただならぬ事態が起きているのですか聖天子様？」

皆の意見を代弁するように歌野が問いかける。最も優達の状態を見た時から彼女は感づいてはいたのだが。

『はい、今東京エリアは滅亡の危機に瀕しているのです∴』

聖天子から蛭子影胤が東京エリアで大規模テロを起こそうと暗躍しており、もしそれが起きた場合東京エリアが壊滅することは語られた。

『本来なら自らの手で解決せねばならなかったのですが∴。情けないことに皆さんのお力をお借りせねばならなくなりました。申し訳ありません』

心の底から自らの手腕を嘆いている様子の聖天子、友人である歌野

らを巻き込むことに心苦しさを感じているのだ。

「構いません聖天子様、力なき人々のために戦うのが私達の使命です。そこにエリアの違いなどありません」

『ありがとうございます乃木さん』

少しでも彼女の心労を和らげようと若葉が力強く伝えると、聖天子は肩の力が抜けた様に微笑んだ。

「言っておくが自由参加だぞ。四国組は自己決定を尊重したいと大葉代表から話があった」

光輝の言葉に、皆迷わず参加の意思を示すのであった。

『東京エリアを代表して感謝します皆さん。どうかよろしくお願いします』

そういつて深々と頭を下げて感謝の意を示す聖天子。

『それでは、詳細の方は天道2尉にて。2尉後は任せます』

「ハツ聖天子様」

モニターが消えると、脇に控えていた光輝が一步前が出る。

「では、今回の主犯である蛭子親子についてからだ」

光輝の言葉に合わせて優がパネルを操作すると――

モニターに子猫が映し出された。どうやら撮影主にじやれついできている映像らしい。背景に瓦礫が多いため、外周区で撮られたものようだ。

「(可愛い…)」

その愛らしさに思わずほんわかしてしまう若葉達。

「あ、間違えた——痛い痛い！蹴らないで隊長殿！」

「何やってんだテメエは！」

「ごめんごめんごめん！保存場所が他になかったの！」

優が臀部を蹴られながら涙目でパネルを再度操作すると、蛭子親子の画像と情報が新たに映し出された。

「…こいつらは元は民警として活動していたが、トラブルを起こしたらイセンスを剥奪された男だ。ちなみに剥奪前のIP序列は134位だ」

「それって凄いのか？」

民警制度に詳しくない珠子が首を傾げる。

「一万近くで一流、千で超一流。そして百番台やそれ以上となれば『化

け物』なんて呼ばれるようになる。つまり、人間扱いされなくなるってことだ」

「要はメチャクチャ強いってことか」

「そういう認識でいい」

腕を組んで納得する球子を肯定する光輝。

「厄介なのがこいつが『新人類創造計画』で生み出された機械化兵士ってところだ」

「新人類創造計画？」

初めて聞く単語に、友奈が疑問符を浮かべる。

「セカンド・アタック末期に行われた対バアル用兵器の開発計画だ。身体の一部を機械化し、超人的な攻撃力や防御力を持つ兵士を造り出すことを目的としている。本来は機械化兵士計画と呼ばれ、同様の内容のものが他の国でも行われてな、新人類創造計画ってのは日本での部署名みたいのものだ」

その説明を聞いた若葉達は複雑な表情を浮かべている。理由どうあれ人を兵器のように変えてしまうことに不快感を抱いたのだろう。「いい気がしないのは当然だな。当時は人類が減る一步手前だったからな、あらゆる不条理が許容されてしまった。最も手術の成功率の低さ、機械のメンテナンスなどに莫大なコストがかかるため、安定性が高く安価なファフナーが開発されたこともあり、大戦後計画は凍結されることになった。：他に聞きたいことはあるか？」

すると、千景が挙手をした。

「具大的にどのような能力を得られるのかしら？」

「光学迷彩によって姿を消したり、脳波で小型の端末を操作することが可能になる。蛭子影胤の場合、自身を中心に斥力フィールドを発生させて攻防に用いることができ、ステージIVクラスの攻撃に耐えられる強度を持っている」

モニターに防衛省での戦闘映像が流され始め、影胤がフィールドで光輝の攻撃を防いでいる様子が映される。

「た、タマだってそれくらい余裕で耐えられるぞ！」

「タマっち先輩無理に張り合わなくていいから」

息まくように鼻息を荒くする珠子。防御を担当する彼女としては、負けたくない気持ちがあるのだろう。だが、多少の尻込み間が見られるあたり、見栄を張ってしまっているようであり、そんな彼女を杏が優しく宥める。

「それと娘である蛭子小比奈はマンティスの因子を持つっており、小太刀二刀流を用いた近接戦闘能力は侮れん」

今度は小比奈と優の戦闘映像が流される。

「タマはどっちかというと、蒼希の戦い方凄い気になるんだが…」

「わあ、人つてあんなに体が曲がるんだね」

軟体生物顔負けの動作をする優の戦闘スタイルに、珠子が冷や汗を流し、人当たりのいい友奈でさえ若干引き気味であった。

「これも因子の効果なんでしょうか？」

「いや、優は昔からこれくらいできていた」

「そ、そうなんですか…」

杏の疑問に若葉が見慣れた様に答えた。

「素での身体能力が異常だからなこいつは」

「どれくらい？」

「その気になればオリンピックピックの全種目で金取れるくらいだ」

「マジか!? 凄いな、おい!」

光輝がしれっと語った内容に球子が驚愕する。

「話が脱線しているのですが…」

「む、そうだな。やれやれだ…」

「僕悪くないよね? ないよね、ねえ」

ひなたの指摘に光輝が責めるような目を向けてきたので、優が抗議するも無視された。

「それと正体不明の協力者の存在も確認されている」

「無視か、無視なのか畜生」

後で覚えてろという目で文句を言いながら、優がパネルを操作すると、モニターに新たにフードの者達が追加された。

「これってスレイヤーなのかな?」

「そうなんじゃないか?」

物理法則を無視した現象が見られることから、そう推察する友奈と珠子。

「……」

「どうしたのうたのん？」

「若葉ちゃんも、何か気になることでも？」

一方で何か引つかかった様に映像を凝視していた歌野と若葉に、水戸とひなたが話しかける。

「ん〜なんか、私達勇者の装備に似てるかなって」

「お前もそう見えたか歌野」

「つまり、あれは勇者システムだと？」

2人の言葉に杏がまさかといった顔で反応する。それは本来ならあり得ないことだからだ。

「勇者システムは土地神に認められた者にしか扱えません。ここにいる若葉ちゃん達以外には……」

ひなたも否定的な意見を述べる。勇者としての力を扱える者は全員この場にいるからである。

「そういや、北海道と沖縄にもいたよな勇者」

球子は何気なく放った一言にその場の空気が凍った。そう、勇者としての力を扱える者は他にもいるのだ。

「あれ、タマ変なこと言ったか？」

「いや、そういう訳じゃないけど……」

空気の変化に戸惑った球子は、目を点にしてアワアワと慌て始める。

そんな彼女一応のフォローをいれつつ、もう一度映像を見る杏。言われてみるとフードの者達が用いている武器が北海道と沖縄勇者の者と一致していたのだ。

「でも、確か北海道と沖縄の勇者って……」

「沖縄の勇者は沖縄エリア壊滅時に死亡した……となっているが、明確になっている訳ではない。北海道の勇者に至っては行方を眩ませたままになっているな」

「……このフードの者達が北海道と沖縄の勇者ではないと言い切れな

「いってことね」

「ああ。といっても可能性があるかもってだけだ、確定した訳ではない以上深く考えても仕方なからう」

友奈と千景の言葉に応じる光輝。否定も肯定もしないのは彼自身判断しきれないからだろう。

「それに今回の目的は、奴らより先に最重要機密を確保することだ。はっ倒すのは二の次で構わん」

「それで、その最重要機密とは？」

若葉の問いに光輝が視線を送ると、優がパネルを操作しモニターの映像が切り替わる。

子猫が横になった撮影者の腹の上で丸まっている映像が流れる。

「(可愛い…)」

その愛らしさに思わず釘付けになる女子一同。

「……」

「あ、間違えあだだだだだだだだだだだ！」

無言で光輝が尻に連続で蹴りを入れると、涙目で再度パネルを操作する優。すると、民警への説明時にも用いられたアタッシュケースが表示される。

『七星の遺産』ステージVガストレーア―ゾディアックを呼び寄せる触媒だそうだ」

「ゾディアックを!?!」

ゾディアックという単語に若葉達に衝撃が走る。バアルでも最高位の戦闘能力を持つ個体を意図的に呼び出せる等、従来の常識を大きく覆すからだ。

「どんななのなんだそれ?」

「分からん」

「は?」

球子の問いに、あっけからんに予想外の答えを返す光輝。

「分かんないのかよ!?!」

「教えてもらえなかったのな。まあ、政府にとってかなりヤバイもんなってことだな。確保しても中身は絶対に見るなど言っていたしな」

どこか愉快そうに話す光輝に、言葉をなくす若葉達。

「聖天子様だって言いたくない訳じゃないんだ。立場がそれを許して

くれないからなんだ…」

「(優?)」

どこか寂しそうに聖天子を擁護する優。そんな彼の様子に引っかけたかりを覚える若葉。

「どうする、別に今からでも辞退しても構わんぞ?というか俺ならキレて帰る。自衛隊員でなければこんな不確かな情報に命なんてかけたくないからな」

真顔で話す光輝。それが本心であり、同時に若葉達の身を案じているのだろう。

それでも彼女らの意思は変わらなかった。事情どうあれ、多くの命が失われかねない事態を見過ごすことはできなかった。

そんな折ドアが開き何かか転がり込んできた。

「だ、誰か食い物をくれ〜〜〜」

霊安室で休んでいた董が空腹音を響かせて這いずりながら、ドアが一番近かった杏の脚を掴んだ。どうやら食事を取る暇もなかったせいで限界を迎えたらしい。髪に覆われた顔から血走った目を覗かせており、どこぞの呪いのテレビから這い出てくる女みたいになってしまっていた。

「ひゃ、ひゃあああつああアアアアアアアアアア?!?!?」

余りの恐怖に杏は本気で悲鳴を上げ、その光景を見ていた光輝は激しい頭痛に見舞われるのであった。

第十四話

若葉ら勇者組の協力を得た翌日の昼頃。一同は長野エリアの青空学校にいた。

「なあ、光輝さんよ」

「なんだ土居？」

子供達に群がられている球子が、隣で同じ状態の光輝に問いかける。ちなみに今の彼に肩車されている子は楽しそうにはしゃいでおり、周りの子供らは早く変わるように急かしていた。高身長的光輝の肩の上は子供らにとって人気スポットと化しているのだ。

「いや、こんなのんびりしていいのかよ？例の感染源のガストレアを探しにいくべきじゃないのか？」

東京エリア壊滅の危機の話が合った翌日に行っていることと言えば、子供達に勉強を教えたり遊ぶことであつた。てっきり映画のような派手なことをすると覚悟していただけに彼女としては拍子抜けであつた。

「俺らの専門は戦闘だ。索敵やらはその専門に任せればいいのさ」

現在自衛隊と警察が秘密裏に対象のガストレアの捜索を行っており、発見次第 *Arvis* と勇者が駆除に動くこととなっていた。

「何、安心しろ。すぐにでもご期待通りの賑やかさになるさ」

「いや、別に期待してはいないが…」

クツクツクツと怪しく笑う光輝に冷や汗をかく球子。別段戦うことが好きではないので、穏便に済むのであればそれでもいいと考えている。

「冗談だ。ま、慌ててもどうにもならんよ、気が抜ける時に抜いておかんと潰れるもんさ」

「まあ、そうだな」

確かに張り詰めてばかりというのも精神的につらいので、光輝の言い分に賛同する球子。それに、こうして日常を確かめることで、戦う意味を再認識する意味もあるのだろう。

「光輝お兄ちゃん」

そんなことを話していると、1人の少女が駆け足気味で呼びかけてくる。

「む、どうした？」

「延珠ちゃんが来てるよ〜」

「何？」

少女の言葉に眉を顰める光輝。延珠と言えば藍原 延珠（あいはら えんじゅ）のことであろう。彼女は天童民間警備会社に所属するインシエーターであり、兄のように慕っている蓮太郎の相棒である。

長野臨時エリアになる前のこの区画出身であり、そのころから付き合っている少女でもあった。

当然他の子供らとも顔馴染みであり、遊びにくることは不思議なこととは言えない。だが、彼女は自分が『子供達』であることを隠して一般の学校に通っており、平日のこの時間に訪ねてくることには違和感があった。

「でもね泣いてるの。だからお兄ちゃんに来てほしいんだ」

「分かったすぐに行こう。土居ここは任せる」

「あ、ああ」

事態が呑み込めず困惑している球子に肩車していた子を預けると、呼びかけに来てくれた子と共に駆けだす光輝だった。

「学校に『子供達』であると漏れた、か」

長野エリアの中心にある政庁である建物の中で、光輝が苦々しそうに言う。彼の視線の先には赤い髪を左右に結ったツインテールの少女――藍原延珠が椅子に腰かけ悲痛な趣で目尻に涙を浮かべて俯いていた。

室内には優もおり沈痛な顔色を浮かべている。彼女の話を聞くと。いつものように登校すると、自分が『子供達』であること噂が流れており、クラスメートらは最初は距離を取るだけだったが。時が経つにつれ嫌がらせが始まり、危険を感じたらしい担任によって帰宅させられるも。家に帰る気になれず、気がつけば出身地であるこの区画に来

ていたとのことであつた。

「皆なら、受け入れてくれると思つていた…。でも、駄目だつた…妾わらわのこと、化け物だつて…」

涙が零れ、掠れた声で話す延珠を光輝がそつと撫でる。延珠自身が事実を否定すれば違つていたかもしれないが、そのことを責めようとは誰も思わなかつた。彼女は信じたかつたのだ、嘘をついていたとはいえ、今まで親しく接してこれた友人らを。

一先ず今後のことを話し合うため部屋を出ると、歌野と水都が歩いてきていた。

「どう彼女は？」

「深刻だな、迷惑になるから保護者の元には帰りたくないと言つていてな。すまんが白鳥、暫くここに置いておいてもらえるか？」

「ええ、もちろん構わないわ」

歌野の問いに溜息をつきながら答えると、申しわねなさそうに依頼する光輝。それに迷うことなく快諾する歌野。

「でも、どこから？このことを知つてるのつて…」

「蓮太郎さんと姉さんに、俺とお前。後は聖天子だな」

「こんなことをして得する人なんていないわよね」

優の言葉に光輝が答えると、歌野が険しい顔で顎に手を添えて思考する。光輝が述べた者達は皆『子供達』との共存を心の底から望んでおり、延珠が正体を隠していたとはいえ、普通の子らと共に生活できていたことは人類にとって将来大きな財産になると考えていた。故に第三者が悪意を持つて行つたということになる。

「…いや、俺達以外にこのことを知りえて得する奴が1人いる」

「もしかして…」

「ああ、蛭子影胤だ。昨夜、奴が蓮太郎さんに接触してきた際に気になることをほざいていたそうだ」

心当たりのある優に同調し、忌々しそうに吐き捨てる光輝。

実は蓮太郎より、昨夜蛭子影胤が接触してきて、自分の同士となるよう勧誘してきたとの連絡を受けていた。当然蓮太郎はこの誘いを一蹴したが、去り際に影胤があることを告げていたのだ。

「気になること？」

「要約すると、どれだけ奉仕しようとも人は何度でも裏切る、いい加減現実を見ろだそうだ」

「まるで自分は人間よりアウトスタンディングな存在って聞いたそうね」

首を傾げる優に、腕を組んで鼻を鳴らす光輝。そして、不快そうに話す歌野。

「言いたそうではなく、本気でそう言ってやがんだよあのクソは。自分が選ばれた者とも思ってたんだろ」

馬鹿馬鹿しいと言わんばかりに息を吐く光輝。そんなことを話している、今度は1人の少女が駆け寄ってきた。

「マリアちゃんどうしたの？」

「それが、右手が警察で左手が性犯罪者の人が来ていましてですので」

優がその少女の名を呼ぶと、彼女は珍妙なことを話すではないか。

「蓮太郎さんが来たか」

「え、今ので分かるの？」

「見ればわかるさ、生粋のロリコンだな」

すぐに理解した光輝とその説明に、ええ…と困惑してしまう水都。

「というのは半分冗談だが、さつきこつちに来ると連絡があつてな」

「半分なんだ…」

「事実だからね水都。で、どうするの光輝？」

「どうもこうも、本人が希望している以上、ここには居ないと言うしかあるまい」

優の問いに腕を組みながら肩を竦めて答える光輝。

「じゃあ、僕に任せても貰ってもいい？あの人に言いたいこともあるし」

「ほう、いいだろう。なら任せよう」

何やら覚悟を決めた様子の優からの進言に、興味深そうに反応する光輝。今まで蓮太郎と距離を置いていた彼が自分から関わろうとしたからである。

延珠を捜して長野エリアを訪れた蓮太郎は、目に着いた少女——マリアに声をかけると性犯罪者扱いされたことに精神的ダメージを負いつつも。彼女に連れられた政庁の前で待たされていた。

途中他の住民にの目に着いたせいも、多くの人々が遠巻きにこちらを興味深そうに見ている。その殆どが警戒の色を受かべており、いい気がしないもこのエリアの状況を考えれば仕方のないことと自身を納得させる。

そんな中。若葉ら四国勇者組は、深刻な表情で政庁へ向かった優や光輝が気になり、建物付近まで来た所で人だかりが目につきその内の1人の男性に若葉が声をかけた。

「どうかしたんですか?」

「あ、乃木様に皆様。どうも外部からのお客様みたいなんです」

「?それでこんなに人が集まっているんですか?」

男性の言葉に友奈が不思議そうに首を傾げる。

「いえ、聖天子様のように公務以外で来る人何て、差別主義の団体が嫌がらせに来るくらいなものなので」

「つまり珍しいって訳か」

球子の言葉にはい、と頷く男性。そうしていると、政庁から優が姿を現した。

「どうも、里見さん」

「…光輝は?」

「藍原さんのことを探しに行ってますよ。僕はすれ違わないように留守番です」

「そうか、邪魔したな」

延珠がいないのであれば長居する理由もないので踵を返す蓮太郎。

「別に探さなくてもいいんじゃないですか?」

「何?」

そんな彼に優が話しかける。それが以外だったこと、そしてその内容に思わず蓮太郎は足を止めて振りかえった。

「わざわざそんなことをしなくても、IISOに連絡して新しい子と

コンビを組めば済む話じゃないですか。そこまでして彼女に拘る必要があるんですか？」

挑発じみた様子で問いかける優。初めて見るそんな幼馴染の姿に、若葉はどこか芝居かかっているような違和感を感じた。

ISO

国際イニシエーター監督機構の略称。『子供達』をイニシエーターとして訓練し、プロモーターとの選定、序列の管理を行っている機関。対する蓮太郎は静かに呼吸をして、目をつぶる。

「俺はイニシエーターだとかプロモーターだとか、そんなの抜きで『家族』として延珠を探してんだよ。勝手に俺達のことを語ってんじゃねえよ」

怒気さえ感じられる目で睨みつける蓮太郎を、優は——鼻で嗤った。

「何がおかしい？」

「いえね。あんたが家族とは笑わせてくれるなど」

「んだと！」

その言葉に頭に血が上った蓮太郎が、優の胸倉を掴み上げる。それを見ていた周辺人々がざわつき、若葉は咄嗟に止めようと駆けだそうとする。

「待て乃木」

だが、いつの間にか彼女らに背後にいた光輝に止められてしまった。

「光輝、だが…」

「いいから見ていろ。あいつの邪魔をしてやるな」

若葉からの抗議するも、光輝の真剣な目にそれ以上何もいえなくなかった。

「今のはどういう意味だ！」

「分からないのかよ？今回の件はあんたにも原因があるつてよ」

「何だと？」

思いがけない言葉に掴む手が緩むと、その手を優は払い蓮太郎を睨みつける。

「あんたが初めて蛭子影胤と遭遇した時、あんたが本気で止めてりやこんなことにはならなかったって言ってるんだよ！そうすりや彼女は今でも友達と仲良く笑っていられたんだ！」

そう言って今度は優は蓮太郎の胸倉を掴んだ。

「昨夜奴に勧誘された時だってそうだ！奴があんたの大切な人達に危害が及ばせる可能性があったのに何もしなかった！あんたには奴を止められるだけの力がある！なのに卑怯だからなんだと理由をつけて自分から逃げ続けた結果がこれだ！そんなあんたに彼女の家族を名乗る資格があるのかよ!!」

優の本気叫びに、蓮太郎は何も言い返せなかった。それは彼の言葉は真実だったからだ。自分には確かに本来の自分を隠して生きてきた。本当なら影胤に対抗することができたのに、心のどこかではどうせ光輝や他の誰かが解決してくれると他人任せにして逃げてしまった。その代償がこの結果を招いたともいえたのだ。

「それだけじゃない、この前の戦闘の映像を見せてもらったよ。彼女はあんた庇って戦ってたじゃねえか、そのせいで追わなくてもいい怪我をしていた！あの子にとってあんたは足枷にしかなくてないんだよ！」

力の限り声を張らして叫ぶ優。胸倉を掴む手は更に力が籠り、蓮太郎は息苦しさを感じる。だが、それに負けないように再び胸倉を掴むんで引き寄せようとする蓮太郎。対する優も、蓮太郎の胸倉を引き寄せたことで顔を突き合わせる形になった。

「テメエに、俺の何が分かる！好きで手に入れたもんじゃねえんだよ！周りから化け物みたいに見られるんだぞ！おまけに、光輝のようにできもしないことを勝手に期待されるのはうんざりなんだよ！俺はアニメや漫画に出てくるヒーローじゃねえんだよ!!」

優に負けないかのように蓮太郎が叫ぶと、優も張り合うように叫び返す。

「分かんないねあんたみたいな腰抜けなんて！そんな怖いなら、自分の命を懸けて守ることもできないならコンビを解消しちまえ!!代わりには僕が守るから!!」

「何!？」

予想外の言葉に目を見開く蓮太郎。それに構わず優は言葉が続ける。

「多くなつたイニシエーターを活かそうと、民警でなく自衛隊員ともコンビを組ませようって話があるのさ。その試験を僕達A.I.V.I.Sがすることになつてるから、僕が藍原さんと組んで彼女を守つてやるよ!」

叫び過ぎたのか息を切らす優に、蓮太郎は胸の奥から湧き上がって来る何かを感じ取っていた。

「——ぎげんな」

気づけば無意識に口から言葉が漏れ出ていた。それと同時に空いていた右手を力の限り握り締めて振りかざしていた。まるで噴火する溶岩のように湧き出る想いを止めることはできなかった。

「ふざけんじゃねえええ×ええええ!!」

右手で優の頬を殴り飛ばす蓮太郎。優は受け身も取らず、そのまま勢いよく仰向けに地面に倒れる。それと同時に周囲が騒然とする。

「延珠を守るのは俺の役目だ!他の誰にも渡さねえ!!」

肩で息をしながら優を見下ろす蓮太郎。その目には先程までとは違い確かな決意が宿っていた。

「優!」

その光景を見ていた若葉が駆けだそうとするも、光輝に手で制される。

「だったら証明してみせろ。せめてあの子のヒーローくらいにはなれるだろ?」

「:言われなくてもやってやるよ」

倒れたまま言い放つ優に、蓮太郎は右手を突き出しながら応じると踵を返して立ち去っていく。

それから暫しの沈黙が訪れるも、それを破つて若葉が人混みを掻き分けて駆け寄り優を抱え起こす。

「大丈夫か優!？」

「うん、大丈夫だよ若葉」

口の中を切ったようで、口から流れる血を袖で拭う優の顔を心配そ

うに覗き込む若葉。優はそんな彼女を安心させようと微笑みかける。そんな彼に歩み寄ってきた光輝が手を差し出す。

「いい演技だったな。役者でもやっていけるぞお前」

「笑えないよ、その冗談」

愉快そうな笑みを浮かべている光輝に、ジト目で見上げながら手を掴んで引き起こされる優。

「…今のは敢えてあの人を挑発したんですか？本心を引き出すために」

「ただ言いたいことをいっただけですよ上里さん」

「それでも、もつとやり方があったのでは？」

得心がいったといった様子ひなたに、飄々と答える優。そんな彼の腫れた頬を見ながら責めるようにひなたは問いかけた。

「…不器用なので」

自嘲気味に肩を竦ませて優が答えると、ひなたは不服そうに眉を顰める。

「ま、前に悪く言ったが。東京エリアにも『子供達』を大切に想っている人もいるってことを、お前さんらに知ってもらいたかったんだよこの馬鹿は」

重苦しくなった場の空気を変えるように茶化すように話す光輝に、優が言うなよ！と言いたげに覗む。だが、どこ吹く風といった様子で受け流される。

「っーか、何がどうなってんだ？タマ達にも分かるように説明してくれ」

「ああ、実はな…」

ここに至るまでの経緯を彼女らに説明する光輝。

「そんなことが…。でも、私も自分を傷つけるようなやり方はよくないと思うな蒼希君」

事情を把握した友奈が沈痛な趣で話す。理由どうあれ友人が傷つく姿を見たくはなかった。他の者達も同様に心配そうに優を見ている。その視線に優は何も言わずに背を向けてしまう。

「…さて、後はなるようにしかならんか」

そんな相方に溜息をつく。光輝は事の一部始終を聞いていた少女がいる政庁に、視線を向けながら呟くのであった。

第十五話

騒動の翌日。光輝はバイクに乗り、勾田区にある小学校近くを訪れていた。

「…本当にいいのか？」

サイドカーから降りた延珠に問いかける光輝。その目はどこか不安そうであった。

「うむ。妾はもう一度信じたい、また共に笑い合えることを」

覚悟を決めた様に頷く延珠。そんな彼女にこれ以上何か言うのは失礼だなと判断し、頭を軽く撫でるに留めた。

「そうか、頑張れよ」

「うむ！色々世話になったな光輝！この礼はいつか必ずするぞ！」

ぺこりと頭を下げると、満面の笑みを浮かべて校門へと駆けていく延珠の背中を見送る光輝。

「……」

長野エリアで蓮太郎の言葉を聞いた彼女は、再び学校へ通うことを決めた。再び人を信じ手を取り合いたいと願ったのだ。立ち止まらず、前に進むことを選んだのだ。

だが――

「(その願いは叶わないだろうな…)」

今の世界には彼女達を受け入れるための体制、人々の意識の改革。あらゆるものが不足していた。例え彼女が手を差し出しても拒絶されるだろう、心無い罵声を浴びせられるだろう。

止めるべきだったかと、今更ながら後悔の念を抱いてしまう。

そんな彼のPDAが着信を伝える。ポケットから取り出し画面を見ると、董からであった。

「はい、光輝です」

『私だ。例の感染源が見つかった。君達の出番だ』

「了解。すぐに戻ります」

通話を切るとバイクを走らせる光輝。小さくとも強き子に負けまいと、彼も前へと進み続けるのだ。

「作戦を確認するぞ」

輸送機内でエンジン音に負けないよう声を張り上げトウガ。彼の目の前には自分と同じシナジエティックスーツを纏った優と、戦闘態勢の四国・長野の勇者達がいた。

「索敵部隊が対象のガストレアを発見した。現在三十二区を飛行して移動中だ」

「飛行？対象ってステージIのクモ型なんだよね？」

光輝の説明に首を傾げる友奈。クモとは地に足をつけて移動する生物である、それはベースとなった生物と同じ特性を持つステージIも変わらないことであった。

「対象は巣をハングライダーのように用いて揚力で飛んでいるそう。市街地の監視カメラは上から見下ろすように設置されているからな、今まで見つからなかったのも道理だ」

今頃担当者部署は責任の押し付け合いで忙しいだろうなとぼやく光輝。まあ、今はどうでもいいことなので話を戻そうと考える。

「既に民警も動いている。彼らと連携し、目標を撃滅して七星の遺産を確保する」

「連携？できるの？」

キョトンとした顔で問いかけてくる優。防衛省での一件で民警からの印象は最悪となっている。プライドの高い彼らが素直に協力するとは思えなかったからだ。

「するんだよ。使える者は活用せんとな」

無論そんなことは光輝は織り込み済みである。仲良くできないのなら、それを想定して動くまでの話である。

「対象の撃滅は民警に任せる。俺達は横合いから遺産を掠め取ろうとしてくる蛭子親子を叩き潰す」

「どうして横取りしてくるって言いきれんだ？」

「少数である自分達で探すより、私達に見つけさせた方が楽できるからだと思うよタマっち先輩」

「そうだ。そして奴ら、後出しになっても勝てると思っていやがるのさ」

杏の説明を光輝が肯定すると、へくと納得する球子。

「また、蛭子親子の協力者とも戦闘になる可能性が濃厚だ、各自留意せよ」

「OK、任せて光輝」

金糸梅をモチーフにした勇者装束を身に纏った歌野が、サムズアツプしながら応える。

すると、壁に設置されている内線電話が鳴りだす。

「こちら貨物室」

『まもなく着陸地点に到着しますので出撃準備を』

「了解した。協力に感謝する」

パイロットからの通信を終えると、光輝と優はハンガーに固定されている機体に取り込み、勇者らは衝撃に備えて手すりを掴む。ちなみにマーク・ツヴァイは今回もB型装備に換装されていた。

本来ならいつものようにパラシュート降下と行きたいところだが、勇者らは経験どころか訓練も受けていないため今回は輸送機ごと地上に降りざるを得なかった。

遊撃戦力として展開力が求められるAlvisとは違い、主力として最前線に立ち敵を迎撃する陣地防御主体の勇者とでは運用方法が異なるため仕方のないことと言えた。

『Command post Pよりマーク・ツヴァイ聞こえますか?』

『こちらマーク・ツヴァイ。多少悪いが聞こえている』

輸送機から降りたツヴァイは、輸送機でオペレータを務めているひなたや水都との通信状態を確認する。

勇者つきの巫女は戦闘時のオペレータも兼任しており、今作戦ではAlvisも含めたオペレータとして参加していた。

『雨か、ついていないな…』

雨に打たれる感覚に軽く舌打ちするツヴァイ。輸送機で移動して

いる最中から天候が豪雨に変わり、衛星が使用できなくなったため、対象の正確な位置の把握が不可能となってしまうていた。

『ツH ^{headquarters} Q より入電！里見・藍原ペアが対象を捕捉し戦闘状態となった模様！座標を送ります！』

『少し離れているか。他の民警はどうか？』

『それが、反応が次々に途絶しています！』

切羽詰った様子の水都の報告を受け、内心来たかと状況を飲み込む光輝。

『仕掛けてきたぞ！アイン、乃木、高嶋、白鳥を連れて先行しろ！』

『了解。マーク・アイン先行する』

アインを筆頭に機動力の高い者を先行させる光輝。ここからは時間との勝負であった。

『最短を突っ切るよ、着いてきて』

アインは跳躍すると木の枝を飛び移って移動していくのを若葉達も続く。

本能的に最短で進める枝を見極めていくアイン。時には幹を足場にした逆さまになって枝を蹴ったりと変則的な機動を描く。

「わわ、蒼希君も若葉ちゃんも早いよ！」

若葉は難なくアインの動きをトレースして着いて来れるも、友奈と歌野はそうもいかず距離が離れ始める。

「以心伝心って感じね。友奈さんごめんなさい、先に行くわね！」

そう言って張り合うように歌野は速度を上げると、アインの動きをトレースし始める。

「わ〜！待ってよお！」

慌てたように友奈も徐々にだが、トレースを始め追いついていく。『！』

アインが咄嗟にロングソードを手にすると、飛来してきた円盤状の物体を弾いた。

アインらが地面に降りると木々の奥から複数の人影が姿を現す。その中には防衛省で見かけたフード姿の者達もいた。人類革新連盟特殊作戦部隊F u h r e nの面々である。

『蛭子親子の協力者さん、かな?』

「これから死んでく奴に、いちいち答えるかよ」

現れた1人——クロヴァンがクラッシャー型ハンドレッド
オルトロス・リベリオ
『叛逆の双刃』の切っ先を向けてくる。

『ならば貴様らが死ぬ』

アインら背後から飛び出してきたツヴァイが、両手に持ったガルド44をクロヴァンら目がけて浴びせかける。

「うお!」

クロヴァンは手にしている双刃の大剣を盾にして防ぎ、残りの者達は跳んで避ける。

着地と同時にマガジンを交換したツヴァイは再び発砲する。

「ああもう、バカスカ撃つなこの!」

苛立ったナクリーが、最初にアインが弾いたのと同型のダンサー型ハンドレッド『双剋の武輪』デュオ・ヴァルガをツヴァイ目がけて投擲した。

2つの光輪は左右から挟み込むようにして迫り、ツヴァイはライフで撃ち落とそうとするも、光輪の勢いは衰えることなく迫ってくる。

『チッ!』

ツヴァイは一方を回避し、残りを左腕のシールドで受け流すも、勢いに押されて僅かだが態勢が崩れてしまう。

『ツヴァイ!』

アインらがカバーに動こうとするも、ネサットが展開したドラグーン型ハンドレッドの弾幕に阻まれてしまう。

「そら、もういっちょよ!」

そこにすかさずナクリーが戻ってきた光輪を投擲しようとするも、飛来した円盤を光輪を受け止めたことで阻まれる。

「大丈夫か光輝!」

『ああ、助かった。だが、ファフナーに乗っている時は機体名で呼んでくれ』

ワイヤーを引いて旋刃盤を回収する球子に、一応念を押すツヴァ

イ。

『どうする突破する?』

『いや、このまま目の前の糞共を叩き潰す』

戦闘態勢に入ったアインが、ツヴァイに提案するも却下される。

「でもツヴァイさん、我々の目的は遺産の確保では…」

『構わんよ伊予島。そちらは蓮太郎さん達に任せる』

蛭子親子の姿が見えないことから、遺産の確保に向かっている蓮太郎ら襲撃しようとしているのだろう。

目の前にいる者達の狙いは明らかにこちらの足止めであり。この辺りに展開していた民警は蓮太郎と延珠のコンビしか残されておらず、すぐにでも援護に向かうべきであるのだが、ツヴァイは目の前の敵の撃破を優先している。

「ハッ、あんなただの人間が機械化兵士に勝てる訳ないじゃん」

そんな判断をするツヴァイをナクリーが馬鹿にしたように嗤う――

そんな彼女をツヴァイは盛大に鼻で嗤った。

「あ？何がおかしいんだよ？」

「ただの人間など、もうこの戦場にはおらんよ」

「何？」

愉快そうに笑うツヴァイに、苛立ったように睨みつけるナクリー。

そして、ツヴァイの放った言葉にギンバイカが反応した。

F u h r e nの面々は訝しんだり不快そうな目を向けており、味方である若葉らは困惑している中——アインだけは意味を理解しているのか平然としていた。

『ここにいるのは俺達因子持ちと勇者、スレイヤーに『子供達』——そして機械化兵士だけだ』

その言葉と共にF u h r e nの後方から爆音が何度か響くと、何かの木々を薙ぎ倒しながら吹き飛んできて彼らの側に地面を削りながら停止する。

「蛭子、影胤!」

吹き飛んできたものを認識したクロヴァンがその名を口にした。

「ガハッ！」

影胤は吐血しながら膝を着くのだった。

時は少し遡り――

最悪。今の蓮太郎がおかれた状況を一言で表すと、それしか思い当たる言葉はなかった。

延珠と共に木更が手配したドクターヘリで現場に急行し、対象のガストレアの駆除と遺産の入ったケースの確保に成功した。だが――

「やあ、蓮太郎君。また会えて嬉しいよ」

「延珠、ミツケタツ」

それを見計らったように奇襲してきた蛭子親子。間一髪で避けられたものの、不利な状況は変わらなかった。

「蛭子、影胤ッ」

「君のところの社長さん、可愛いのにやること結構えげつないね。私の後援者についてなりふり構わず嗅ぎまわっていてね。彼らからお達しだ。早く片付けろとね」

今までとは違う明確な殺気を感じ取り、蓮太郎は手にしていたケースを延珠に預け一歩前に出る。それを見た影胤はほう、と感心したように声を漏らす。

「君達だけで我々と戦う気かね？ 言っておくが、近くにいた雑魚民警はあらかた殺しながら来た。頼みにしているだろう A l v i s は私の協

力者が相手をしている。彼らでも一筋縄ではいかないだろうねえ」

影胤が絶望を告げるように愉快に語るが、民警については奴の服に着いている返り血を見て期待していないし、Alvisは協力者がいる時点で予想はできていた。

「言われなくても分かってたんだよクソツたれ。何も時間を稼ごうとかなんて考えちやいねえよ」

そう言いながら蓮太郎は制服の右腕と右足の裾を捲り上げる。

「ふむ、ではどうすると言うのかね？」

「決まってるだろ、テメエをぶつ倒すんだよ蛭子影胤ツ!!」

右腕を突き出しながら宣言する蓮太郎。

対する影胤は愚かと嗤う。どう足掻こうが彼我の戦力差は歴然、勝負は既に決して――

「何？」

蓮太郎に起きた変化に影胤は目を見開く。露出された右腕と右足の皮膚から亀裂が走り剥離していく。そこから現れたのは、光沢のある黒色の義肢であった。更に、左目は幾何学的な模様が浮かび上がる義眼が本来の姿を現していた。

「バラニウムの義肢、だと…？里見君、まさか君も？」

その姿を見た影胤は小さく体を震わせていた。

「名乗るぞ影胤。元陸上自衛隊東部方面隊第七八七機械化特殊部隊

『新人類創造計画』里見蓮太郎」

影胤が両手を広げ、けたたましい笑い声をあげ始めた。

「そうかそうかそうだったのかツ、一目見た時からなぜか君が気に入っていたが、まさか本当に同類だとは！ヒヒ、ヒハハハハッ！」

蓮太郎の背後にいた延珠が悲鳴を上げた。

「蓮太郎、もう二度とそれは使わないって――ツ」

「いいんだ、…いいんだよ。もう、うだうだと言いついて逃げるのは止めだ。この力と向き合って俺は進むツ！」

蓮太郎が歩み出るのに合わせて、影胤が先手を取る。

「マキシマムペインツ！――潰れるおおおッ」

薙ぎ払うように腕を振るうと青白いフィールドが扇状に膨張し、恐

ろしい勢いで蓮太郎に殺到する。

「——天童式戦闘術一の型三番ッ」

天童式戦闘術——

天童家に伝わる武術の1つで、徒手格闘に重きを置いた流派である。

パンという炸裂音が響き、腕部の疑似尺骨神経に沿うように伸びたエキストラクター—黄金色の空葉莢を掴みだし、回転しながら蹴りだされる。

『轆轤鹿伏鬼』ッ」

カートリッジ推進力により加速された蓮太郎の爆速の拳が、迫りくる圧殺の壁に捻り込まれ貫通。インパクト面が爆発し、双方が吹き飛ばされるのであった。

「マキシマムペインを破ったのか…ッ」

「パパあッ!!」

影胤が吹き飛んできた方から、相方の小比奈が慌てて飛び出し、くると、事態が呑み込めず啞然としているFuhrenの面々を無視して影胤に駆け寄る。

「一体何が…」

ナクリーが困惑を口にする、再び影胤が吹き飛んできた方から蓮太郎と延珠が飛び出してくる。

「バラニウムの義肢と義眼ツ。まさか、あなたも機械化兵士——!？」

蓮太郎の姿を変化に気づいたネサットが目を見開く。その反応を楽しむようにツヴァイは蓮太郎に歩み寄る。

『お帰りなさい蓮太郎さん。今の気分はいかがですか?』

今の蓮太郎からは覇気のない昼行灯だった頃の面影はなく、かつての『人』であった頃の活気に満ち溢れていた。ツヴァイが慕う本当の里見蓮太郎が帰ってきたのだ。

そんな彼に思わず右拳を差し出すツヴァイ。

「…お前の思惑通り、てのが正直癪だが。まあ、悪い気分じゃねえな」ムスツとした目をツヴァイに向けるも、どこか清々しさを見せながら拳を合わせる蓮太郎。

「おい、どうなってるんだよねーちゃん!向こうにも機械化兵士がいるなんて聞いてねえぜ!？」

「…私にも分からない」

動揺を隠せないクロヴァンがリーダー役であるネサットに問うも、彼女も知らされておらず首を横に振るしかなかった。

「どうやらアレがあちらさんの切り札みたいですなあ。いやはや、見事に裏をかかれたね」

ペチュニアは取り乱す様子もなく、肩を竦めながら軽薄口調で語る。だが、その声音は凍土のように冷え切っていた。

『延珠ケースを伊予島に渡せ。伊予島はケースを守ることに専念せよ、土居は彼女の護衛に着け。残りは奴らを潰すぞ』

ツヴァイの指示に合わせてA I v i s 側が行動に移る。

「…こりやこつちも本気でやるしかないね」

「ああ。しゃあねえ、やるか」

冷静さを取り戻したナクリーとクロヴァンが獰猛な笑みを浮かべる。状況的にF u h r e n 側が不利となっているにも関わらず、どこか余裕が感じられた。

『そう早まるなお前ら。パーティーにはまだ早いぞ』

「え？」

突如背後か聞こえた声に杏が思わず振り返ると、見たことのない

フアフナーがすぐ目の前に立っていた。

「キャ!？」

「あんず!？」

悲鳴に反応した球子が後ずさる彼女の前に立って、武器を構えなら謎のフアフナーを睨みつける。その姿はメガセリオン・モデルをベースとしているが、細部がノートウング・モデルと同様の形状となっていた。

『そう睨みつけなさんなお嬢ちゃん。これさえ貰えればこの場ではこれ以上戦り合う気はないからさ』

そう言つて謎のフアフナーは左手に持っている、杏が抱えていたのと同じケースを掲げる。

「え?あれ、あれ!？」

そこで杏は、自分が抱えていたケースがなくなっていることに気がつく。

「この返せドロボー!」

延珠が能力を開放し、瞳が真紅に輝くと同時に跳躍すると、一瞬で謎のフアフナーへと肉薄し跳び蹴りを放つが。蹴りが当たる直前に謎のフアフナーの姿が掻き消えた。

「な!？」

『いい蹴りだねえ。まだ、有望な民警がこのエリアにいるとは嬉しい限りだよ』

姿を探す延珠の頭上から声がし、そちらを視線を向けると枝の上にも謎のフアフナーの姿があつた。

「なんだお主は!?!そいつらも仲間か!」

蛭子親子とF u h r e nの面々を指さしながら問いかける延珠に、いかにも、と頷く謎のフアフナー

『人類革新連盟特殊作戦部隊F u h r e n隊長日野道陽だ。ちなみその変態仮面は利用価値があるから手を貸しているだけで仲間じゃないんでっ』

言い切る前に発砲音がし、道陽が僅かに首を傾けると。顔があつた位置を弾丸が通過し背後の幹にめり込んだ。

『日野道陽イ。遂に見つけたぞ、このお裏切り者がア!!』

ツヴァイが彼とは思えない程に激昂しながらライフルを道陽へ向けトリガーを引こうとする。だが、道陽がケースを盾にするように見せつけると指の動きを止める。

『どうした撃たんのか? ああ、こいつを無傷で持ち帰れって言われてんのかあ。無理難題を押し付けられて大変だねえ』

『——ツツツ!』

嘲笑うような道陽の態度に、ツヴァイは歯が砕けるのではないかという程に噛みしめる。

『おっと』

いつの間にか、側面に迫っていたアインが横薙ぎに振るったロングソードの刃を、右手の人差し指と中指で挟んで受け止める道陽。

『躊躇いがあり過ぎだ、この馬鹿タレがア!!』

『ガあ!?!』

腹部に蹴りを入れると、サッカーボールのように吹き飛び、地面をバウンドしながら木に叩きつけられるアイン。

「アイン!?!」

重力に従い崩れ落ちるアインに、若葉が慌てて駆け寄る。

『まったく、しょうがない奴め。にしてもそんな隠し玉を持っているなんて、流石に予想外だったぞ光輝よ』

アインに呆れの混ざった目を向けると、今度は蓮太郎を興味深そうに見つめる道陽。

「ツ!」

軽薄そうな態度と裏腹に、まるで影胤と対峙するのと同等の威圧感を感じ取り、冷や汗が流れる蓮太郎。

『今回俺は働く気がなかったんだが。まあ、何事も思い通りにはいかんか。さて、そろそろ帰るぞお前ら』

「いいのか? ここでこいつらを潰しちまった方がいいんじゃないかねえか?」

『こらこら、目的を忘れるんじゃないよクロヴァン君。それにどうせそっちから来てくれんだ、潰すのはその時にすりゃいい。変態仮面も

それでいいな？ま、残るなら置いてくがな』

枝から飛び降りF u h r e nの面々の側に着地した道陽は影胤に撤退を促す。

「…スポンサーの意向もあるのなら仕方がないか。残念だが里見君、決着は暫しお預けだ」

渋々といった様子で恭しく頭を垂れてくる影胤に、蓮太郎は逃がすまいと駆け出す。

「逃がすか影胤！」

『それじゃサラバダー諸君！ドロンとなあ！』

道陽が小型の球状の物体を足元の地面に叩きつけると、白色の煙が辺りに立ちこめ視界が塞がれてしまう。

「クソツ、煙幕か！」

煙が晴れていくと、蛭子親子とF u h r e nの面々の姿はなくなっていた。

「どうする追うか!？」

『…藪蛇にしかならん。俺達の負けだ、クソがア!!』

苛立ちをぶつけるようにツヴァイが近くの木に蹴りを入れると、バキバキツと音を立てながら木がへし折れて倒れる。

普段の彼からは想像のできない感情的な姿に、他の者達は困惑の色を浮かべる。

「大丈夫かアイン？」

『うん、大丈夫だよ若葉』

若葉にを抱え起こされたアインは、彼女を安心させるように微笑む。だが、若葉にはどこか無理をしているようにしか見えなかった。

「なあ、アイン。あの日野道陽と名乗った者は知り合いなのか？」

若葉は、道陽が現れてからのアインとツヴァイの様子に変化が気になり問いかけると。アインは悩む素振りを見せるも、暫しすると口を開いた。

『あの人はA l i v i sの前隊長であり、僕とツヴァイに戦うのに必要なことを教えてくれた人で、僕は兄のように慕っているんだ。多分ツヴァイもそうだと思う』

どこか寂しそうに語るアイン。そんな彼の心情を表すように、雨は更に強まるのであった。

第十六話

任務を終え、蓮太郎と延珠を連れて横浜基地へと帰還したAlvi
s一同。

地下専用ルームにて、治療を終えた優は共用エリアへ戻ると、室内は重苦しい雰囲気にもまれていた。

「?どうしたの皆?」

「あゝ、それがな…」

優が不思議そうに問いかけると、壁に背を預けている蓮太郎が気ま
ずそうに視線を椅子に腰かけている杏に向ける。

彼女は俯いた状態で両手で顔を覆っており、どうやら泣いているよ
うだ。

「泣くなつて、あんずのせいじゃないんだから…」

「でも、わた…しが、もつと、しつかり…してれば、こんなことには…
!」

「そんなことないよ!アンちゃんは今一杯頑張ったよ!」

勇者組が必死に宥めているようだが、杏が泣き止む様子はなかつ
た。

「どうしたんですか、伊予島さん?」

「いや、自分のせいでケースを奪われたって責任感じてんだろうが」

キョトンとした様子で問いかけてくる優に、蓮太郎が何いってんだ
と言いたそうに返す。

自分のミスで、東京エリアが滅亡するかもしれない事態となったの
だ。責任感の強い彼女には、耐えがたいものがあるだろう。勇者と
言っても、心は年端も行かない少女なのだから。

「光輝はなんて?」

「あいつは上と今後のことを話してくるつつて出てったが」

「じゃあ、大丈夫だよ伊予島さん。彼が次を考えているんだから、まだ
終わりじゃないよ」

杏の前にしやがみ込むと優しく語り掛ける優。

「でも、私の…せいで、誰かが、死ん…じゃったら…」

「そうだね。次の作戦で、多分誰かが死ぬことになると思う」

「ツ——！」

「おい、お前!!」

顔を青ざめて息を詰まらせる杏を見て、優に詰め寄ろうとする珠子を若葉が手で制した。

「若葉ツ！」

「私達が優しい言葉をいくらかけても、今の杏には意味がない。今必要なのは、厳しくも彼女を思いやれる言葉だ。それには優に任せるのが一番だろう」

自分達でも杏の心を癒すことはできるだろう。だが、それでは時間がかかってしまう。一刻を争う現状その余裕がとてでもないがなかった。

今求められるのは早急に彼女を立ち直らせること。だが、絆が強いからこそ、自分達ではどうしても心に甘さが出てしまい、杏もそれに縋ってしまう。この場で彼女のために心を鬼にできるのは優だけだろうと若葉は考えたのだ。

そのことが理解できたのか、珠子は不安ながらも見守ることにしたようだ。

「それが君のせいだと言う人もがいるかもしれないし、そうなのかもしれないね。少なくとも僕は否定することはできない」
「……」

容赦ない言葉に俯く杏。そんな彼女の手に、でもね、と優は自分の手を重ねる。

「だからと言って、何もしないのはもつと辛くなるんじゃないかな。それよりも、できることを精一杯頑張った方が犠牲になった人も喜んでくれると思うんだ」

「でも……」

優の言い分に納得しきれないの様子。の杏。

「立ち止まって後悔することはいつでもできるよ。でも、反省して前に進めるのは今しかないと思うんだ」

「前に進めるのは、今……」

「うん。僕もね、自分が許せなくなるような失敗をしてしまったことがあるんだ」

自嘲するように語る優。恐らく、バーテックスが初めて現れた日のことを言っているのだろう。

「もう僕は後悔しかないけど、伊予島さんにはそうなってほしくないんだ」

「蒼希さん、あなたは——」

杏が何か言おうとするも、通信室から光輝が出てきたことで遮られた。

「お取込み中悪いが、次の作戦が決まったぞ。説明するから来てくれ」
「わかった。行こう伊予島さん」

「あ、はい」

握っていた手を放さずに引いていく優。突然のことに杏は驚くも、手から伝わる温もりが心地よくて嫌な気はせず思わず握り返す。

「なあ、若葉。蒼希つてさ……」

「言うな、何も言うな」

そんな2人を見ていた珠子が何かを察したように問いかけると、若葉は複雑な表情で片手で目元を覆うのだった。

通信室にて椅子に腰かけた若葉ら勇者組と、蓮太郎・延珠コンビ、そして光輝と優はモニターの側に控えていた。

モニターにはエリア代表である聖天子が移されており、その顔は心なしか疲労の色が伺えた。

『皆さんお集り頂き感謝します。これより『蛭子影胤追撃作戦』の説明をさせて頂きます』

聖天子の言葉に合わせて、モニターに地図が表示された。

『現在蛭子親子は房総半島内に潜んでおり、これを選抜された里見さん含む民警とAivis、そして勇者の皆さんで追撃、彼らの無力化ないし撃破し、遺産を確保します』

地図に蛭子親子が潜伏しているとされる地点が点滅し、そこへ向け

て東京エリア側のルートと見られる矢印線が追加された。

「それで要請していたものは？」

『…最悪の場合、遺産の破壊の許可と、それに伴いあなたの機体の重武装形態A型装備の使用の承認を菊之丞さんから取り付けました』

「結構。これで誠心誠意任務に励めます」

待ち望んだ言葉に、満足げに口元に笑みを浮かべる光輝。

『…言っておきますが、破壊は最後の手段ですよ？』

「相手が相手なので方が一流れ弾で——なんてことがあるかもしれない
せんがね」

目を細めて釘を刺す聖天子だが、光輝は不敵な笑みを浮かべながら
応える。…彼女の疲労の幾分かは、この件のせいなのかもしれない。

「聖天子様、ちよつといいか？」

『はい、何でしょうか里見さん？』

「蛭子影胤だが、あんたら政府は奴のことをずっと前から把握してい
た筈だ。なのに何故なんの対策しなかった？」

蓮太郎始め、今回の作戦に参加する一部の者に開示された蛭子影胤
の情報には。彼が十年前に政府系の病院から脱走したとあった。本
来ならその時点で手を打って然るべきであっただろう。

『里見さん、『新人類創造計画』は存在しない計画です。存在しない兵
士は脱走できません』

『ざけんじゃねえよ！何人殺されたと思っただッ！全部あんたらの
せいだッ！その子だって流さなくていい涙を流したんだぞ!!』

椅子から立ち上がると、杏に視線を向けながら怒鳴り散らす蓮太
郎。聖天子はその怒りは最もだと言うように反論することなく、甘ん
じてその言葉を受け止めていた。

「言っておきますと、そうしたのは当時の聖天子さん方であって、我ら
が主人は無関係なのですがね。防衛省での対応や、先程話した遺産の
破壊許可なんか頑張ってますよ主人は」

場を和ませようとしたのか、おちやらけたように言う光輝。

『いえ、過去の聖天子が残した負の遺産も含めて、わたくしは継承しま
した。今回の件も全ての罪はわたくしにあります』

強い決意の籠った目で語る聖天子。その目を見た蓮太郎は、これ以上彼女を責める気がせず、やり場のなくなつた怒りを発散するように、腕を組みながらドカツと音を鳴らしながら椅子に座つた。

『ですので伊予島さん、あなたが責任を感じる必要はありません』

「いえ、そんな…」

聖天子としては少しでも友人を励まそうとするも、相手が相手だけに恐縮してしまう杏。

「気にすんな、こいつは自分を責めるのが好きだからな。いわゆるマゾだ」

『わたくしだって怒ることがありますよ光輝？それと今は公務中です』

「おつと失礼」

愉快そうな笑みを浮かべている光輝に、ジト目を向ける聖天子。この瞬間は2人とも年相応の友人同士に見えた。

「それと優、冗談だから睨むな」

刺すような視線を向けてくる隣の相方に、軽く息を吐く光輝。

「たく、お前ら真面目過ぎるんだよ。もつと肩の荷を降ろしていけよ。だいたい今回の件など、事件起こした奴が全部悪いんだよ」

「確かにそうだが、それを言ったら今までのやり取りが全部台無しになるだろ!?!」

身も蓋もないことをぶつちやけた弟分に、ツツコミを入れる蓮太郎。

「いいんですよ、どいつもこいつも辛気臭過ぎて、フォローすのに疲れるつたらありやしねえんだよ。メンドクセエ」

「わー?! わー! ストレス貯め過ぎて、漏れちゃいけないのが漏れてるよー?!?!」

ストレスのダムが決壊しかけた相方を、全力で止めに入る優であった。

横浜基地滑走にて、輸送機を待つ一同。最後の装備の確認をする者

や、たわいもない会話で緊張を紛らわせようとそれぞれしている中。光輝は人気のない施設の裏手に1人いた。

腕を組み壁に背を預けて目を伏せていると、足音が聞こえてきたので目を開けそちらに視線を向ける。

「ごめんなさい、待たせたわね」

姿を現したのは姉である木更であった。作戦前に話したいことがあったため合流してもらったのである。

だが、彼女からは普段の穏やかさはなく、どこか張り詰めた気配を纏っていた。

「いえ、お気になさらず。愛の告白なんですから当然でしょう」

「違うわよ、お馬鹿!!」

壁から背を話して向き合うと、からかうように笑みを浮かべる弟に、顔を赤くしながらツツコミを入れる木更。

先程まで蓮太郎と会っていたことを茶化したのが、実際のところ姉も蓮太郎も互いを幼い頃から想い合っていることを光輝は知っていた。

だが、色々な事情が重なり、一向に歩み寄ろうとしない2人にハッキリ言って歯痒かった。光輝としては、さっさと所帯を持って民警を止めて平穩に過ごしてもらいたいのだ。

「今は冗談を言ってる時じゃないでしょう、もう…」

「冗談で言っただつもりはないですがね。これが今生の別れになるかもしれないんですよ?」

今回の作戦は東京エリアの存亡がかかっている。最悪どちらも死ぬか、蓮太郎が戦いの最中命を落とすこともないとは言い切れなかった。

後悔は残すべきでない目で語る光輝に、木更は首を横に振った。

「大丈夫、彼は必ず無事に帰って来るわ。こんなところで死ぬ人なんかを好きにはならないわ」

そう語る彼女の目には確かな信頼があった。それも確かなのだろうが、悪く言ってしまうと逃げる言い訳にしているとも言えなくもないのだが。

「もちろん光輝あなたもね。死んだら許さないからね」

「無論。やらねばならないことがありますからね。何より、老衰以外で死にたくはないので」

幼馴染と友と描いた夢のために、こんなところで死ぬなどごめん被る。そして、仲間を死なせるつもりも微塵もない。

「さて、名残惜しいですが。姉弟の仲睦まじい会話はこれくらいにして、本題に入りましょうか」

「ええ、そうね…」

本当に名残惜しそうに話す光輝。この後の会話の内容と結果が想像つくからであった。そして、それは木更も同じようであった。

「こちらに来る前に、電話で話していたことは本当なの？」

「ええ、蛭子影胤がステージVを呼び込むためにモノリスの外へ逃げ出したのと同時期に、マスコミ数社にそのことがリークされかけたそうです。幸い聖天子が素早く報道管制を引いたので拡散はしませんでした」

告げられた内容に、木更は顎に手を添えて思案顔になる。

ステージVの襲来——すなわちエリア滅亡の可能性がある。そんなことが知られれば、市民は恐慌状態に陥り取り返しのつかない事態となるだろう。そんなことをして益のある者などいない筈なのだ。

「妙ね。そんなことをしても得るものなんてないのに…」

「この事件、初めから妙なことばかりですけどね」

姉の言葉に、空を見上げながら意味深なことを返す光輝。そんな彼に木更は目線で続きを促した。

「今回の事件の発端となった七星の遺産の強奪、そもそもあれだけ重要度の高いブツがなぜあっさり奪われてしまったのかって話ですよ」

聖天子直轄の部隊にすら当初は秘匿されていた機密物が、いとも容易く奪われたことに光輝は引っかけかりを覚えていた。

「そして、あのクソ仮面がエリア内で好き勝手に動けたこと。加えてこちらが対象のガストレアを発見したのと同時に奴が動き出せたことも、本来ならありえないんですよ」

事態が進むごとに疑念は大きくなり、マスコミへのリークでそれは

確信へと変わった。

「…つまり、政府内に蛭子影胤の内通者がいるって言いたいのかね？」

「俺としては、あのクソ仮面はあくまで事態を動かすための駒と見ていますよ」

その言葉に木更が驚愕共にまさか、と漏らす。自分が辿り着いた結論を信じたくないようであった。

「光輝。あなたは、今回の事件を引き起こしたのは政府の人間だと言いたいのか？」

「仮に姉さんの言う通り政府内に内通者がいるとして、奴に流れた情報を知っているのは政府上層部——聖天子の側近というごく一握りです。そんな立場の者がスパイだったか、金に魂を売る輩だったらこのエリアはとつくに潰れていますよ。少なくともお爺様がそんなことを許す筈がない」

木更と光輝の祖父であり聖天子の右腕と言える天童菊之丞は、バアルによって分断される以前の日本政界で辣腕を振るい、多くの人間から畏怖されていた人物である。そして、何より現聖天子に絶対の忠誠を誓っているかの人物が生半可な者を側近に置くこと等考えられなかった。

「…光輝、あなたの推察通りなら今回の事件の首謀者は——」

「あくまで推測ですよ。証拠はない」

木更の言葉を遮るように話す光輝。その目には、迂闊なことは言うべきではないと語っていた。

「…そうね。分かった、私はその辺りについて調べてみるわ」

弟の意図を察し、自分のなすべきことを理解した木更は力強く頷いた。

「よろしくお願いします。資金が必要なら俺にツケておいてくれて構わないので。それでは、時間なので俺はいきます」

横を通り過ぎて去ろうとする光輝を、木更が呼び止めた。

「光輝。この事件の裏が私達の予想通りなら、チャンスになるかもしれないわ。お父様とお母様の敵討ちの」

弟の背中にそう語り掛ける木更の声音は冷え切っており、その目は

抜身の刃のように鋭くなっていた。

まるで何かに取り憑かれたかのように、鬼気迫る雰囲気纏う姉を見たくないかのように光輝は背を向けたままであった。

「前にも言いましたが、俺は姉さんのようには生きられませんよ」

「……」

継るような目を向けてくる姉を置いていくように、光輝はこんどこそ歩き去って行くのであった。

木更と別れた光輝は角を曲がると足を止めて、ある一点を見つめる。

「おい、出てきて構わんぞ」

視線の先に会った屋外用のゴミ箱の陰に語り掛けると、陰から人影が出てきた。

「よう」

光輝は出てきた人影——千景に気軽に話しかけるも、彼女はどこか気まずそうに視線を逸らしていた。

「……ごめんなさい、盗み聞きする気はなくて」

「別に謝ることはないが。優に迎えに行けとでも言われたのだろうか？」

何故分かったのかと言いたそうな顔をする千景。

彼女がこの場に居るのは。優から間もなく輸送機の準備が整うので、光輝を呼びに行くよう頼まれたからであった。

そして、伝えられた場所に向かったところ。木更と話しているのを見かけたが、声をかけられる雰囲気ではなく聞こえてきた内容に離れることもできなかつたのだ。

「あのアホめ、いらんことを……」

優には誰にも来させないように念を押していたのだが、何を考えたのか彼は背いたようだった。

「え？」

「いや、なんでもない。ちよつと来てくれ」

思わず漏れた本音を誤魔化すため歩き出した光輝に、千景は大人しく着いていく。

暫し歩くと、人気のないことを確認すると光輝は壁に背を預けて腕を組みながら千景に視線を向けた。

「聞いていたなら分かつているだろうが、一緒にいたのは天童木更、俺の姉だ。それと蓮太郎さんの所属している会社の社長でもある」

「民警の社長？」

不思議そうな顔をする千景。話を聞く限り、彼らの実家である天童家はかなり格式の高い一族であり、汚れ仕事と誹りをうけることもある民警に直接関わるとは思えなかった。

「なんで民警やっていいるのかと思うだろう。実はあの人実家と縁を切っけていな」

「え？」

「この発端は十年前。俺の家にガストレアが侵入し、父と母が殺害される事件が起こった」

「……!？」

告げられた内容の大きさに、千景は息をのんだ。そんな彼女を尻目に、光輝は話を続けた。

「俺はその時家を離れていたので無事だったが。両親は食い殺され、共に暮らしていた蓮太郎さんは姉さんを庇って右手と右足を食われ、左眼を抉り取られて瀕死となった」

「……」

余りの悲惨さに言葉が出ない千景。その顔は青白くなっており、吐き気を抑えるため手で口を覆っている。

「無理なら止めるが？」

そんな彼女を気遣い背中をさすりながら提案するも、千景は首を横に振る。最後まで聞きたい、そう目で訴える千景に、光輝は応じることにした。

「その後、蓮太郎さんは機械化兵士の処置を受けて助かったが。事件の一部始終を見ていた姉さんはストレスで持病の糖尿病が悪化し、腎臓の機能の殆どを喪失してしまった」

「…じゃあ、民警になったのって」

「両親の敵討ちをするためさ」

自分の手で両親の敵を討ちたい。そう思うのが普通なのであろう。千景には余り理解できないことではあったが。

「でも、実家と縁を切ったのはどうして？」

民警となった経緯は分かったものの、そのために実家と縁を切る必要はない筈である。

「あの事件は起きたのは偶然だったのか、姉さんは違うと考えたのさ」
「?どういうこと…」

「俺の家はエリアの中心部にあった。そんな場所にガストレアが現れたらお前は思う?」

「中心部に?そんなことが…」

モノリスとて万能ではなくどこかしらに穴があり、そこからガストレアが侵入することは珍しいことではない。ただし、それはモノリスに近い外縁部に限った話である。

エリアの中心部に近づくにつれ警戒は厳しくなっており、ガストレアが侵入したとしても中心部に接近する前に発見されて駆除されるのが普通であった。

「——意図的に見逃された、それならありえんことでもない」

「意図的、に?」

「何者かが父さん達を襲わせるために、ガストレアを招き入れたのではないという話さ」

「ちよつと、ちよつと待って」

話の内容に着いていけなくなったのか、片手で頭を抑えだす千景。

「可能性の話ってだけさ、証拠がある訳でもない。ただ、後で知ったことだが、父さんは当時実家や親類と何やら重大なことでかなり揉めていたみたいでな、目障りと考えていた者がいてもおかしくはない。そして、あんな事件を起こせるとしたら天童家以外いないのさ」

そこで言葉を区切ると、再び壁に背中を預け腕を組みながら空を見上げる光輝。

「だから姉さんは考えたのさ、実家や親類が何らかの理由で家族を消

すために、あの事件を起こしたってな」

「でも、証拠はないのでしょうか？」

「否定する証拠もない。それにそう思わないと耐えられないのさ」

「何に？」

「生きることにさ」

どこか憐憫の籠った目で話す光輝。それは姉に向けられたものなのだろうか…。

「愛する両親が無残に殺された現実には、壊れかけた心を繋ぐために目標が必要だったのさ。そしてあの人が見出したのが復讐だった。ガストレアと俺以外の天童の家の連中に復讐するために姉は生きようとしているのさ」

深く息を吐く光輝。姉が蓮太郎との仲を進めようとしもないのも、そんな生き方しかできなくなった自分が幸せになることが怖いのだろう。そんな彼女を救えるのは蓮太郎だけなのだが、奥手過ぎて一向に踏み込まないのが腹立たしくてしかたなかった。

「…あなたは、どうなの」

「む？」

「あなたは、その事件についてどう考えているの？」

無意識に震える声で千景は問いかけていた。『子供達』のことを楽しそうに話していた彼が、もし同じようなことを考えていたら自分は

「正直、どちらでもいい」

「え？」

だが、返ってきたのは全くの予想外のものであった。

「俺としては、あの事件に例え陰謀があろうと敵討ちをしたいとは思わん。薄情ではあるが、俺は過去のために生きたくはない」

姉に薄情者と罵られたがなと肩竦めながら、光輝は壁から離れると数歩歩き、千景に背を向ける形になる。

「前に言っただろう。『子供達』が差別されることなく、人として生きていける世界を作ると。俺はそのために生きていく」

そういつて向き直る光輝。その目には強い決意が宿っており、それ

を見た千景は不思議と安心感に包まれる。

そんな彼女に口元に笑みを浮かべると。光輝は腕時計で時間を確認すると、作戦の開始時間が迫っていた。

「さて、そろそろ時間だな。戻るとしようか」

頷く千景を連れて仲間の元に戻ると。光輝は右手の親指を立てて迎えてくれた命令違反者に、跳び蹴りで待機していた輸送機に叩きこんでやるのであった。

第十七話

「突然だが乃木君達に私のことを話しておきたい」
出発しようとする光輝らに董がそう語り掛ける。

「? 帰ってからじゃ駄目なのか?」

「君達のことを信じているけどね。残念ながらこの世に絶対はないからね。永遠の別れとなった時、後悔はしたくないのさ」

珠子の問いに、肩を竦めながら答える董。彼女なりに世の不条理を嘆いているようであった。

「それで、話とは?」

「ああ、実はね私はかつて新人類創造計画の最高責任者だったんだ」

董の告白に、初耳の若葉ら四国組に衝撃が走る。

「博士が、ですか…?」

「信じられない、と言いたそうだね。すまないが君達が思っている以上に私は醜い人間なのさ」

杏の言葉に、董は胸元からロケットを取り出すと、蓋を開け中身を彼女らに向ける。

「私の恋人だ。もつとも10年前に化け物共に殺されたがね。彼を失い生きる希望を失った私は、復讐することだけでしか生きれなくなつたのさ」

自嘲するように話す董。その瞳は後悔の色を浮かべていた。

「だから私は計画に参加し、一匹でも多くの奴らを殺してくれる『兵器』を生み出していった。人を救うべき医師であったのに、『人』を殺していったんだ。里見君を始め何人も何人も、ね」
「違つ」

董の言葉を蓮太郎が強く否定する。彼は一步前に出ると、真つすぐに董に目を見る。

「先生はガストレアに襲われて死にかけて俺を救ってくれた。それに、機械か兵士の手術を受けると決めたのは俺自身だ。他の奴だって先生はちゃんと選択肢を与えてくれていた、そうだろう?」

「そんなのは方便さ。どう取り繕うが私のしたことは許されることで

はないよ」

「…事実がどうであれ、結局のところは相手次第だと思えますよ。少なくともここに感謝している者がいる、それだけでもあなたのしてことは無駄ではなかったのでは？」

光輝の言葉に董は何も言わなかった。

「1つ質問なのですが、蛭子影胤の手術も博士が行ったのでしょうか？」

「いや、私ではないよ乃木君。彼の執刀医はアルブレヒト・グリューネワルト、全機械化兵士計画を統括していた人だ。彼は私や他の参加者のように、特定の地域に縛られず世界中で活動していたのだよ」

「彼はセカンド・アタック終結後、現在に至るまで行方不明とお聞きしていますよが」

「彼だけではなく、他の者達もそうさ。皆変わり者で人間嫌いなどころがあったからね。私だって日野先生やミツヒロ博士がいなくなっ
てしまい、その後を継がなければ今頃どこかの医科大学にでも籠って
陽の目の当たらない生活をしていただろうね」

そういつて肩を竦めると、董は腕に巻いている時計に目をやる。

「…私の話は終わりだ。乃木君達は私のことは軽蔑してくれても構わない、それだけのことをしたからね」

「ん〜昔はともかく、今の博士のことタマは好きだぞ。変なところはあるけど、優しくと一緒にいると面白いし色々教えてくれるし」

珠子が頭を掻きながら言う。話を全て理解はできていないようだが、今までの触れ合いから董のことを信じることを選んだようだ。

「歌野と水都はこのことを知っていたのだな」

「ええ、過去を悔やみ未来のために戦っている博士を、私もみーちゃんも信じることにしたの」

若葉の問いに、歌野が答える。2人の目には一点の偽りもなかった。

「ならば、私もあなたを信じます博士。過去ではなく、今を――
これから^未どう生きていくかが大切なのですから」

若葉の言葉に、他の者達も同意するように頷く。

そんな彼女らを、董は眩しいものを見るように目を細める。

「ありがとう。その信頼に応えられるよう私なりに足掻いていくよ。さあ、行きたまえ希望達よ、そして必ず無事に帰ってくるんだ。例えばどんな絶望が待っていても、私のように負けないでくれ」

それぞれが応えると、輸送機に乗り込んでいく若者達の背を、董は最後まで見送るのであった。

『以上が未踏破領域での注意事項だ。質問がある者はいるか?』

輸送機の格納庫内に、ツヴァイの声が響く。

四国の勇者と延珠が、未踏破領域へと足を踏み入れるのが初めてとなるため、必要な事項を説明していたのである。

いくつか出た質問が出ると、延珠がはい！と元気よく手を挙げた。

「この輸送機というのはやけに静かだな。先に乗ったヘリなんかは、かなりうるさかったが」

『こいつは司馬重工の最新型でな、消音性にも優れたのが特徴だな』

「ん、司馬重工?どこかで聞いたことがあるな」

『蓮太郎さんのスポンサーだ。正確にはその社長のご息女だが。出発前に色々手配して頂いたのでしょうか?』

その話題がでた途端蓮太郎が顔を顰める。

「別に頼んではねーよ。あっちが勝手に用意したんだよ、後で礼を言わせるためにな」

民警を始めたばかりの頃に、駄目元でスポンサー申請を送ってみたところ、社長の娘に将来性を見込まれて個人的に支援を受けているのである。

その見返りとして彼女の通う高校に通わされたり、自分の元に引き抜こうとして木更とじゃれ合ったり（銃や刀を使って）と、碌な目に会わないことが多いが。

『それだけ期待されているんですよ。ならばそれに応えるべきかと』

ツヴァイの言葉に、面倒臭そうに自分の頭を掻く蓮太郎。

昼行灯を気取っているが、性根は義理堅いので何だかんだで筋は通

すのだろうと、ツヴァイは内心考えていると。操縦室から降下地点に到達したことを通信が入る。

『よし、降りるぞー！総員用意!!』

解放されたハッチから、入り込んでくる気流によって響く轟音に負けないよう叫ぶツヴァイ。

今作戦が展開される地形は輸送機が降りられる平地がないため、パラシュートによる降下をせざるを得ないのである。

「ほ、ホントにあんな所に降りるのかよ!？」

ハッチから覗き込むように地上を見下ろす珠子が、不安を隠せず叫んだ。

まして眼下には、ジャングルのように木々が多い茂っており、とても安全に降りられるとは思えなかった。

慣れている歌野以外の勇者達も、多かれ少なかれ緊張しており――杏に至っては目に見えて怯えていて、彼女のために言っているようであった。

『訓練通りにやればいいんだよ！そうすりゃ、降りるだけで早々死にはせん！まして勇者として強化されてんだ！これくらいでビビってんじゃねえ！』

「そうだけどさー！」

弱気になつている珠子に、ツヴァイが遠慮なく怒鳴る。訓練こそ一応受けているも、実践となると否が応でも緊張してしまうのは無理もないのだが。指揮官としてはこんなところで躓いてはられないのも事実であった。

『僕が先に降りるから着いてきて！できるだけ安全な場所にするから！』

アインはそう告げるとロックを解除し、レールに沿ってハンガーごと後ろ向きに大空に飛び出していった。

「優ー！」

そんな彼を追って若葉が飛び出していく。

「あの幼馴染馬鹿、迷わず行きやがった…」

「悪いけど私も行かせてもらおうわね！」

小さくなっていくリーダーを呆れの割合が多いも関心していると、歌野が負けじといった様子で飛び出す。

「じゃあ、妾も！」

「あ、おい延珠！」

続いて待ちきれなくなった延珠が飛び出し、それに引っ張られるように蓮太郎が続く。

「私達も行くこうグンちゃん！」

「ええ」

自然と手を握った友奈と共に千景も飛び出していった。

「…タマ達も行くか」

「うん」

他の者達が降りていくのを見て不安が減ったようで、ハツチの縁まで歩く杏。珠子自身、何か躊躇っていたのが馬鹿らしくなったので、杏の隣に立ち僅かに震えている彼女の手を取ると飛び降りるのだった。

『……』

号令前に置いていかれたツヴァイが、思わず溜息を深くつく。

『すみません天童さん。若葉ちゃん達をよろしくお願いします』

『引率も楽ではないな。…オペレート頼むぞ、これより作戦を開始する！マーク・ツヴァイ出るぞ！』

通信で聞いていたひなたの言葉に、冗談交じりに応えようと、ツヴァイはロツクを解除してアイン同様に大空に飛び出すのであった。

第十八話

輸送機から降下したツヴァイは、計器で高度を確認しつつ効果を発揮するギリギリのタイミングでパラシュートを展開し減速していく。

風に流され過ぎないように風向きを気にしながら、密林の中から降下地点を見極めて着地すると、パラシュートをパーシする。

周囲を索敵し安全を確認すると、頭部に備わっているライトを点滅させながらその場で一回転する。すると、草陰から若葉と歌野を連れたアインが姿を現す。

『異常は?』

『僕達は無いよ』

簡潔に状態を確認していると、蓮太郎コンビと杏が集まって来きた。

『伊予島。土居はどうした?』

ツヴァイが訝し気に杏に問いかける。彼女と共に降りた球子がないのである。

『それが、風に流されてはぐれてしまっ…』

『おいおい、マジかよ』

杏の言葉に蓮太郎が顔を顰める。視界が最悪な敵地ではぐれるとは、致命的な問題になりかねなかった。

『初体験ですから仕方ないでしょう。寧ろあいつ1人だけなのは上出来ですよ。どうだアイン?』

フォローを入れると、ツヴァイは匂いを嗅ぎ分けていたアインに問いかける。

『…いたよ』

そういうと木の枝に跳び乗り、他の枝に移っていく。暫く移動するとある木の前で止まる。

『おお、アイン!早く助けてくれ〜!』

その木には枝にパラシュートが引かかって、絡まった状態で宙ぶらりとなった球子があり、小さい声で助けを求めてきた。

『ん〜と、どうしよう…』

側まで移り助けようとするも、固く絡まっており難しそうであった。

「もう、パパッと切っちゃえば?」

『え、いいの?』

「大丈夫だ。問題ない」

何故かキリつとした顔で言う球子。地面からかなりの高さがあるも、強化された身体能力なら問題なく着地できると判断したのだ。

球子の言葉に。それじゃと、アインは両大腿部のホルスターからナイフを取り出すと、パラシュートを切断していく。すると当然重力に従い球子は落下し、そんな彼女をアインは先回りして受け止めた。

「……」

『どうしたの?どこか怪我した?』

お姫様抱っこされた状態となった球子は、予想外の事態に呆けてしまい。そんな彼女をアインが慌てて心配する。

「お、おう。ビックリしたが大丈夫だ、ありがとうな。て、てか、早く降ろしてくれ!何かハズい!」

『あ、ごめんね』

顔を赤くしている球子を、申し訳なさそうに降ろすアイン。

『おい、迷子は無事か——と、何かあったか?』

合流したツヴァイが、様子の変な球子を見て問いかける。

『えっとね……』

「だあああああー!いいから早く行くぞ!!」

説明しようとするアインを遮ぎると、先に進みだす球子。そんな彼女にツヴァイが声をかける。

『方角真逆だぞ』

目指すべき方角を指さしながら指摘すると、球子は顔を真っ赤にしながらそちらに向き直るのであった。

「なあ、こんなにゆっくりしてて大丈夫なのかよ?」

密林を一列になって進む中、球子がじれったそうに中間にいるツ

ヴアイに声をかける。

走るでもなく一歩一歩警戒しながら歩いているため、出発してからそれなりに時間が経つも、大した距離を進んではいなかった。

『バルと戯れたいなら別に止めんど。その場合、俺は混ざらないがな』

言外に見捨てると宣言するツヴァイ。基本的にバル——特にガストレアは夜間は眠りにつく習性があり。未踏破領域で活動する場合、夜間帯に刺激しないよう慎重に行動することが原則となっているのだ。

『そんな慌てずとも、十分に間に合うよ』

「ならいいけどさ」

余裕を見せるツヴァイ言葉に引き下がる球子。

「まあ、ギリギリだな」

とはいうものの、今の速度だと想定されているリミットに、辛うじて間に合うかという瀬戸際だったりするのだが、不安を見せないのが指揮官の鉄則なので、問題ないように振舞うしかないのだが。

「それにしても、未踏破領域に入るのは初めてだが。本当に日本にいるのか信じられなくなるな」

辺りを見回している若葉が、驚きを隠せない声音で心情を漏らす。

かつての日本を知る者からすれば、空さえ碌に見えない程多い茂った木々に囲まれた環境は、別世界に迷い込んでしまったような感覚に陥るのだ。

『ガストレアウイルスによって、生体系が完全に破壊されたからな。世界中でこんな有様だそう。まあ、人がいた頃より環境は良くなっているがな』

「どういうことだ？」

『空気が上手いだろ？そういうことだ』

ツヴァイの言葉に、延珠が大きく息を吸うとおお、本当だ！と、はしゃいでいる。

「ガストレアやバーテックスは、環境を——地球を汚染する人類を排除するための使者、という説がありますからね」

『これまでの歴史を振り返れば、さもありなんだな。自業自得と言われても俺は否定できんわな』

「…同業の人間で、未踏破領域でケツアールを見たって奴がいたんだ」
不意に蓮太郎が空を見上げながら話し始める。

「けつあーる?」

「ああ、手塚治虫の『火の鳥』のモデルもなった鳥で、その雄は世界一綺麗な幻の鳥だと言われてる奴だ。勿論日本にはいねえからずっと嘘だと思ってきたが、こうまで生態系が滅茶苦茶だと、もしかしたらって思うな」

『なる程、確かにありえない話ではないですな。もしかしたら絶滅した生物がいるかもしれないですし』

首を傾げる延珠に説明する蓮太郎。それにツヴァイが同意を示し、他の者達も興味深そうに耳を傾けていた。

「本当に蓮太郎は動物が好きだな。見てみたいのか?」

「何だよ、わりーかよ」

子供だなど言いたそうな延珠に、蓮太郎は拗ねた様に唇を尖らせる。

「いや、蓮太郎が見たいなら妾も見てみたいな。そんなに綺麗ならさぞかし美味だろうな」

「食う気なのかッ! 幻の鳥を!」

予想外のベクトルにウキウキしている延珠に、鋭くツツコむ蓮太郎。

「その時は是非タマにも分けてくれ」

「おおいぞ! 皆で食べれば更に美味になろう!」

「タマっち先輩…」

延珠と一緒にしゃぐ球子に、杏が溜息をつく。

「……」

「食べたいの高嶋さん?」

「そ、そんなことないよ! 食べちゃいけない鳥さんくらい分かるもん!」

千景の指摘に、ワタワタしながら否定する友奈。

「お肉だけだと栄養が偏るから、食べるならお野菜も欠かせないわよね。ってことで『白鳥農園』をよろしく！」

『は〜い』

ここぞとばかりに自家農園の宣伝をする歌野を、わくと拍手して盛り上げるアイン。

敵地でありながら和気あいあいとしているも、警戒は怠ることなく順調に目的地を目指す一向。

だが、そんな空気を引き裂くように爆発音がどこからか響き渡る。

「な、なんだ!？」

球子始め四国組は何が起きたか理解できず困惑し、それ以外の者は事態の深刻さに冷や汗を流した。

「クソツたれ!どこかの民警ペアが爆発物を使いやがったツ！」

『総員隠密行動は中止だ!迅速にこの場を離脱するぞツ!!』

蓮太郎が苛立ちを隠さず叫び、ツヴァイが素早く指示を飛ばす。

だが、行動に移るよりも早く、地鳴りが鳴り響いた。

四方に反響し出所が分からないも、腹の底に響く低い唸り声に、一同は素早く円陣を組んで周囲を警戒する。

「蓮太郎…あれは、何だ」

震えた声で一点を指さす延珠。その先には巨大な影が浮かび上がっていた。

ツヴァイが頭部のライトを当てると、樹冠じゆかんの奥から一対の巨大な瞳がこちらを凝視していた。

六メートルはあろう緑色の巨体に、爬虫類特有の獰猛な顔に首は長く赤い舌がチロチロと覗いている。吹き出物のような細かいいぼが顔中を覆っており、風下にいる一同にまで肉が腐ったような強烈な口臭が漂ってくるではないか。

更に両腕は鳥類の遺伝子が混ざっているのか、翼状に進化したその姿は。まるでおとぎ話に出てくるドラゴンのようであった。

経験則から、ステージIVクラスのガストレアと判断したツヴァイは思わず舌打ちする。ただでさえ余裕がないのに面倒極まる相手に早々に遭遇したことに、取り敢えず神の集合体らしい神樹に内心罵声

を浴びせる。

「おい、あいつの口ッ……!」

警戒しながら観察していた球子が思わずうめき声を上げる。

ドラゴン型の口には服の切れ端があり、口臭からは鉄分の匂いが混じっている。政府がなりふり構わない物量作戦を決行した時点で、犠牲が出ることは想定できていたが、いざ目の当たりにするとやりきれない気持ち湧き上がってしまう。

『逃げるぞー走れエ!!!』

ツヴァイがガトリングはドラゴン型の頭部に向けて放つと、次々と殺到する弾丸にドラゴン型は忌々しそうに唸りながら怯む。

その間に延珠は蓮太郎を肩車すると、一同は背を向け全力でその場から離脱していく。

そんな彼らを、ドラゴン型は逃がさんを言わんばかりに木々を踏み倒しながら追跡してくる。

『クソがッ!』

ツヴァイが、向き直って後退しながらガトリングを浴びせるも。ドラゴン型は弾幕を恐れることなく突進してくるではないか。

「つて前崖だよ!」

先頭に行く友奈は驚愕したような声を上げる。

密林から抜けたかと思えば、先に広がるのは切り立った崖であり、高さは百メートルはあるだろう。

『構わん跳べエ!!』

地面から追跡してきたことから、ドラゴン型の翼はモモンガのように滑空するのが背一杯のものであると判断し、この高さなら振り切れると考えたツヴァイは迷わず指示を飛ばす。

「マジか!」

「だが、行くしかない!」

冗談だろと言いたげな球子に、若葉は覚悟を決めた様に叫ぶ。

「――!」

ドラゴン型は腕で木々を薙ぎ払うと、吹き飛ばされた木片が一同に降り注ぎ。それを避けながら各自崖から飛び降りていく。

「キヤツ!？」

しかし、ぶつかりそうになった破片を避けようと身を屈めた友奈が、石に躓き転倒してしまった。

「高嶋さんー!」

そのことに気がついた千景が助けに行こうとするも、既に飛び降りた後のためどうすることもできない。

友奈は急いで起き上がろうとするも、ドラゴン型が目前まで迫っており巨大な口を開けて襲い掛かって来る。

「――!!」

友奈は恐怖から思わず目を閉じてしまうも、そんな彼女の腕を誰かが掴んだ。

「アイン君!？」

その者の名を友奈は咄嗟に呼ぶと、アインは彼女を崖下へと投げ飛ばした。

そしてソードを手にし、噛みついてきたドラゴン型を跳んで避けると、ブースターとスラスターを駆使して縦回転しながら顔面を斬りつける。

「――!!」

ドラゴン型は苦悶するように唸ると、尻尾を振るいアインに叩きつけようとする。

アインは体を逸らしながらスラスターを吹かし避けるも、続ける振るわれた腕は避けられず弾き飛ばされ崖から落下してしまう。

「アインっ!!」

自分達とは離れた場所に落ちていくアインに若葉が呼びかけるも、意識を失っているのか反応がない。

「優、ユウウウウウウウウウウ!!!」

若葉が必死に手を伸ばしながら叫ぶも、アインの姿は遠のいていくだけであった。

第十九話

「んむ〜？」

目を開けた優の視界に星々が輝く夜空が広がる。エリア内にいる時より良く見える空に、人類の駆逐された未踏破領域は、文明の栄えていた頃より環境が改善されているという親友兼上官の言葉を思い出した。

「目覚めましたか？」

プラネタリウムにいるような感覚で夜空を眺めていると、視界に少女の顔が入り込んできた。

延珠と同年代であり、この地にいることからイニシエーターだろう。表情から感情が抜け落ちたような、どこか冷めた印象を与えた。「始めまして、聖天子直轄遊撃小隊A l v i s 副隊長の蒼希優3尉です」

「千寿 夏世 《せんじゆ かよ》と申します」

初対面なので挨拶すると、応じてくれる少女こと夏世。

「見た限り機体のみ損傷しているようですが、具合はいかがですか？」

少女の言葉に体を見ると生身の状態で、草が積まれた地面に横になっていた。ノートウング・モデルの特性により、機体のダメージが肉体に痛覚としてダイレクトに反映されていた。全身に激痛が走っているも、優は無視して周囲を確認する。

今いるのは石造りの室内であり、入り口には土嚢が積まれた壁が築かれている、どうやら大戦時に築かれたトーチカらしい。長い年月によってかなり古びて本来の機能は失われているも、風よけには役立っている。側には焚火がパチパチと燃えていて、室内は程よく暖められていた。

「落ちた場所が木々が茂っている所で良かったですね。でなければ今頃死んでいたでしょう」

夏世の指さした方を見ると、枝をへし折られてた木々の根元に倒れているアインがあった。

「！君怪我してるの」

少女から鼻につく鉄分の匂いを嗅ぎ取った優は、起き上がり腕を手取る。獣に噛まれたように、歯型の形に抉れており血が止めどなく流れ出ているではないか。このレベルだと『子供達』であっても回復に時間を有するだろう。

それを確認すると同時に全力で愛機の元に駆け出すと、解放されている内部から小型のケースを取り出し少女の元に戻る。

「あの…」

「じつとしてー！」

遠慮するような少女を無視して、ケースからいくつかある無針注射の1本を取り、少女の首元に押し当てる。

「回復を早める栄養剤だから」

そう告げると、納められた液体を注入する。

「はい、包帯巻くから腕見せて」

優の気迫に押されて言われた通りにする夏世。

優ら因子や『子供達』ウイルス保持者は傷の治りが常人よりも遥かに早いも、それによって細胞が活性化されることで浸食率が上がってしまうのだ。

だが優が注入した栄養剤は、董が開発した肉体への負担を抑えながら回復を早めることができるのだ。製造が難しくA l v i s にしか配備されていない試作品である。

「んしよ、これで良しと。他に痛むところある？」

「いえ…ありがとうございます」

夏世の言葉に、そっかあ、と安堵したように笑みを浮かべる優。

身体を蝕んでいた痛みは、既に大分緩和されており。優の笑みを見ていると、不思議と安心感に包まれた気分になりそのせいか空腹音が鳴ってしまった。

「お腹空いたの？ちよつと待っててね！」

再び愛機の元まで駆け出すと、優はまたケースを手に戻って来る。

ケースを開けると、中には携行糧食が詰められていた。

「はい、どうぞー！」

優はパッケージジされたいくつかを夏世に有無を言わず渡すと、自分の分を手にし開封して食べだす。

夏世は暫し優をジツと見ていたが、彼にならうように食べ始める。「…うどん?」

スナックバーを口にした夏世は、その味に不思議そうな声を漏らした。彼女が食べたバーからはうどんの味がしたからである。

「あ、それ僕が作ったんだ。いつでもどこでもうどんを食べられるよにつてね!」

「…あなたもしかして香川出身ですか?」

「そうだよよく分かったねえ」

「いえ、香川人のうどんへの執着は異常だと聞いたことがあるので…」
何やら呆れたような様子を見せる夏世だが、優は気づかないように、彼女と同じうどんバーを美味しそうに食べている。

「でも、これうどんの味がするバーであって、うどんではないですよね?」

「ぐは?!」

凶星を突かれて精神的ダメージを受ける優。

「だって、インスタントにしようとしたら光輝——あ、上官がね『即応部隊に3分待つ暇はない』って却下されたんだもん」

拗ねた子供のように、シクシクとすすり泣く優を見て、思わず夏世はクスリと笑ってしまう。

「わお笑ってる方がやっぱり可愛いね〜」

「可愛い、ですか?」

不意に優が発した言葉に、夏世はキョトンとした顔をする。

「そうだよ君は可愛いんだから、もつと笑った方が素敵だよ〜」

「…私なんか、大人びていて子供っぽくなくて機械みたいで気味が悪いって言われます」

俯きながら首を振る夏世に、優はえ〜と不満そうな様子を見せる。

「クールで僕より頭良さそうでカッコイイ感じだよ〜」

「…イルカの因子を持ってますので、常のイニシエーターより¹知能指数と記憶能力が高いだけです」

「おーどれくらいなの？」

「二百十程あります」

「お、光輝と同じくらいだね！」

両手の平をポンと合わせて、信じがたいことを言いながら感心している優。

「…その人は人間なんですか？」

「捻くれてて目つき悪いけど人間だよ。あ、今は内緒ね、目つきは自分でも気にしてて傷ついちゃうから」

両手の平を合わせながら片目を瞑り頼み込んでくる優に、どうやら嘘や冗談ではないらしいと感じた夏世。

「それなら言わなければいいのでは？」

「あ、そっか！」

思わずツツコミを入れると、しまった！といった顔で衝撃を受ける優に。再び夏世はクスリと笑ってしまう。

「わくやっぱり笑ってる方が似合ってるよ」

「そんなことないです。私なんて大したことありませんから」

「んく感じ方は人それぞれだけど、僕は可愛いし素敵だなくって思うよ？」

屈託のない笑みを浮かべて覗き込んでくる優に、恥ずかしさを感じて顔を背けてしまう夏世。

確かに、今までも可愛いといったことを言われることはあったが、誰もが邪な思いを滲ませており不快さしか感じたことがなかった。だが、優にはそういったものはなく、純粹に思っていることを口に出しているだけのようであった。彼の言葉だけは素直に受け入れられ、胸の内に暖かさが広がる初めての感覚に夏世は不思議と悪い気がしなかった。

「ねえこれ君の銃だよ？」

不意に優が何かを掲げて見せる。それは夏世の銃であり、彼とは反対側の壁に立てかけていたものだ。いつのいまにと夏世は目を見開くが、すぐに顔を覗き込んできた来た時だと悟る。先程の言葉をこちらを油断させるためかと推察するも、呑気そうに銃を見ている彼を見

て深く考えないで直感的に行動しているようであった。

「えーと、こういうのショットガンって言うんだっけ光輝っていないんだった」

ま、いいや、と呟きながら色々な角度から銃を観察している優。そんな彼に気まずそうな様子の夏世。

夏世のショットガンは、サイレンサー付きのフルオート式で、装備拡張用のレールにグレネードランチャーが取り付けられていた。

優はランチャーの銃口の匂いを嗅ぐと、んくとえくと、と四苦八苦しなから薬室を開く。というか扱い方が良く分からないのなら余り触らないで欲しいと、内心暴発を恐れる夏世。

「一発ないけど、さつき使ったよね？」

薬室には空気が一つあり、彼女が敢えて装填していないのでなければ、先に起きた爆発は彼女が元凶ということになる。

薬室を見せながら問い詰める優に、夏世は観念したように膝を抱えて焚火の炎を見つめた。

「私と将監さん——プロモーターは罨にかかりましたね。お陰で怪我をした上、今は別行動中です」

夏世の言葉を優は難しい顔をして聞いていた。

「私達が降りたのは深い森の中だったので、暫く進んだ所で森の奥から短く点滅するライトパターンが見えましてね。味方だと思つて無警戒に近づいていたんですよ」

膝を抱えた手に力を込めて、彼女は小さくなっていく。

「もつと注意していれば、あんな薄青い鬼火みたいな色のライトなんて、誰も使っていないことが分かったのでしょうか。：光を発していたのは、生き物と植物を合わせたような形状のガストレアでした。油断していたところを襲われてれ咄嗟にグレネードを使ってしまったのです」

後悔と反省の念を見せる夏世に対して、優は握った右手で左手の平をポンツと叩いた。

「あ、将監って防衛省で光輝に喧嘩を売ったのに、蛭子影胤に邪魔者みたいにぶつ飛ばされてノビてた人か！」

思い出したといった様子で言い放つ優に、夏世は思わず傾いた。やけにまともな顔をしていると思ったら、この男彼女のプロモーターのことを必死に思い出していただけらしい。

「…私の話を聞いていましたか？」

「うん、変な光に馬鹿正直に引き寄せられちゃったんだよね！」

ジト目を向けてくる夏世に、身も蓋もないことをぶつちやける優。ここに相方がいれば遠慮なくドツかれていただろう。

「……」

「誰にでも失敗はあるから仕方ないよ」

無自覚な容赦のなさに頬がひきつっている夏世に、ドアホウは一人優でうんうんと頷きながら納得していた。

「…怒らないのですか？」

「生きるためにしたんでしょ？人間誰だって死にたくないもんね。それより気になることがあるんだけど」

そう言う顔と顔を近づけて匂いを嗅ぎだす優に、咄嗟に気恥しくなつて身をよじる夏世。

「君のとは違う人の血の匂いがするね。プロモーターさんのかな、それとも他の民警さんかな？」

気づかぬ間に、彼女の腰にあるカバーからナイフを抜き取った優は、匂いを嗅ぎながら問いかけてくる。

「ええ、ここに来る途中も出会ったペアを殺害しました」

彼に隠しても無駄だと悟り、言い訳するでもなく淡々と彼女は肯定した。

「手柄を独り占めにしたいからとか？」

「はい、将監さん曰く『トチ狂った仮面野郎をぶち殺す手柄は俺達以外誰にも渡さない』そうです。それとその後にはコケにされたあなた達も殺すつて息巻いていました」

「止めておいた方がいいよ。君達だけじゃ、蛭子親子にも僕達にも天地が逆転しても勝つてっこないよ？」

失礼極まりないことを言いながら、ワタワタと慌てながら本気で止めようとしている優。

夏世としても防衛省での戦闘から見てその通りなので言い返せないが、もう少し言い方というものがあるだろうにとツツコミたくなつた。

「変な光の件も、他の民警さんなら消そうとしたんだ」

「はい」

「そっか」

それ以上は何も言わず、ニコニコしながら携行糧食を食べる優に。夏世は困惑の滲んだ目を向ける。

「あの、それだけですか？」

「何が？」

「いえ、私正当な理由もなく人を殺したんですよ？ 非難するなり罵倒するなり——」

「されたいの？」

「！」

その言葉に夏世の身体がピクリと揺れた。

「君は自分の罪を後悔している、だから罰を受けたいんでしょう？」

優のどこまでも透き通るような——全てを見通すような目で見つめられ、彼女は自然と頷いてしまっていた。

「本当はそんなことしたくないけど。でも、生きるためにはそうするしかなかったんだよね」

「…はい」

「インシエーターになる子ってさ、親に捨てられたりして居場所のなくなつた子の駆け込み寺みたいな役割もあつてさ。生きるためには大人の、プロモーターの言う通りにするしかないってことが殆どでさ、君みたいな子が普通なんだよ」

そう言うとき優は夏世の身体をそつと抱き寄せる。

「だから君は悪くないよ。辛くて怖くて心が痛いんだよね、『命』の大切さを感じられる君は機械なんかじゃないんだよ」

夏世の頭を撫でながら慰めるように話す優に、彼女は彼の胸に顔を押し付けながら無意識に嗚咽を漏らし始めた。

「俺は君を責めないし罰しない。するとしたら——プロモーターにす

るよ」

今までの穏やかさとは一変し、殺意すら滲ませる冷淡な声音に、夏世は背筋が凍りつくような心地になった。

日溜まりのような暖かさと、凍土のような冷たさ。極端な二面性を持つ彼とは何なのか、不思議と夏世は彼のことをもっと知りたいと思うようになっていた。

「よう、人が必死に捜しているのに、何イチャついてんだゴラアツ」

いつの間にか姿を現していたツヴァイが、優に劣らぬ冷めた目をしながら彼の後頭部ガトリングの銃口を押しつけていた。

その後ろには勇者組もおり。ツヴァイの様子に怯えたりする中、若葉は優と夏世を見て額を手で覆っていたのだった。

第二十話

『なる程、連絡不備への貴様の言い訳。100歩譲って認めてやらんでもない』

「…できれば5発ガトリングで同じ場所を的確に殴る前に聞いて欲しかった」

仁王立ちするツヴァイの前に正座している優の頭部には、5段重ねのたんこぶができていた。

『殴った上での100歩の譲歩だが何か?』

「寛大な裁量誠にありがとうございます」

「いやいや許してないよなそれ?」

深々と頭を下げる優に、球子ツツコミが入る。

『無論、続きは帰還してからだ』

「ワータノシミダナー」

「で、でも私を助けたからだから、そんな怒らないであげてよ!」

平坦過ぎる声音で涙目になる優に、友奈がフォローしようとする。

「それとこれとは話が別よ高嶋さん。連絡を怠ったのは彼の責任よ」

「そうそう気にしなくていいよ」

千景の言葉に同意する優。それでも友奈は納得しきれないのか、でも…、と反論しようとする。

「友奈、優は己の職務を全うしたんだ。それを否定することは侮辱にしかない」

「…うん、そうだね。助けてくれてありがとう蒼希君」

肩に手を置いた若葉の説得に、友奈は心からの礼を述べた。が、当の優は職務?と、疑問符を浮かべてポカーンとしていた。

『彼女らの警護だ! 仕事内容を忘れてんじゃねえよ!!』

「さつきと同じ所を的確に殴らないでッ!」

ツツコミを入れながらツヴァイがガトリングで優の頭部を殴ると、たんこぶが6段重ねとなった。

「素でああいうことをしちゃうのが優君らしいわね」

「つまり大馬鹿ってことか」

微笑ましく笑う歌野の言葉に、蓮太郎が呆れた様子を見える。

「それだと蓮太郎も大馬鹿ってことになるぞ？」

「うるさい」

余計なことを言う相棒の頭を、乱雑に撫でて黙らせる蓮太郎。

「あの…」

「伊熊将監のイニシエーターだな。部下が大変失礼をした。こいつは昔引きこもっていて、人との関りが少なかつたせい距離感が極端だな。気に入った相手には深く考えず、とことん詰め寄っていきやがる」

「引きこもってないよく出れる時はお外にでてたよ」

「なので、こいつの戯言は本気にしない方がいい」

「は、はあ…」

部下の抗議を軽々と無視して話を進めるツヴァイに、その清々しさに夏世は困惑の色を見せる。

『さて、傷は粗方治ったな馬鹿』

「君にやられた分以外は問題ないよ。後馬鹿じゃなくて優だよ」

『そうか、ならば問題ないな馬鹿』

体を軽く動かしながら優が再度抗議するも、綺麗に流すツヴァイ。

「ああ、蒼希が回復するの待ってたのか」

「そうだよ土居さん。ツンデレだからね僕の上官は、場を和ませるために敢えて茶番を演じていたのさ！」

『は？』

優の言葉に、ツヴァイ何言ってんだお前？と言いたそうな顔をする。

「え？」

そんな彼の反応に。嘘だと言ってよ、と言いたそうな顔をする優。

『は？』

「え？」

『は？』

「え？」

『いや、お前は馬鹿だろ？』

「ウソダドンドコドーン！」

「お前らのコント、ホント面白いわ」

互いに馬鹿なといった反応をする両者に、思わず関心する球子。

『いいから、さっさと機体を装着してこいや』

「あの、作戦中にこんなゆくりしている場合ではないのでは？ 読んだ本には『兵は拙速を尊ぶ』と言いますし、急いだほうが…」

優に蹴りを入れていているツヴァイに、杏が疑問を呈する。

その言葉に、ほう、とツヴァイは興味深そうに反応した。

彼女は他の仲間より身体的に劣る部分を補うため、戦略家としての知識を身に着けようとしており。ツヴァイはそういった面で彼女に強い関心を持っていたのだ。

『孫子のことか。確かにその通りだ。だが、それは万全の状態であることが前提の話であり、十全の力を発揮できない状態で戦おうとするのは下策に過ぎん。いいか伊予島、俺達の戦いはこれからも続く、故に戦力の損耗を抑え先を常に見据えることが策を練る上で求められるのだ』

「！なる程、勉強になります！」

杏と意気投合するように話しているツヴァイを、千景はどこか複雑そうに見ていた。

「どうしたのぐんちゃん？」

「いえ、何でもないわ」

友奈が気に掛けるように声をかけると、千景は誤魔化すように答える。

「(どうして彼に嫌な感覚が？ それに昔のとどこか違うような…)」

心に沸いた不快感、その答えを見出せず困惑する千景。

「…何か困ったことがあったら相談してね。いつでも聞くから」

「ええ、ありがとう高嶋さん」

友奈は彼女の様子に何か思い当たる節があるも、今はその時でないと敢えて踏み込まなかった。

そうしている間にアインが戻ってくる。

『さて、君はどうするかね？ よければプロモーターと合流するまで共

に行動すべきだと思おうが?』

「はい、よろしく願います」

ツヴァイからの申し出を夏世は快諾する。プロモーターである将監は彼らを毛嫌いしているも、彼女個人としては彼らの判断は正しいと考えており、反感といった感情は持っていないかった。

そんな折、夏世の持ち物である無線機からノイズと共に野太い男の唸り声が聞こえてきた。

彼女は飛びついてつまみのようなものを回すと、音は鮮明になっていき、Alvisの面々には聞き覚えのある声になる。

『き……ろよ。おい!生きてんだったら返事しろよ!』

夏世がツヴァイらに静かにしていってくれ、と目配せをする。共にいる理由を説明するのは骨が折れるので当然と言えよう。反論する理由がないので代表してツヴァイが頷く。

「音信不通だったので心配していました。ご無事で何よりです、将監さん」

『たりめえだろ!んなことより夏世、いいニュースがある』

そこで将監はもったいぶるように一旦言葉を区切る。

『仮面野郎を見つけたぜ』

その言葉に、ツヴァイと夏世は顔を見合わせ。他の者達は息を?む中、アインだけは平然としていた。

「どこですか?」

ツヴァイはモニターに地図を表示させる。将監が告げたポイントは海辺の市街地であり、現在地に近かった。

『今、近くにいる民警が集まって総出で奴を奇襲する手筈になっている。ホントは出し抜いてやりてえところだが、まあ仮にも序列が上の相手だし、肝心のインシエーターがいやがらねえ。今荒れていた手柄の話がようやく纏まったところだ。仲良く山分けだとよ、面白くねえ話だ。お前もとつと合流しろ』

夏世の返答を聞かずに無線は切られた。会話中にも将監の後ろから囁声や笑い声聞こえており。襲撃計画が進みつつあるのは間違いないのだろう。

『よし、出発するぞ。遮蔽物のある丘から回り込むぞ』

『僕達の到着を待ってもらった方が良かったんじゃないの？』

指示を飛ばすツヴァイに、アインが疑問を挟む。

協力して当たった方が成功率が上がるので、当然と言えよう。

『言ったところで頭に血が上って判断力を鈍らせるだけだ。それどころか、手柄を取られまいと俺達に襲い掛かってきかねん。好きにやらせた方がまだ楽だ。ま、彼らだけで片がつくなら儲けものだな』

やれやれと言いたそうに息を吐くツヴァイ。最後の方は特に期待していないようだった。

夏世を加えトーチカを出た一行は、街へ続く平野部に到達した。

そこから道なりに進めば数キロで街に入れるが、ツヴァイは敢えて遠回りをして小高い丘を目指した。

街までの直線には身を隠すものがなく、サベージの砲撃等の的になるだけであり。時間をかけてでも損耗を抑えることを優先したのだ。海に近づいていることもあり、歩くにつれ鼻孔に潮の匂いが運ばれてくる。

途中、周りを背丈の高い下草が囲んだ場所に夜営の跡があり。煙が出るのを恐れてか、煮炊きした形跡はないも、携帯食料の袋が散らばっていた。数からして二十人は軽くいたのだろう。

どうやら既に民警らの作戦は始まっているらしい。時間から見ても、もうじき夜が明ける頃であり。人とは夜が深まる深夜よりも、夜明けの方が眠りが深く最も無防備になり、夜襲する上で最適なのである。

「よお、やっと来たか。待ちくたびれたぜ」

不意に頭上から声がし一回が顔を上げると、Fuhrenのクロヴァンが木の枝の上に立ちながら猟奇的な笑みを浮かべながら見下ろしていた。

彼は飛び降りながらハンドレッドを展開し、着地すると同時に他の面々も茂みの中から戦闘態勢を取りながら姿を現す。

『ふん、奴の子飼いか』

予想通りと言った様子で戦闘態勢に入るツヴァイは、肝心の道陽の姿を探す。

「道陽ならいないよ。あんたら程度あたしらだけでお釣りがくるし」

ナクリーがチャクラムを指で回しながら嗤う。

その発言にツヴァイは眉を潜ませる。

「(奴にとつての目的は、既に果たされているということか?)」

前回の戦闘時の発言からして、最早この状況は余興であり、高みの見物をするつもりなのかと思考を巡らせる。

そんな折、街のある方角から銃声や金属同士がぶつかり合う音が響き始めた。

「おい、始まつちまつたぞ?！」

『落ち着け土居。敵は奴らだけではないッ!』

ツヴァイがガトリリングを振り上げると、背後から球子に突進してきた影に叩きつけた。

それは鹿型のガストレアであり、上半身の皮膚を突き破って至る所から角が生えていた。

どうやら一同を尾行しており、隙を見せてしまった球子を狙ったようだが。巨大な鉄の塊であるガトリリングに押しつぶされた肉塊となった。

球子が礼を述べようとするも、それを阻むように、森から獣の鳴き声が響き渡る。街からの銃声で目を覚ましたバアルが様々な周波数帯域で仲間と交信を始めたのだ。

「ここは我々が引き受けます。蓮太郎さん、延珠は先行して民警の援護を」

ツヴァイの指示に、蓮太郎らは迷うことなく従い駆け出す。人革連の妨害が入ることは確実であったので、その際の行動を事前に決めていたのだ。

『バアルは俺が抑える。アイン奴らは任せろぞ。千寿君はこちらを手伝ってくれ』

「分かりました」

ショットガンを構えながら、森へと向かうツヴァイに続いていく夏世。

「さて、んじゃあ、こっちも始めようやあ!!」

クロヴァンが大剣を肩に担ぎながら、アインら目がけて駆けだす。

一瞬で弾丸の如き速度まで加速すると、跳びながら横回転を加えて加速させた斬撃を放ってくる。

それを、仲間を守るように前へ出た若葉が居合で繰り出した刀が迎え撃ち、刃がぶつかり合い互いの勢いで互いの体が弾かれるが、共にすぐに体制を立て直し武器を構え駆け出す。

それに続くように、両陣営とも戦闘を開始するのであった。

第二十一話

長きに渡って人の営みが消え、人工的な灯が消えて久しい房総半島。既に日が沈み空高く昇る月の光のみが光源となったこの地の一角が、煌々と光輝いていた。

そして、その光源に群れるようにバアルが群れを成して押し寄せていた。異形の怪物が辺り一面を埋め尽くす百鬼夜行が如き、見る者を恐怖のどん底に突き落とさんばかりの光景が。次の瞬間には爆音と轟音と共に爆炎に焼かるか粉碎されていく。

『……』

その光景を生み出しているツヴァイは、淡々とした動作で生き残りがいないか確認していると、レーダーが次の集団を捉える。頭に叩き込んだ地形データから最適なポジショニングを瞬時に選択し、ホバー移動すると同時に全ての火器を起動させる。

展開した装甲から露出したミサイルが撃ち出されると、次々とバアル目掛け着弾し、爆炎がその身を焼き、粉末状に加工され封入されていたバラニウムがガストレアの傷口に触れると、再生を阻害し更に毒として体内を蝕んでいく。

背部から展開した2門のレールキャノンは、戦車砲すら容易く弾くサベージを紙のように貫通していき、両腕で保持したジャイアント・ガトリングが轟音と共に無数の弾丸を吐き出し、バアルを次々と粉碎に肉片に加工していく。

サベージが放ってきたビームが直撃するも、装甲表面に塗装された特殊塗料が拡散させて無力化させ、無傷のままツヴァイは反撃を加え撃破していく。

小型のガストレアが小回りを生かし側面から襲い掛かると、左腕に装備された火炎放射器が文字通り火を噴き消し炭と化していく。更に、炎は周囲の木々に燃え移っていき、壁となってバアルの進路を塞いでいく。

小型のガストレアが、濃密な弾幕を突破するも、背後に控える夏世がショットガンで丁寧処理していく。

『千寿君、そちらは問題ないかね?』

「あ、はい。こちらは大丈夫です」

夏世を気に掛けるツヴァイ。とはいっても、彼女が対応しているのは爆炎や火炎に炙られ弱っていた小型のガストレアのみであり、その身にはかすり傷一つついていなかった。

強いて言えば、圧倒的なまでの戦闘力を見せつけるツヴァイへの心理的に圧倒されていることだろうか。

『さて、次の客人がお出ました。出迎えてやるとしようか』

「わかりました」

新たに現れた集団に対応すべく、ツヴァイらは行動していくのであった。

「ウオラア!!」

クロヴァンが横回転しながら跳びかかり、大剣を若葉目掛け振り下ろす。

それを軽く横に跳んで躲すと、刃は地面に叩きつけられ。その威力は地面を優に砕き、その衝撃は波紋のように広がり、反撃に出ようとしていた若葉を体を押し出し出鼻をくじいた。

「(この威圧感ツ。なんという剛力だ!)」

衝撃波を受けただけでヒリつく肌の感触に、内心相手の技量に驚嘆しながらも、若葉は怯むことなく果敢に攻めかかる。

「ハアツ!」

「アメエよ!」

瞬時に肉薄し刀を横薙ぎに振るうと、大剣で弾かれるも。その勢いを利用し連撃を繰り返すと、クロヴァンは身の丈を超える長大な獲物を難なく操って防ぎ、逆に反撃を加えてきた。

「(わかつてはいたが、やはり手強い!)」

以前遭遇した時に感じられた圧迫感から、相手の技量がある程度予測していたが。実際に刃を交え、それ以上の強敵であることを感じ取るのであった。

「くらえチビ！」

「お前に言われたくないわ！このドチビがア!!」

ナクリーがチャクラムを投げつけると、旋刃盤で渾身の力で打ち返していく球子。

木々を飛び移りながら、ナクリーは手元に戻って来たチャクラムを再び投げつける。

「じゃあ、このちんちくりん！」

「一緒やろがい！」

互いにの罵り合いながら、同じような攻防を繰り返す両者。

他者から見れば、どんぐりの背比べとしか言えないけれども、
…。

「タマっち先輩！挑発に乗らないで！」

熱くなっている珠子を落ち着かせるため、杏がボウガンから矢を放ち牽制すると、ナクリーは一旦距離を取り枝の上に乗る。

そして、杏の全身を観察するし始める。体のラインに沿うデザイン
の勇者服は、彼女の年齢に反し豊かに発達した肉体を浮かび上がらせていた。

長年努力しているにも関わらず、実りを感じさせない己との差に。
絶望と敗北感を植え付けられたナクリーは、親の仇でも見るかのような目で木々を飛び移りながら杏に襲い掛かった。

「あたしと大して変わらない歳のくせに、デカイチチ見せつけんなアアアア!!!」

「ふええ!?!」

予想外の発言に戸惑っている杏に、チャクラムで直接斬りかかるナクリー。

そこに珠子が割って入り、旋刃盤を盾にして受け止めると押し返す。

「あんずはタマの大切な後輩で妹分だ！傷つけることは許さんツ！」

「タマっち先輩…」

「例えひなたに劣らぬけしからんチチをしていようともだ!!」

「怒るよ先輩!」

キリつとした顔でセクハラをかましてくる姉貴分に、どつきそうになるのを辛うじて堪える杏であった。

「ハアッ!」

「……」

千景が振り上げた鎌とネサツトが振り下ろした槍がぶつかり合い火花を散らす。

千景が手首を捻ると鎌の刃が槍に引つ掛かかり、腕を引くとネサツトの手から奪い取る。

対してネサツトは飛び退くと、ミサイルランチャーを展開しミサイルを放ってくる。

「くッ……!」

追尾してくるミサイルから逃げながら、地面や木々に誘導してやり過ぎそうとするも、一発だけ避けられず鎌で切断するが、爆風で吹き飛ばされて態勢を崩してしまう。

直ぐに態勢を立て直そうとするも、長剣を手にしたネサツトが背後から迫っていた。

「ぐんちゃん!」

千景を押しつけた友奈が突き出された長剣を、両手を交差させた手甲で受け止めた。

「やめて下さい、こんなこと!人同士で争うなんて……!」

「日向しか歩いたことのないあなたにはわからない。人間がいかに醜く野蠻であるかということ……!」

冷淡としていた瞳に憤りの色を見せながら、力を込めて長刀を押し込んでいくネサツト。

友奈は相手の気迫に気圧され押し込まれていくも、千景が振り下ろした鎌を避けるためネサツトは跳び退いた。

「高嶋さんは下がっていて。奴の相手は私がするから!」

「あ…」

獲物を構え直し敵に向かって行く親友の背を、友奈はただ見送るこ
としかできなかつた。

ギンバイカと対峙した歌野は。どちらが仕掛けるでもなく睨み
合った状態のまま互いに出方を伺っていた。

「ねえ、できれば手を引いてもらえないかしら？アイン君程じゃない
けど、私も人同士で争うのは好きじゃないの」

突然の歌野からの提案にギンバイカは、首を振って拒絶の意を示
す。

「それはできない。我らには成さねばならない『使命』がある。そのた
めにお前達と戦わねばならん」

「そう、残念ね。なんとなくだけど仲良くできそうな気がしたのに」
「…そうだな」

互いに本当に残念そうな顔をしながらも、ギンバイカが先手を取り
歌野目掛け突進していく。

対する歌野は得物である鞭をしならせると、上段から振り下ろし
た。

それをギンバイカは横にステップを踏んで躲し、地面に叩きつけら
れた鞭は大地を紙のように引き裂いた。

歌野はすぐさま鞭を引き戻し、速度を緩めず向かってくるギンバイ
カを迎撃する。

上下左右に繰り出された鞭を、左右にステップしたり、上半身や首
を逸らしながら進んでいくも。右から来たのを避けた次の瞬間には
左から鞭が襲い掛かっており、それを避けている間下から迫ってくる
技の速度に、息つく間も対応していくギンバイカ。

距離を詰める程連撃の密度は高まっていき、遂には避けきれなくな
り足を止め獲物であるヌンチャクで防御に徹し始める。

「流石は3年に渡り孤立無援の長野を護り続けた戦士。手強いかつ」

歌野の洗礼された技量に感嘆の念を抱きながらも、相手の呼吸や技

の癖を分析していき、鞭の軌道を僅かながら予測していく。

「そー！」

軌道に合わせ片手を伸ばすと鞭を掴みとるギンバイカ。衝撃で掴んだ手の皮膚が裂け血が飛び散るも、鞭を引つ張り歌野を一気に引き寄せると、無事な方の手に持ったヌンチャクを叩きつけようとする。

それに対し、歌野は鞭を手放すと寄せられた勢いのまま回し蹴りを放ってきたので、急ぎ鞭を手放し両腕を交差させ受け止めるも、勢いに押され足裏で地面を削りながら押し出される。

受け止めた箇所が痺れ感覚が鈍る程の威力に、僅かだが顔をしかめるギンバイカ。

「こー見えても農作業で鍛えてるから、脚力には自信があるの！」

「…そのようだ」

得意顔で見せつけるように片足を軽く上げる歌野に、どこか楽し気に応えたギンバイカは、獲物を構え直すと再び突撃を開始する。それを、歌野は足元に転がっていた自身の獲物を、軽く蹴り上げると手にし迎え撃つのであった。

「ああ、もう！ちよろちよろと鬱陶しいっての！」

苛立った声を発しながら、ペチュニアが投げ槍をアイン目掛け投擲し、アインは周囲の木々を足場にしながら跳んで避ける。

無手となったペチュニアの手に、新たな槍が生み出され次々と投擲していく。次々と飛来する槍を軽々と避けていくも、アインは反撃どころか武器を手にすらしておらず。その姿に苛立ちを募らせていくペチュニア。

「戦う気が無いなら、戦場に出てくるなッ！」

1本の槍をアインではなく、上空へと投擲するペチュニア。放たれた槍はある程度まで上昇すると、無数に分裂し豪雨のようにアインへと落下していく。

目前へと迫って来た槍の1本を掴んだアインは、それを振り回して直撃する射線の槍だけを次々を払い落としていく。

「そっ！」

その間にペチュニアは地面に片手を触れると、アインの足元から槍が無数に突き出して串刺しにしようとする。

それをアインは読んでいたように、降つてくる槍を弾きながら悠々と跳んで回避した。

必殺のコンビネーションを涼しい顔で対処されたことに、無意識に歯ぎしりしているペチュニア。

『もう十分理解できたよね？これ以上の戦いは無益だ。だから投降してくれないか？僕は人とは戦いたくはないんだ』

攻撃を受けていたと思えない程冷静に語り掛けるアイン。まるで敵とさえ認識していない態度に、ペチュニアのフードの奥に隠れた目が、視線だけで射殺さんばかりに鋭くなり。返答と言わばかりにアインの周囲に無数の槍を生み出し、更にその槍から新たな槍を生み出していき、アインを包み隠す檻のごとく囲みを形成していく。

「死ね」

ペチュニアは死刑宣告をするかのように冷え切った声で発すると、槍1本が辛うじて通れる程度のいくつかの隙間に槍を突き刺していく。

暫しの沈黙の後、槍の隙間から血が漏れ出していく、確実に敵を貫いたことを確認すると、槍を解除していくペチュニア。

「(馬鹿な奴。なんであんなのに隊長は…)」

あっけなく骸となった愚か者の末路に、内心で唾棄するペチュニア。上官である道陽が自分の後継者になりえると語っていたこともあり、余りの期待外れに憤りさえ感じてしまうのであった――

「は？」

が。血塗れになりながらも、何事もなかったかのように佇んでいるアインに。思わず間の抜けた声を漏らしてしまう。

急所こそ外しているも、至る所に槍に貫かれてできた風穴が空き、そこから止めどなく血が流れ出ており、本来であれば立っていることさえ不可能な状態であるにも関わらず、アインは悠然とペチュニアへ

と歩み出すと、背部のパイロンからロングソードとルガーランスを左
右の手にそれぞれ持つ。

『マーク・アイン、これより戦闘を開始するッ！』

そう宣言すると同時に。アインの姿がブレた瞬間姿が消え、咄嗟に
気配を感じ視線を上に向けると、こちらに向けてランスを構えながら
落下してくるアインが視界を埋め尽くすのだった。

第二十二話

「くそッ放せー!」

『そういわれても、こうしないと攻撃してくるでしょ?』

地面に押し倒されたペチュニアの上に覆いかぶさっているアインは、両手で相手の両腕を抑えている。

振りほどこうともがくも、姿勢的にもだが純粋な腕力で劣っているためビクともしない。

降下と同時に振り下ろされたロングソードはペチュニアの頭部を覆っていたフードの頭部部分のみを斬り裂き。アインはその勢いそのまま手を押し倒したのだ。

晒されたペチュニアの素顔は、アインと同年代の少女であり。クリーム色の髪に白いカチューシャを着けており、アンダーフレームの眼鏡をかけていて、その奥から見せる目は全てに失望しているかのよう荒んだ色を見せていた。

『君は秋原雪花だよな? 北海道の勇者である』

「ッだったら何さ」

アインの問いに苦虫を噛み潰したような表情をするペチュニア――雪花。

データベースと照合した結果。彼女が若葉らと同様神に選ばれた勇者と一致した。

『確認したかっただけ。君がどうしてこんなことをしてるのかとか聞く気はないよ、話したくないだろうし、何となくわかるから』

「ッ――」

バイザー越しに覗かせるアインの青空のように澄んだ瞳に、まるで心の全てを見通されるような錯覚を覚え、雪花はもがくように身を振る。

「そんな目で見るなッ。放せ、放せよッ!」

『嫌だ。悪いけどこのまま拘束させてもらおうよ』

伏臥位にし拘束用のワイヤーを取り出していると、突然地面が激しく揺れだすのであった。

「楽しいッ、楽しいよ里見君！この生と死の交わるこの瞬間ッ。我々は己が生きて言うことを実感できる！そうだろうッ！」

「うッせえ！黙ってるクソ野郎ッ！」

蓮太郎が持つスプリングフィールドXDと影胤が持つ、黒と銀色にそれぞれ塗装されマシンピストルにカスタムされた2丁のベレッタが火を噴き弾丸を吐き出していく。

迫る弾丸を、一方は義眼からもたらされる高速演算によって軌道を見切り、右足の義足のギミックを機動させ爆発的な加速で回避し、もう一方は斥力フィールドを目の前に展開し弾いて防ぐ。

蓮太郎と延珠が街についた時には、伊熊将監と彼と組んでいた民警らは全滅してしまっており。まるで軽くゴミ掃除でも終えたかのように無傷で待ち受けていた影胤と小比奈と単独での交戦を余儀なくされていた。

「轆轤鹿伏鬼オ！」

「マキシマム・ペインツ！」

影胤が放つ不可視の障壁と蓮太郎の爆速の拳がぶつかり合い、激烈な炸裂音を響かせながら衝撃で互いの体が弾かれる。

不意打ち同然だった前回と違い、衝撃を逃がされていることもあり、明確なダメージを与えられないことに内心舌打ちする蓮太郎。機械化兵士としての能力を開放したとはいえ、ようやく互角の勝負に持ち込めるようになったが、相手を打ち倒すにはもう一押しできる要素が必要であった。

「蓮太郎！」

小比奈を相手していた延珠が、靴底に仕込んでいるバラニウム製の鉄板を用いて蹴りで小太刀を受け流しながら合流してくる。

「どうする、蓮太郎？」

「…延珠、一対一で影胤を倒すのに何秒かかる？」

敵を見据えながらの蓮太郎の問いに、延珠がはっとして心配そうに相方を見たが、やがて正面を向き直り十秒で倒すからな！と言って義

足のギミックを用いた蓮太郎に劣らぬ加速力で突進していく。

モデル・ラビットの本領発揮と言わんばかりの速度で向かってくる延珠を、小比奈が迎撃しようと振るい。それをスライディングで掻い潜ると、速度を緩めず影胤目がけて突進する。

相手の意図に小比奈が遅れて気づくと、痛恨の表情を浮かべるが、すぐに蓮太郎の方へと襲い掛かる。

蓮太郎が戦局の打開をすべく選んだのは。裸の王将目がけて、互いの飛車が襲い掛かる捨て身の戦法であった。

防御主体のスタイルの影胤にとって、機動力で攪乱するスタイルの延珠は決して与しやすい相手ではない筈だ。だが、それは蓮太郎にとっても例外ではない。

小比奈は体を地面と平行にして弾丸のような速度で突っ込んでくる。義眼の演算装置がスパークし、目蓋の裏がチリチリと焼けるような痛みが走るも、辛うじて刃の軌道を捉える。

状態を捻り一の太刀お躲し、下段を狙ってきた二の太刀にバラニウムの右拳を発動させる。

炸裂音が響き、黄金色の空葉莢が回転しながら排出される。

「轆轤鹿伏兎ッ」

「斬ッ！」

共に神速で振るわれた拳と小太刀が打ち合わされる。

衝撃波で地面の埃が巻き上げられ、互いに靴を激しく擦りながら押し出された。

先に態勢を立て直した蓮太郎は接近しながらXDを連射。放たれた銃弾を、小比奈は小太刀で斬り払っていく。

「マジかよッ」

驚異的な身体能力を持つ子供達とは言え、相当の訓練と何より天賦の才が無ければ実践不可能な芸当に思わず舌を巻く蓮太郎。

そんな彼の心境ぞ知ってか知らずか、笑みを浮かべながら突進してくる小比奈に、胴体から払われにくいだろう頭部に照準を変えたと再度発砲——と同時にその選択を後悔することになる。

小比奈はその時を狙っていたように、首だけを動かし銃弾を避ける

と、懐に潜り込んでくる。

誘き寄せられたことに舌打ちする間もなく、刀身が視認不可能な速度で突き出される。義眼が焼けるような熱を持ち、超演算を開始。蓮太郎は勘だけで刺突を回避し、脇で挟むように相手の腕をロック。腰を落とし、足を払い柔道の投げ技、はね腰に似た態勢に持ち込む。

だが、狙いを読んできた小比奈は、力技だけで強引に腕のロックを外し拘束から逃れると、蓮太郎の背中を足場にいて跳躍する。その際、引き抜かれた剣が蓮太郎の脇を浅く裂いていく。

一飛びで五メートル飛翔する矮躯に今度こそ舌打ちをする。

重力に従い落下していく彼女を視線で追っていくと、その予想地点に蓮太郎は思わず叫ぶ。

「上だ、延珠ッ！」

機動性で攪乱していた延珠は、慌ててバク転でその場から跳び退き大きく下がる。直後凄まじい勢いで上から降ってきた小比奈が延珠のいた位置を串刺しにする。

「哭けソドミーツ、唄えゴスペルツ」

回転ノコギリのような爆音をまき散らしながら影胤の二丁拳銃が火を噴く。延珠への追い打ちの内の一発が、後退していた延珠の左腕を捉えた。

「あぐっ」

被弾した腕が反動で跳ね上がり、彼女の口から苦悶の声漏れる。

「延珠ッ、伏せろ！」

ゼロコンマ秒でXDの弾倉を交換。

左手でシグマ拳銃を手にし小比奈に、右手のXDを影胤に向け、腕を交差させ反動を軽減しながら発砲——漫画などの見様見真似、にわか仕込みの二丁拳銃ではあるが、延珠を援護するための弾幕が張れればいいので精度は然程気にせず引き金を引く。

小比奈が踊りながら弾丸を弾き、影胤は何かを呟くように口を動かして、イマジナリーギミックの呼び動作だと気づいた時には、青白い燐光の壁が弾を全て大音響と共に弾き飛ばす。

左手にシグマが先に弾切れし、銃ごと放棄した蓮太郎は。ポーチに

入った強化スチール製の円筒缶のピンを歯で抜いて投擲した。

小比奈が前に出て委細構わず斬り払おうとして、影胤が動揺を感じさせる大声を張り上げた。

「いかん小比奈、それはッ」

小太刀を振るおうとした小比奈の目の前で、スチール缶が強烈を光を撒き散らし闇を吹き飛ばす。

「あああああー！」

蓮太郎が使用したのは特殊音響閃光弾^{フラッシュユバン}。強烈な衝撃波と閃光を発生し、聴覚と視覚にダメージを与える代物であり、それを無警戒な状態で至近距離から受けた小比奈は耳を抑え苦悶の声を上げながら身によじる。彼女の側にいた影胤も、十分にスタンさせることに成功した。

その隙を延珠は逃さず突貫する。

自慢の脚力で瞬時に間合いを詰めた延珠は、左足が地面に陥没する程に踏みしめる。

本能的に危機を感じた小比奈は、小太刀を交差させ身を守る。そこに薄手の鉄板程度なら難なくぶち抜く蹴りが炸裂。バラニウムの小太刀を一本をへし折りなおも威力は衰えず、彼女らのいた埠頭から小比奈を吹き飛ばし、水面を津波の如く蹴り立てながら二十メートル近く進んで水没していった。

「蓮太郎！」

相棒に呼びかけられるまでもなく、蓮太郎は既に走りだしていた。残る燕尾服の前に躍り出る。影胤が銃口が蓮太郎を捉えるより先に、蓮太郎の脚部に仕込まれたカートリッジ底部をストライカーが激発。疑似伏在神経に沿って配置されたエキストラクターが空薬莖を掴みだし排出。爆発音と共に凄まじい速度で蓮太郎の足が跳ね上がり、同時に延珠とアイコンタクトすると彼女も蓮太郎に合わせ蹴りを放つ。

「隠禪・玄明窩^{げんめいか}ッ」

「ハアアアアアアアアアアッ」

爆速の蹴りが炸裂。影胤へのインパクトの瞬間、青白い燐光が阻み、激突した衝撃で辺りの大気を吹き飛ばす。影胤も埠頭から吹き飛

ばし着水水没。更に着水地点を見定めてXDで追い打ち射撃。たった三発撃つたところで弾切れ。シンと静まりかえる夜に、そつとさざれ波が波打ち際で碎ける音が返ってきた。

蓮太郎は銃を両手で硬く握り込み、祈るようにして待った。願いが通じたのか、影胤達が沈んだ水面は変化を起こすことなく静寂を保っていた。

「延珠」

へたり込んでいる延珠の前でかがみ込み腕の傷を見る。蓮太郎は眉をしかめた。延珠の傷は再生する様子もなく未だにじくじくと血を流し続けている。バラニウムの弾はガストレアの傷を阻害するが、それはガストレアウィルスの恩恵によって傷の再生を促すイニシエーターにとつても全く変わらない。バラニウムの武器や弾丸の前では、彼女も一般の人間と変わらない脆弱性をさらす。

「だ、大丈夫だ！」

激痛で顔を顰めそうになるのを、口元をへの字に結んでやせ我慢する延珠。

そんな彼女の頭部を、蓮太郎はばかりと叩く。

「痛いぞ！」

「大丈夫なもんかアホッ、無茶しやがって」

不満そうに唇を尖らせ、両手で叩かれた部分を抑えながらも。延珠はすぐに水面に視線を向ける。

「倒したのか？」

わからん、と言いながら、蓮太郎は周囲を観察しながら埠頭の先まで生き、月の輝きのみを映す水面を睨む。慎重にポーチからXDのマガジンを取り出し交換する。

イマジナリーギミックを破った手応えはなかったが、術者の内臓が破裂していてもおかしくはない衝撃を与えた。死亡とまではいかなしも、戦闘継続は難しいだろう。

「ん？」

ふと、水面が揺れ動いたように見えすぐさまXDを構えるも、何も起きることなく見間違いかも息を吐く。——その瞬間水面に波紋が

広がり徐々に激しさを増していく。それと同時にズンツ！と腹の奥に響くような振動が襲い掛かってきた。

「な、何だ!？」

「蓮太郎ッ！」

慌てて駆け寄ってきた延珠と共に警戒態勢を取る。その間にも振動は激しさを増していき今しがたまで静寂だった水面が嘘のように波立ちを起こしていた。

「クソツ、一体何が…」

「蓮太郎、あれ！」

延珠が指さす方を見ると、水面が盛り上がりを見せており、振動や波立ちの激しさに同調するようにその大きさを増していく。

盛り上がりが最高潮を迎えると、海水を掻き分けるように20メートルはある巨体が姿を現していくのだった。

その光景に圧倒されていると、突如水面から現れた腕が蓮太郎の足を掴んできた。

「——なッ」

予想外の事態に反応が遅れた蓮太郎は、恐ろしい力で水面に引きずり込まれてしまった。

月光の僅かな輝きさえ届かぬ暗闇の中。眼や鼻に海水が入り込んで来るも、飲み込まないよう息を止める彼の眼前に暗闇から這い出るように白貌の仮面が浮かび上がってくるのであった。

『デス・フォートレス、だど!?!』

10メートル級の中型サベージを、ジャイアント・ガトリングを鈍器のように叩きつけて殴殺していたツヴァイは。海面を突き破ってきた巨体を見て忌々しそうに吐き捨てていた。

甲殻類の面影を残した体に6本の腕を生やし、胴体部分に目とイソギンチャクに似た口がビッシリと備え付けられた異形の姿は。以前遭遇したステージIVガストレであった。

デス・フォートレスは鼓膜をつんざかんばかりの雄たけびをあげる

と、こちら目がけて歩みを進めてくるではないか。

「ツヴァイさんッ！」

『他の連中と合流しよう。俺達だけではどうにもならん』

夏世を連れて移動していると、ツヴァイに通信が入る。

『こちらC P、ツヴァイさん聞こえますか！』

『上里か、聞こえている。どうした？』

『そちらの戦域にバーテックス反応が、警戒を！』

『チッ、このタイミングでか！』

上空に視線を向けると。夜空に流星のように輝きが次々と生まれ、こちらに向かつてきているのか徐々にその大きさを増していき、白色の袋のような身体に、触手と巨大な口のような器官が備わった異形の生物がその姿を現していくのであった。

「だああああアアア！うっゼツェ!!」

突如襲い掛かってきたバーテックスを、クロヴァンは大剣で両断していく。

Alvis、Fuhren問わず襲い掛かって来るバーテックスを、各々戦闘を中断し迎撃せざるを得なくなっていた。

「ちよ、これヤバくない!?何かバカでつかいのまで出てきたし!!」

「落ち着けナクリー。退路を塞がれた以上、戦うしかあるまい」

明らかに自分達めがけて迫って来ているデス・フォートレスに、焦燥感に駆られるナクリーをギンバイカが落ち着かせながらバーテックスをヌンチャクで殴り倒す。

「こんな所に出てくるなんて、よっぽど私達のことが好きみたいね」

皮肉めいたように言いながら、迫るバーテックスを鞭で打ち倒す歌野。

バーテックスは、デス・フォートレスと挟み込むように展開しており。退路を断たれ孤立する形となっていた。

「やべーぞこれ！どうすんだ若葉!？」

「どの道逃げ出す訳にはいかない！デス・フォートレスを抑えないと……！」

「どうやって!?!」

デス・フォートレスの進路上には、蓮太郎達のいる街があり、彼らを援護するためにも足止めをする必要があった。

「……」

焦燥感を隠せない土居に、打開策が思いつかず沈黙してしまう若葉。現状の戦力では状況を変える手段がないのだ。切り札が使えればと思わず歯噛みする若葉。

「伊予島さん何か策はある?」

「…すいません、直ぐには…」

「来るよ!」

千景の問いに杏が思索していると、群がって来るバーテックスに、友奈が彼女らを守るように前に出ながら構える。

すると、轟音と共に群がって来ていたバーテックスが、弾丸とミスイルに薙ぎ払われていき。飛来した方角からツヴァイが夏世を連れて合流してくる。

『お前ら無事か!』

「ツヴァイか!そっちは!?!」

『こちら問題ない。乃木、アインは!?!』

「分断された!合流しないと…!」

『あいつなら自力でできる!自分が生き残り事を優先しろ!!』

そう伝えると、ツヴァイはFuhrenの面々へと声をかけた。

『おいお前ら!このまま三つ巴をするか俺達と利用し合うか、好きな方を選べ!!』

「ああ!?!何言ってるんだテメエ!!」

突然の提案に、クロヴァンが睨みつけて大剣を向けようとする、ネサットが彼を制止した。

「待てクロヴァン。それはこの場でだけ協力するということか?」

『そうだ。そちらさんもこの場で死にたくなかろう?こちらとも殺し合うよりはマシだと思うが?』

「…いいだろう。そちらの提案を?もう」

「マジでネサット!?!」

承諾したネサットに、ナクリーが驚愕しや様子を見せる。

クロヴァンも彼女同様に動揺を見せているが、ギンバイカは取り乱した様子はなく口を開く。

「私は異論はない」

「ギンバイカもか!? あんな奴を信じるつてのか!？」

「その方が生存率が高く現実的だ。こんな状況で騙し討ちをする非効率な人物ではあるまい」

「……ああ、わーたよ! こうなりやヤケだ! やってやらア!!」

ヤケクソ気味に大剣を構えると、バーテックス目掛け突撃していくクロヴァン。ナクリーも彼に触発されたように同じように突撃していった。

「え、いいのか、これ??？」

『構わん土居。使えるものは何でも使う。それが俺の主義だ。では、いくぞ! 生き残りたければ敵を殺せエ!!』

仲間を鼓舞しながら突撃するツヴァイに、若葉らも続いていくのであった。

第二十三話

「デス・フォートレスだとツ!?こんな時に…!」

東京エリア第一区にある作戦本部。そこで開かれている日本国家安全保障会議にて、モニターに映る海を割るように現れた巨体に、内閣官房長官が狼狽した声を張り上げた。

作戦域に送り込んでいた、UAVから送られてくる映像を始めとする各種情報がモニターに表示され。聖天子始め内閣官房長官や防衛大臣ら閣僚が長机に腰かけながら、固唾を呑んで見守っていた。

十組近い民警のペアが一斉に蛭子親子に挑みかかり、手も足も出ず壊滅させたれた映像をみて間を置かず、特大級の不確定要素が現れて取り乱すなどというのも酷と言えよう。

「落ち着け官房長官。この程度で取り乱すな」

「は、はい…」

末端に至るまで騒然とする中でも、副議長である天童菊之丞が揺らぐことのない大山の如く、悠然と主である聖天子の後ろに控えながら一喝する。

「状況の報告を」

そして、彼らを統べる聖天子も凜とした佇まいを乱すことなく、透き通った声音で指示を出すと、浮足立っていたオペレーターらが我に返ったように職務に戻っていく。

「デス・フォートレスの出現と同時に出現したバーテックスの大群が、デス・フォートレスと挟み込む形で展開中しております」

「やはりバーテックスは他のバアルと共同して動いてくるか…」

むう…と忌々しそうに防衛大臣が唸る。

バアルらは互いに敵対することなく、人類を共通の敵と言わんばかりに共に攻撃を加えてくる。その中でもバーテックスは、最も交戦している四国エリアから提供された情報では、無秩序に行動する他のバアルことなり、一つの意味に統一されたように秩序立って行動し、他の種の動きを補完するように『戦術』を駆使してくると記されていた。

「Alvisと里見ペアは？」

「里見蓮太郎、藍原延珠ペアは引き続き蛭子親子と交戦中。Alvisは人革連と共同しバアルと交戦している模様」

「何だと!？」

映像には、確かにAlvisと勇者らがつい先程まで交戦していた人革連の者達と、背中を預けるとまでは言わないも、互いに敵対することなくバアルと交戦している姿が映される。

その様子に再び官僚らがざわつく。

「何を考えているのだ天童二尉は!？」

「必要であればバアルさえも利用する、あれはそういう男だ。構いませんな、聖天子様?」

「ええ。最優先は七星の遺産の奪還です。現場での判断は彼に任せます」

菊之丞からの問いに、聖天子は迷うことなく肯定の意を示す。

そんなやり取りをしていると。会議室の外に立たせていたSPが動揺して声を荒げているのが聞こえてきた。

いきなり出入口の扉が開かれ数人の人間が雪崩れ込んでくる。聖

天子は先頭にいる少女を見て一瞬反応が遅れた。

「何事です!」

会議室の中がにわかに色めき立つ中、先頭にいる黒髪の少女、天童民間警備会社社長、天童木更は肩で風を切りながら、部屋の中を横ぎると居並ぶ面々に一枚のペラ紙を突きつける。

彼女が取り出した一枚の紙にはサークルが引かれており、サークル外側に寄せ書きのように直筆の名前と判が押してある。

聖天子は覗き込んで思わず息を飲んだ。それは傘連判からかされんはんと呼ばれるものであり。市民が百姓と呼ばれていた時代、一揆の固い団結を約束すると同時に、首謀者を隠すために円状に同志の名を連ねたものである。

周囲の視線はごく自然に、その無数の名前の中の一人——防衛大臣に向けられる。他の高官は青い顔で防衛大臣の周囲から後ずさりしていった。

「ご機嫌麗しゆう轡田大臣」

「こ、これはなんの冗談だ！」

「あなたの部下がこんな面白いものを持っていましたね。連判状に書かれている通りです。あなたが蛭子影胤の背後で暗躍していた依頼人ということですよ。そして、七星の遺産を盗みださせ、それをマスコミにリークしようとしたのもあなたですよ」

「そ、そんな馬鹿な……」

木更は顎に手を当ててわざとらしく首を傾げる。

「直筆で傘連判なんて、随分古風なことをなさるんですね。おかげでこの計画に加担した人間が一斉に検挙できそうで手間が省けました」
聖天子の目が細められる。いくら彼女が天童家の人間であり、今回の事件の裏を暴いた立役者であろうとも。政治的になんの力も持たない一般人に過ぎない者に、政府の中枢であるこの場でこれ以上で我が物顔させる訳にはいかない。

「この会議は国防を担うべく置かれた超法規的な場です。土足で踏み込まれるのは困ります」

「そ、そうだ。貴様は所詮薄汚い民警のイヌにすぎぬ！どこからそんなものを手に入れたかは知らんがとつと失せろ！」

聖天子の尻馬に乗って大臣が吠えたてるが、木更は涼しい顔であった。

「聖天子様の仰ること、誠に我が意を得た思いです。しかし私はこの事実を知って、一刻も早くお知らせせねばならぬと、居ても立っても居られずここに馳せ参じた次第です。聖天子様もスパイを排除せねば落ち着いて議事を進められないのではないのでしょうか？」

上手い弁を使う、とこの場に単身乗り込んできた気概も含め、内心感嘆しながら。菊之丞に合図を送る。

「連れて行け」

菊之丞が、冷ややかな目を防衛大臣に向けながら指示を出すと、護衛官が大臣の両脇を抱える。

「そ、そんな……。天童閣下あッ。私はッ——私はあああああッ！」

「では、私はこれにて失礼します」

哀願し泣き喚きながら引きずられていく大臣を尻目に。木更は踵を返そうとした彼女を、聖天子が呼び止める。

「天童社長。そうはいきません」

「と、仰りますと?」

「すみませんが、この作戦が無事に終了するまで、あなたをこの建物から出す訳には参りません。この部屋に軟禁させてもらいます」

木更は一瞬だけ顎に手を当てるフリをしてみせる。

「そういうことならば仕方ありませんね」

「木更よ…よくもここに顔を出せたな」

怒気を露にしかけた菊之丞に、木更は泰然と微笑んだ。

「ご機嫌麗しゆう、天童閣下。お久しぶりですね」

「地獄より舞い戻ってきたか、復讐鬼よ」

「私は枕元で這い回るゴキブリを駆除しにきただけです。ここに居合わせたのは偶然に過ぎません。気の回し過ぎではございせんか?」

おちよくるように口元に笑みを浮かべる木更に、菊之丞は怒りで拳を震わせながら握り締める。

「よくもそのような戯言を…」

今にも首を取らんとせんばかりに殺意を放つ祖父に。木更の瞳が冷たい輝きを放ちながら細められる。

「弟の——光輝以外の『天童』は死ななければなりません、天童閣下」

「き、貴様…」

とても祖父と孫の会話には聞こえなかつた。周囲が戦々恐々とおののく中、ある程度木更と菊之丞の関係を知っているだけに、聖天子も生きた心地がしない。

そんな殺伐とした空気の中。オペレーターの1人が気圧されながらも報告をあげてくる。

「し、四国エリアの乃木代表から緊急通信です!」

「繋ぎなさい」

ある意味渡り船とも言える内容に、即座に許可を出す聖天子。菊之丞と木更もそちらに興味を惹かれたのか、互いに殺気を収めてモニ

タワーに視線を向ける。

『聖天子殿、火急の折失礼する』

モニター群の中心にある大型モニターに、若葉の父でもある大葉が映し出されるのであった。

一人一人なんとなく飲み込める程巨大な顎あぎとを広げながら迫って来る、星屑体と呼称されているバーテックスに投擲された投げ槍が突き刺り、地面を無様に転がりながらそれでも得物を仕留めようともがくも力尽き動かなくなる。

それを幾度繰り返しながら、ペチユニア——秋原雪花は苛立ちを抑えられないように舌打ちした。

明らかに自分を標的にしている、巨大な口が特徴的な白色の袋の群れに、生成した投げ槍を殺意を込めて投げ放つ。

そんな彼女の背後に回った星屑体が襲い掛かろうとするのを、アインがロングソードで両断し阻止する。

『退がって。こいつら君を狙ってる』

「言われなくてもわかってる！てか、あんたの助けなんていらんっての！」

当たり前のように背中合わせて援護してくるアインに、雪花は拒絶するように怒鳴る。

『それでも構わない。この状況で君に死んでほしくないっていうただの我儘さ』

襲い来る星屑体を両手にそれぞれ持つソードとルガーランスで斬り倒すか、刺し貫いて撃破していくアイン。

そして、自分標的を変えさせようと、群れの中に飛び込んでいく。「(偽善者面して、勝手なことするなつての!)」

身勝手に己を犠牲にしようとするその行動に、腹ただしさを感じながらも、雪花は彼を囲もうとする星屑体へ投擲し撃破、あるいは牽制していく。

助ける必要などなく、そのまま放置して仲間の元に向かうこともで

きるが。体はアインを援護することを止めず、それでいいと思っ
る自分に、無意識に舌打ちしていた。

『！』

「チツ、進化する気か！」

ある程度数を減少させると、一部の星屑体が一箇所に集結を始
める。進化体と呼称される上位個体への変化の前兆であった。

それを察知したアインと雪花は阻止しようとするも、残る星屑体
立ちほだかり阻まれてしまう。

その間に集結した星屑体は、粘土のように形状変化しながら交じ
あつていき、ミミズを思わせる細長い胴体に螺旋状の頭部を持つ10
メートルはあろう巨体へと変化した。

進化体は頭部を振り上げ地面に勢いよく叩きつけると、そのまま
を振りながら掘削していき地中へ消えていく。

『跳べー！』

「わかつてるー！」

両者がその場から跳び退くのと同時に、今いた場所の地面が陥没し
進化体の頭部が突き出される。

アインが右手にスコープピオンに持ち替え発砲。放たれた無数の弾
丸は照準は甘いものの、大半は着弾するもその巨体通りの頑強な装甲
に阻まれ弾かれてしまう。

進化体が飛び出してくると2人目がけて突進し、回避されると全身
を激しくくねらせ、周囲の木々をなぎ倒しながら暴れ回り追撃を加え
てくる。

迫る巨体を避けながら雪花が槍を投擲するが、やはり装甲に阻まれ
てしまい。手数で攻めようと更に投擲するも進化体は再び地中に
潜ってしまい槍は空を切るだけだった。

「ッああ、もう鬱陶しいー！」

地中から攻撃を加えてくる進化体に、苛立ちを募らせていく雪花。
そんな中、アインが何かに気づいた様子で叫ぶ。

『こつちだー！』

スコープピオンを放ちながら、敵を誘導するように移動をしていくア

イン。意図は読めないも、他に手もないのでその後が続く雪花。

暫く進んでいると、何か人工物の影が闇夜の中から浮かび上がってくる。

距離が近づくとつれ。それがかつての大戦時に設営された物資集積所であると気づく。

「——て、わっ!?!」

そのことに気を取られていると。不意にアインが雪花の手を掴み、集積所の周りに設営されていた塹壕へと投げ込んだではないか。

「あたあー!」

背中から塹壕に落ちた雪花。大した高さではないので、さしたダメージこそないが、不意のことであつたため無意識に情けない声が漏れてしまった。

急いで起き上がると塹壕から出ようとする雪花。そこにあるのは怒りや不信感ではなく、彼が何をするのか想像がついたからである。

「あいつ——」

塹壕から顔を出すとアインがコンテナを背に對峙しており、獲物を追い詰めたと言わんばかりに、進化体は押し潰さんと突進を繰り返す。

それに合わせアインは跳躍すると同時に、ブースターを全開に吹き進化体の頭上を取ると、ソードとランスを突き刺し。それを支点に更に跳躍し、触れるか触れないかのストレスを越えていく。

標的を見失った進化体は、勢いそのままにコンテナ突っ込んでいき。火気厳禁のマークが記されたコンテナが粉碎され——納められた砲弾類が爆発を起こし、その炎と衝撃が隣接する他のコンテナを巻き込み連鎖的に誘爆していき、辺り一帯を眩く照らす程の爆炎と大気を震わす程の衝撃が生み出される。

進化体が盾になる形でアインはが直接爆発を受けることはないも、その衝撃は彼を吹き飛ばすにあり余り。地面に叩きつけられたアインは数度バウンドしながら建物に激突し、崩落した壁に巻き込まれてしまう。

対する進化体は、爆発自体でダメージは受けないが。砲弾類に詰め

込まれていた、球体状に加工されていたバラニウムが高速で飛散し。進化体の装甲を紙切れのように貫通して引き裂き風穴を開け、爆発が収まるとボロ雑巾のようにズタボロとなった進化体は、断末魔すらあげることなく力なく崩れ落ちると。朽ちるように崩壊していき、跡形もなく消滅していったのだった。

『——ッ』

覆いかぶさっている瓦礫を押しつけながら、起き上がろうとするアイン。しかし受けたダメージが多きく思うように体を動かせないでいる。

そんな彼に生き残っていた星屑体が襲い掛かろうとし、雪花が投擲した槍に貫かれ息絶える。

それを見届けた雪花は、周囲を警戒しながらアインの元へと歩み寄り、安全の確認すると腕を掴み引つ張り出す。

それからアインを仰向けに寝かせると、外部から装甲を開放するパネルを操作し、中身を露出させる。続いて内部から小型のケースを取り出すと、中身の入っている注射器を手にし、息も息も絶え絶えに青白い顔色をした優の首筋に打つ。

すると、薬品の効果によって因子が活性化し、増大した回復力によって体調が安定していく。

「…ありがとう」

「別に。あんたに借りなんか作りたくないから」

素っ気なく答えながら、周囲を警戒している雪花。

数分もすると、取り敢えず動ける程度には回復した優は、装甲を閉じ起き上がる。

「何してんのや?..」

『皆戦ってる、合流しないと』

アインの視線の先には、離れた場所で暴れ回るデス・フォートレスの姿があり。今だ戦いが終わっていないことをあらわしていた。

「…いやいや、死ぬって」

『大丈夫。まだ、生きているから。それより君はどうするの? さっきの続きする?..』

動いているのが異常な程、満身創痍としか言いようがない状態で。そんなことを言い出すアインに、雪花は馬鹿を見る目で呆れ果てたように息を吐く。

「興が削がれたしもういいや。今からじゃ全部終わってるだろうし」
別にここでアインを始末しても構わないのだが。横槍が入ったことで白けてしまい、気が乗らなくなったしまっていた。

結果がどうなろうと、今いる位置ではどう駆け付けても手遅れであり、彼女としては最低限の役目は果たされているため。これ以上アインと戦う必要はなくなっていたのだった。

『そう。じゃあ、気をつけてね』

そう言っただけで別れると。仲間達の元に向かうべく、ブースターを吹かしホバー移動を開始するアイン。

そんな彼に、森林から飛び出してきた小型ガストレアの群れが襲い掛かる。

『どけエエ!!』

アインはブレードとランスを用い次々と薙ぎ払っていき、機体が警報を鳴らすのと同時に急制動から跳躍し、サベージの放ったビームを回避する。

『ゴフツ——』

急激な負荷に肉体が悲鳴をあげ吐血してしまうも、それでも止まることなく木々を跳び移りながらサベージへ肉迫し、速度を載せてランスを突き刺しレールガンを撃ち込んで撃破する。

『オオオオオオオオオ!!』

まるで、命を絞り出すかのような雄叫びをあげながら戦い続ける。それでも多勢に無勢であり、数体の犬型のガストレアが取り付き、爪と牙を突き立てられて抑え込まれてしまう。

そこにゴリラ型の大型ガストレアが拳を振りそうとし——飛来した無数の槍に貫かれ絶命する。

更に囲んでいたバアルらが、地面から突き出てきた槍に串刺しにされ一掃される。

『ありがとう』

取り付いているガスレアを、腰両部から取り出したナイフで引き剥がしながら、アインは助けてくれた雪花に礼を述べる。

「…あたしもこっちに用があるだけだから」

仲間がいるから、と素っ気なく言い残し先に進んでいく雪花。

『なら一緒に行こうよ。その方が安全だよ』

その後を追いながらアインが提案すると、雪花は答ええないながらも、拒絶する様子は見られないのであった。